

# TSロリが逝くダンまち ゲーRTA

原子番号16

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

TSロリの需要を察知したので初投稿です。嘘です。

ダンまち×RTA増えろ。

10/18(日) ボーイズラブタグを削除しました。男性との絡みを期待してください。さっていた方々には深く謝罪いたします。



こちら、ダンまちRTA走者様の作品リンクになります。よろしければ合わせてご覧ください。

作者：アリフア様 ダンジョンに（略）RTA

link：https://syosetu.org/novel/215569/

# 目次

計測開始〜オラリオ入りまで

m p. 1 『キヤラクターメイキング』

1

m p. 2 『セットアッププロセス』

12

幕間 『ある夜、社の中』

L v. 1 ↓ L v. 2

m p. 3 『舞台／迷宮都市』

m p. 4 『邂逅／太陽の男神』

63

m p. 5 『放浪者↓冒険者』

幕間 『なんか変なの』

106

幕間 『太陽神のファミリア』

m p. 6 『再会／グッドフェロー』

146

幕間 『遍（あまね）くを照らす太陽よ』

164

m p. 7 『邂逅／栗鼠と蛇と医神』

199

幕間 『ある夜、雨の中』

m p. 8 『決戦／刃折れた人形姫』

233

m p. 9 『決戦／鉄馬駆る女戦士（ジャ

ミール）』

幕間 『無銘の墓』

279

252

幕間『英雄宿命／ソード・オラトリア』

298

最終決戦（クライマックスフェイズ）

『往（ゆ）け、彗星のように』—— 342

エピローグ『星のようなあなたへ』

390

L v. 2 ↓ L v. 3

m p. 11 『命名／灰別』—— 428

m p. 12 『遠征／新世界を目指して』

『起』—— 455

m p. 13 『遠征／新世界を目指して』

『承』—— 468

幕間『ある夜、迷宮の中』—— 481



計測開始〜オラリオ入りまで

## mp. 1 『キャラクターメイキング』

英雄になったりならなかったりするゲームのRTA、はあじまるよー！

今回取り組んでいくゲームはこちら。大森藤ノ氏が原作を務めていらつしやるライトノベル、『ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか』通称ダンまちをモデルにしたアクションRPGです。

縛り内容は主に三つ。バグ・チート禁止、ロールフルグッド秩序にして善の維持、そして小人族バルウム縛りです。

はい、よーいすたーと……はまだしません。計測開始までもう少し時間があるので、今のうちに本RTAのゴールについて、お話しします。興味無いよという方は下記の時間までスキップすると幸せになれるかもしれません。

さて、このゲームにおけるエンディングは使用キャラやその立場によって個数や内容が変化します。有名なのは闇陣営イギリスを除く全ルートで到達可能な共通エンド『黒龍討伐』、異端児セリウススタートで人類との共存を実現するエンド『真の友愛』などでしょうか。目指すルートによってレギュレーションが設けられており、発売から数ヶ月が経過した現在、

多くの先駆者様方の動画を拝見させていただいています。

まあ、この動画ではどのルートも完遂しないんですけどね。

結論から言いますと、本RTAは、プラチナトロフィー『世界最速の第一級』の取得までを計測区間としています。

この最速というのは「敏捷」の話ではなく、「恩恵」<sup>ファルナ</sup>を得た時点からLv. 5、つまり第一級冒険者になるまでのスピードに依存します。ようするに四回ランクアップするRTAというわけです。

オープニングが終了したところで、早速ですがキャラエディットのお時間です。

薄々察していただけているかと思いますが、このゲームは原作・外伝キャラのルート他に、オリキャラ、いわゆるエディット武将によるフリーシナリオが用意されています。ポリウムたっぷりですね。

容姿は適当に決めます。

諸々の設定をして……

さて、ここからが問題。特記事項の決定です。



これはエディットキャラ特有の仕様で、特技や体質、特殊な背景のようなものをキャラに付与することができます。原作の人物で例えるなら、ベルきゅんの体質【透明の魂】やフィンの技能【超直感】、カサンドラちゃんの祝福である【未来予知】、ヴェルフが背景とする【鍛冶貴族】などです。

エディットキャラは原作キャラに比べて能力値などが劣る分、こういった特記技能を自由に選択できるのが利点です。

ちなみにエディットキャラにSSランク【透明の魂】を付与する場合、くつそ重いバツドステータスの付与が必要となるので、【透明の魂】プレイをしたい人は素直にベルきゅんを選ぼうね！

余談ですが、両足欠損盲目発声不可能の【透明の魂】を習得キャラで闇陣営含むネームドキャラ全員との好感度MAXを達成なさった方の動画が先日公開されています。概要欄にURLを貼っておきますので、ぜひご覧になってください。

はい、事項の決定が終了しました。

当然ながら、ここで選択する事項は事前に決めてあります。

Sランク体質【幸運】。

Hランク背景【重度の実験体（マイナス）】。

Cランク資質【妖精眼】グラムサイト

こちらの三つの説明は、おいおい行おうと思います。

スタート位置はRTA勢御用達、通常プレイでもおすすぬされるひとつ、【極東の社】に設定します。タケミカツチ様の孤児院ですね。ここが優秀なんですよほんと。

それでは最後に名前を決めようございます。

名前に関してですが、入力速度を考慮しまして、ホモ……と、したいのはやま→やま←なのですが、変な名前にすると出会うキャラからの初期好感度が悉く低めになるのでキャンセルだ。

というわけで、一身上の都合により——

『フリーユーカー・グッドフェロー』

——とさせていただきます。

え？ 長い？ おつそうだな（肯定）。ファミリーネームに関してはちゃんとした理由があるので許してくれたまえ（大佐）。まあ誤差だよ誤差。

ファーストネームに関しては完全に私の趣味です。

それでは計測開始まで、さん、にい、いち——はい、よいすたーと。

はい、スタート直後ですがいきなりイベントです。

農家の子供である少年、フリーガー・グッドフェローくんが、ひとりで山を散策しています。空気がおいしそうですね。表情も笑顔です。無邪気だなあ。

そんな顔立ちのそこそこよろしい小人族バルツムの少年は、散策に夢中になっていて、背後から近づいてきた一人の人物に気がつきませんでした。

背景【重度の実験体】……あっ（察し）。

というわけでフリーガーくんが拉致されました。この背景を習得したキャラクターは、スタート直後に実験体として拉致されます。たとえばハイエルフだろうがボツシユートです。加害者はランダムなのですが、今回はエルフの女性でしたね。

この時点で、フリーガーくんの「心的外傷：エルフ」の習得が確定しました。

ここで、【重度の実験体】について、お話しします。

こちらの特記背景は、バッドステータスを発生させるものうち、かなりヤバイ位置にあります。これより下のマイナス事項は片手で数えられるほどしかありません。

コイツのヤバイポイントとしては、Fランク以下、つまりバッドステータスを発生させる事項を最低四つ、多い時には九つこの以上も押し付けてきた挙げ句、当該キャラクターに軽度から重度の人間不信を与え、対人コミュニケーション力を著しく減少させます。勘弁してくれよ……。

そのうちのひとつは、拉致られた相手の種族に対する「心的外傷」で確定しています。今回はエルフですね。レフイーヤちゃんやリヴェリアママ、その他ネームドエルフとの交流がだいぶキツくなりました。

通常プレイでもくっそ辛い特記事項ですが、もちのろん、無策でコイツを抱え込んだ訳ではありません。何がなんでも「幸運」を習得したかったのはありますが、それ以上にアドを取れるようチャートを組んでいます。

まま、そう焦らないで。ビールでも飲んでリラックスしな（920隊長）。

フリーユーカーくんがどんな実験のモルモットにされるか、それによって他のマイナス事項が決定されます。

ここでHランク以下のヤベーやつを引かされた場合、大抵リセットです。Gランクで

クトゥルフ  
COCの狂気表とどっこいどっこいなので、Hランクを引かされるとくつつそキツイです。Iランクはクビだクビだクビだ。『血液が鳥になる』とかウオーハンマーじやあるまいし。

……ですが、はい、その可能性は限りなく0に近くなっています。

なぜなら、Sランク体質【幸運】を握っているからです。

【幸運】はその名の通り当該キャラの幸運値L.C.K.に補正をかけ、発展アビリティ【幸運】の発現条件を達成する特記事項です。

あくまで幸運値をガン上げするだけなので、例えば確定イベントによる不運な出来事を、これだけで覆すことは出来ません。

が、ある程度ランダムで決定される物事に関しては相当やってくれます。

つまり、この特性は【重度の実験体】で押し付けられるマイナス事項にも影響してくれるのです。

例を挙げますと、直前の試走の際習得したマイナス事項は最低の三つ、かつ低確率でひとつだけ付与されるプラス事項もAランクのやつをきっちりゲット出来ました。これって勲章ですよ……（自画自賛）。

さて、今回はどうなりそうですかね？（20倍速）

実験シーンを垂れ流すのもアレなのでね、救出イベントがくるまで倍速していきま

す。

誰かが助けてくれるまでに行える自由行動はランダムな上、そう多くはないのですが……よし、目当てのやつが出てきてますね。

予定通り、『鉄格子の隙間から星を見上げる』を連打します。

日数の経過によつて減少する正気度<sup>SAN</sup>は、実験の内容によつて増減するのですが……今回はそれなりに当たりなようです。隔日で周りの子供がぽつぽつと消えていっています。実験によつては毎日ガバツと消費されていくので発狂しなただけマシという他なし。

肝心の内容ですが……どうやら、『他種族の子供をエルフにする』実験を行っているようです。有名なヤツですね。

動機としては単純で、

← 同族すら拒む隔離されたエルフの里

← 人口の減少

← せや!! 他種族の子供拐<sup>さら</sup>つて同族にしてから孕ませたる!! これで子沢山や!!

……いや頭おかしいですって！ 勘弁してくださいよほんとに。エルフの里やべーな。これは焼き払われて残党（多大な偏見）。クロツゾの旦那ッ！ おもいつきしやつつけてやれーッ！（SPW）

何がたち悪いかつて、世界から隔離されたエルフの里には大抵『古代』の魔法が現存していることなんですよね。だから種族をいじるなんて無法がまかり通ってしまう。

この実験において最もやってはいけない行動は、被害者の氏に様、および氏体を見ることです。全身に性器を生やして息絶えてるヤツとか目撃した日には発狂不可避ゾ。

大人しくエルフの魔法を浴びて、怪しげな薬品に浸かりましょう。  
ちなみにですが。

この実験によって、フリーユーカーくんの種族がエルフになってしまった場合、リセットです。

【幸運】があるので余程のことがなければ大丈夫なはずですが……

えつ。

あつ、ふーん。

名前をホモにしなくて本当によかったですね、これ。

——はい、無事に救出されました。今回は五年間、原因は一般正義のファミリアによる粛清でしたね。研究者の方々とはもう二度と会うことはないでしょう。

救出された後の処遇ですが、近場の孤児院——タケミカツチさんちに預けられることとなりました。地味に別大陸まで拉致行為に及んでいたことが明かされる研究者軍団、ガチすぎて笑っちゃいますよ。

実験体にされた子供は薬品によって記憶をボロボロにされているため、元の親を探すのは極めて困難です。かわいそうに……。

それでは、今回はここまで。ご視聴ありがとうございました。





名前：フリーユーガー・グッドフェロー

特記事項

ランクS 【体質：幸運】

ランクH 【背景：重度の実験体】

ランクC 【資質：妖精眼】  
グラムサイト

NEW!!

ランクF 【疾患：心的外傷（エルフ）】

ランクG 【疾患：変貌への恐怖】

ランクF 【背景：性転換】

ランクG 【疾患：女体恐怖症】

ランクA 【資質：侍】

## m p. 2 『セットアッププロセス』

ランダム性を考慮して柔軟に対応できるチャート作成を強いられるRTA、もう始まつてる！

前回、タケミカヅチさんちに引き取られたところから再開です。

早速ですが、新規に習得した特記事項の説明を含め、今後の予定について、お話ししようございます。

まず、今回【重度の実験体】によって押し付けられたバッドステータスは、以下の通りです。

ランクF【疾患：心的外傷（エルフ）】。

ランクG【疾患：変貌への恐怖】。

ランクF【背景：性転換】。

ランクG【疾患：女体恐怖症】。

【幸運】のおかげでHランク以下はなく、個数も最低の四つに抑えられてぼく満足、といったところですが、組み合わせが少々やかいかいです。

フリーユーカーさんの倍速社生活を背景に、前回お話しした心的外傷を除く三つを順に

説明していきます。

ひとつめ、【疾患：変貌への恐怖】。

こいつはですね、自分の容貌が変化することへの強い嫌悪・恐怖になります。習得するシチュエーションとしては、『10歳になったら食料にされる村出身』という背景、『美貌の喪失による失恋』というイベントなどです。

今回は、他者による強引な肉体改造が原因とされます。

しかし、デメリットはそう多くありません。重度のものではないので、自然な成長であれば体格の変化も許容できます。精々が髪型の固定、ピアスなどの肉体欠損への抵抗感、四肢を失った時に発狂不可避という程度です。

これ単体であれば、そう重くはありません。

二つめ、【性転換】。……そうですね、フリーユーカーくん、開始早々女の子になっちゃいました。たまげたなあ。

効果は文字通り、性転換！ 性別が強制的に変更されます。終わり！ マイナス事項の中で最も軽度とされるランクFなだけがあります。

デメリットは、特にありません。強いて言えば、RTAにおいては、男性と女性は能力値の伸び方が多少異なりますので、細かな調整が必要になります。

これ単体であれば、そう重くはありません。

色々どひつかきまわしてくれたのは、お前だよ、「女体恐怖症」!!

こいつの効果は『女体』——つまり女性の身体への恐怖・嫌悪! 女性らしい体つきをしたキャラクターの側にいるだけで正気度を減らしにくるヤベーやつです! ダンまちにおける『出会い』要素を真つ向からぶち壊す性質を讃えて贈られた二つ名は、『野獣先輩製造機』!!

こんな動画をご覧になられている方々なら、もうお分かりでしょう。

——この事項を与えられた男性キャラクターは、女性への恐怖感を獲得するとともに、女性への性欲を喪失、そして多くの場合、同性愛に目覚めるのです!!

うっそだろお前WWW……と思われた方もいらつしやるでしょう。ですが、既にこのゲームを遊んだことのある方なら、こいつの恐ろしさをよくご存知かと思えます。

なぜならこいつは、ベルきゅん√において強大な敵として君臨しているからです。

最も有名な場面は原作7巻のシナリオ。発情期のアマゾネス軍団に取っ捕まった場合、また春姫ちゃんの好感度が足りず妖怪ヒキガエルに犯された場合、ベルきゅんはこいつを発症します。その後の行動次第では回復することもあります、最悪……まあ、はい。

主な被害者はヴェルフ、対抗でベート、らしいです。

以上の三点が合わさった結果、現在フリーガーくん改めフリーガーちゃんは、大変な危機に陥っています。

【女体恐怖症】持ちが【性転換】した場合、どうなると思いますか？

答えは、『自分が女性だと実感する度に正気が削られていく』です。

そして、フリーガーちゃんは男性に戻ることも許されません。

なぜなら、【変貌への恐怖】を持つキャラクターにとって、肉体の性別が変わるということは、最も忌避する物事に該当するからです。

あゝ（苦痛）

……現状、フリーガーちゃんは意識のある間、常に正気をギリギリ削られる状態にあります。

本来、【極東の社】では、性根のまつすぐな孤児達やタケミカツチ様を始めとする善良な神々との交流によって、正気度の回復、人間不信の軟化、失われたコミュニケーション力の補填を行えるのですが、今回は不可能です。

女兒と戯れても女神とお話ししても消耗します。

何もせずにじっとしていても消耗します。

このような状況に陥ってしまったため、フリーガーちゃんはこんな日々を過ごさなくてはならないんですね。

ちよつと等速に戻しまして。

今は真夜中ですね。フリーユーガーちゃんが、机の前で静止しています。

何をやってるかわかりますか？

……これ、寝てるんです。

彼女が机の前で気絶するように就寝しているのは、何かの物事に心底から専心することですか、自身の精神を守れないからです。つまりは苦肉の策ですね。

早朝から社の掃除、朝から晩まで竹刀を振り、夜には気絶するまで書物の写生を行う日々は、「女体恐怖症」による精神疲弊こそ防いでくれますが、単純に苦行です。それをさせている私が言うのもあれですが。

いや、違うんですよ！ 本当はもつところ、幼少期の壮絶な体験によつて影のあるシヨタつ子が、善良な社の人々との交流でかつての純真を取り戻し、やがて社の人々のために出稼ぎにイクゾー！！ みたいな流れにするはずだったんですよ！

こんな修羅ルートなんて望んじゃあいなかったんだ！

タイムは早くなりそうですが（走者特有の邪心）。

それにしたって、完走する前にメンタルブレイクで14送りにされちゃあたまらんです。

もちろんコミユ力が底辺まで下がることを前提としたチャートではありますが、最低限、回復してもらわないと、特定のイベントで少々厄介なことになります。

——例えば、このようなイベントですね。



いつものように写生を行っていた貴方は、ふと視線を外に向けた。  
星光満ちる夜。

雲ひとつない空を見て、貴方はかつての日々を思い出す。

日に日に減りゆく年上の子供。

精神を病んでいく年下の子供。

軋みをあげて改造されていく心身。

記憶は奪われ、家族を奪われ、数度話しただけの友人がまだ生きているのか、失われたのか、そのような人物は存在しないのか、全てが曖昧。

今日生存していることに喜びを見出せぬ地獄。

だからこそ、貴方は星を見た。

不変の光。

何者にも侵されぬ天の輝きに、貴方は確かに救われたのだ。

「うむ、うむ。見とれるほどに美しい夜天じゃのう」



—— 貴方は跳ねるようにその場から飛び退き、竹刀を手に取った。

声のした方へ視線を走らせれば、確かに、そこにいた。

貴方の部屋に音もなく入り込んでいたのは、女神だ。

その名はツクヨミ。月を司る神性。

貴方の師である武神タケミカツチが、よく話に挙げていたのを思い出す。

↓ [……]

【消えろ。さもなくば斬る】

貴方は全身から敵意を滲ませ、彼女を威嚇した。

それと同時に、自嘲する。

貴方がツクヨミへと向ける敵意は、恐怖の裏返しであり、神の一柱であるツクヨミがそれを察せられぬとは考えがたい。

つまる話、貴方は『アナタのことが恐ろしくて仕方がない』ということを言外に告げているに過ぎず、それを理解しながら、威嚇せずにはいられないのだ。

「ふふ。愛い子じや。小鹿のように震えおって……思わず抱き締めてしまいそうじやが、うむ、それには時期尚早じやの。もつと好感度を上げねば素っ首叩き落とされかね

ん」

からり、ころり、鈴を鳴らすように彼女は笑う。

碧の髪をいじる指はか細く、一房ひとひやくさきを耳へとかける仕草は典雅てんがに過ぎる。

世の男を容易く虜とりこにせしめる風貌は、しかし貴方にとつては柔肌を粟あわだ立たせるものではない。

一步、ツクヨミが、貴方に近づいた。

「——こつちに来るな！」

↓【ひツ……】

貴方は竹刀を取り落とした。

「……ふむ、なるほど、なるほどのう。タケの言っていた通りか。安心せい。これ以上、私からは近づかんよ、愛い子。刀も槍も届かず、弓を取るには間近に過ぎる、この隔たりこそ我らの癖しじなじゃ」

貴方はツクヨミの言葉に返答できない。

心臓が暴れ、呼吸が乱れ、汗が吹き出る。

相手の目的が見えず、こちらの立場は底辺となれば、貴方は全くの抵抗を許されない。

「いいや……許されて、いなかった。」

「星、好きじやろう?」

貴方は瞠目する。

「私もじや。これでも月の女神じやからのう。天上を見上げるだけで心が踊る。愛い子よ、私は近づかぬとも、近づかぬので言葉は許せ。孤児達は星に関心を持たぬ、日々を無邪気に過ごすのみ、無論それをこそ愛らしく思う私じやが、いささか寂しくてのう」  
悩ましげに首をかき上げ、ため息をひとつ。

それが、貴方の関心を引き、心を動かすためだけの仕草であると、幼い貴方は気づけない。

そうして、彼女は薄雲に隠された月のごとき微笑みを浮かべ、

「どうか、どうか。話し相手になっておくれ、愛い子よ」

「天文に関して私は凄いで? 愛い子よ、おまえの疑問に対し、私は常に満月の解答を返すであらう。」

あの光の名を知っているか? 彼らを纏めてなんと名付けられているか、思い至るか

? 星辰に神秘を見出し、星々の運営に心を踊らせた経験は?」

「天文学の先人達が編み上げた星の秘跡ひせき、その全てをおまえに与えよう」

「愛しいおまえ、星を学ぶ気概はあるかえ?」

↓【……】

「——うむ、今宵はここままでとしよう。明日の夜、よい返事を聞かせておくれ」  
ツクヨミが背を向ける。

出会ったときから最後まで、ずっと艶やかであった女神が、貴方の視界から失せる。

↓【——フリーユーカー】

貴方は震える声でそう囁いた。

↓【フリーユーカー・グッドフェロー。……愛い子は、いやだ】

そうして、貴方は眠りに落ちた。

緊張の糸が途切れた瞬間、さくつと眠気に屈したのだ。

だから、貴方は気づかない。

愛しい子の可愛らしい抵抗に、月の女神がころころと微笑んでいたことに。



ツクヨミ姉貴のロールプレイに助けられましたねクオレア……ツクヨミ姉貴ありがとうナス！（心からの感謝）

はい、今のは社の神の石柱、ツクヨミ姉貴と深い関係になるイベントです。

フラグは『星が好きなこと』！<sup>I<sub>N</sub>T</sup>知性に関係なく声かけてきてくれるツクヨミ姉貴好きだよ（大胆な告白）。まあフリーユージャーちゃんの知性<sup>I<sub>N</sub>T</sup>は高めですが、ともかく実験体

されてる間ずっと星を見てた甲斐がありました。

しかし、成功してよかった。本当によかった。コミュニケーションからがかなり悲惨、かつ女神ということでのフリーガーちゃんの言動がかなりアレでしたが、ツクヨミ姉貴が上手いことやってくれました。

ここで、本ゲームの会話形式、関連してコミュニケーション力についてお話しします。本ゲームは昨今流行りのVRゲームではないので、VRのように自由な会話はできません。

キャラクターのコミュ力、性格、相手への好感度によって複数の選択肢が揭示され、それらから選ぶことで会話が進行します。

無論、コミュ力が高ければ高いほどネームドキャラからの好感度を稼ぎやすいので、本ゲームにおいて重要視される能力値のひとつです。

ちなみに、初期コミュ力最弱はエルフ、最強はぶっちぎりでヒューマンです。

どのステータスも伸び難く、筋力にも敏捷にも体格にも優れない種族の武器こそは、即ち集団を作り規律をもって団結する力なり、ということ。

エディットキャラ初心者にヒューマンが勧められている理由の一端ですね。みんなと仲良くなつて一緒にイベントをこなしていきたい方、ヒューマン、おすすめです。

エルフが最弱な理由はお察しの通りです。これはこれでツンデレプレイが捗るので

ヨシ!! (現場猫)

そんなツクヨミ姉貴との交流で得られるもの、それこそ私がこのRTAで実践させて  
いただくチャートの根本です。

即ち——【アストロロジ占星術師×幸運チャート】！

フリーユガーちゃんには、ツクヨミ先生の薫陶により、占星術師になつてもらいます。

このゲームには、【フェアルナ神の恩恵】の能力値の他に、正気度、コミュ力を始めとする様々な  
能力値が設定されています。

その中でもコミュ力に匹敵するほどに重要なのが、『職業レベル』！

一般的なRPGにおける『剣士』『野伏』『盗人』のようなもので、例えば剣術を学べ  
ば剣士としてのレベルが、窃盗をしまくれれば盗人としてのレベルが上がります。

【恩恵】が『力量』なら、職業レベルは『技量』。

この二つの違いを知り、両方を高い水準で備えることこそ、第二級冒険者到達の関門  
といったところでしよう。

モンハンでいう、護石や装飾品を駆使していつちよ前にスキルを発現させられるよう  
になった、みたいな感じです。

そのうちのひとつである「占星術師」は、占いやナビゲートによる探索補助を得手としており、戦闘では自身への特殊な強化パフを駆使して戦う職業です。

パフの数値がその日の星辰によって増減する上に、魔術師職でありながら攻撃魔術を一切習得しないこともあって、不遇クラスと思われがちですが……

——ほならね？ 自分でや証明しつてみるって話でしよう？

私はそう言いたいですけどね（無敵構文）。

私は特別ほならね理論信者という訳ではありませんが、このRTAを通して、占星術師の良さあじ味を知っていただければいいなあと思っています。

そして、今回は幸運にも「重度の実験体」でランクAの資質【侍】を獲得できましたので、こちらも成長させていこうと思います。

元々、【極東の社】を初期位置に唾すえたのは、善良な人々によるメンタルケアはもちろんのこと、タケミカツチ様から教えをいただける点があまりにもアドすぎるからです。

通常プレイでも、RTAでも、タケミカツチ道場ほど効率よく技量を高められる拠点はそう多くありません。

【恩恵】を受けとる前の『調整』として、彼の指導はとてもの確です。

また、【極東の社】で生活することで、操作キャラクターに『社のために金を稼ぐ』と



いう、『明確な目的』<sup>グランドオーダー</sup>を付与することができません。

有識者の方々の間で、オラリオスタートとオラリオ外スタートどっちがええねんという議論が白熱なさっている理由のひとつが、この『明確な目的』<sup>グランドオーダー</sup>の獲得の容易さになります。

こいつは、ルート完遂よりは優先度が落ちますが、キャラクターにとつての『戦う理由』として機能します。

ベルくんの『英雄願望／祖父との約束』。『憧憬一途／黄金の出会い』。『異端英雄／水精との誓い』。その他エトセトラであり、

アイズの『消えぬ黒炎の劍姫』であり、

リリの『白光』、

ヴェルフの『鍛冶神への挑戦』、などなど。

そういった、己の行動方針というものを抱えることで、精神の保護や過重労働を始めとする様々なバフを得ることができません。

強烈なものを挙げるなら、リリの『白光』でしょうか。彼女のそれは、精神汚染の完全遮断です。どれだけ格上の相手だろうが、神のこしらえた神酒を呑み干そうが、精神面を侵されることはありませんという、職業によっては噴飯ものの祝福になります。

社のために金を稼ぐ、正式名称を『家族への献身』は最も取得しやすいグランドオー

ダーであり、効果は連続勤務時間の増加です。つまり連続で迷宮に潜れる期間が増えます。社畜かな？

タケミカツ子様から物理的な方面の指導をいただきつつ、他の女神様達から色々教えてもらい、コミュ力を鍛え、同時にグラントオーダーも獲得できる。

初期位置として【極東の社】が人気な理由は主にこんなところですよ。

今後の予定ですが、ツクヨミ姉貴から占星術を学び、タケミカツ子様から湾刀の術理を教わる日々を続け、13歳のタイミングでオラリオへ向かいます。

それまでは特にイベントもなし、ひたすら倍速です。

……暇ですねえ。

こんなこともあるかと。

みなさまのためにいゝ。

こんな動画をおゝ。

ご用意ゝ。

…冗談です。上映会なんてやるわけないだろ！ いい加減にしろ！  
今回は説明ばかりになってしまいましたでしたが、次回からオラリオへinするのですいま  
せん許してください！ なんでもしますから！

それでは今回はここまで。ご視聴ありがとうございました。

## 幕間『ある夜、社の中』

私は【幸運】に恵まれている。

生きているからだ。

運が悪ければ、死んでいた。

あの時、少しでも反抗的な態度をとっていたら、薬品の材料にされて死んでいた。

魔法薬に上手く適合出来てなかったら、死んでいた。

一緒に逃げよう、と言われて、無視していなければ、死んでいた。

記憶を穴だらけにされ、肉体を弄くられ、精神を壊していたら、死んでいた。

『失敗作』となつても——女体への変化は成功したけれど、エルフにはなれなかった——

——研究価値を見いだされていなければ、死んでいた。

どこぞの正義の眷属とやらが、やたらめったらに撒き散らした魔法の余波を浴びていたら、やはり、死んでいた。

だから、私は、【幸運】に恵まれている。

……恵まれていなければならぬ。

生きているのだから、私はとても【幸運】で。

【幸運】なのだから、【幸運】でなかった顔もわからない不特定多数の誰かのために、私は——

「……」

瞳を開ける。

見知った天井だ。

上体を起こし、諸々の確認をする。

夢を見ていた、という訳ではないらしい。

もし夢を見ていて、それが原因で眠りから覚めたのなら、私はとつとつに失禁していて、股下の辺りに不快感を覚えているはずだからだ。

間違ひなく恥ずべき黒歴史だが、個室を与えられるに至った要因のひとつでもあるので、複雑な心境である。

部屋は、暗い。

窓から外を見れば、雲ひとつない夜天が目飛び込んでくる。

様子からして、夜明けまで三時間といったところか。

どうして起きてしまったのかはわからないが、さて、どうしてくれよう。

……時期が時期だ。<sup>タイムリ</sup>何かしらの意味はあるだろう。

胡乱に判断し、立ち上がる。

護身用の木刀を確かめ、足袋たびの調子あらたを檢める。

一足一刀の間合あひいにあつて、道具の不都合で挙動を仕損じては、師である劍神タケミカヅチに合わせる顔がない。

音を立てず、部屋から出る。

隠密行動は小人族バルツムの十八番である。

時間を敵に回している状況ではないため、あくまで動作は緩慢に。

月明かりに照らされる廊下を進む。

ひび割れた床が軋みをあげる。

粗末な布団で、より集まって安眠する子供たちの息遣いを聞く。

眉が歪むのがわかる。

この社に、金銭的な余裕はない。それが辛く悲しい。私のような者を置いてくださる慈悲深きお歴々が、純朴な子供たちが、このような暮らしをしていいはずがない。

だからこそ、私は、

「

思考を中断する。

手のひらに唾をくれ、木刀に馴染ませる。

誰か、いる。



場所は、いつもは私が剣を振るっている道場。

タケミカヅチ様ではない、それはわかる。彼はこのような粗末な息遣いをしていないし、あんなに小さくもない。

様子からして、何かを振るっているのだろう。

愚図なりに思考を回し、結論を出す。

ここの子供であれば咎め、寝るように言い、夜盗であれば素っ首叩き落とすのみ。

勢ふすまよく襖ふすまを開けると、はたしてそこには見覚えのある少女がいた。

「命ミコト」

「——あ、ふえっ?」

「……命ニコト」

「ふ、ふあいつ!？」

木刀を振り上げた体勢で固まっていたので、語気を強めてみると、何やら奇声をあげて直立不動となつた。

よく見てみれば——よく見たくはないのだが万が一何かしらの問題を抱えていれば事なので——子供らしいもつちりした肌には玉のような汗が浮かんでおり、長い時間鍛練に励んでいたことがわかる。

どのような事情かは知らないが、告げることは変わらない。

「身を清めて、寢床に戻りなさい。もう、夜が明ける頃合いだ」

「あつ、はい……」

「それでは」

「あ——ちよつ、と！ お待ちくださいませんかつ！」

「……何」

正直に言つてしまえば、これ以上『女』と会話したくはないのだが、請われたものを無下には出来ない。何より彼女も私が社（じ）にいることを許してくれていた人だ。

ため息をひとつ、ゆらりと振り返つてみると、そこには興奮止まぬという様子でこちらを凝視する命がいる。

視線の向いている先は……携えている木刀、だろうか。

「そ、その。剣の心得をお持ちだと、タケミカツチ様が、おっしゃっていましたが」  
「指導をいただいている」

「そ、そんな細腕で——いえそうではなくつ。あ、えとつ、それなら——」  
わりと直球な侮辱を慌てて取り消すのを見て、静かに嘆息する。

細腕なのは事実で、侮られるのは当然だ。

彼女の中の私は、栄養失調で餓死する寸前の姿から更新が止まっているはず。無論、その時よりは健康だと自負しているが、それでも彼女の反応は正しい。彼女は変わらず心優しく、依然として私は脆弱である。

気にしなくていい、そう口にする前に、命は動いたのだ。

「み、命と！——戦ってくださいっ！」

「……矛盾してないかな」

「あああ、すいませんっ、これには事情がありましたて！」

ぶんぶんつ、と諸手を振り回す命。

彼女の言い分はこうだ。

先日、どこぞの貴族様から食料の援助を受けたらしい。

貴族様のご息女が、苦しい生活を送る社の存在を知り、己に回されるはずの豊富な食

料を、こちらに回してほしいと御両親に頼み込んだのだとか。

有り難い話である。

それで、タケミカツ子様と社の子供たちはその恩返しのために、

「拉致つてこい、と？」

「はい、ただ広いだけの屋敷でひとり寂しそうにしているあの娘を連れ出してこい、と」

「……………」

ふと、気が遠くなった。

最近何やらどたばたしてるな、とは思っていたが、そんなことを企てていたとは。もっと早くに私に声をかけてくださったなら、幾許か力になれただろうに。

……遺憾ながら、好都合ではあるのだが。

「大人の警邏に対抗するため、あのお方を連れ出すために、私達は【フェアルナ恩恵】を授かりました」

なるほど、と頷きを返す。

彼女がぼんやりと『灯り』を纏っているように見えたのは錯覚ではなかったらしい。

険の上から、道場の外から命の姿を捕捉した魔眼を撫で、話に耳を傾ける。

元々、武神であるタケミカツ子様から武術の手解きを受けていた子供たちだ。【フェアルナ恩恵】

なんて鬼に金棒だろう。彼等彼女等は増幅された身体能力の確認を済ませ、さあ今こそ

出陣の時、という頃合いで、最後の調整として身内での決闘を行い……

「それで……全員叩きのめした、と」

「は、はい。全員、叩きのめしました」

「……お前達の中で、最も体格と技量に優れていた……桜花おうかを含めて？」

「はい、その、素手の勝負では今でも勝てる気はしませんが……武器を使った形式では、負ける気がしませんでした」

曰く、彼女は今まで他の子供に剣を向けたことがなかったらしい。

訓練ではいつも素手で戦い、結果として桜花に次ぐ二番手の位置にいたのだとか。

周りの子供たちは、命が心優しいから剣を向けられないのだと思っていたらしいが、その真実は。

「剣を使ってしまうと、勝負にならないだろうと、タケミカヅ子様……」

「……素晴らしい才能だ。桜花とて、どう低く見積もっても千人にひとりくらいのを才を持つ益ますらお荒男見習いだろうに」

「えへへ……それで、ですね？ 訓練を終えて小休止をとっている時、タケミカヅ子様からこう言われたのです！」

曰く——今の命なら、フリーユに剣を向けても大丈夫かもな、と。

いや、何言ってるんですがタケミカヅ子様。

「……つまり、試したいのか」

「はいっ。命は今日の夜、春姫殿をお迎えに行くのです、だから、出来る限り己を高めた  
いと思つています。桜花殿たちでは、その、練習相手にならないので、ひとり自己鍛練  
していたのですが——」

じつ、と。目映い意志の込められた瞳に見詰められる。

「本当に、本当に久方ぶりに、フリーユ殿と出会え、更に木刀まで携えていらつしやるの  
です。これは、打ち合え、という……託宣、のようなものかと！ 思うのです！」

ふむ、なるほど、そう言われるとその通りな気がしないでもない。道場を訪れた発端  
が発端だ。

確かに、「恩恵」を得た命が相手なら、私も真剣に戦わねばならない。

命にとつても、私にとつても、最後の調整となるだろう。

既に戦いの準備を終えている命の前で、木刀を構える。

ひい、ふう、みい、間合いを計る。

およそ七<sup>メトル</sup>M。

一足一刀からはやや離れた距離。今更ながら、こんな距離で会話をしていたのかと嘆  
息する。主に年下の子に氣遣わせてしまった不甲斐なさで。

そんな訳で、先手を譲るくらいはしよう。

「……来なさい」

「では！——とおーっ！」

可愛らしい鬨反社が出そうなどきの声をあげて、命が突っ込んでくる。

——速い。十に満たない幼子の疾駆とは思えぬ速度に舌を巻く。

踏み込みの強さも、振り落としてくる斬撃も、見事なものだ。

生来の才、積み上げられた鍛練が、神の加護を得て数倍に膨れ上がっている。

【恩恵】とはこれほどのモノなのか——ここで知れたのだから、やはり私は幸運だ。

けれど。

ああ、けれど。

遅い。

タケミカヅチ様の一太刀には程遠い。

半歩下がって回避する。

眼前を一過する剣閃。風圧で舞い上がる前髪。

回避されると思っていなかったのか、命は驚いたように目を見開き、隙を晒した。先程の一件と言いつめてくれる。いや憤ってなどいないが。

ともあれ、一手番<sup>ターン</sup>凌いだ。

次は、こちらの番だ。

「しッ」



純粹に、高揚を覚えていました。



中々顔を合わせてくれない『姉様』と、久方ぶりに会話出来たことにも、タケミカツチ様 剣 神からその腕を認められていている剣士と、打ち合えることにも。

「言つてしまえば、いざ些かの失望すら感じていたのです。

【恩恵】を得たのだから、きつとそれ以前とは違う結果になるだろうと、剣を執つたのに、結局剣でもつて命に敵う方は居なかつたのです。あの桜花殿ですら、命の剣を目で追えていないのだと知れた時、はい、確かに命は心が冷めてしまったのです。

だから、嬉しい。

姉様が剣の心得を持っていると聞いた時は驚いたし、命に届きうる技量だと知つたときは耳を疑つたけれど、うれしい。

負けられない戦いを前にして、命に敵うかもしれない人と打ち合う機会に恵まれた。幸運なことだと思う。

「……来なさい。」

鈴のような声が耳じ朶だを叩きました。

纏う空気は鉄塊そのものなのに、妖精のような顔立ちが、風のような立ち振舞いが、ただ硬いだけの空気を華やかなものにしていきます。

思えば、春姫殿と、姉様はどこか似ているのかもしれない。

春姫殿と姉様。どちらも容姿端麗ですし、人見知りなところも似ています。

先手を譲られたのですから、本気で行かせてもらいます、姉様。

「では！——とおっつ！」

背中【恩恵】の熱に駆られるように、命は肉薄しました。

【恩恵】を授かる前とは比較にならない速度で間合いを詰め、木刀を振りかぶり、そして、

そういうえば、姉様は【恩恵】を授かっているのだろうか？

という、打ち合いの前に検めなければならなかった事項に思い至りました。

（不味ッ——）

もし【恩恵】を得ていないのだとしたら不味い。

桜花殿ですら目で追えなかったこの剣閃を視認するなど不可能だ。

いや、例え視認出来たとして、なんの対応も叶わないでしょう。回避も受け流しも出来るはずがない。

結果は明瞭。命の木刀が姉様の額を割るのみ。

既に攻撃は為ってしまっている。

手加減すらして差し上げられないことに齒噛みして、後悔と共に、木刀を袈裟けさに振り落とし、

「——え？」

すかつ、と。

己の剣閃が虚空を斬り裂いているのを見ました。

姉様は、ほんの少し後ろにいました。

意味がわかりません。

だって、命とてタケミカツ子様からご指導を賜っている身です、敵との目算を誤るなどという不手際はしません。

確実に当たる軌道で木刀を走らせました。

当たるはずなのです。

姉様は全く移動していませんので、外れるはずがないのです。

(いや——その前提が違う……?)

ぶわつ、と。

全身の汗腺が開くのがわかりました。

けれど、そうとしか思えません。

姉様は、きつと、動いたのです。

命の剣閃を完璧に見切り、命が知覚出来ないほどの足捌きで、移動したのです。

そうして、無様に隙を晒した命を咎めるように。

姉様が、動きました。

「あ——あ」

気がついた時には、命は尻餅をついていました。

剣など既に手放していて、腰は抜けていました。

目の前の姉様は、木刀を握っているだけで、命はそつと、首筋に触れました。

どうやら、首と胴は無事に繋がっているようでした。

見えなかった。

斬撃の初動も、刃が辿ったであろう軌跡も、何もわからない。

こちらを見下ろしている姉様と、敬愛する剣神が、ほんの一瞬、重なって見えた。

「あ——は、は」

春姫殿のような、儂いお方だと思いました。

綺麗で、臆病で、心優しい人だと思っていたのです。

重なったのは、タケミカツチ様でした。

おそらく、おそらくだけれど。そうであつて欲しくはないし、違つたのならまだ救わ

れるのだけれど。

きつと、姉様は、【恩恵】を秘めていない。

一合すら打ち合えなかった、否、そも戦いの舞台上に上がっていたのかどうか。文字通り、レベルが違う。

「——姉様」

「……」

姉様が形のよい眉をほんの少し歪めた。

姉様は、姉様と呼ばれると怒るのだ。何故かは知らないけれど。

「また、明日……勝負して、ただけますか？」

「……星の巡り次第で、そうなることもあるだろう」

……よかった。

なら、いい。

次があるのなら、安心できる。

明日も明後日も、時が許す限り、私は、命は、小さな剣士に挑むのだろう——

☆☆☆

曖昧な表情で沈黙する。

目の前には、気絶したらしい命。

余りにも大人気なかつたと猛省する。

六歳の子供には、酷だった。

想像以上の腕前だったので、つい、昂ってしまった。

しかも、このまま放置する訳にはいかないのです、私はこれから汗まみれの彼女を清め、布団に寝かせなければならぬらしい。

端的に言つて地獄だった。

命があと七年ほど歳を重ねていたら即死していたかもしれない。

けれど、彼女を病魔に侵させる訳にはいかない。

だから、仕方がない。

これから親不孝を犯す私への天罰なのだと言ふと勝手に解釈して、神経を磨り減らす作業に従事した。

☆☆☆

数日後、風の噂で何やら役人の屋敷で騒動があつたらしいと聞いた。

社の人々に危害は出ていないらしかつたので、安堵を覚えた。

けれど、今後、屋敷からの援助は期待できないだろうとも感じていた。

だから、私は親不孝だと罵られようとも、この判断を間違つていとは思わなかつた。



## L v. 1 ↓ L v. 2

## mp. 3 『舞台／迷宮都市』

齡十三の女兒に遠方まで旅をさせるRTA、もう始まつてる！

さて、社での生活を三年間続け、遂にオラリオへ行く運びと相成りました。やったぜ。今回は実験体期間が長かったので社で生活出来る時間が試走より短くなつてしまいましたが、無事に立立を迎えられて一安心、といったところ。何より、春姫はるひめのイベントに巻き込まれるというリセット不可避なガバを犯さずに済んでよかったです。わりかしギリギリでしたね、はるひーイベの発生時期はある程度ランダムなのですが、かなり早期の乱数を引いていたようです。

そんじやあ書き置きを残しておきまして、いざ鎌倉（五十倍速）。

さて、早速ですがオリチャー発動、最寄りの町で布を買います。

色は適当に白でいいや。それを適当にちよこちよこつと弄りまして……

はい、簡易外套の完成です。これによつて顔と体の線を隠します。こうすることで、フリーユーカーくんの無駄によろしい容姿と少女らしい体を誤魔化し、『女への目線』と

『女扱い』を避けることができます。

見た目は完全に動くてる坊主。小学一年生の頃、両親に「ランドセルが歩いてる」と言われてたのを思い出します。これなら鏡を見ても安心！……は出来ませんが、心なしかフリーユーカーちゃん、ホクホク顔ですね。かわいいなあフリーユーカーくん（濁点省略）。

さて、改めて港町へゴー。

本来なら、各地点からオラリオへの移動の際には、ランダムイベントが発生したりしなかつたりします。

陸路の場合は、山賊と遭遇したりモンスターと遭遇したりするのですが、フリーユーカーちゃんは「幸運」持ちなのでそのようなバッドイベントはカット……カットカットカットカットカットカットカットカットカットカットカットカットカットカットカットカット（WRKA）

ちなみにランダムイベントの中には、まあ当然ですが、こちらの利益になるものもあります。しかし少なからずもたついてロスになります、基本こちらも無視です。オルガ団長を見習って止まらないようにしましょう。

港町に到着しました。

極東から迷宮都市のある大陸へ渡る方法は幾つかありますが、現在のフリーユージャーちゃんが利用できるのは海路のみです。船にのりこめー。。

……？ 乗ってくれませんか。どうしました？ 海上や船に関するバッドステータスはなかったと思うのですが……。

と思っていたら、船長がエルフでした。ガバ運です。ね。クオレア。別の船を探しましょう。そうしましょう。

一般人として利用できる船の候補は基本二〜三隻、船長含むキャラクターは特定の人物を除いてランダムなので、先程のような事態も起こり得ます。

無事に乗船出来ました。ドワーフの船長の船ですね。船員と利用客にエルフがいなのも確認できていいゾーこれ。ドワーフとエルフの仲は悪いつてトールキン先生も言ってた。

しかも航海中、お仕事を手伝えばお小遣いも貰えるようです。やったぜ。無骨系ドワーフおいたん愛してる。

ロスにならない範囲でお魚の捌き方や操舵の心得なんかも教えてもらいつつ、ひたすら大海原を進みます。

航海の間に、本RTAにおけるLv. 2昇格の目論見について、お話しします。

このゲームにおいて、冒険者という区分でLv. 1↓2となる方法は、大きく分けて三つあります。

1つ目は、『インファント・ドラゴンの討伐』。上層唯一にして最強の竜種をぶち頃すことで、ほぼ間違いなくランクアップ出来ます。種族、年齢、職業問わず、特別なイベントもフラグも不要、ということ、最も分かりやすい手段になります。

こちらの問題点としては、単純にインファント・ドラゴンが強すぎることです。オリキャラによる通常プレイ、もしくはは原作キャラを使用したルートならともかく、RTAという低ステイタスでの攻略を強いられる形式だと辛すぎて吐きます。

物理型なら「力」、魔法型なら「魔力」がB以上、残りのアビリティが最低Eはないとまともに戦えません。そして、ひいこらステイタスをボーダーラインまで上げたところで、三人以上の『仲間』を用意する必要があります。単騎でドラゴン討伐はむ……無理です。

以上の理由から、『インファント・ドラゴンの討伐』は却下です。時間がかかりすぎる。二つ目は、『格上の冒険者の札害』です。自分よりレベルが上のキャラクターをぶち56してランクアップします。原作キャラではクロエさんがこの手段でランクアップしていましたね。

これに関しては、採用できる余地はあります。本RTAの縛りとして秩序ローフルグッドにして善の維持というものがあり、秩序陣営の冒険者の札害が禁止されているのですが、混沌陣営のゴミクス共なら頃しいので、適当にイヴィルスのオニイサンを見繕って抹殺すればオツケー。

欠点としては、そんなに都合のいいオニイサンはいないってことです。付け加えるなら秩序側からも嫌われます。「アストレア・ファミリア」からヘイト貰うのはいやーキツイです。

よってこちらも却下。仕方ないね。

という訳で、今回採用させていただきますのは、三つ目の『特定のイベントの完遂』です。イベントによる戦闘に勝利してランクアップを図ります。

言ってしまうと、ベルくん達原作キャラがいつもやってるアレです。ミノタウロスとの『冒険』、黒ゴライアスとの戦闘、ウォーゲーム戦争遊戯、歓楽街での大立ち回り、イケロス・ファミリア狩猟者達との殺し合い、アステリオスとの『再戦』。

ベルくんルートでのランクアップは全て『特定のイベントの完遂』によるものです。といっても、ここまで極端なのは原作キャラでもベルくんくらいですが。

今回狙うのは、アイズちゃんが初めてのランクアップを果たすイベントへの介入です。彼女と共闘(?)して位階の昇華を果たします。

そのために必要なものは、然るべき時、然るべき場所へ突っ込むことのみ。手間がかからない代わりに難易度は地獄、更に特定技能の有無によって『詰み』があり得ます。

それでもアビリティのボーダーラインがかなり低く、何より【ロキ・ファミリア】と関係を持てるのが大きいので、フリーユーカーくんには死ぬほど頑張ってもらう予定です。

話し終えたところで、ちようど陸に着きました。もつと言えば港街メレンですね。迷宮都市オラリオから直近の港街で、大陸を越えて迷宮都市を訪れてくる冒険者志望のオニサンをお出迎えしてくれます。

当然フリーユーカーちゃんもここで降ります。ドワーフの船長殿、短い間でしたがありがとナス！

お、『解体用のナイフ』を貰えました。今後、ダンジョンでモンスター死体の死体を弄くるのに役に立ってくれそうです。会話で生じたロス分の価値はありますねえ！

港町から迷宮都市までは五キル口ほどですが、既に迷宮都市の市壁が見えてますね。高すぎイ！ 自分、外壁登ってみてもいいですか？

ちなみにLv.1かつ道具なし、魔法などの補助なしで市壁を素手で登り切ると『偉業』判定されることがあります。RTAにも通常プレイにも向かないし、むしろ何故発

見されてしまったのか……

着くウゝ（入場）。

こちらア、【原作九年前】のオラリオになります。

やあああつと着きましたよもー！ なんのイベントもなく半年かかるんだから困ったものです。

目の前には、人、人、人！ ここまで多民族乱れる混沌とした都市はオラリオくらいです。フリーユーカーくんも目を丸くしてます。かわえッ……かわえッ……

都市外ではお目にかかれない光景を堪能しておえたら、早速移動です。裏路地を活用して、冒険者ギルドへ向かいます。

ちなみにこの時期原作九年前のオラリオはお世辞にも治安が良いとは言えず——これからもつと悪くなっていくのですが——路地裏を使うと一定の乱数で誘拐イベントが起こったりするのですが、フリーユーカーくんは【幸運】なのでそのような心配はフヨウラ！

ギルドに着きました。外見は原作開始時とそう変わりませぬ。受付嬢の面子は違いますが。

早速中に入ります。中に入れるZ O Y！ 中々Z O Y！（陛下）

……てるてる坊主スタイルのフリーガーくんに一瞬注目が集まりますが、まあこんな格好してるヤツは珍しくないので、波が引くように注目は薄まっています。ちっちゃいしね。

さて、ギルドでやることですが、各「ファミリア」の情報が記載されている冊子を閲覧します。受付嬢と会話する必要はありません。そつと持つていつてギルドの端っこで読みましょう。

これによって、中堅以上の「ファミリア」の『入団試験』を受けることが出来るようになります。記載された日程に試験の場所へ行くことで、『入団試験』イベントが発生します。

ちなみに試験でない日に突撃したら、零細ファミリアでなければ門前払いです。試験日以外に学校突っ込んで入学試験受けさせてくれ、と言ってるようなものですからね。

ともかく、ここで重要なのはお目当てのファミリア——私の場合は「アポロン・ファミリア」の日程なのですが……どうやら明日っぽいです。やったぜ。

「アポロン・ファミリア」の入団試験は、珍しいことに戦闘面での優秀さを示す必要があります。代わりに求められるのは、『標準以上の容姿』と『芸術技能』です。そんな



やから等級Dなんやぞ（辛辣）。探索系派閥だルルオ!? 真面目にやって、どうぞ。

まあその、アポロン兄貴は資金面であんまり困っておらず、団員の質を高めようという意欲に欠けてるのはわかるんですけどね。それにしたってお前……。

実際合格できるか、という話になりますと、九割ほどの確率で入団できると思われるます。容姿に関しては、元々それなりに良かったのがTSによって女神カンス並ストになつてるので問題ありませんし、『芸術技能』は「占星術」のひとつたつ披露すれば大丈夫です。単純にパフォーマンスとしても使えるのが占星術のいいところ。

それでは、試験開始まで倍速していきます。適当な宿に泊まってお休みしようねえ……（十倍速）。

この間に、選ばれたのはアポロン・ファミリアでしたの理由をお話しします。

まず言及させていただくのは、RTAという形式において求めなくてはならない要素についてです。

それは大きなもので三つ。その派閥で完走できるのか、その派閥で早く走れるのか、その派閥でしか出来ないことがあるのか、です。

1つ目に關してはもうそのまんまです。完走出来ない派閥に入るわけにはいきませ

ん。具体的には闇派閥のディオニソス、タナトス、ルドラ、ペノア、そしてデメテルさんちもアウト。こいつらだとう足掻いても秩序ローフルグッドにして善の維持なんて出来ないし、そもそも生存の択があるかすら怪しいです。

2つ目は、ランクアップに必要なイベントが頻発するようだとアウトです。つまりはフレイヤやロキなどの原作キャラ盛り沢山な派閥。環境こそよろしいですが会話が非常に大量で、経験値の悪いイベントが非常においしくない。通常プレイならともかく早さを重んじるRTAでは採用できません。

3つ目ですが、これは特に重要視しなくても大丈夫です。ただ、アポロン・ファミリアを選んだ大きな理由がこちらになります。

こちらの三点を念頭に、アポロン・ファミリアを評価しますと、  
まず、アポロン・ファミリアは闇派閥ではなく、零細でもないので完走は十分に狙えます。

原作キャラもそう多くはなく、何よりアポロン・ファミリアは本拠地に定住することを強制されないので適当に宿を取れば無問題です。

そして、アポロン・ファミリアの団員であることで、Lv. 2↓3へのランクアップを狙えるイベントに参加することが出来ます。

以上をもって、私はアポロン・ファミリアを選択しました。

もちろんロキ・ファミリアで走っている方もいらつしやいますし、これらの意見は私の主観によるものだご理解くださいますよう、よろしくお願いいたします。

さて、試験当日です。

場所はアポロン・ファミリアの本拠地。けっこう人が多いですね。こちらの方々と席を争う訳ですが、走者としては気楽です。なにせロキとかガネーシャの試験にはこの倍以上の人数、より質の高い猛者が集まってくるので。これだから中堅派閥はたまらねえぜ。

と、試験のために本拠地に入るので、その前に主神であるアポロン兄貴と軽いお話をします。

これは入団希望者に混じって刺客の類いが入ってくるのを防ぐための処置で、『YO U 私達に不利益なことする?』と問いかけて、アウトだったら引つ捕らえる、というだけです。神には嘘つけないってそれ一番言われてるから。

そんなわけで、ファミリア内でも実力者らしい人達に護衛されてるアポロン兄貴の御前に参りまして、問答をさせていただきましよう。てるてる坊主スタイルのフリーユーガーくんは怪訝な眼差しが集中しますが無視。素直に対応します。

……。

……。

アポロン兄貴？ ナズエ止まってるんです？  
えっ、フリーズ？ ……再走案件ですか？

えっ。

あつ、はい。

——入団が決まりました。やったぜ。

mp. 4 『邂逅／太陽の男神』

☆☆☆

「髪を撫でてもいいかな？」

—— 貴方は彼の要望を手痛く突っぱねてもいいし、受け入れてもいい。

↓【……どうぞ】

【すみません、そういうのはちよつと……】

貴方は熟考の末、今日知り合つたばかりの、太陽の男神に頭を差し出した。隣に座る男神は、一瞬の逡巡しゆんじゆんを経て、おずおずと貴方へと手を伸ばす。

そうして、壊れ物を扱うかのように、愛しい人の頬を愛撫するかにように、貴方の銀の髪を梳すいた。

「ああ、く……」

男神の声帯から零れ落ちる、間の抜けた、感嘆の言葉。

それはつまり、この世全ての女性を虜にしかねない魅惑のバリトンに違いなかった。タケミカヅチを始めとする【社】の男神達のそれが『硬い』と言うつもりはないが、しかしこの男神——アポロンの声は、そう、『甘い』のだ。

愛を囁くことを日常とする神である。

はたして今日に至るまで何人の女性の頬を朱に染めてきたのだろうか、一応肉体的には女性である貴方は、ぼんやりと考えていた。

——マテリアルが解禁されたちなみにこれは全くの蛇足だが、愛を囁いた割合で言えば女性より男性の方が高かったりする。

「……すまない、正気を失っていた。君を迎え入れてから、どのくらい経ってしまっただろうか」

腕利きの斥候の頭の中には方位磁石やら砂時計やらが詰め込まれているらしいが、少なくとも貴方には当てはまらない。

なので、貴方は部屋に備え付けられた豪華な時計を見て、撫でるといふ行為に費やされた時間を申し上げた。

アポロンは「マジか」と神々特有のスラングを口走り、しかし、撫でるのは止めなかつ

た。

「ああいい。とてもいい、素晴らしい、この手触りだけで詩を綴ってしまいそうだ。いや綴るべきか。ともかく素晴らしい。いかな、詩歌の神にあるまじき語彙力だ、いやしかし」

アポロンの顔はほにやりと歪んでいた。

美の女神を目撃したとしてもこうはならないだろう。

その表情に、貴方には見覚えがある。

目撃例はいくつかあるが、最も鮮明に覚えているのは、社に引き取られた赤子が、初めて言葉を発した時のことだ。

いわながひめ、と口にしたのだ。

はたしてその赤子を抱えていた母親代わりの女神は驚天動地の狂喜乱舞、赤子を携えたまま社を三周し、疲労困憊の上で、現在アポロンが浮かべているような顔をした。

とすると、彼から向けられているのは親愛の類だろうか。決めつけるのは早計だが、そう思っておいて問題はなさそうだった。

貴方は、目と目があつた瞬間から異様に執着してくる男神が、この忌々しい身体を求めている訳ではなさそうなことに安堵した。

「我が妹、アルテミス月女神の恩寵篤き月の子よ。君を迎え入れられた幸運と運命に感謝しよう」

そう口にしてから、ぼんぼん、と二回。貴方の頭をやさしく叩いて、アポロンは貴方への愛玩行為を止めた。

【この発言について追及する】

↓【行動しない】

貴方はアルテミスという単語に頭の隅っこを刺激されたが、さして気にすることでもないだろうと放置した。

「さて、予定より遅くなってしまったが、早速【ファルナ恩恵】を与えようと思う」

お互いに、表情が引き締まった。

「といつても、そう大層なものではないが……背中に、直に触れる必要がある。私は男神故、抵抗はあるだろうが……」

アポロンが二の句を告げる前に、貴方は既に脱衣に入っていた。

恩恵の取得に関する知識は既に仕入れているので驚きはしないし、むしろ女神には触れられたくない。男神に触られたい訳でもないが。

貴方はあつさりとは半裸になって椅子に座り、アポロンに背を向けた。



☆☆☆

クレイジーサイコシスコンにロックオンされてやはりヤバいRTA、不味いですわよ！  
（令嬢）

アポロン兄貴は『銀髪』や『銀眼』などのキャラクターに対し、『月↓月女神↓アルテミスっぽい』とかいう三段論法めいたナニかによって『第一印象判定』にプラスの補正がされる特性を持っています。

そしてフリーユージャーちゃんも銀髪銀眼の超絶美少女……あつ、ふーん。

妹さんを想わせる子供に執着するくらいなら、さつさと仲直りすればいいと思うんですけど（禁句）。

アルテミスとアポロンの関係については、ウイキを見ようね！ わしも調べたんだからさ（同調圧力土方）。

しかしここまでの反応は珍しいです。想定外とも言えます。入団試験免除はタイアイム的には嬉しいですが……アポロンを含む一部の神様が主神の場合、好感度高くしすぎると監禁される危険が危ないんですね。好感度調整に苦心する未来が見える見える……。

まま、ええわ（休暇課題を最終日まで引きずる気質）。

でも今は、そんな事はどうでもいいんだ、重要なことじゃない。ダンまちの醍醐味にして序盤の盛り上がりどころさん、おまちかねの「恩恵」タイムがやって来ますわよ奥さま！

イヤアーツ!!（僧侶 杉田 蜥蜴人銀の祝詞）。

このレギュレーションのRTAは、他のレギュレーション以上に特定の「魔法」、「スキル」を引くことが重要です。

成長系スキルなしの一般冒険者を5年でLv. 5まで到達させるのですから、真面目にコツコツアビリティ上げて、なんてやってる暇はありません。

活用すべきは事前に獲得しておいた『特記事項』と『魔法』、『スキル』、そしてねるねるねるねよろしく練り込みまくったガバガバチャート！ 低レベル低アビリティでな

んとか強敵を撃破することを強いられているんだ！

このゲームにおける「魔法」と「スキル」の発生条件は、設定されたフラグの達成です。ただしそのうちの半分くらいは血筋由来だったり種族由来だったりするので、なんでも自由に獲得できる訳ではありません。

有名かつ困難なのは王族ハイエルフなことが条件のヤツですね。リヴェリア様とかいう前例のせいで里から出るのが、もう気が狂うほど、キツいんじゃない。レッサーレゴラス軍団の目を盗んでのスニーキングとか確実に「ランクアップ」案件なんだよなあ……加減しろ馬鹿。

さて、これまでのムーヴでいくつかのフラグは達成しているつもりですが、どうですかねえ？ 目当てのスキル出てくれよなー頼むよー（走者特有の懇願）

……お、出ました！

フリーユーカー・グッドフェロー

L v. 1

力：I 0

耐久：I 0

器用：I 0

敏捷：I 0

魔力：I 0

魔法

〇

〇

スキル

【半<sup>カイネウス・ヴェール</sup>端者】

・《耐久》に高域補正。

・水上歩行可能。

・《水上》条件時全アビリティ超域補正。

・受け入れる程に強化。

【一意<sup>コンセントレイト</sup>専心】

・超集中。

・行使判定の達成値は精神状態に依存。

・《器用》値によつて基準値減少。

・連続発動困難。ファンブル失敗時、一定時間理性蒸発。

【妖精虹石】グラムサイト

・魔眼保有者。カラットホルダー

・発展アビリティ《魔眼》獲得。等級は《魔力》に依存。潜在値含む。現在ランク『I』

・《魔力》に成長補正。

・妖精・精霊と親しくなる。

---

やったぜ。投稿者：変態糞走者（1月14日05時14分19.19秒）

無事に狙っていた二つ、そしておまけにひとつ追加で「スキル」を取得できました。フリーゲイガーちゃんか脱いだ衣服を着ている間に説明を入れさせていただきました。

【一意専心】コンセントレイトは、皆様ご存じの通り、RTA勢御用達の定番スキルです。

取得条件は『長期間同じ物事を継続し』、『その物事に一定時間を費やす』こと。フリーガーくんの場合、道場での鍛練と夜間の写生で余裕の習得だったと思われます。

こいつが御用達と言われる所以ゆえんはなんといつても、有能技能と名高い『超集中』コンセントレイトです。判定に成功することで達成値を上げることが出来ます。つまりはベルくんのぶつ壊れスキル【英雄願望】アルゴノウトの劣化縮小版です。アルゴノウトが強すぎるだけってそれ一。

強いてこちらにしかない利点を挙げるなら、戦闘以外でもそれなりに使えます。料理とか。編み物とか。家庭的だあ……

【妖精虹石】グラムサイトは、特記事項『資質・妖精眼』を所持するキャラクターに自動的に付与されるユニークスキルです。RTAで呼びがかかるとは珍しいかも。

妖精眼はいわゆる【魔眼】にカテゴライズされる技能なのですが、観たものを焼いたり石にしたりは出来ません。主な効果は『魔力を視る』こと。占星術とタッグを組んで暴れてもらいます。

最後に【半端者】カイネウス・ヴェールですが、これは『背景・性転換』持ちのキャラクターに確率で付与されるレアスキルです。そういえばあつたなそんなの……（失言）。確か魅力値によつて確率が決まっていたような気がします。

チャートバルウムに書いてはありませんが、思いがけないプラススキルで棚からぼたもちですね。小人族バルウムの紙耐久を補ってくれるのは素直に有り難いです。水上での効果も

アンフィス・バエナ戦で活躍してくれそうでいいぞーこれ。

最後の一文は……ナオキです（白目）。

何はともあれ、収穫の多い恩恵お披露目会でした。

【恩恵】へまだ俺のバトルフェイズは終了してませんよおおおおお!!

プレイヤー走者へなんだとお……!!

という茶番は置いておいて、まだ恩恵獲得に関わるイベントは終了していません。

あんだだけ壮絶な背景持つてて占星術も修めてるフリーガーくんが、なんの【魔法】も  
発現させないなんて、あり得ませんよね？

というわけで、宛てがわれた私室でお休みした瞬間、イベントスタートです。

無尽蔵に習得できる【スキル】とは異なり、個数制限のある【魔法】は、取得する際

に特別な手順が発生します。それがこのイベントです。

画面にフリーガーくんが映っていますが、これは彼女本人ではありません。原作四巻の魔本イベントで出てきた『本の中の僕』と同じ存在です。

彼女は、今までにフリーガーくんが立ててきた「魔法」に関するフラグに沿って言葉投げかけ、選択肢を提示してきます。ここでの選択肢によって、発現する「魔法」の方向性が定められるんですね。

今回、魔法に関して立てたフラグは二つです。

R T Aらしからぬ長い『家名』と、妖精の視認を可能とする『妖精眼』。この二つを合わせて、「魔法」を発現させます。

それじゃあバシバシと細心の注意をはらって選択していきましょう（三倍速）。

終わりました。

くうく疲れましたw。これでお目当ての効果を持つ「魔法」が発現するはずですよ。

それじゃあ起床致しましょう。

起きたら飯食って冒険者登録して装備整えてダンジョンです。新米冒険者としての初陣ですが、中堅以上の派閥の場合、基本的に引率の方がついてきます。チュートリア



ルのためですね。探索に慣れてる冒険者兄貴が付いてくれるので、はじめての探索では死にません。

戦士や武道家などの前衛職の場合は前衛職、魔道士などの後衛職の場合は後衛職の先輩が、武器の購入方法とか、装備の仕方とか、戦い方の基本なんかを丁寧丁寧に教えてくれます。

主神様からの好感度によって宛がわれる人材の力量が決まるので、主神様からの『第一印象』を測る機会として重宝しますぜ。

さて……今回の《仲間になりたそうにこちらを見ている》は誰ですかね……？

——ファツ!?

こいつ、現アポロン・ファミリア団長殿じゃないですかヤダー！ 過保護か（困惑）。いや、これ……これは流石におかしいです。確かに栄養失調気味のフリーユーカーの体は鶏ガラ並みですけど、それを差し引いても……考えるまでもなく好感度最高……監禁エンド……主神（女神）とヒロイン達による手枷足枷とろろ生活……ヴアアアツ（トラウマ再発）。

流行らせコラ案件にならないことをお祈りしなきや（胃潰瘍）。

まあいいや（よくない）。

大丈夫だつて！　ヘイキヘイキ、平気だから！

悪いところばつかり見ると気が滅入るので、良いところを見ていきましよう。

お付きの方が団長となれば、軍資金はたんまりです。予定していたより早期に装備を整えられるのは幸運と言えるでしょう。特に占星術師は用意しないとイケない触媒カタリスが多いので素直に有り難いです。

お代は胃の安寧ですかね（吐血）。

団長殿と一緒にご飯を食べつつ、会話をこなしていきます。

この男性、原作では故人なのもつたいなくらい神的にいい人です。小柄かつてる坊主なフリーユージャーくんにも物腰柔らかに対応してくれています。

二つ名が「オルフェウス悲恋の奏者」な辺り色々とお察しです。奥さんのことお好き？　この時期はまだ結婚してなかったっけ？　お前ノンケかよお！（残念でもなければ当然）。お前の琴キタがけっこう好きだったんだよ！（大胆な告白は少女の特権）。

この世界線では生還させてやるからなあ、見とけよ見とけよ。

冒険者登録は倍速だ（十倍速）。

受付嬢と話すことなんてないので（やること）がないのです。しょうがないね。団長殿諸々の手続きオナシヤス！　センセンシヤル！

もちろん詳細なデータは渡しません。出自も年齢も不明でなれる職業があるってマジ？

それでは「ヘファイストス・ファミリア」のテナントまで倍速します。

武器に関しては特に理由がなければヘファイストス姉貴のところにお世話になるのが安価で確実です。顔通しも兼ねて神塔パベルのテナントで諸々の装備を購入します。

やって来ました。新人鍛冶士の方々の作品で賑わうフロアに到着です。

ここで買い上げするのは、《鉄刀》一振りに《ナイフ》を三本、防具は《革の帽子》でも買つときましようか。防具も買えというLv. 3の無言の圧力に屈した訳ではありません、これだけははつきりと真実を伝えたかった。

【幸運】と团长殿の目利きのおかげでいい感じの品を揃えることができました。团长兄貴ありがとナス！

……その手に持つてるのはなんですか团长殿。

あ、ちよつ——流行らせコラ！ 流行らせコラ！

……《太陽のネックレス》をいただきました。過保護……あまりに過保護……この装飾品は第二等級の防具で炎熱防御と精神耐性持ちです。正直めつちや嬉しいけどやめてくれよ……（矛盾）

ま、まままええわ気にするほどでもなし。RTA走者は狼狽えないッ！（ドイツ軍人並）

気を取り直して、ダンジョン初探索にイクゾー!! ……といったところで今回はここまで。ご視聴ありがとうございます。



『フリーガー・グッドフェロー、です』

幼くも美しい声音が響く。

『冒険者となる目的は、仕送りのためです』

月明かりのような輝きを秘める瞳に射抜かれる。

『はい、脱ぎます』

月の化身としか言い様のない肢体が、脳裏に焼き付いている。

「——無様だな」

彼は自嘲する。

静かな夜。月明かりのみを光源とする暗い部屋。

テーブルには、栓の開けられた酒瓶がずらりと並んでいる。

「——全く、無様だ」

ぐしやりと。

太陽の光を凝縮したような黄金の髪を握り潰す。

「——呪うぞ。ああ呪うとも。あの子をここまで導いた【幸運】と【運命】とやらかに  
くれてやるのは感謝ではない。

遠矢<sup>アポロン</sup>の神の名に違<sup>たが</sup>うことなく、恐るべき病魔をくれてやろう。医神ですら蘇らせられ  
ぬほどに死滅させてくれよう——」

彼女は、月のような瞳をしていた。

彼女は、月のような髪をしていた。

彼女は、月のような軀をしていた。

彼女は。彼女は。

彼女の瞳は落ち窪み、長い間満足な睡眠を取れていないことが見てとれた。

彼女の髪は乱雑に纏められ、痛み、月光を束ねて織り込んだかのごとき様相をこれでもかと貶めていた。

彼女の軀は痩せ細り、肉と皮、剣を振るう筋肉のみを残して多くのものを欠落させていた。

何より——彼女は、アポロンおとこに裸体を晒すことになんの抵抗も抱いていなかった。

「——ッ」

頭に浮かんだ光景を打ち払うように、酒を呷る。

香りを楽しむ余裕などない。

高価な葡萄酒ワインは破落戸ごろう共を酩酊の夢へ誘う安酒エールに成り下がる。

——構うものか。

仕送りのために金がほしい、この言葉に偽りはない。神としての権能がそう告げている。

だが、それ以外のことは、致命的に、知らない。

彼女は何も語らない。



最悪の光景が思い浮かぶ。

月のごとき少女の尊厳が貶められる様を幻視する。

下卑た笑い声、情欲に塗れた瞳。

鈴の音が嗚咽を紡ぎ、か細い四肢が汚濁に穢される様が浮かび上がる。

「ツ——おええええええツ……!!」

耐えきれず、吐瀉物としゃを撒き散らした。

神室に設けられた、神が寝そべるに相応しい寝台が汚泥に冒洗おかされる。

——構うものか。ぐい、と乱暴に口許を拭って彼は笑った。

「フリュー」

掠れた声で彼女の名を綴る。

「……私は、お前を——いや……そうだな。少なくとも……お前を囲う【死相】から、

守らなければ……」

夜はふける。

太陽が昇ったなら、彼は普段通り、愛多き神として、愛する子らの前に立つだろう。

主神の『悪酔い』に気づけたのは——かの団長と、まだ名を持たぬ『光寵童』だけだった。

## mp. 5 『放浪者→冒険者』

パート5にしてやつと迷宮に押し入るRTA、ちよつと遅かつたんとちやう？ ままええわ。

前回、団長殿のお金で購入した装備をちゃんと装備してから、その足でダンジョンに突入します。

ちなみに新米冒険者の初期装備代は「ファミリア」のお金で賄われるので、団長殿の懐は痛みません。ただし立場が上なほど『経費』で済む金額が上がります。フリーユールガーくんは『鉄刀』一振りあれば十全に動けるので即時的な恩恵には乏しいですが、例えば剣と盾、それに鎧を合わせて運用する騎士系の職業ですと、どのくらい必要な武器を『初期装備』扱いでゲットできるかがスタートダッシュに直結します。

そういう訳で、基本、主神様からの好感度は高ければ高いほどいいです。高すぎるとデメリットが生じることもありますが初期段階で発生するような代物ではありません。じゃけん、『入団試験』で好成绩収めるのはもちろん、お目当ての主神に合わせて容姿とか技能とか背景を獲得しましょうね。

え？ フリユーチさんは入団試験なしで好感度MAXですよねって？ 知ら管。

着くうゝ（始まりの道）。

ダンジョン一階層の入り口、だだっ広い一本道に到着です。

現在時刻は朝の11時ほど。早朝のラッシュを越えた時間帯ということで、同業の方はそれほどいません。サポーターなしの零細ファミリア所屬らしき兄貴達とぼつぼつすれ違う程度です。いかんせん、サポーターがいないと「魔石」の収集限界が辛いねんな……。

団長殿が振ってくる軽口に適当に付き合いながら、初戦闘で注意することをお話します。

ダンジョン内での初戦闘は、イベント戦扱いになります。内容は『広間』と『ゴブリン一体』で固定。正真正銘、新米の冒険者アビリティオールと迷宮最弱の怪物の一騎討ちです。

この戦闘の成績によって、NPCの行動パターンがある程度決定されます。

敗北であれば、そこで強制帰還です。ポーションを与えられた上でおんぶか抱っこでお家に帰ります。そしてしばらくの間本拠内ホームで戦い方を教わり、改めてダンジョンアタックを行います。また、サポーター志望の方はこの時点でも転向を行います。

辛勝く完勝未満であれば、ポーションで全快させられた上で、一旦地上へ帰還します。

神塔<sup>パバル</sup>で適当に休み、そうして『帰る』か『探索を続ける』かを選択します。

そして完勝の場合、そのまま探索を続行でき、さらに「ファミリア」での評価が加点されます。先輩や同期の方々から、中々やる奴、と思われる訳です。

R T Aで狙うべきは、もちろん完勝です。なにせ完勝しない理由がありません。さくつと倒して探索しましょうそうしましょう。

—— いました。只人の子供ほどの体軀、緑色の肌、牙の隙間から零れ落ちる涎<sup>よだれ</sup>、総じていかにもモンスターといった外見の怪物。ゴ布林兄貴がエントリーです。

ばーつと流れるテキストを連打で捌き、チュートリアルもスキップ。さっさと始末します。

ゴ布林と目が合いました。小人<sup>パルウム</sup>族特有の現象ですね、こちらでも子供ということもあって、体格差はほぼありません。おお怖い怖い、殺意剥き出しで怒鳴ってきてます。

さて、さて。わたくしの腕の見せ所さんですね。【戦争遊戯モード】でそれなりに鍛えたワザマエをご覧に入れましょう（震え声）。ばか野郎お前俺は勝つぞお前！ 占星術師に勝てるわけないだろ！ 刀はそう得意って訳じゃないけど俺は魔剣！（F E）

そんじゃあはりきって初戦闘—— 団長殿、何してるんです？

（サウンドエフェクト）

おおっと！ 団長殿から、【演奏】による強化をいただきました。流石迷宮都市でも有数の吟遊詩人、頼りになりますねえ！ ゴブリン相手にやや過保護な気がしないでもないですが。

ともあれ、武器よし、長靴よし、団長殿のバフ付きで万全以上。さらに念のため【占星術】でバフを決めまして。

……イイアアアアツ！（蜥蜴人銀の祝詞）

——やりました。

先制取つて初手確殺、我ながらいい動きでした。

団長殿の反応から察するに評価も完勝。予定通りです。やっぱゴブリンって雑魚だな……！（棍棒戦士並感）

団長殿から水筒を差し出されますが拒否します。体力も精神も疲弊してませんからね。お氣遣いありがとナス！ ついでにバフにも感謝。

さて、それではゴブリンから魔石をいただきましょう。例に漏れずチュートリアルをスキップして手早く済ませます。ドワーフの船長からいただいた《解体用のナイフ》が

よく働いてくれていきますね。元々購入する予定の代物だったので、あの場面でいただいたのは幸運でした。

お、ドロップアイテムです。《ゴブリンの歯》を入手しました。……団長殿持つてや  
くめでしょ。

ともあれ探索続行です。

今日の目標は……まあ初日ですので、団長殿から帰還を提案されるまで、つまり行ける  
ところまで行きましょう。

イクゾー！（五倍速）

はい、無事に地上につきました。

既に日が落ちてしばらくといった様子ですね。迷宮帰りの冒険者兄貴がそこら辺を  
うろついてます。

ともあれ、地上に帰ってきてからまずやることは、冒険者ギルドに行くことです。魔

石の換金と、後は掲示板を眺めて情報を集めましょう。今回はアドバイザーをいただいでいないので受付嬢とのイベントはキャンセルだ。

早速倍速かけてギルドへ行きますよーイクイ——なんで等速に戻す必要があるんですか。

ファツ!? 団長殿!? その動きは一体、ちよ、回避間に合わツ——流行らせコラ!  
流行らせコラ! ネットレスの時といい乱暴だな君は! (冠位術)

又ツ、これは……お米様だつこじやな? いやいや何してんですか、不味いですよ!  
何処行くねーん!? ギルドはあっちだつて!

は? もう帰れ? 換金は僕がやつとく? 風呂入つて飯食つて寝ろ? アツハイ。  
どうやら、団長殿からの好感度が思つていたより高そう……なのででしょうか。お米様だつこで強制帰還は好感度高いのか低いのかももうこれわかんねえな。

あの、お家に帰るくらい一人で出来るんですけお。お米様だつこは恥ずかしいのでやめてください。え、無理? そんなー(・ω・)

仕方ないので、団長殿の細いようでも中々にがっしりした肩に乗つて帰ります。びつくりするくらい振動がこないですね。いちおう拘束から逃れようと判定を試みています  
が、悉くLv. 3のステイタスに惨敗しています。

なんという……これ「ファミリア」内の評価に影響しないといいいのですが。ちよつと



不安ですね。

本拠ホトムに帰ってきました。門番の方々からの視線がアツウイ！ やめてくれ門番兄貴その術は走者に効く。ニヤメロン、噂にするんじやあない！ せつかく上げた評価が下がっちゃーう！

拘束から逃れた瞬間にダツシユします。もう……お前、お前……もう絶対許さねえからなあ!?

実際タイム的には嬉しいのですが、同僚から『ダンジョン初日に団長にお米様だっこされて帰ってきた奴』扱いされるのは流石に辛いです。ただでさえ団長と一緒に探索したってことで他の新米冒険者達からの心証はよくないのに勘弁してくれよ……（憔悴）。ファミリア内の評価は、高いことのメリットと低いことのデメリットが釣り合っていないと言いますか、高くてもいいことないし低いと悪いことばっかりなクソステです。幹部、ないし団長の席に座る気がなければ、低くしないことだけ心がけましょう。

とりあえず、団長殿の言葉通り、風呂入って飯食います。

入浴シーンは倍速です。キャラクターのマップが見たい方はR-18版を買ってどうぞ。

アポロン・ファミリアには、ロキさん家のような『食事の際のルール』は特にありま

せん。各々適当に食堂行つて食べます。外食派の方も少なくないですね。

極東勢特有のアクションをしつつ、夕飯をいただきましょう。この動作をロスとする  
兄貴は素直に認めるので私の代わりに走つて♡ 走れ（豹変）。

ヌツ、誰か来ますね。

……。

……。

すいません、来ないでください。おい来るな、やめろお前あっち行けつて。いやだつてそれはアカンですよ駄目だつて、不味いですよそれは一介の新米冒険者がたつた一日でファミリアのNO・1とNO・2と関係もつのは流石にやつかみが凄まじいことに

☆☆☆

「食事中に失礼する！ 貴公、隣にお邪魔してもいいだろうか！」

貴方が顔を上げると、そこには一人の少女がいた。

まず目につくのは、本<sup>ホーム</sup>掘内だというのに外していないグ<sup>バ</sup>レ<sup>ケ</sup>ット<sup>ツ</sup>ヘルム<sup>かぶと</sup>。

身に纏う鉄板鎧<sup>プレートメイル</sup>には太陽の意匠が施されており、腰には質実剛健な長剣を携えている。

まさに、騎士とはかくあれかしといった風体である。

貴方は彼女の姿に見覚えがある。

貴方がアポロンと初めて目を合わせた際、彼の傍らに団長と共に控えていた少女だ。

迷宮内では長剣と、恐らくは盾を操るのであろう女性らしい両手は、今は食事の載った盆を持っていた。

つまり、この女性は『隣で食事をとつてもいいですか?』と言っているらしかった。

【……………どうぞ】

↓【……………すみません、ちよつと】

貴方はゆつくりと辺りを見回して、慎重に言葉を選び、彼女の言葉に拒否を返した。そもそも女性と会話をしたくない。それに空いている席は他にもある。わざわざ自分の隣で食事をとる必要はあるまい。

何より、貴方は気づいていた。

目の前の騎士の後方。壁際にいる数人の男女が、こちらに強い視線を向けていることに。

悪感情ではない。いや悪感情ではあるが、それは騎士に向けられたものではなく、貴方に向けられたものだ。そしてそれが嫉妬の類いだともわかる。

おそらく、というか、ほぼ確実に上級冒険者、言つてしまえば幹部に位置する熟練者<sup>ベテラン</sup>である。向上心の高い新米達<sup>同期</sup>からすれば是が非でも友好的な関係を築き、指導をいただ

いたり、便宜を図ってもらいたいのだろう。貴方は色々と察した。ついでに今日一日团长と一対一で迷宮探索したことも彼等の悪感情を加速させてそうだとも察した。

貴方はわざわざ指を向けて、『貴方と食事の席を共にしたいと願う方々があそこいらつしやいます』と発言することはせず、それとなく、しかし高い技量を持つ目の前の女なら気づける仕草でそのことを示した。

そして、派手に裏目を引いた。

「私はどうしても貴公と食事を共にしたいのだ！ 隣に座っても構わないだろうか！」

貴方は硬直した。

その言い方は、致命的だ。

チツ、と。

舌打ちが聞こえ、ついで視線が失くなったのを感じた。

じろ、と貴方は瞳に非難を込めるが、かの騎士は首をかしげて「む？」とよくわかっていないようだった。なるほど天然らしい。

↓【……どうぞ】



太陽のごとく輝く金髪の美少女は、神々に与えられた名を力強く貴方に告げた。

「私は【太陽の騎士】。名をソラールという！ 見ての通り『神官戦士』だ。今後ともよろしく頼むぞ！」

【無言】

↓【名前だけ】

貴方は少女に対し、小さな声で名前だけを告げた。

およそ目上の者への対応とは思えない無愛想な態度に、ソラールと名乗った女は太陽のような笑顔を浮かべた。

そして、

「冒険者生活の一日目だ。ダンジョンはどうだった？ 感想を聞かせてくれ！」

ぐい、と、さらに顔を近づけて貴方に迫った。

貴方はこの場から逃げ出してもいいし、きらきらと瞳を輝かせる少女の求めるままに今日一日の所感を語ってもいい。

↓【逃げる】

貴方が食事を放棄して立ち上がろうとした瞬間、閃光のように少女の腕が動いた。貴方が椅子に座ると、少女は変わらぬ笑顔のまま、腕を下ろした。貴方はL v. 1で、目の前の騎士は上級冒険者だ。

↓【話す】

貴方は逃げ道がないことを察した。

☆☆☆



恐ろしいガバを犯しましたが私は元気です（瀕死）。

先程まで会話していたオネエサンは「アポロン・ファミリア」随一の戦士です。レベルは『3』。团长殿と並んでこのファミリアのツートップになります。

ダークソウルで似たようなのを見たって？ いやまあ太陽神の派閥に『太陽光』<sup>ソーラー</sup>をもじった名前のキャラクターがいるのはそんなに違和感ないし……ちゃんと別人ですし問題は無いんじゃないですかね。なにせ女の子ですから。

しかしまあ疲れました。やはり主神からの好感度が高すぎるとロスりますね。会話が増えるし同期からの心証も悪くなるしと踏んだり蹴ったりです。おいおい調整を入れましょう。

さて、それではげんなり顔のフリーユーカーくんを操ってアポロン兄貴の神室に向かいましょう。ステイタスの上昇はもちろん、前回立てたフラグによって「魔法」が発現しているはずですよ。

彼の部屋は本拠の最上階にあります。神様のお部屋ですからね、この辺りは大体のファミリアで共通です。

アポロン兄貴お邪魔します、元気にしてたか？ 相変わらずにやにやしてんなお前な（無礼）。

世間話もそこそこに、まあとりあえず更新オナシヤス！  
……出ました！ さてどんな【魔法】かなー？

フリーユーカー・グッドフェロー

Lv. 1

力：I 0↓2

耐久：I 0↓1

器用：I 0↓10

敏捷：I 0↓3

魔力：I 0↓8

魔法

【ディア・オーベイロン】

コール・マジック  
・ 招来魔法。

・ 対象は《縁》を結んだ妖精限定。

詠唱式

『パツク』

【悪戯妖精、悪戯妖精、夜を彷徨う浮かれもの。妖精王にかす傳く道化。夏の夜空に虚実を唄

い、溺れる夢を囁いて】

二

スキル

(略)

---

これはー、あー、なんとも言えませぬね。

今回狙っていた魔法は『妖精使役』だったのですが、使役ではなく『招来<sup>コール</sup>』ですか。うーん、これは……まあ誤差の範囲でしょう。そう信じます。使い所はまだまだ先なのでリカバリーは効くはず。

おっと、アポロン兄貴から魔力が上昇していることについて聞かれました。そういえば『入団試験』で術を披露していないので、アポロンはまだフリーユーカーくんが占星術師だって知らないんですね。失念していました。せっかくなのでここで説明しておきます。

アポロン様には魔術の逸話はありませんが、全知零能なだけあってすぐに理解をいただけました。これが魔術ガチ勢なオーディン様辺りになるとめちやくちや突っ込まれます。さながら清少納言とか紫式部に作品を読まれるコミケ作家のように。つまり死ですわわかります。海外兄貴が発狂してたの素直に草なんだ。

【魔法】が発現した場合、中堅以上のファミリアだと、上級冒険者に連れられての『試し撃ち』イベントが発生します。こちらはキャンセル不可能なので、諦めて受け入れましょう。

……お？ 『主神からの褒美』ですか。こんな早期に発生するとは異常を通り越して笑えてきますね。

このイベントは、一定以上の好感度を得ている状態で、納金ノルマの達成率や派閥内での評価などに依存する確率で発生するランダムイベントです。主神様から日々の功労を褒められ、こちらの要求に対応してくれたりくれなかつたりします。

もちろん要求できる物事の幅はその段階のL.V. や立場などによつて変動しますが、そもそも最低段階でも探索初日で発生するような代物ではありません。どうということなの……。

このイベントで主神様に嘆願出来る物事は多岐に渡り、武器や道具の調達はもちろん、一人部屋がほしいだとか、幹部の○○さんとパーティを組みたいだとか、いろんな活用法があります。

今回、というより発生時期タイミングが早すぎただけで発生し次第要求しようと予め決めていたのですが、ともかく今回要求させていたただくのは、**「別居」**です。

本拠内に住んでいますと先程の太陽万歳ガールや同期の方々に絡ランダムイベントまれる確率が無視できないので、本拠外のアパートにでも部屋を借りて夢の一人暮らしをします。

こうすることで、眷属のみなさんに絡まれる危険がかなり低くなるだけでなく、魔道具の作成などを自由に行えるようになります。ロキやフレイヤ、ガネーシャなどの大派

閥では許可されず、零細でも無理という、中堅派閥にのみ許された仕様です。

フリーガーくんはアポロン兄貴からかなり好感を抱かれていますので、まあ要求は通るでしょう！ 勝ったな風呂入ってくる。

却下されました。なんででしょうねえ（白目）。

仕方ないので、ソロ探索の許可をいただきましようか。

新米の状態ですと、今回団長殿が付いてきたようにパーティを組むよう強制され、長時間の探索を制限されてしまいます。これは金策の面でも経験値狩りの面でもよろしくありません。

なので、早期にソロ探索の許可を得たいんですね。一応今回の探索結果は完璧でしたので、階層の制限はつくと思いますが、要求自体は通ると思われれます。

却下されました。なんで？（殺意）

しょうがないので『お手紙セット』でも貰つときましよう。ちつ、しけてやがるぜ。

明日の魔法試射イベントのことを伝えられてから、神室から出ます。お休みなさいア

ポロン様。

自室についたらさっすく手紙を作ります。送り先はもちろん、社の方々です。タケミカヅチ様冷えてるか？

内容はとりあえず近況報告……五体満足なことと中堅派閥に入れたこと、後はまあ適当に。

この手紙を出すのは一週間くらい後です。迷宮で稼いだヴァリスを包んで差し上げろ。

月明かりの差し込む部屋で文をしたためるフリーガーくんが、社での生活を思い出している姿をスクショしつつ、今回はここまでとさせていただきます。ご視聴ありがとうございました。

## 幕間『なんか変なの』

団長。

ファミリアのトップが座る席、主神から認められた者の称号。

そんな大層なものを僕が賜っている理由は、そう大したものではない。

ファミリアに二人だけの第二級冒険者、その片割れ。

もう一人のやつが年若く、彼女自身も団長の席を望んでおらず。

両親と共にアポロン様の眷属で、生まれてから今の今までずっとこのファミリアに所属していた。

そんなこんなが重なって、まあ、お前が適任だろうと任されて、はや5年。

自分なりに精一杯ファミリアに尽くして、それを評価してくれたのか、団員達もそれなりに慕ってくれている。

それが、辛い。

器じゃないんだ。柄じゃない。

僕はしがない詩人<sup>パード</sup>で、豎琴とかピアノと一緒に歌ってるのがこの上なく幸せな人間だ。そりゃ生きてく上でお金は欲しいし、アポロン様に任せられたお役目には誠実に向



き合う所存だけれど、軍を率いる指揮官なんて欠片も望んじやないし、怪物殺しの名誉なんてくそくらえだと思う。

誉れ高きドラゴンスレイヤーだって、そう成りたいからそうなったんだろう？

だったら僕は詩人がいいよ。団長なんて息苦しくて敵わない。何より辛くて苦しいのだから。

そりゃあ、愛しいあの娘が『竜殺しして♡』なんて言ってきたなら、話は別だけれどさ。「お前に見てもらいたい子がいる」

そう、敬愛する主神様に言われた時は、こりやあまた珍しいことがあるもんだと驚いた。

だって、僕は団長だ。

新米にいきなり団長をつけるってのは明確な<sup>ひいき</sup>鼻<sup>き</sup>貞<sup>けい</sup>で、他の新米からすれば面白くないに決まってる。

入団試験で一番の成績のやつだって、担当するのはあくまで『幹部』の太陽<sup>ソ</sup>万<sup>ラ</sup>歳<sup>イ</sup>娘<sup>ル</sup>だ。単純な武力なら彼女は随一だが、立場で言えば団長の僕より明確に下なのだ。

そんなわけで、ここ最近僕が出張る機会は皆無と行ってよかったのだけれど……

「よろしいのですか？」

「構わない。手は回す」

そういうリスクを許容した上での命令だと、アポロン様はおっしゃった。そうなつてくると、本格的に珍しい。

この男神は程度の差はあれど、男女遍く愛を振り撒くお方で、それ故に、バランス感覚というか、寵愛が理由なく偏重するのを避ける達人といつてよかつた。

鼻屑にしている子がいたとしても、おおつぴらに愛を与えるのではなく、その子が何かしらの手柄を得るまで待てる人なのだ。感情だけで動く神ひとじゃない。主神としての体裁はしっかり守つてくださる。団長の務め甲斐もあるというもの。いや後継欲しいけど。

だから、珍しい。

その新米の情報も渡されても、その感想は変わらなかつた。

入団試験をすつ飛ばしての眷属入り。

年少の小人族。男。

『劇団』の方ではなく、『冒険者』志望。

容姿を隠蔽する傾向あり。

そして、『女性嫌い』の傾向あり。

つまり、入団試験を受けてなくて、小人族のくせに冒険者に成りたがつていて、容姿を隠すことを認められていて、女性を嫌つてる新米。

これに『団長に指導されてる』がくつつくのだ。お腹の痛くなる話である。自然、こちらの返答も決まってくる。

「わかりました。神命に従います」

団長とは主命を遂行する第一の鍬なれば。

……後継、欲しいなあ。



「やあやあ初めまして、君がグッドフェローくん……で、いいんだよね」  
第一印象は、なんだこの変なの、だった。

まず、ズダ袋を被ったまま食事をしているのが面白い。

首から下も厚手のマント——もしや手作りか？——で覆っていて、なるほど容

姿を隠す傾向あり”だ。なんて的確な表現！

何より、小さい。

くっそちっちゃい。

小人族つつてももう少し大きくていいんじゃないかって程の体格だ。

これで冒険者志望だっていうんだから、頭が痛い。

「……」

首肯で返事をしてきた。

なるほど声も出さないらしい。なんたる。

「僕はオルフェ。一応、ここの団長を務めさせてもらってる者です。君の新人講習を

担当するんで、まあ、よろしく頼むよ」

……黙礼してきた。そんなに発声したくないのか。

食事をとりながら今後の予定について伝える。思えばこの作業も久しぶりだ。

といつても、ギルドで冒険者登録をして、神塔<sup>パベル</sup>で武器買って、最弱のモンスターを殺

すつてだけ。

その「最弱のモンスターを殺すだけ」が出来ないヤツは多いんだけど、それは伏せておいていいだろう。不安がらせてはいけない。

ともあれ、話すべきことは話したのだ。ここからは親睦を深めるための会話をしよ

う。

「僕はオラリオ生まれオラリオ育ちなんだけど、君、出身は？」

「……極東です」

——喋った。なるほどイエスノーで答えられない質問には発声するんだな？

「へえ、そりゃあ遠方だねえ。御両親は許してくれたのかい？　ひとり旅つて訳じゃあないだろう？」

「……家出紛いです。ここには、一人で来ました」

「おおう見た目によらずいい度胸だ。冒険者になろうつてんならそのくらい肝が据わつてなきやあね。キツカケは、やっぱりかの「勇者」に憧れて？」

モゴモゴとくぐもつた声と言葉を交わらせる。

さりげなくふっかけてたけれど、最後のは重要な質問だ。

かの豪傑に罪はないが、「勇者」に憧れて冒険者になって、戦えなくて、早々に引退する小人族は多い。

もちろん小人族つてのは見上げた種族だが——なんならうちの幹部の一人も小人族だ——この子も同じような手合いだつていうなら、僕の心労は凄いいことになるのだから。

「……お金が、欲しくて——」

「ほう」

目の前の変なのが言葉を探してるようだったので、追及を止めて少し待つてみる。

「……私の育った場所は、貧しくて、暖かくて」

「うん」

「それが、許せなくて。間違ってると思って」

「うん」

「だから、お金が、欲しくて……」

「うん」

「……それだけ、です」

なるほど。

力も栄誉も求めず、金の使い道も地に足ついた柔らかなモノ。

「大丈夫、だいじょーぶ。君なら上手くやれるとも」

いや、まあ。

実際どうなるかはわからない。かの高名な吟遊詩人は『歌った英雄譚が起ころ』レベルだったらしいけれど、生憎僕はそんな埒外の存在ではないし、なれる器でもない。

この子はゴブリンにポッコポコにされて、泣いて故郷に帰るかもしれない。

けれど、同じように、緑色のあん畜生をぶちのめして、笑顔で凱旋するかもしれない。

全てはこの子次第だ。

だから、上手くいきますように、と願っておいて、損はないだろう。

彼の希望で路地裏を歩く。

女性が苦手ってんなら、自然大通りも苦手になるのだろう。

チンピラに襲われても、まあ、L v. 3だし、なんとかなるんじゃないかなって判断だった。

「そういえば、僕の二つ名って教えてたっけ？」

「……」

「ありや、そうだったか。じゃあ今教えておこう、我が賜りし名は「オルフェウス悲恋の奏者」！

酷くないかい悲恋って、悲恋って！ 正直、これを変えたくってランクアップしたんだよ、僕は！

そのくせL v. 3になっても変えてくれなかったんだ！ いやアポロン様のせいじゃない、なにせこの一件で一番悲しんだのはあの神ひとだったからね。あの泣きっぷりを見せつけられたら、なんだか色々どうでもよくなっちまったんだ。あの娘……その、今交際させてもらってる女性も、私は全然気にしない、カツコよくて素敵だって何

度も言ってくれたし……」

「……よかったですね？」

「その疑問符が全てを物語ってるね……」

それなりに長い団長業を矢筒から引き抜いて、身の上話という名の矢を乱れ打つ。

やはりズダ袋を被ったまま隣を歩いているグッドフェローくんは、言葉数こそ少ないけれど、その全てに感想をくれた。

本拠ホームから冒険者ギルドに行つて、バベルへと向かつている現在、彼についてわかつたのは、この子は話しかければ返答レスポンスはする、ということだった。

「そろそろバベルだけど、使う武器はもう決めてるのかい？ それともまだ考え中？」

「……灣刀に、しようかと」

「ほーう……」

基本的に、小人族というのは体格に優れない。何故つて小人族だからだ。彼等は総じて只人の子供程にしか成長しない。もちろん頭の方は別だが。

そんなわけで、どうしたつて白兵戦の適性は低くなつてしまいがちだ。

体格と近接適性の結びつきは、強い。

ヒューマンだったならどれほどの武勲を立てただろう、という小人族を見かける度に、やるせなさを感じてしまうのは、きっと彼等に対する侮辱なのだろう。



体格によって装備不可能となる武具は多いし、手足の短さはただでさえ小さな攻撃範囲リチを更に狭めてしまうし、小柄っていうのは軽いつてことだ。

故に小人族はその目のよさを生かした斥候スカウトや盗賊シーフ、弓兵や魔導士などの遠距離戦闘といった方面に進むのが正道で、戦士職の道に進む者は見かけない。

いるにはいるのだろうが、茨の道だ。華奢なエルフが武道家やるようなもんだろう。

【勇者】とか、【炎金の四戦士】とか、ああいうのは例外中の例外なのだ。

「んまあわかるよ。かつこいいよね、アレ。最近は【アストレア】のときの黒髪美人さんのお陰で流行ブームになってるらしいし」

「……」

「僕も一度やってみたいなあ、あの、居合いつてやつ。浪漫があるよ、あれは……つてどうした？」

彼は足を止めていた。

「……ズダ袋のせいで感情が読みづらいな。」

「私は」

「うん」

「……かつこいいからじゃ、ないです」

「おおっと……」

「ちやんと、習いました」

素直に両手ホールトアップを挙げる、だ。

そんなもつて、ここまで積み上げてきた成果もあつた。

「へえ、誰に習つたんだい？ 極東出身つて言つてたけど……湾刀の術理を修めてるやつだから、噂に聞くサムライつてやつ？」

我ながら自然な流れだと褒めたくなる。

相手の素性を探るときは、こちらから真つ正直に問いかけるのではなく、相手が尻尾を出すのを待つべきなのだ。

「神様です」

「おおと……」

もしかして、マジに期待の新人なのか？

「これがいいです」

——マジに期待の新人かもしれん。

何がつて、武器屋に入って一分で業物を持つてきやがったからだ。

しかも無銘の。いや武器自体に名前はあるんだろうが、【鍛冶】持ちの上級鍛冶士の作品じゃないんだから無銘といつていいだろう。

そこら辺に適当に置かれていた、質のいい武器を、こうも短時間で引っ提げてくるとは。

「うん、僕もそれがいいと思う。……けど、本当に湾刀でいいのかい？ 普通の剣よりは織細だよ？」

「……」

「こくり、と首肯が返ってくる。ならばよし。」

「さて、それじゃあ次は防具だね」

「——」

「といっても小人族用のは少ないからなあ……鉄製のやつと、革のやつ、どっちがいい？」

「……革の帽子が欲しいです」

「鎧は？」

「……」

今度は横に振られる頭。まあいいだろう。少なくとも頭部は守ろうという心がけは評価できる。

ゴブリン相手に撲殺されるのは稀だし、鎧に手を出すのは痛い目を見てからでも遅くはない。

そういうのを引つくるめての『新人講習』だ。

「そんじや、仕上げだ」

革の帽子の上にズダ袋を被るといふ器用なことをしたらしい——着替えのシーンは見せてもらえなかった——彼の首に触る。

困惑した様子のグッドフェローさんに、アポロン様からのプレゼントだ。

「《太陽のネックレス》。役に立つよ」

なにせ第二等級の防具だ。我が主神様も過保護だな。



ダンジョンの良心的な所は、燐光に満ちていることだ。

少なくとも僕が探索したことのある場所で、松明や魔石灯が必要になったことはない。休息レストの際に火を焚く程度。

そして、ダンジョンの悪辣な所は、相手が無限だということだ。

敵を倒して進んだ道を引き返せば、敵がいる。

それをわかっていない零細ファミリアの新人は、えてして引き際を見誤る。

「初ダンジョンの感想はどう?」

「……明るいです」

「そうだねえ」

わざわざご丁寧にご光源を用意してくださる迷宮というのは珍しいのではないだろうか。

探索する側としては、火持ちを作る必要がないっていうのはありがたい。

じゃあ探索される側に利点はあるのかって話になると、たぶん必要に迫られてなのだと思います。

なにせ、ここら辺のモンスターに、闇を見通す能力は備わっていないのだ。

さて、さて。

「体調はどう? 緊張してる?」

「……」

少し固まって、首肯。

「怖い？」

これには、すぐに否定が返ってきた。

素直じゃないのか、強がりなのか。

息遣いから心中を洞察するのは楽士の嗜みである。

彼の呼吸が少し荒くなっているのも、心臓の鼓動が早まっているのも、楽士として鍛え上げられた第二級冒険者の知覚はしっかりと捉えている。

「戻って、鎧買うか？」

「要りません」

「おおっと」

会話はやめない。

冒険するにあたって、軽口のもたらす物事は意外にも多く、大きいものだ。

深刻になって勝てるのならそうするのも吝かではないけれど、何も輝ける鎖帷子チェインメイルの英雄よろしく世界を救う戦いではないのだ。

無名の冒険者が、迷宮の一番浅い階層で、最弱のモンスターと、ただ戦うだけ。

たかだかそんなことに緊張を強いるのは、あまりにもバカらしい。

「……つてというのが持論なのだけど、君はどう思う？」

「道理です」

「君とは気が合いそうだ」

もちろん、話してもよさそうだったから話したのだ。

緊張でガツガチ、いざ乾坤一擲の戦いに臨まんってノリの新米の気炎を削ぐような話はない。詩人として戦意高揚を促す語りはいくらでも修めている。

ただ、この子にはこういう話をした方がいいかな、と思っただけだ。

『——ギィ』

「エンカウントだ」

ゴ布林。

最弱のモンスター。

この子にとっては初めての冒険。

「準備はいいかい？」

「……」

こくり、と首肯。

出会った時から何も変わらない姿で、彼は武器を構えた。

携えるのは無銘の業物。鉄の刃。

息は荒く、戦意は十分。

こちらにも、戦闘続行不可能と判断した際に介入するための準備は整っている。

「よしっ！　じゃあ、行け！　《剣》を持って走って行って、あのあん畜生をぶちのめしてやれ！》」

最後の仕上げ。即興歌に発展アピリテイ【歌唱】と【スキル】を合わせての戦意高揚。

——いや、まあ、僕も大概過保護だな。

でも、別にいいだろう。新米の面倒を見るのは久しぶりなのだし、あの子はいいい子だ。少し変わってるけど、それでも、どこにでもいるような優しい子供だ。僕はそう感じた。傷ついたなら高等回復薬を費やすことに異論はないし、刀が折れたなら別の武器を相談した上で買ってあげよう。鎧を欲しがったなら、ほんの少しからかって、上等なものを立ててあげよう。

だから、頑張れ、少年。

そう、突撃してくるゴブリンと相対する小さな背中に、心の中で声援エールを送った。



「スコレプイン観測開始——私は月を奉ずる者」

首が舞った。

人外染みた——否、人体の限界を知り尽くした者の肉薄、抜刀、斬殺。

「……なんだ」

きつと無意識に零れ落ちた一言。

明確で、絶望に満ちた、凍えるような失望が込められた言葉。

……訂正。

やっぱり変なのじゃないか、この娘。

## 幕間 『太陽神のファミリア』

『グオオオオオオオオオオオツツ!!?』

叫喚が連鎖する。

一挙動で両断された怪物が断末魔を伴って崩れ落ちる。

戦場における彼女の動きは単純だった。

近くのヤツから撫で斬りにする。

彼女にとってはそれが全てで、彼女が他の戦法を採用する理由をこの階層のモンスターは与えられなかった。

『——オオオオツ!』

「しッ」

『ガッ——』

『オオオオオオオオツツ……!!?』

背後から強襲してきた《ダンジョン・リザード》を回避と同時に斬殺し、そのまま目の前の《コボルト》の素っ首を叩き落とす。

戦闘は終わらない。

攻撃後の隙を突くように遠方から放たれる『舌』。新人冒険者を苦しめる遠距離攻撃——  
 《フロッグ・シューター》の狙撃は、しかし彼女には届かなかつた。

鈍色の刃が稲妻のように閃く。

中空で半ばから断たれたピンク色の舌が、鮮血の海に沈む。

『ギッ、イイイイイイッ……!?!』

「そりゃビビるよね。同情はしないけど」

なにせ近づいた順に斬殺されるのだ。確実な死を前にして尻込みしない生物は——

いやモンスターってのはそういう生物のはずなだけだ。

ともかく死にたくないって気持ちにはわかる。助けはしないが。

それに、ほら、もう手遅れなのだし。

「——っ」

無音の肉薄。

喉笛をかつ切る剣閃。

それで終いだ。この哀れな《ゴブリン》は、自分の血液に溺れて死ぬ。介錯してやる

気は起きない。

そして、『前衛』が全滅したのだから、『後衛』の辿る末路も決まっていた。

僕達の視線の先には、さつき舌をぶつた斬られた《フロッグ・シューター》。

唯一の、そして自慢の武器を失った怪物が始末されるのに、そう時間はかからなかった。

「——っ、はあ、はあ」

「ほい戦闘終了。処理する間にこれ飲んどきな」

「……ありがとうございます」

ふう、ふう、と息を荒げる少女に水袋を放り、血の海に沈む死体を漁る。

彼女が始末した怪物からはドロップアイテムがぼろぼろ出てくるので、大型のバックパックは既にかなり埋まっていた。

現在、ダンジョン上層、第5階層。

新米がゴブリンをぶち殺してから半年間生き延びて、装備なり経験なりがだんだんと積み重なってきた頃に行き着くこの階層で、『変なの』は塵殺を働いていた。

「はあ、はふ、はっ、はあっ」

ずだ袋をつけたまま、器用に水を呷る、変なの。

既に鞘に納められた鉄刀は、幾つもの戦場を経た今もその斬れ味を損なっていない。

それは彼女の技量の証明であり、だからこそ困惑は広まるばかりだった。

「……」

どれ程の時間、剣に身を捧げたのだろう、そう思わずにはいられない『業』。

もはや我には剣しかいらんと開き直った剣鬼が、果てしない鍛練を経てようやく辿り着くような剣技。

それを、齢いくらかの女兒が身に付けているという事実には、怖気が止まらない。何が、どうして、こうなったのか、理解できないし、したくもない。

「これ、ありがとうございます」

「——、ああ、うん」

少し中身の減った水袋が差し出される。

その、差し出された小さな手を、抜き身の刀剣と見紛まがった。恐らくは柔らかいんだろう手を、鈍く輝く刃と。

深く息を吸って、吐く。

脳裏に思い起こすのは、彼女の剣技。

——血の滲むような、なんて言葉はあるけれど。

血の滲むような、という段階は既に過ぎ去っている。彼女の剣はもはや血肉そのものだ。

磨き抜かれた『業』は彼女自身と混ざりあって、手足の延長、新たな臓器と化している。

血の一滴、呼吸に至るまで、剣を振るうことを前提とした戦闘機構。

「……いやあ、お見事。綺麗な剣だね。神様に習ったって言ってたけど、どんな神びとなのかな」

「……」

沈黙。それは回答拒否とイコールではない。言葉を探している仕草。

「……優しいお方です」

親に買ってもらった玩具を見せびらかすような、あるいは、最愛の人から贈られた指輪を擦るような、喜悦と誇らしさの混じった声色。

——ああ、クソ。くそつたれ。

はしたなく舌打ちを打ちかけて、すんで 既のところで自制する。

団長としてどうかと思うが、彼女に剣を教えたらしい神様とやらを思いツきりぶん殴つてやりたい。

この小さな女の子が差し出した親愛への報酬が『こんなもの』だっというんなら、僕はどうかになつてしまふだろう。

「団長」

「ん？ ……ああ、そうか、そうだった」

呼び掛けられて、碎ける程に冷え切っていた思考に熱が戻る。

目の前には、第6階層へ続く階段。

先に進むのか、戻るのか、彼女はその判断を立場が上の僕に仰いだのだ。  
ほんの少し、考えて、告げる。

「行こう、第6階層。そこで、君にはあるモンスターと戦ってもらおう」

立ち塞がる《キラアアント》の群れを、適当に殲滅する。

この身は第二級に座する器なれば、上層のモンスターを相手取るのに一行もかからな  
い。  
ワンター

「ドロップアイテムはなしか。やっぱそうぼこじゃか出るようなもんじゃないよな  
……」

「……その、やっぱり、荷物は」

「当然、僕が持つてるからね」

丸々と太ったバックバックに魔石を放り込む。

ここまでの戦利品を背負ったまま戦闘に臨む僕に、彼女は気を遣ってくれているらし  
かった。

「今日の主役は君だ。それはこの階層でも変わらない。君にはアレと戦ってもらおう、

他の奴等は僕が狩る、だから荷物は僕が持つてる。いいね？」

「……」

こくり、と、もはや見慣れてしまった光景に苦笑を返す。

同時に、この子を過酷に叩き落とし、その真贋を見定めようという己の思惑に胃が悲鳴を上げる。

これだから団長という立場は嫌なんだ、と愚痴るのもつかの間。待ちに待った瞬間が訪れようとしていた。

——ピキリ。

モンスターが、ダンジョンによって産み出される。

ひび割れる壁面。響く破砕音。ぼろぼろと零れ落ちる迷宮の破片。母体を傷つけながら、ぐい、と身体を押し出すように、その異形は姿を現した。

ゴブリンやコボルトと同じ、人型のモンスター。

彼等と異なるのは、外見の不気味さはもちろんのこと、既階層の怪物とは一線を画す戦闘能力だ。

——《ウオーシャドウ》。



その外見を一言で表すなら、『顔面に鏡を張り付けた全身黒タイツの成人男性』だろうか。

ウォーシャドウ  
戦の影の名に違ちがうことなき漆黒の瘦身に、両腕の先には下手なナイフより鋭い爪を備えている。

第5階層での探索に慣なれ、不用意にひとつ下の階層を訪れた新米冒険者の多くを葬る、恐るべき【初心者狩り】だ。

「では」

「……いや、待って」

エンゲージ  
接敵する間際、僕は彼女を留めた。

素直に突撃姿勢を解除する変なのに、努めて普段通りの声色で、その『条件』を伝える。

「三分間、攻撃なしで、凌いで。いい？」

「——」

……こればかりは、横に振って欲しかった。

そいつは『新人』には手の負えない相手なんだと、ちゃんと説明した。だから、拒否されて当然の話だった。何を言っているんだこの人は、みたいな目で見てくるのが正しい反応で、そうしたら僕は適当に弁明して、適当にウォーシャドウを始末して、帰る、そ

ういう話だったのに。

彼女は、何でもないことのように、首を縦に振った。



ウォーシャドウの突撃が疾風なら、相対するフリーユージャーちゃんは巖のようだった。

迫りくる怪物を前に、微動だにしない矮躯。

その姿を、ウォーシャドウがどう受け取ったのかはわからない。

戦の影は陽動を仕掛けることなく、愚直に、真剣に、彼女を刺殺さんとその『指』を  
繰り出した。

槍のように打ち込まれる鋭爪。

直撃すれば新米冒険者の《耐久》では受け切れない、鎧具足の有無で生死の天秤が定まる一撃。

それを、鎧を持たない、小人族の少女は、

「——ああ、クソ」

当然、回避していた。

それも紙一重。彼女はウォーシャドウの真正面から退かずに攻撃を凌いでいた。

『——ッ！』

声のない咆哮を叫び、漆黒の体躯が躍動する。

長大な両腕による二刀流。ダブルナイフ

怪物の身体能力に物を言わせた斬撃は、単調ながらも鋭い。技量の欠けた一撃は、恐ろしい速さを伴うことで風を切る猛撃と化している。

無論、新米の域から脱した者にとっては、そう脅威的な代物ではない。

地道に軍資金を貯め、鎧具足を得たなら、この程度の斬撃は容易に無効化出来るだろう。

技術を磨き、剣術なり体術なりを修めたなら、攻撃の隙を突いて、お返しと言わんばかりに手痛い一撃を与えられるだろう。

それ故の【新米殺し】。

とある武闘派の派閥では、こいつを一騎討ちで仕留めることが新米扱いから脱却する契機とさえ言われているくらい、新米にとっては『脅威的』な、熟練者にとっては『上

層の』怪物。

じゃあ、この『変なの』は。

既に二分が経つ中、未だにウオーシャドウの眼前から退こうとしない小人族にとつては、なんなのだろう。

『——ッ!!』

ウオーシャドウの攻勢が、更に強まる。

生まれ持つ高い敏捷性を、腕を振ることにのみ費やした怪物の連撃には、目を見張るものがあつた。

拳闘士のラツシユを彷彿とさせる刺突が繰り返されたかと思えば、一転して中空に弧を描く薙ぎ払い、薪を割るような振り下ろし。人類を抹殺するために披露される、醜悪なる剣つるぎの舞。

その全てを、フリーユガー・グッドフェローは回避していた。

『——ッ!?!』

今度こそ、戦の影に焦燥が生まれる。

届かない。

当てられない。

——退けられない。

彼女は——変なのは、モンスターの真正面から、全く退かなかつた。降り注ぐ殺意の雨を、淡々と、最小限の動きで、紙一重で避け続ける。

薙ぎ払いには僅かに身を屈め、振り下ろされる鋭爪をそつと横にズレて回避。

怪物の間合いで振るわれる凶器を、間合いの内側に入ったまま、ひたすらに凌ぎ続ける。

お前の攻撃など脅威に値しない、と。

小さな小人族は、その立ち振舞いで告げていた。

「……まさに『ダンス・マカブル死の舞踏』だな」

それは、不可避の死から逃れようとする人々を描いた絵画群に与えられた名前。

この場合、逃れられないのが何者かは、誰がどう見ても明白だった。

ごうかけんらん豪華絢爛たる死の舞踏ダンス・マカブルが、戦の影を破滅に誘う。

『——ツツツ!!!』

ぐん、と。

ウオーシャドウの姿が、ぶれる。

あと数秒で三分といった頃合い。

自らの破滅を悟ったモンスターが、自壊を厭いとわない戦闘駆動を決行する。

安物の鎧さえ断つ斬撃は、もはや第6階層の怪物が振るっていい一撃ではない。

正真正銘、己の命を燃やし尽くさんという、決死の乱舞である。それを、彼女は。

「ふう——っ」

あつさりで見切つて、一步。

この戦いにおいて初めてとなる、彼女からの踏み込み。

鯉口を疾走する刃。今か今かと出番を待ちわびていた《鉄刀》が、歓喜の声と共に姿を現す。

彼女の腰が、肩が、腕が、本来の用途を發揮する。

研鑽を知らぬ怪物よ。人が編み上げた『業』を知るがいい。——その一閃は疾風の  
ように。

『……………』

ゴブリンのように、コボルトのように、ウォーシャドウの首が飛んだ。  
一手番。

それで終わり。

彼女は未だに新品同様の刀身を律儀に検め、血振りをくれ、布で拭い、鞘に納めて、こ  
ちらへと振り返った。

「……………進みますか？」

「帰還だよバカヤロウ」



夜。

アポロン・ファミリアの本拠の一室に、上級冒険者を始めとする熟練者ベテランが集まっていた。

どちらかといえば僕は集めた側なのだけれど、ともかく集まったのだ。

「团长、まだ始めないんですか？」

「ソラールちゃん……ごほん、ソラール殿の不在は気になりますが、既に定刻を過ぎておりますぞ」

「つていうか、いつものこととはいえ、どこほつつき歩いてるんだ、あの娘は」  
幹部である太陽万歳娘の遅刻に、ぽつぽつと不満の聲が挙がるけれど、どれも軽口の域を出ないものだ。

それはひとえに彼女の人柄と、遠征での堂々たる姿を、この場にいる全員が知っているからだろう。

それでも言葉を出してきた彼等に、団長の僕は重々しく頷いて、後で説教をくれることを固く約束する。それで、終わりだ。

本当、僕は部下に恵まれていると思う。

「……あ、来た」

「来ましたか」

「あの喧やかましくて賑やかな足音は間違いない」

ばたんつ、と大きな音を立てて、扉が開かれる。

そこから飛び出してきたのは、太陽のような金の髪の毛の少女。

「——申し訳ない！ 遅刻しました！」

「うん、それじゃあ全員揃ったところで始めようか。アポロン様、よろしいですね？」

「うむ、やってくれたまえ」

長机から少し離れた椅子に腰かける主神が頷いたのを確認して、会議を始める。



ここに集まっているのは、皆一様に、新人の教育を担当した者だ。始まるのは、戦績の確認である。

「じゃあ、いつも通り『楽団』志望の子から順番にお願い」

「はい。では、まずは私が受け持った——」

熟練の団員から語られるのは、受け持った新人の今日一日の評価である。

どんな会話をした、どんな気質だった、何を買った、そしてゴブリンと戦えたか。元の資料に改めて目を通してながら言葉を交わし、今後の処遇について検討する。

「——というわけで、将来有望と感じました。技量は新米相応ですが、度胸がありません」

「意外だな。入団試験の成績はあまり芳しくなかったようだが……」

「いや、しかし——」

尤も、今日の目的はそう大したものではない。

新人講習は、基本、一週間で行われる。

熟練の団員の元で、七日間をどう過ごしたか。それによって誰それとパーティを組ませたり、熟練者のパーティにサポーターとして編入させたり、本拠で武器の指導を行ったりといった処遇を決定するのだ。

尤も、初日である今日は、あまり踏み入った話はしない。なにせ、こちら相手のこと

とをまだよく知らないのだから。

「——あいつには才能を感じる。びしばし鍛えてやる所存だ！　うわっはっはっはは！」

入団試験で最も成績のよかった新米の諸々を、ソラールが語り、ついに僕の出番がやつて来た。

ふう、と息を吐いて、努めて普段通りの声色で、僕自身どうかと思う戦果を語る。

「ウォーシャドウを殺した」

……いや、うん。

わかる。気持ちはとてもわかる。

なんなら僕だつてそっち側に回りたいくらいだ。

でも、残念ながら夢じゃない。現実。これが現実。

「——」

今日一日の彼女を滔々と語り終えた頃には、会議室には異様な空気が漂っていた。

もしかしたら、アポロン様はこうなることを見越して僕に彼女を任せたのかもしれない。

「……皆を代表して、一言、問わせてくださいませ」

「うん」

張り詰めた顔の第三級、突剣フエンスサー使いの少女が、恐る恐るといった口調で話しかけてくる。

僕は、出来る限り真剣な顔をして、その言葉に応じた。

「——真剣マジですか？」

「——真剣マジです」

彼女は曖昧に微笑んだ。

僕も笑った。

「真剣マジなのですか」

「真剣マジなのです」

彼等の反応は様々だった。

ふうふうふう、と長いため息を吐いて頭を抱える突剣使い。抱えるとは行かなくとも、曖昧な表情で額に手を添える者が大半。

それ以外の反応をしているのは、大半が上級冒険者だった。

ふむん、と思案に耽るのは第三級、エルフの斥候。この場で最も年かきな彼は、冷静に書面を精査している。

ほおう、と瞳を輝かせるのは小人族バルウムの魔術師スベルスリンガーと只人ヒューマンの拳士ボクサー。観察対象扱いしてる魔

術師はともかく、今にも突撃しかねない拳士の方は注意が必要だろう。

我関せず、という態度の盗賊は、しかし頭部に生えた猫の耳をぴくぴくぴくつ、と震わせている。

そして「太陽の騎士」は、どこか気分良さげに、静かに座っていた。

そして、曖昧な空気がついに混沌としたモノに変わろうとしていた時。

ばん、ばん、と拍手が響いた。

「最後に、私の発言を許して欲しい」

椅子から立ち上がったアポロン様が、場の全員を見回してから、僕に目を向ける。

当然、否はない。

「では、——まずは、我が愛しい子等よ、今日はお疲れ様だった。新人の教育は「ファミリア」の存亡に直結する大事であり、故に君達の功労に私は心からの感謝を捧げる。これから七日間、君達が過去、先達にそうされてきたように、真摯に新米達と向き合ってやって欲しい。

今日のところはこれで解散とする。が、幹部はここに残って欲しい。話したいことがある。私からは以上だ」

「他に、何かこの場で報告することはあるかな?」

……どうやらないらしいので、彼等を解散させる。

部屋から出る度にかけられる「お疲れ様です」の声に、疲労が飛んでいくような気分で返答する。

幹部未満の団員達が抜けた後、会議室に残ったのは僕とアポロン様を除いて三人。僕が赤子の頃から副団長を務めているエルフの斥候。

白兵戦ではこの場の誰よりも強い聖騎士。

爛々と瞳を輝かせている、小人族の魔術師。

彼等は、自分達がどうして呼び止められたのかを既に察していた。

「——まあ敢えて言わせてもらうと、グッドフェローくんについてなんだけど」

「だよね——！」

びしゃん、と机をはたく魔術師に苦笑を返す。エルフの斥候は当然といった表情。

「まず神である私が保証するが、先にオルフェが話していた事柄は真実だ。その上で、これを見てもらいたい」

そう言つて、アポロン様は僕達に何事か書き記された羊皮紙を配つた。

皆の体が固まる。

予め伝えられていなければ、僕だって驚いただろう。

「彼の——いや、彼女の【ステイタス】だ」

「あ、それはもうバラしちゃうのですね」

「うむ。そしてこれらの情報の口外を固く禁ずる」

冒険者にとつて、「ステイタス」の内容は生命線といつていい。同じ派閥の仲間さえ秘匿すべきもの。

それを、アポロン様は僕達に晒した。

「……これは、なんとも」

「一言で表しちゃえば、将来有望？」

「[スキル]が三つ、それもレアスキル。それに加えて[魔法]か。ヤバイな！ うわっはっはっはは！」

無論、口外禁止なんてことは既に承知している三人である。彼等が口にするのは彼女のステイタスについてだ。

レアスキルが三つ。うちひとつは[魔眼]に関わる代物。そして見るからにヤバそうな妖精由来の[魔法]。

これに今日の戦果が加わるのだ。

——将来有望。全くその通りだ。

「つまり、大っぴらに『特別扱い』してしまつて構わないということですか？」  
「うむ」

そう口にして、少しの逡巡を経て、言葉を続ける。

「彼女は——何か、大きな過去を抱えているようだ。それは彼女を精神的に苦しめている。……何とかしてやりたい。協力してほしい」

簡潔な、それでいて、深い感情の籠った言葉。

僕たちの返答は決まっていた。

「仰せの通りに」

「了解です」

「任せてくれ！」

「ほーい」

恭しく、余裕綽々に、元気よく、朗らかに。

【アポロン・ファミリア】の精鋭は、主神の命を承った。

## m p. 6 『再会／グッドフエロー』

ついに【魔法】をお披露目するRTA、早速始めていきます。

前回、【魔法】を獲得し、社宛てのお手紙を作成した翌日から再開です。

起床した所で、まずは【魔法】を使います。

起床した直後に打ちます（再掲）。

本来、中堅派閥に所属している場合、魔法の試射イベントは先輩魔導士兄貴の引率の下、ダンジョンの適当な広間<sup>ルーム</sup>で行われます。が、素直にその道筋を辿りますとチュートリアル含めてテキスト量が凄まじいです。

なので、色々な手順をすつ飛ばしての魔法行使がタイム短縮に繋がるんですね。

それでは、うれし恥ずかしの魔法のお時間です。

———【悪戯妖精<sup>グッドフエロー</sup>、悪戯妖精<sup>グッドフエロー</sup>、夜を彷徨う浮かれもの。妖精王に傳く道化。夏の夜空に虚実を唄い、溺れる夢を囁いて】！



☆☆☆

—— 【ディア・オーベイロン】。

貴方が詠唱を完成させると、何も起きなかった。

光も生じない。

音もない。

宛てがわれた一室は平時のまま、早朝の冷気とうららかな陽光に満ちている。

ただ、精神力マインドの抜け落ちた感覚が、魔法行使の証明として、貴方に少々の倦怠感を与えていた。

貴方はこの結果を嘆いてもいいし、特に気にしなくてもいい。

↓【気にしない】

【悲しむ】

貴方はふむ、と形のよい眉を僅かに歪める。

詠唱に不備はなかった。

燃料となる精神力も消費されている。

となれば、単純に《魔力》を含む魔導士としての実力が足りていなかったか、【ファルナ恩恵】に記載されていない隠された条件があるか、あえて記載しなかったか、大まかに分けてこの三種だろう。

三つ目かなあ、というのが素直な感想だった。

貴方の脳裏に、出会って二日となる主神の顔が思い浮かぶ。

妖精の招来。警戒すべき特異な【レア・マジック魔法】。

己の知る「ステイタス」に何かしらの『不備』が設けられている可能性を頭の片隅に

そつと置いて、貴方は身支度のために寝台ベッドから退いた。

その、瞬間である。

貴方の足が、沈む。

敷物を敷かれていますとはいえ硬質なはずの床が、ぐにやり、と変形する。

貴方に知識があれば、極東の甘味、寒天のようだと思つたかもしれない。ひどく反発する寝台ベッド、あるいは踊る粘液スライムのよう。

柔らかなそれは、貴方の小さな足を容易く受け入れる。

くるぶしを飲み込み、ふくらはぎを越えて、大腿ももに達した所で、ようやくその変形を終えた。

さて。

圧迫された『柔らかな床』は、包み込んだ貴方をどうするだろう？

はたして、貴方は『床に弾き飛ばされた』。

華奢な身体がトランポリンのそののように——尤も貴方の知識にはないものだが——宙に打ち上げられ、飛んでいって、天井すれすれまで上昇し、そして落ちる。

——貴方は「ステイタス」不相応に達者な体捌きで受け身を取り、負傷することなく床に戻ってきた。

敷物の敷かれた硬い床だ。

着地すると同時に、貴方は妖精眼グラムサイトまで起動しての索敵を行うだろう。

懐のナイフを取り出し、寝台の横に置かれた鉄刀を手に取る機会を窺うことだろう。

そんな様子を嘲笑うように。

ケラケラと。

心底愉快そうな笑い声が、なんの変哲もない部屋に響き渡る。

『それ』は、其処そこにいるのが当然のように、貴方の肩に座っていた。

「——ごきげんよう、我が王様！」

☆☆☆

いきなり判定ふっかけてくるのは止めようね（殺意）。

というわけで、悪戯妖精のパック兄貴が仲間になりました。やったぜ。なんか馴れ馴れしいなお前（失礼）。

これもおそらく『使役』と『招来』の差異なのでしょうが、先程の受け身判定は初見だったので少し焦りました。本来取るはずだった『使役』の場合は、虹色の金平糖三つをリリースした感じの邂逅になるのですが……まあ誤差だな！ むしろタアイム的にはうま味です！

それでは身支度を済ませまして、ご飯を食べに行きましょう。

食堂に着くと、昨日同様に同行してくださいさる団長殿と、本日の魔法試射イベント限定

でパーティに入ってくる魔導士兄貴もしくは姉貴が席についています。パック君を伴ってそちらに向かいましょう。

このイベントに参加する魔導士兄貴の位階は、例によって主神からの好感度と、派閥内での評価で決定されます。試走の段階では中堅どころのおじさん（Lv. 2）でしたが、はたして今回は誰になりますかね……？

——はい、正直知ってました。

団長殿の対面に腰かけている小人族兄貴バルウムをご覧ください。とんがり帽子に黒ローブ、まん丸メガネでスリーアウト。見るからに魔法使いな風貌の彼は「アポロン・ファミリア」幹部、魔法大国出身アルテナ（脱走）の愉快な魔術師兼魔導士です。

……つまり、このファミリアで最高の魔導士です。

団長と幹部と幹部に面識のある新米冒険者、スリーアウトです。

おそらく同期連中からの好感度は恐ろしいことになっているでしょう。果てしなくどうでもいいですが。立場を高めて幹部プレイしたい方は同期からの心証には気を使おうね！

んだらば彼等が会話を仕掛けてくる前に、今朝の出来事をお話しましょう。具体的にはパック君を引つ掴んで魔術師兄貴の前に突き出します。これもタイムのため、卑怯とは言うまいな……

——はい、魔術師兄貴がパック君を拘束して連行していきました。時間短縮成功です。

本来の道筋ですと、担当魔導士兄貴の前に突き出したらしばらくして小人族魔術師兄貴が来襲し、第三級に勝てるわけないだろ！ になるのですが、今回は直接魔術師兄貴に渡せたので、こちらでも時間短縮になっています。うーまーいーぞー！

この後、パック君は魔術師兄貴によって色々と調べられ、安全であることを確認されてからフリーユーカーさんの所に帰ってきます。パック君の叫喚が聞こえてきますが無視です。決して邂逅イベントでの仕返しではありません。これだけははっきりと真実をお伝えしたかった。

それでは、団長兄貴が死んだ目で頭を抱えている様をスクショしつつ、ご飯をいただきますしよう。もっと胃を痛めて♡ おらッ、このリア充が！（足蹴）

ここから先、倍速が続きます。

いかんせんイベントが始まるまではひたすらダンジョンするだけです。殺風景になつてしまうのです。よって倍速、倍速、倍速です。

その間に、Lv. 1↓2の間にこなすイベントを説明させていただきます。

ざっくり言ってしまうえば、邂逅、邂逅、そして決戦です。

今回、最初のランクアップにワイヴァーン戦のイベントを利用するのですが、そのために必要な物事が実はひとつあります。アイズちゃんとの面識です。

面識といっても、会話をしたりする必要はありません。こちらの『印象に残る』が達成出来ればオーケーです。それこそじゃが丸くんの屋台で見かけるだけでも十分。今回はアイズちゃんがキラアアント相手に無双する場面で顔合わせを図ります。

『同じファミリア』や『血縁』などを条件とするイベントも多いので、ワイヴァーンのイベントは参加条件が非常に優しい部類です。その分難易度は凄まじいですが。端的に言って地獄を見ます。初心者にはお薦めできません。

具体的にはプレスへの対抗手段がないとこんがり肉にされてバッドエンドです。火炎吐いてこないインファント・ドラゴンくんはあれでも良心的だっけはつきりわかんかね。

そして、アイズちゃん関連のイベント二つに挟まる形で、もうひとつイベントをこなします。こちらのイベントは一切のフラグを必要としない、ランダムイベント一歩手前な代物ですので、起こったら達成して終わりです。

こちらのイベントは路地裏で発生するので、日々の移動に路地裏を使用していればほぼ確実に遭遇できます。楽でイイゾー。



あ、パック君が帰ってきましたね。この間二日。最長記録で草生えますよ。平均は一日と少し、最速はゼロ秒です。第一印象判定の怖いところさんが露呈していますね。

このゲーム、容姿は良ければ良いほどいいので、こまめな入浴とまともな服装、最低限、この二つは頭に入れておきましょう。他キャラクター、特に女性からの印象をよい方向に持っていていきやすくなります。

間違つても迫真ずだ袋部・ぼろ布マントの裏技なんてやつちやあ駄目だゾ！（反面教師）

まあともかくお帰りなさいパック君。シヤバの空気はどうだい？

……おや珍しい。強制連行ドナドナによるパック君からの反撃が来ませんでした。いつもなら暗黒微笑からの《幻惑》なり《スカートめくり》なりぶっぱなしてくるのですが……イメチェンか何か？ ままええわ。一応、機嫌直しのために用意していた嗜好品を差し上げておきましょう。

ほーれ、焼き菓子ですよ。美味しくいたいでどうぞ。……かわいいなあパック君（濁点省略）。

パック君が正式加入したところで、やることは変わりません。イベントが起こるまで淡々とモンスター共を殺して回りますよ。

——一週間経ちました。伴って新人講習が終了しました。

新人講習の終了後ですが、この七日間の動向・成績に応じて、自分と同じくらいの実力の方々とパーティを組むこととなります。ただ、この『同じくらい』の幅は広く、同期のみなさんと一緒になることもあれば、ソラール姉貴 *With* 二軍メンバーのパーティにサポーターという立場で加入させられる場合もあります。

つまり、ここで組むこととなる一党の内容はほとんどランダムです。RTAという仕様に真つ向から中指を立ててんなお前な。単独探索の許可を取りたかつた理由がこれで、面子が普通の奴等だったらまだマシなのですが、高圧的だったり、みんな！ ぼくの指示通りに戦ってくれ！” タイプの人間と組まされるとタイム的にお辛いです。

……ただし、今回、というより【実験体】のせいでコミユ力がかかなり低くなることを前提としている本チャートの場合、同期と組む確率はかなり低くなっています。何故なら、彼等からの好感度が低いからです。

というのも、团长殿含む幹部の方々、険悪な仲の奴等を同じ一党にする愚行は犯しません。それなりに気の合いそうな人達を組ませてくれます。

本来のチャートでは、この七日間は同期からの『一緒に飯食おうぜ』『少し話さないか』

などの提案を片っ端から断りまくることで、偏屈なやつ、という印象を同期連中に与える予定でした。が、フリーユージャーくんは幹部とすごい仲良く○していたせいか、同期の冒険者に一切絡まれることなく七日間を終えられました。

これは……嫌われものじゃな？（凡推理）  
やっただぜ○。

同期の方々は若い人が多く、端的に言つてやりづらいです。なんとというか血気盛んですし、こちらが『小人族』というだけでよく思つてこない方もザラにいます。なので、元々アポロン・ファミリアに在籍していた冒険者兄貴達のパーティに加入させてもらうのが理想です。

つまり何が言いたいかというと、一刻も早く単独探索させて♡

そんなわけで、今日で団長殿とはお別れです。元々団長殿が『新人講習』に参加しているのがおかしいという話。アポロン様から極めて好かれていたせいなのでしょうが。

ここから先、団長殿と会う機会は、少なくともLv1の間はありません。毎日顔合わせで感覚麻痺してきてるけどこの人けっこう多忙だからね、仕方ないね。

団長殿、この七日間面倒みてくれてありがとうがとナス！

……ありがとうナス！

……。

あのー、パーティーから『オルフェ・リユート』の文字が消えてないのですが。消し忘れか何か？

えっ？

あつ。

——はい。新人講習の終了と同時に、団長殿と正式にパーティーを組むこととなりました。

??????????

なんで？　なんで？　なんで？

いや……マジですか。

これ、報告案件ですね。いやあ驚きました、アロン様からの好感度が高いとこんな現象が起こるんですね。当時の私の困惑ぶりが映像から察せます。たぶん、この不自然な硬直はウイキを確認してた気がします。走ってる時にウイキ確認とか走者の屑ですねこれは間違いない……

しかし、この時期に団長殿とパーティを組むとなると……ああやつぱり。新しくもう一人、パーティに加入している子がいます。

団長殿の後ろに隠れてこちらの様子を窺っている黒髪シヨタ兄貴オツスオツス、まさかお前とパーティ組むことになるとは思いませんでした。まあこの時期の、というより団長殿とソラール姉貴が死んでない時期のお前なら……大丈夫だろうか……？　大丈夫だな？（確認）

——はい、『ヒュアキントス・クリオ』がサポーターとしてパーティに加入しました。お前のせいでガバったらビンタも辞さないからな（脅迫）。



その子は、変な格好をしていた。

頭から袋？ を被って、布のマントを身に付けた、とても小さな小人族<sup>パルウム</sup>。

まだ九歳のぼくより小さいんだから、そりやあもうとつても小さいのだ。

正直、こんな小さい人がモンスターと戦えるなんて信じられない。

……いいや。

きつと、そうだ、そうに違いない。戦えないんだ。モンスターが怖いんだ。それこそ、かつてのぼくみたいに。

「そんなじゃあ、坊っちゃん、ご挨拶出来ますか？」

——できる。

オルフェさんの後ろから、しっかりと全身を出して、むん、と気合いを入れる。深呼吸をひとつ。

オルフェさん以外の人との、初めての一党。

不安だった。

怖くて、嫌だって言葉が喉奥から飛び出しそうだった。

けれど、そう、だって、アポロン様からの『お願い』なんだから。

「……初めまして！」

今ならわかる。

ぼくは、任されたんだ。

「ぼくはヒュアキントス！ ヒュアキントス・クリオ！ アポロンさまの眷属です！」  
きつと、この子も同じなんだ。

戦いたいけれど、戦う力がなくなつて、それでも、アポロン様のために戦いたいんだ。  
だったら、やっぱり、ぼくの役目だ。

オルフェさんから、ソラールさんから、リカルドさんから、トランベリオさんから、沢山のことを教えてもらったんだから。

今度は、ぼくが——この子の『師匠』になつてあげるんだっ！

「ぼくが、一緒に戦つてあげる！ だから、怖がらないで、安心してっ！一緒に、ア

ポロンさまのためにがんばろうっ！」

出来た！

ちゃんとやれた！

そうだ、ぼくは任されたんだ！

アポロンさまから、ファミリアの先達として、この子にたくさん教えて、強くするこ  
とを！

「……」

「いつも通りでいいから」

「……その」

「いつも通りやってくれれば、それでいいよ。あの子もバカじゃないから、それで察し  
てくれると思う」

「……すみません。小さくて」



「いや、本当、ごめん、ごめんね……」

## 幕間『遍（あまね）くを照らす太陽よ』

結果として。

少年の淡い決意は、早々に叩き壊されたのだった。

「ごめんなさいでした」

そう、ぺたんと頭を下げたのである。

ぺたん、だ。

つまり、地面にくつつくほどに下げたのだ。

「……ドゲザまでしなくても」

「ごめんなさいでした」

「……は、い」

狼狽うろたえるずだ袋の幼女。

今日はこの子の意外な一面をよく見るなあ、と三步離れた所から二人を見守る僕は独ひとりごちる。

そもそも、坊っちゃん——ヒュアキントスから例の宣言をくらう前から、フリーユーちゃんは挙動不審だったのだ。

椅子の上で体が微振動していたし、ずだ袋の裾から伸びる紐を弄くってたし。食事の量も多かったし、あろうことか『早く行きたいです』と迷宮探索の催促さえしてきたのだ。団長ほくと正式にパーティを組むっていうのになんの気負いも感じてないのは大変結構なのだけれど、そう、確かに挙動不審だった。

それが、ヒュアキントスの宣言を聞いたら、ぴたつ、と止まったのだ。

いつも通り、ではない。

ただでさえ少ない口数が減った。

逆アバウト・デイスに言えばそれだけのことだったのだけれど——いわゆるアイ・ハブ・ア・バッド・フィーリング嫌な予感がする。〃 ってやつだったのかな。

はたして、迷宮に押し入った湾刀使いの小人族は、モンスターを相手にえげつない剣舞を披露したのだ。

悉く、一刀両断、である。

……縦に。

目の前でウォーシャドウがすっぱり二等分されて、少年はわかりやすく限界を迎えたらしかった。

「坊っちゃん」

「は、はいっ」

「冒険者は見かけによらない。そう教えたでしょう」

「はい……………」

「またひとつ、賢くなりましたね？」

「小さくても、侮りません……………」

そう、冒険者は見かけによらない。

L v. 1の大男がL v. 2の少女に力負けするなんて常識だ。

外見と中身は一致しない。それが【ファルナ恩恵】のもたらす恩恵なのだ。

「そして、フリーユークン」

ぐるん、と矛先を変えた僕に、フリーユークンはこれまたわかりやすく狼狽えた。

「確かに僕も意地悪だったけど、いつも通りって言ったよな？」

「……………」

「年下の子の恐怖心を煽るのはどうかと思うな」

「…………ごめんなさいでした」

「よろしい」

まあ、こんなものでいいだろう。

ヒュアキントスには、冒険者としての常識を。

フリーユークンには、年長者としての良識を。

それぞれに教えることは山積みで、これはその一步に過ぎない。

現在、ダンジョン第7階層。

新品びかぴかの一党は、極めて順調に探索を進めていた。

『——オオオツ』

「遭遇。<sup>エンカウト</sup>数は七かな」

「行きます」

「が、頑張ってください……！」

そんなやり取りをして、とととてズバンギャアギャアブシャアツ、で戦闘終了。

相も変わらず『鉄刀』一本で血の路を作ったフリーユーちゃんが刀身に血振りをくれ、刃

こぼれの有無を検めている間、ヒュアキントスにサポーターとしての経験を積みませつ

つ、周辺の警戒。

相手方に『ゴ布林』や『コボルト』といった難度の低い敵が現れた時は、ヒュアキ

ントスにも前衛をさせる。

それを繰り返して、気がつけば僕とヒュアキントスの背負っているバックパックは満

杯になっていた。

「一旦帰還しようか」

魔石及び戦利品<sup>ドロップアイテム</sup>の収集具合と、一党の消耗度合いを考慮しての判断。

それに、ヒュアキントスは素直に返事をして、フリーューちゃんはほんの少し間を置いて首肯した。

「わあ、これ、おいしいです、オルフェさん」

それで、まあ。

「そうでしょうそうですね、一党の結成記念にいいとこのヤツを持ってきましたからね。フリーューくんはどう？ 口に合えばいいのだけど」

自然な流れで、小休止をとっていた。

なにせ、Lv. の都合上過剰戦力となる僕も、単純に力量の足りないヒュアキントスもあまり前衛として機能出来ていないので、自然、経験値疲労はフリーューちゃんひとりに集積される。

そもそも「ステイタス」自体はヒュアキントス以下で、エルフ程ではないとはいえ体力貧弱な傾向のある小人族バルウムなのだから、そりやあもう存分に休ませるべきだ。

「うわあ、本当においしい……アポロンさまにも差し上げたいくらいっ」

わいわいと、喜色の滲む声を発しているのは、自ポケットマネー費から奮発した焼き菓子を頬張るヒュアキントスだ。

かわいいやつだ、と、素直に思う。

甘いものを口にして頬を薔薇色に染める様は、そっち男色の気けのないやつにも生睡を飲ませ

るものがある。

いやまあ、僕は愛エウリュディケーしいあの娘一筋だけれど。

「……おいしいです」

と、ずだ袋を被つたまま、もそもそと焼き菓子を咀嚼するフリーユちゃん。

広間の隅つこに陣取つて、小さな身を抱えていると、迷子の子供と見紛いそうになる。年齢はともかく体格は子供なこともあつて、路地裏に放置していたら誘拐されてしまひそうだ。

今まで遭遇してきたモンスターの全てを斬り伏せてきた彼女だけど、人を斬れるか、というのとは未知数である。

美少年といつて差し支えないヒュアキントスともども、よく目を光らせておかなければならないだろう。

——二人とも、勝手に何処かに歩いてくような性格じゃないのが救いかな。

ヒュアキントスはびびりだし——事情が事情だけに茶化すような真似は死んでもできないが——フリーユちゃんは、まあ、フリーユちゃんだし。

素直、健気、冷静、体力の限界を知つていて、物怖じせず意見を具申してくる。

これで十三歳だつていうんだから、もう、全く。

「我が王我が王、ボクにもひとつちようだい」

「……」

「わあい」

……。

「坊っちゃん」

「んむつ、なんですかオルフェさん?」

「……や、もうひとつ食べます?」

「いいんですかッ!?!」

くつきりとした瞳を輝かせる少年に、どうやら見られてはいなかったらしい、と心の内で安堵する。

——頼むから自重しやがれファツキン妖精野郎。

恨みを込めて視線を送ってやれば、ケラケラという笑い声が耳朶を叩いてくる。

ずだ袋の隙間から顔だけ出してきた妖精が、可憐な相貌を邪悪に歪めて哄笑こうしょうしていた。

「悪戯」の妖精。パツク。

ビンに入れられる程の矮躯に、蜂蜜を糸にしたような頭髮。なるほどその姿は幻想物語を読んだ子供が夢想する妖精そのものだけれど、頭の中に詰まった悪辣さもそのままなのは、なんとも度しがたい。



今だって、姿を見られてはいけけないヒュアキントスのすぐ近くであえて姿を晒し、僕の狼狽ろうばいっぷりを眺めて爆笑しているのだ。

控えめに言つてクズい。

五年の歳月をかけて培つてきた『団長』のガワが外れかける程度に、この妖精はクズい。

正直に告白してしまえば、どこかから適当なピンを見繕つてきて、突っ込んで密封した上で海に流してやりたいと思つたのも一度や二度ではない。なんなら今まさに思つてる。

何より救えないのは、パツクと名乗るこの妖精が、不確定名称他人に決してその存在を感じさせていないことだ。

創作の妖精よろしく知性皆無の微笑ましい輩やからではない。こいつは、自分の姿が余人に晒された場合、主あるじであるフリーユーちゃんが被る不利益をよく理解している。

顔を見させるのは、アポロン様と、僕を含む幹部、それとフリーユーちゃんだけ。

そういう約束を持ちかけたのは僕達だが、持ちかけた側が困惑してしまうぐらい、この妖精は上手くやっている。

それが、フリーユーちゃんの不利益に繋がる物事だから、というのは、流星に察している。

認めたくはないが。

悪戯妖精のパックは、主あるじに関連する物事に対して、際限なく誠実に、聡明になれるらしかつた。

それはつまり、主に不利益が及ばない限り、この悪戯野郎は叡知の限りを尽くして僕達を弄くつてくるということだ。「アポロン・ファミリア」が誇る精鋭は揃って胃を痛めている訳だ。

切実に自重してほしい。

「団長」

「うん」

彼女がそれに気づいたのは、くそやろうもといパックの進言か、あるいは修めているらしい『占星術』とやらの結果か。

術士にその術理を問うのは禁句NG、というのは幹部の一人である小人術師トランベリオの一言だが、いつかは踏み込まなければならぬ事柄だ。

まあ、妖精の助言にしても、修めた術にしても、それらは彼女自身の力だ。第二級冒険者と遜色ない初動を可能とする総合戦力スベツクは驚嘆すべきだろう。

ゆつくりと立ち上がり、取り出しておいた小型の豎琴キタラを構える。全員レが有効射程レンジに入ったところで演奏開始。

幾多もの弦をつま弾き、音色を奏でながら、迫る戦場を見据える湾刀使いと会話する。

「逃走か、防衛か、と愚考します」

「迎え撃とう。ここは正規ルートに近い。先に進まれたら惨劇になりかねない」

「では通路へ。……クリオくんは」

「後方の警戒と、治療の準備かな。《演奏》かければここの相手でも十秒はもつからね、うちの坊っちゃんは」

「ではそのように」

優秀だ。

本当に、心の底から、嘘偽りなくそう思う。

打てば響き、剣に優れ、戦闘を恐れず、己を過信することなく、血に酔わない。

この状況を把握した上で、『逃走』と『防衛』を提言出来るのだから、文句なしに満点だ。

あと数年も経てば、太陽<sup>ソッ</sup>万歳<sup>ラウ</sup>娘と共に「アポロン・ファミア」不動の双矛<sup>ツィットツフ</sup>となるに違いないと、一冒険者としても、团长としても、そう思わされるし、そうするに足る少女である。

「——よし、《駆ける章駄天》は演奏完了。あともう一曲……速弾きしなきゃだな。フリーユくん——」

「クリオくん、バックバックから高等回復薬を取り出して、並べておいてください。予備の武器はその横に纏めて、清潔な布を——」

「えっ？ あ、は、はい……！」

「……はあ」

気がつけば、息が出ていつていた。

我ながら褒めつばなしでどうかと思うけれど、素直に感嘆してしまった。

彼女が準備をしてくれるなら、接敵までの数秒を、本業に専念できる。

「……この、音——」

ようやく事態に気づいたららしいヒュアキントスが、頬から色を失くす。

それでも手は止めていない辺り、やはりこの子も才能溢れる新米だと思う。

叶うなら、この傑物の側で、見事な花を咲かせてほしいし、そうさせるのが団長の役

目だ。

ふう、と深く息を吸い、深く吐いて、最後の《演奏》を完成させ、近接用の武装《太陽のフランベルジュ》を抜剣する。

僕達の見据える先、通路の向こう。

そこから、音が響き、近づいてくる。

おびただしい量の足音。

氾濫するモンスターの殺意。

むせかえるほどに濃厚な血の香り。

人々の——冒険者の叫喚どうぎようしや。

「とりあえず作戦はもう立ててるから、安心してくれていい。簡単な仕事さ」  
軽口をひとつ。

深刻シリアスになって勝てるのなら、まあ、構わないけれど。

これはダンジョンではよくある事で、最終決戦でもなんでもないのでから、彼等が気  
負う必要などないのだ。

なにせ、命を支払ってでも『何か』君達を生きて帰すをしなければならぬのは、団長の僕だけなんだか  
ら。

何より、恐怖がちがちの頭目より、不敵な笑みを浮かべている頭目の方が、安心す  
るだろうか？

「——以上で作戦説明終わり。どう、出来そう？」

「問題なく」

「がんばりますッ！」

「よし！ じゃあ、やろうか……！」

はたして、それはすぐに現れた。

通路を埋め尽くす大量のモンスターと、全身を血塗れにしてひた走る、冒険者――

！



『魔眼は、大きく分けて二つに分けられる』  
懐かしい声よみがえが甦る。

それはいかなる暗澹に在ろうと絶えることのない月明かり。女性らしい、されど芯の通った声音。私の手を引き、星々の神秘へと誘う女神の言葉。

ツクヨミ。我が魔術の師。

『一方は〔付与〕。それを視た者、或いは視られた者に直接作用する神秘。これはまあ、古代の女怪メドゥーサの石化の魔眼が有名だろう。視た者に石化を与える。そう、与える。』ことを本質とするのが付与型の魔眼だ。

——対し、フリーユ、お前の妖精眼は「観測」の神秘だ』  
朗々とした響き。

聡明とは言えない私の頭に浸透し、咀嚼させ、行き渡らせる、月女神の特別講義。

『この部類の魔眼は、〃受け取る〃ことを本質とする。千里、未来、生存、痕跡、失せ物、捉え方の差異はあるが結局どれも同じだ。この世界に在る何かを、それぞれのやり方で受け止め、理解する神秘。』

——では、妖精眼は何を、どのように観測するか』

あの神の瞳に射抜かれる。

蒼い瞳は、密やかな夜に浮かぶ月を思わせる。

『妖精可視による魔力の観測。それが妖精眼だ。特にフリーユの位階になると、上の森人の聖域、そこに鎮座する聖木に匹敵する〃妖精の宿り木〃の機能を兼ねる。』

そして、性質上、この魔眼は他の魔術との併用に適している。元々魔眼保有者は高い魔法適性を持つが、中でも妖精眼持ちは顕著だ」

フリーユ、と呼ばれるのは、好きだった。

……いつそ、ツクヨミ様が男神だったなら、生涯をこの御方に費やしてもいいかと思える程に、心地よい。

『その瞳は星の術理をより広げ、星の術理はその瞳をより十全に運営させるだろう。

……フリーユが星に惹かれたのは、『宿命』だったのかもしれないね』

故に与えられた起動鍵は『観測』。

星を観るだけしか能のなかった私が、月の神から賜った、星を知る術。

その一言をもって、魔力を観測する魔眼を起動する。

「——観測、開始」





濁流のように迫りくるモンスター達の先頭に、彼等の姿はあつた。

全身を鮮血で汚した冒険者。只人。男。どこにでもいるような無名戦士。

いつものように迷宮に潜り、異常事態に直面し、敗走した。そんな、どこにでもいるような二人は、それぞれ負傷者という荷物を抱えていた。

「っ……あ……」

「セインっ、頑張れっ死ぬなっ！」

「くそ、追い付かれるぞ……！ どつちか捨てろガイル！ いくらお前でも二人は無

理だ！」

「なっ——馬鹿野郎ッ、何言つて……!?!」

「もう見捨ててるだろ、俺達は!?!」

その言葉には、怒りがあつた。

殿しんがりという名の人柱を許容した諦観と、どこまでも無力な己への悔恨があつた。

それでも、否、だからこそ、無名戦士は吠える。

「だから、生きなきやいけないだろうっ!? 一人でも多くの仲間とっ! 地上に帰らなきやいけないだろうっ!?」

その、鮮血を撒き散らすような言葉に、常に隣で戦ってきた戦友の言葉に、ガイルと呼ばれた男の相貌が悲壮に染まる。

わかっている。わかっているとも。

だから、武器を置き去りにした。

戦闘の継続を捨てて、武器を捨てて、仲間を捨てて、冒険者であることを捨てて、腕の中にある命を守るために、走っているのだ。

けれど、だから、どうしても、躊躇う。

あらゆるモノを捨てても救いたいと願ったものを、自ら手放すなんて、残酷すぎて、とても耐えられない。

「私を、捨てろ」

「――」

涙腺が崩壊しかける男の耳に、典雅な響きが囁かれる。

彼に背負われているエルフの魔導士が、氣力を振り絞って、口を開く。

「私を、捨てろ、ヒューマン……!」

気障きざったらしいエルフが、潔癖な癖して娼婦街に興味津々だった男が、常に勝利をも

たらしめてきた魔導士が、友人たる戦士に懇願する。

お前の足手まといになどなつてたまるか、と。

どうか、自分を捨てて生存してくれ、と。

「あああああつ、あああああつ……!?!」

「……つ、ううううつ……!?!」

彼等の判断が正しかつたかといえ、意見が分かれるだろう。

後方、すぐ近くまで迫っているモンスター群の群れ。

武器のない戦士では、いや、武器があつたとしても、数の差で一手番もたず引き千切られるだろう死の波に、二人の戦士は突撃する覚悟を決めた。

友人の願い通りに、友人を捨てて、死ぬよりも。

友人の願いを捨て、友人を捨てずに死ぬことを選んだのだ。

迷宮の闇が迫る。

二人の戦士の背を撫でて、死の道へと引きずり込もうとしている。

そうして。

どこにでもいるような二人の戦士が振り返り、ありふれた結末を迎えようとした間際である。



絶え絶えだが——戦士が、音色の根源に接近していることを察知する。

正規ルートへと続く道だ。

そこに陣取って、見ず知らずの自分達を支援するような真似をしているやつと、かち合う。

——ちょうどいいカモじゃないか。

随分と昔に捨て去ったはずの悪性が笑う。

仲間を犠牲にせずに済むぞ、と。

この音色の奏者をモンスターにけしかけて時間を稼ごう、と。

【怪物進呈】<sup>バス・パレード</sup>してやれ、と。

その提案は極めて現実的で、飛び付きたいほどに魅力的だった。

だから、かつて路地裏にたむろっていた盗人は、

「——くそつたれがよおおツツ!!!」

ただ、理性を燃やした。



小さな体をめいっぱい駆動させ、次々と怪物の首を撥ね飛ばす。

そして、手を止めることなく、こう呟くのだ。

「……やつぱり、『キラアアント』」

それは、堅牢な甲殻を持つ巨大蟻のモンスターの名前。

『ウオーシャドウ』と同じく「新米殺し」の異名を与えられているこのモンスターは、ぶつちやけでかくて堅い蟻だ。体色は赤黒いけれど体型はフォルムそのまんま。四足二腕に大きな双眼、腕先の鉤爪の威力は高く、新米冒険者の斬撃を容易く無効化する甲殻と合わさって、厄介な怪物だ。

ウオーシャドウが静かな武道家なら、キラアアントは鎧具足を着込んだ戦士だろうか。

特筆すべきは、窮地に陥った際、独特なフェロモンを発散させることで、周囲の同種モンスターを呼び寄せる性質だ。

——だから、本当に、よくある事なんだ。

「キラアアントの大群！ わかってはいたけど、なんともありきたりだな！」  
瀕死になったら仲間を呼ぶのがキラアアントだ。

止めを刺し損ねるだけで大群になる怪物だ。

本当に、よくある事なのだ。

だからこそ、対処法も判然としている。

「防衛重視！ 絶対に後ろに通すな！ 確実に殺せ！」

「行きますッ……………」

そうして、僕達は通路に陣取った。

この身は第二級なれば、上層のモンスター程度に遅れをとるはずもない。

「アポロン・ファミリア」の首領に与えられる武装《太陽のフランベルジュ》をひたすらに振るい、一太刀で三体のモンスターを爆砕する。

けたたましい爆砕音を伴って迸る、太陽の剣閃。

Lv. 3の「力」をもって体躯を打ち砕き、甲殻を弾き飛ばし、魔石を叩き壊す。

対して、フリーユーちゃんの戦い方は静かだった。

無銘の業物を手足のごとく操る湾刀使い。

彼女は一切無駄な破壊を行わず、甲殻の間を縫って確実に首を落とし、あるいは魔石を——まるでそれがどこにあるか見えているかのように——両断する。

戦士としての技量は、間違いなくフリーユーちゃんの方が上だ。

それでも撃破数はこちらに傾く辺り、恩恵というものの偉大さを体感する。

「さて、そろそろどうだ……………」



「止まってくださいっ！」

そう、目の前の戦士達に立ち塞がる。

先の大声によって勢いを削がれていた、全身を真っ赤に染めた戦士達は、一も二もなく停止した。

その相貌に浮かぶのは、焦燥と、困惑。

「なっ、なんなんだあんたら……!?!」

「怪我人が三人いて、仲間の一人が奥にいるんですよね？」

「——な」

そして、それはヒュアキントスも同じだ。

先程団長から語られた『作戦』通りに動いてはいるが、何がどうしてこうなるのか、そこまでは説明されていない。

ただ、彼の言っていた通り、怪我人は三人いたし、どうやらもう一人、あの波の向こう側にいるらしかった。

「負傷された方をこちらに寝かせて、とにかくポーションぶっかけてください！」

じゃんじゃん使っちゃっていいです！ 負傷箇所もわからないし、服を脱がす時間もないので、とにかくたくさんお願いします！」

彼に与えられた指示は簡潔だった。

負傷者の治療と、後方の警戒。

戦列に加われ、とは言われていない。

それに、悔しさが無いと言え、嘘になる。

一瞬だけ、パーティの仲間である小人族に目を向ける。

自分と同じく、団長の指示に従っている新米冒険者。

最前線でなんか格好いい武器を振るい、団長の隣で怪物共を塵殺する彼。

——それが、仕方のないことだとも、適材適所の結果だとも、ヒュアキントスは思わない。

状況はよくわからないし、前で戦えないことを悔しく思うし、無力なことが苦しくて、それでも、与えられた役割を全うする。

「仲間を助けるために、動いてください……！」

「……っ、来たぞー！」

「よし、来たね」

音が聞こえたので振り向けば、そこには負傷を回復された戦士が二人。

放り捨てたらしい——そんな音が聞こえた——武器の代わりに、僕が持ち込んでいた予備の武器を構えている。

「……あんだ、正気か？ 見ず知らずの俺達のために、こんな真似を……」

そう問いかけてくるのは、長身の戦士だ。装備からして先程の男が專業戦士なら、こちらは斥候も兼ねているのだろう。

斥候の男は、短槍を構えながらも、冷や汗の垂れる顔を僕に向けていた。

当然、こちらの返答は決まっている。

「君達の仲間は生きている」

まだ、という二文字はあえて外した。

「まあ、戦闘音はけっこう小さくなってきてるけど、呼吸はしてるし、心臓は動いてる。本職は『楽士』だからね、こんなのは小技、大道芸さ。まあそれでも、冒険者を名乗らせてもらっている身だ。

だから、当然、助ける」

大体、そうしない理由がわからない。

助けられるヤツがいるらしい。

そして、僕は冒険者だ。

なら、助けるだろう。

軍人でもなし、効率主義でも、大間<sup>マンチキン</sup>抜けでもない。冒険者なればこそ。

「そんな訳だから、僕の仲間を任せる。代わりに君達の仲間を任されよう」  
最後に、彼女を見る。

湾刀の絶技を操り、妖精を従え、文字通りの屍山血河を成している、新人冒険者とやらを。

ここを任せるよ、と。

そういう意図を込めた視線に、冒険者フリーユーカーは、完璧な回答をした。

彼女は、いつものように、首を縦に振った。

「……まあ、ポーシヨン代は請求させてもらうけどね」

ボソリと口にして、突っ込んだ。

「しッ——！」

団長の姿がモンスターの海に消える。

先程までの役割が堅牢な城壁ならば、今は敵将を貫く<sup>やじり</sup>鏃か。

防衛の懸念を捨てた第二級冒険者が、進路上の、最低限の怪物だけを殺して、ひたす

らに前へと進む。

団長が直前に速弾きしたのは《星降る夜》。敏捷を徹向上させ、みかわしの加護を与え  
る楽曲。

槍衾やりふすまのように放たれるモンスターの攻撃を、ひらりと躲かわし、疾走していく。

まるで、囚われた姫を救いに駆ける勇者のようだ、というのは、大仰に過ぎるだろう  
か。

ともあれ、やることはわかりきっている。

鏃やじりとなった団長が抜けた以上、私一人で城壁を成さねばならない。

彼が無銘戦士達の仲間を救いだすまで、この防衛線を死守する。

後ろを見ることなく、背後を想う。

負傷者の治療に専念する、若い戦士の姿を幻視する。

やることはわかりきっている。

——死守する。

「《私は月を奉ずる者》」

星々の神秘に干渉する占星術をもって、魔力を観測する魔眼を変調させる。

月の光が照らすのは、やはり魔力。

されどこの魔術は通常の観測より視点をずらし、相手の急所を浮き彫りにする。

「ふううッ——！」

「小人族、一旦下がれッ！」

「——助かります」

巨漢の只人戦士の声に応じ、ほんの一瞬、戦列から退く。

二人の戦士がモンスター<sup>ボーション</sup>の波をなんとか押し止めているのを見ながら、ずだ袋をつけたまま、回復薬を呷る。

賦活<sup>ふかつ</sup>される心身。体力の回復を感じ取り、直ぐ様前へ。

やや押し込まれ気味<sup>きみ</sup>の戦列に加わり、湾刀を一閃する。

「うおッ!? もういいのかッ!？」

「無理すんなつ、俺達だけでも、まだ……!」

いや敵しいでしょう、という一言は押し留めた。

気遣いは気遣いとして受け取るべきだ。

「——あああつ!」

数秒拮抗し、そして、押し返す。

魔術を併用した自分と、二人の戦士、人手も実力も足りていて、さらに団長殿の能力<sup>パ</sup>向上<sup>アップ</sup>があるのだから、負ける道理はない。

短槍が振るわれ、長剣が唸り、それらを上回る勢いで湾刀が殺戮を行う。

かくして、ありふれた戦場は終息した。

そして、当然の結末に至った。

「……血が、足りないな」

そう告げるのは、無表情の団長だ。

彼が救い出した女の戦士は、見るからに致命傷を負っていた。

L.v. 1の戦士がキラリアントに囲まれれば、こうなる。

当然の結果だった。

全身をずたずたにされ、右腕を切断されていた。

いくら外傷のほとんどを高等回復薬で治癒したとしても、失われた血液は補えない。

「サレン……！」

「そんな……！」

二人の戦士がうめいた。

治療の施された仲間の側にひざまずに跪き、嗚咽を漏らす。

癒しの術すくを持たないフリーユも、顔をうつむを俯かせていた。

そして、第二級しゝにまで登り詰めた冒険者は。

「じゃあ、やれ、ヒュアキントス」

「はいっ……！」

淡々と、それを口にした。

今の今まで裏方に回されていた少年が、女戦士の側に跪き、その体に手を重ねる。全員の視線を集め、しかし、怖気つくことはない。

——アポロンさま。

強く目を瞑り、彼の太陽を思い浮かべ、嘆願した。

「《遍くを照らす太陽よ、暖かなる木漏れ日にて、我等の傷をお包みください》……つ

！

それは、敬虔なる神の使徒の“奇跡”だった。

かつては天上におわした、今は地上に在る神々への直接嘆願。

古代、魔法行使者が少数であった時代に、神に仕える者が行使していた、魂削る御業。ヒュアキントスが行使するのは《癒し》。

肉体を回復させ、流れ出でた血液すら補完する奇跡。

溢れ出でる陽光が、瀕死の戦士を包み込む。

そうして。

全身を汗まみれにしたヒュアキントスが、ぜえぜえと荒い息を吐いた頃。死にかけていた女戦士は、うつすらと瞳を開けたのだった。





後日。

「まあ、よくある事だよ」

「よくあること」

「うん、よくある事」

あつげらんかんと口にする団長に、そうなのかと納得するフリユー、まともなのは僕だけかと戦慄するヒュアキントス。

あの日、いつものように本拠に帰還した彼等は、数日後となる今日、件の<sup>くだん</sup>パーティと会話をした。

曰く、貴<sup>がた</sup>方は命の恩人だと。

曰く、死にかけてた女戦士が「ランクアップ」したと。

曰く、困ったことがあつたら言ってくれ、と。

結局、ことの始まりは、どこぞのパーティがキラーアントを仕留め損なつたことらしい。

肥大した軍勢に、恐らくその一党は呑まれ、巨大蟻の群れは固まつたまま移動を開始した。

彼らの一党がそれに遭遇してしまつたのは、運が悪かつた、としか言いようがない。

「強化種と打ち合つたんだから、そりゃLv.も上がるよね」

群れを率いていたのは、キラーアントの強化種だつたらしい。

身体はもちろんのこと、統率力が強化された個体に、多くのキラーアントが追従し、擬似的かつ大規模な怪物モンスターパーティの宴が発生してしまつたのだとか。

そんな強化種の末路は、

「生かしておく理由はない」  
らしかつた。

キラーアントの海をかき分け、仲間のために勇気を振り絞つた女性戦士を救い出し、太陽の剣にて首魁を討つた、ということだ。

ちよつとしたお話に出来そうですね、というヒュアキントスに、大したことではないと答えるオルフエ。

いずれギルドから討伐の緊急指令ミツシヨウが発令されていただろう災禍に、第二級冒険者が居合わせたのは、多くの下級冒険者にとって幸運に違いなかった。

そして、「アポロン・ファミリア」にとつても幸運だったと、一団を率いる男は語る。

「このご時世、腕があつて、仲良くできる「ファミリア」は、多ければ多いほどいい」

本来、彼等が活動しているのは『12階層』。

技量も、装備も充実した一党であると、団長は太鼓判を押した。

そんな彼等を、強化種というイレギュラーは呑み込もうとして、達成されなかったのだ。

彼等の技量不足、という話でも——まあ、あると言えばあるのだが。

それでも、下級冒険者の中では上位に入る者達だ。軍勢と化していなければ、キラークラント風情、彼等の敵ではない。

そこに、戦士の一人がLv. 2に至ったとなれば、その戦力はバカにならない。

迷宮都市、暗黒期。

闇派閥が台頭し、治安の悪くなる一方な現状、今回の事件は自派閥を守るための一助となつたのだと。

「まあ、「アポロン・ファミリア」は闇でもなければがつつり秩序という訳でもなし、た

だ自衛してればいいんだから、気楽なものさ」

これは日常的一幕。

イベントには至らない、倍速で片付けられた一件。

異常事態イレギュラーが発生し、ある一党が潰え、ある一党が救われたというだけの話。

魔王を討った勇者にはなれず、与えられたモノは感謝と友誼。  
だからこそ。

迷宮都市最高の楽士、小さな剣豪、未だ未熟な神官戦士、それに悪戯の妖精という、な  
んともちぐはぐな一党。

彼等は今日も迷宮へ往く。

## m p. 7 『邂逅／栗鼠と蛇と医神』

アルテリオス計算式を採用してたりしてなかったりするゲームのRTA、はあじまーるよー。

さて、前回シヨタキントスがパーティに加わりましたが、それで特に何か起こることもなく、強いて言うならバックバック持ちが増えたので稼ぎが良くなり、戦闘に費やせる時間が増えました。いいぞーこれ。

というわけで、イベントまで倍速していきます。

この間に、フリーガーくんの育成方針について、お話しします。

育成方針といっても、このゲームはパワプロくんやMMO系のような、ポイント単位での緻密な調整を可能とする代物ではないので、そちらを嗜まれている方にとってはかなりざっくりしたものになります。

また、一秒でも早く大天使ロリアイズちゃんのご尊顔を拝みたいという方は、下記の時間に飛んで、どうぞ。

なお、ただいま右枠おっぴろげて神妙に倍速させている見所さん薄めの日常パートで

すが、ご希望の方がいらつしやるなら後日単体で投稿しようと思っております。公開希望の方はこの動画にコメントを残していただきますようお願いいたします。

では、始めていきます。

RTAにあたり重要となるのは、いかに早くDランク以上の能力値アビリティを作るかです。

改めて説明しますが、ランクアップに必要なのは『偉業の達成』と『基礎アビリティのどれかがD評価に達する』ことです。

前者に関しては、プレイヤーの操作技術や装備、特記事項による短縮が見込めます。

このRTA、時間の大半を基礎アビリティの育成に費やすので、低アビリティでの偉業達成はタイムにかなり影響します。

これに対し、後者はチャートによる短縮が主になります。いかに効率よく経験値エクセリアを獲得するか、特定のアビリティに経験値を集中させるかが重要となります。

ここで、戦闘による経験値の獲得処理を説明します。

イベントの達成による経験値獲得もありますが、通常の戦闘では『モンスターの脅威度』、『使用武器』、そして『戦績』の三要素によって総量と配分が決定されます。それぞれ手短かに説明します。

まず、『モンスターの脅威度』によって、経験値の総量が決まります。脅威度というのは怪物の強さとキャラクターの強さの差による指標です。これが高いモンスターを殺

すことで多くの経験値を得ることができません。

例を挙げると、Lv. 1でゴブリンを倒した時とLv. 5でミノタウロスを倒した時では前者の方が多くの経験値を得られます。逆にLv. 1でミノタウロスを倒せば、Lv. 6でゴライアスを単騎討伐するより多くの経験値を貰えるんですね。

獲得した経験値は、『使用した武器』に応じて基礎アビリティに割り振られます。力、耐久、敏捷、器用、魔力の五つですね。

基本的に、近接武器は力と耐久、遠距離武器は敏捷と器用、魔法は魔力が伸びやすいです。そこから重量やリーチ、手数、要求される精密動作などで配分が定まります。

このゲームで用意されている武器は多様ですので、ここでは特徴的な武器のみ紹介させていただきます。

まずは「長剣」。その辺の冒険者が持つてるあれです。斬ってよし、刺してよし、殴ってよしの万能武器。最もバランス良くアビリティを成長させられる近接武器です。これを握ってぶんぶんしてれば、魔力以外を満遍なく鍛えられます。

逆に、経験値の大半が魔力に行くのが「魔法」です。このゲームでは「魔法」も武器の一種になってます。生物を殺せるものなんでも武器だからね、仕方ないね。

遠距離武器は大概、器用が育ちやすく、耐久が伸びづらいいのですが、「短筒」は例外です。特に大型のものは反動が大きく重量があるので耐久も伸びてくれます。なお装填

時間と弾の値段からして迷宮探索には不向きな模様。都会シテイでの冒険アドで運用しましょう。

そして最後の『戦績』ですが、武器種ごとに定められた「綺麗な勝ち方」に沿った戦い方をすると、総量に追加が入ります。いわゆるボーナス点ですね。

大剣であれば、斬撃攻撃で一撃必殺したり、複数体を纏めて始末。

槍であれば、急所的に確な刺突攻撃、もしくは投擲。

短刀であれば、先手を取り、超至近距離で止めを刺す。

……といった、武器の特徴を生かした戦い方をすると、経験値が増えます。

この三要素と「スキル」と『特記事項』を利用して、特定のアビリティに経験値を集中させ、早期にD評価のアビリティを得るのが、多くのダンまちRTAで課題となっているんですね。

これらを踏まえた上で、フリーガーくんの育成方針をお話しします。

今回特化させるアビリティは、「器用」です。

そして、それに次ぐ形で「魔力」も育てます。

理想は、器用がD、魔力がF、他のアビリティがHという状態でのランクアップです。

なぜ器用かという点、小人族のショタorロリボディでは力を鍛えても効果が薄く、

同じ理由で敏捷も除外。耐久は論外として、魔力を選ばなかったのはエルフや狐人ルナールのよ



うな魔法種族ではなく、燃料の都合上、単独での長期探索が難しくなるからです。

何より器用特化のチャートは「一意専心」コンセントレイトとの相性がとてもいいのです。

以前、「一意専心」はRTA御用達と言いましたが、その理由のひとつが技能：超集中コンセントレイトによる器用熟達です。

【英雄願望アルゴソット】のチャージ攻撃と違い、超集中である「一意専心」は経験値が器用に集中します。獲得経験値こそ【英雄願望】には劣りますが、最終的な器用値の伸びは「一意専心」に軍配が上がるほどです。

—— イベントが始まるので、一旦説明を中断します。

現在ダンジョン第7階層、連絡路の近辺です。つまりは幼アイズちゃんちゃんがキラーアントを相手に無双するイベントですね。

このイベントでは、キラーアントの群れを相手に耐久戦をします。一定時間経過か、もしくは一定数殺せばイベント達成です。

ここでどちらを選択するかは、フリーくんがどれくらい育っているか、一党パーティの人員が優秀か否かで決めるのですが、今回はオルフェ団長とかいうLv. 3がいるので、迷わず後者を選択します。

ここで戦うこととなるキラーアントの配置は固定なので、動きを固定化しやすいで

す。一党の動きをコントロールしつつ、効率よく始末していきましよう。

せっかくなので、ここでフリーユークンの得物である【湾刀】について説明をば。

【湾刀】は近接武器の中でもピーキーな性能をしています。【長剣】と比べると分かりやすいのですが、『力』と『耐久』の伸びが近接武器中一、二を争うレベルで劣悪で、代わりに『器用』の伸びが高いです。

そしてこの武器ですが、なーぜーか、ジャストガード、あるいはパリイと呼ばれる判定が他の近接武器と比べてくっつきやすいです。もう本当に厳しくて腹が立ちます(?)。

おそらく【湾刀】の「戦い方」の大半が『一刀で部位を切断すること』や『的確に攻撃を回避・受け流すこと』など露骨に高難度なのが関係しているのでしょうか……とにかく厳しいです。長時間の集中を必要とするRTAには不向きと言わざるをえません。じゃあなんで採用してるんやというと、特記事項が関係しています。

【重度の実験体】によってもたらされた事項、【資質：侍】のせいですね。

その職業への適性を高める【資質：〇〇】の特記事項には、該当職業に適した武器を使用した際、その戦闘での経験値を増やす効能があります。

よって、意図せず【資質：侍】を得たフリーユークンの場合、【湾刀】を使用するのが最適となる訳です。

ああ〜(疲弊)

ちなみにですが、本来のチャートでは「長槍」を使う予定でした。「湾刀」<sup>R</sup>ほどではありませんが器用が伸びやすく扱いやすく、「戦い方」も先ほど言及したように<sup>T</sup>急所狙い<sup>A</sup>で、何より武器としての性能が素晴らしいです。

あまり気張らなくても高い威力と範囲でモンスターを狩れる優秀武器をすこれ（迫真）。

小人族戦士男で「長槍」を採用したフィン団長の判断は全く素晴らしいと思います。

——画面では一定数の討伐が終わり、アイズとガレスが参戦してきました。

実質戦闘終了です。大人しくアイズの暴れっぷりを眺めてみましょう。下手に参加して目立つのも嫌ですし。

周りの冒険者が迷宮無双をやらかしてるアイズにドン引きしてるのを尻目に、撤回します。

さて、それでは次のイベントまで倍速しながら説明の続きを——なんで等速にする必要があるんですか。



「あ、あのっ！」

去り際。

貴方の背中に、少女らしい声がかけられる。

「助けてくれて、ありがとうございます……！」  
貴方は振り返ってもいいし、無視してもいい。

↓【無視する】



見知らぬ栗毛のロリっ子よ、これもタアイムのため、卑怯とは言うまいな……（無視）。  
 今のような会話は往々にして発生します。ランダムに発生するプチイベントですね。  
 通常プレイであれば応じるのもやぶさかではありませんが、いやむしろ積極的に絡みに  
 イキますが、今回はRTAなのでフヨウラ！

それでは、説明の続きです。といつてもそう長くはならないのですが。

結局のところ、やることは単純で、「一意専心」キメて首を刎ねます。これをひたすら  
 に繰り返します。

フリーユークんの素質にもよりますが、この方法ならほぼ間違いなく半年で器用がDに  
 到達します。

そして、それと並行して魔力も育成します。

魔力は原則【魔法・魔術】の使用により経験値を得られます。ですが、【魔法】を使う、  
 これが中々に難しいです。

原作でリリースケが言及していたように、【魔法】には詠唱と精神力マインドが必要であり、  
 精神回復薬マジックが高価なこともあって、そうばんばんぶつぱできる代物ではないのです。

それでも、魔力を上げるには【魔法】を使うしかありません。

では、どうするか。その答えは、原作・外伝のそれぞれの主人公が示してくれていきます。

つまり、『速攻魔法』と『付与魔法』<sup>エンチャント</sup>です。

ベルくんの【ファイアボルト】。

お馴染みのぶっ壊れ速攻魔法ですが、こちらを例にあげた理由はほぼリスケの主張と同じです。

圧倒的な使用回数、他の追従を許さない取り回しのよさ。

さっさと強くなりたいという願いのもとに生まれたこの【魔法】は、魔力を伸ばす手段として最適解のひとつです。

アイズの【エアリエル】。

こちらもお馴染みのぶっ壊れ付与魔法ですね。

この系統の魔法は、詠唱完了後、精神力を消費し続けることで半永久的に魔法を起動していられます。

魔力を育てるのに適した特性だっではつきりわかんだね。

纏めますと、『気軽に使えて』『起動し続けられる』魔法・魔術が、魔力育成に適したものとなります。

私はこれを、「妖精使役の魔法」と「超短文詠唱で扱える占星術」で達成するチャートを組みました。

結果的に「魔法」は「妖精招来」となってしまうましたが、特に問題なく完走出来ました。……が、招来ですとオリチャーが必要になったりならなかったりするので注意が必要です。なんなら招来引いたらリセットしてもいいかもしれません。それくらいガバのもとになります。

パツク君お前もう本当に許さねえからなあ？（後付け実況特有の未来視による暴言）  
まあ見所さんも増えたしヨシ！（よくはない）

ちなみにですが。

マジックユーザー

魔法種族限定RTAで幸運×魔力特化プレイをしたい場合、おすすめの職業は『人形使い』です。というより私がそれで走りました。

このチャートの何がいいかって、完走後に同じデータでフェルズさんを攻略できるんですよね。

フェルズさんを攻略できるんです。大事なことなので二回言いました。

具体的には、秩序側かつ特定の「ファミリア」で実力と信頼を得ると、ウラノス様から死んで骨だけフェルズさんに人形の身体を与える依頼をされるんですね。

これに成功しますと、フェルズさんとウラノス様、そして異端児ゼノスからかなりの信頼を得ることが出来ます。異端児関連のルートを進む場合、かなり楽になるかと思えます。何より、数百年ぶりの身体の感覚に戸惑うフェルズさんがあゝくたまらねえぜ。あの人の赤面スチルだけでご飯三杯いけます私。

——あらかた話し終えたところで、イベントの時間がやって参りました。

時間帯は夜。迷宮帰りに路地裏を移動中、道の隅っこに幼女がいるのを察知しました。

彼女の名前は『ネサレテ・ジャミール』。家名から大体察したかと思いますが、あいつの妹です。

この子とのイベントを達成するかしないかで、あいつが蛙になるか否かが決定されます。というより、このイベント以前からチャンスはあるのですが、そのイベントに関わるには相応のLv.と立場、コネが必要になるので、フリーくんには不可能です。

よって、フリーくんがこの子とその姉の境遇決定に関われるのはここが最初にして最後の機会となります。

肝心のイベントの内容ですが、迷子の子供をただ送り届けるだけです。

はい。くっそ楽です。



楽なのですが、届け先が都市のどこにいるかはランダムなので、なんの宛てもなしに歩いていると時間を取られます。なので、「占星術」でばばつとサーチして終わらせようございませう。

こういったお使いクエストを速攻で終わらせられるのも「占星術」の魅力のひとつです。なんならこれが本業まであります。いや本業なんですけど。

——目的地に到着しました。今回は神塔前の広場でしたね。「女体恐怖症」なフリーユークンを娼婦街に凸らせるはめにならなくてよかったです。

目的地で待っているキャラクターはランダムなのですが、今回待っていたのは、ネサレテちゃんの姉でした。このキャラクターが人のシルエットをしていることに驚いた視聴者様もいらつしやるのではないのでしょうか。私は初見のとき噴き出しました。きかない。

ここで出会うキャラクターによっては、この時点でネサレテちゃんの『職業』を看破できるのですが……今回は無理っぽいですね。

おお、姉が妹の頬をつねってます。彼女の言い分を要約しますと、『勝手に迷子になるんじゃないよオ！』とのこと。これに関してはそちら側の監督不行き届きだと思っただけ……。

一通り説教を終えたネサレテちゃんの姉がこちらに向き直り、話しかけてきます。

これによって、アイズとのワイヴアーインイベントで、ネサレテちゃんに助力に来てくれることが確定しました。

こんな幼女で大丈夫かって？　むしろこのゲームにおける一番いいの候補です。通常プレイでもRTAでも頼り頼られて差し上げる。

さてさて、これでアイズとのイベントの前にやることは全て終わりました。

後はその日までひたすらに経験値を稼ぎます。当然のごとく倍速です。

同じような日々を送るだけです、イベントも何も起こらんでしょう（慢心）。

それでは、フリーユークンが医神アスクレピオスと同居することが決まったところで、今回はここまでにしとさせていただきます。ご視聴ありがとうございました。

は  
?????

## 幕間『ある夜、雨の中』

「……やはり、変わらんか」と。

輝ける光明の神は、能面のような顔で呟いた。

愛する子供達に向ける微笑は消え、代わりに机上のワイン瓶が本数を増やしている。

「アポロン様……」

気遣うような派閥<sup>オトル</sup>団長<sup>フェエ</sup>の言葉が、暗い部屋に溶けていく。

夜だった。

迷宮都市に住まう大半の冒険者が寝台に潜り、明日の英気を養う時間帯である。

朝昼晩常に『楽団』の音楽鍛練が響く「アポロン・ファミリア」もその例にもれない

が、ただ一ヶ所のみ、例外があった。

本拠<sup>ホーム</sup>最上階、『神室』。

主神アポロンのための部屋に、三人の男がいた。

部屋の主にしてこの集会の発起<sup>しん</sup>神であるアポロン。

主命を承る第一の鏃なる派閥団長。

そして、派閥内でもっとも熟練のエルフ。

派閥運営に深く関わるスリートップが、わざわざ深夜に顔を合わせて覗き込んでいるのは、ある団員の「ステイタス」だった。

フリーユーカー・グッドフェロー

L v. 1

力：I 5 1↓5 2

耐久：I 1 2

器用：E 4 7 5↓4 9 8

敏捷：I 8 9↓9 2

魔力：S 9 9 9

「……」

やおら立ち上がったオルフエが、部屋を弱々しく照らすろうそくに「ステイタス」の記された羊皮紙をくべる。

別段、おかしな行動ではない。

「ステイタス」の内容は同派閥であつても他人に知られるべきではなく、情報は速やかに抹消されるべきだ。

ただ、今回に限っては、情報の抹消はもちろんだが、もう視たくない、そんな男達の無言の願望も背を押していた。

羊皮紙がすっかり灰になったのを見届けて、三人の男は深くため息をついた。

「……エルフかな？」

「王族妖精ハイエルフの類いでしようこれは」

「——」  
 疲れたように口にするオルフェの言葉に、年かさのエルフがおどけるように言い、目の据わったアポロンが閉口する。

彼等の胃を脅かす点は、二つあった。

ひとつは、この更新は前回から一月の間隔を空けて行われたものだということ。

もうひとつは、その前回の更新以前から、魔力の値は変わっていない、ということだ。

この「ステイタス」を余人が見て、はたして何人がこの「ステイタス」の持ち主を、小人族の湾刀使い〃と判別できるだろうか。

前衛型の冒険者として貧弱極まる【力】と【耐久】。それらよりはマシだがやはり低い【敏捷】。小人族バルウムという種族が本来得意とする【器用】にしても、【一意専心スキ】の過剰使用によるものなのだから、本来は【敏捷】と同程度と見るのが妥当だろう。

ならばと【魔力】に目を向ければ、今度はあまりに高すぎる。999である。【魔力】におけるSランク自体、もつとも有名な魔法種族であるエルフですら中々お目にかかれ  
ない、真に魔力に親しい者にもみ許された領域なのだ。諸能力の才気に乏しいとされる小人族が到達できる等級ではない。

何より恐ろしいのは——この「ステイタス」が、半年の間ひたむきに迷宮探索を続けた小人族の冒険者のものだ、ということだった。

魔力に目を瞑れば『駆け出しの戦士』と、魔力だけを見たなら『極めて才能に恵まれた魔法種族の魔導士』と表現するのが相応しい「ステイタス」が、だ。

「……露骨だな。胸くそ悪い。予め「用途」について知っておいてよかつたと安堵する団長と、やはり知りたくなかつたと思う「冒険者がいるよ」

それが、口にするのも憚られる実験の成果である、ということ、彼等は知っている。以前、彼女の故郷から送られた密書。

その内容は信じがたい代物であつたが、この「ステイタス」を見れば納得せざるを得ない。

何故「魔力」だけが異様に高く、他が異様に低いのか。——当然の帰結なのだ。その方が都合がいいというだけ。

「ファルナ恩恵」とは器の限界にたどり着くための階キヤハシなれば。これが、『フリーユーカー・グッドフェロー』という単一の用途のために品種改良された肉体の到達点なのでしょう」

それは、「恩恵」に設けられた数少ない「限界」のひとつ。

下界の子に無限の岐路を与え、あらゆる可能性を芽吹かせる効能は、なるほど「神の力」に相応しいが、それでも、限界はある。

例えば、基礎アビリティの限界値は999、Sランクである。

例えば、ランクアップ時に獲得できる発展アビリティは、一つのみである。

例えば、【魔法】のスロットは三つである。

——例えば、その「器」を超えた成長は出来ない。

エルフの剛力無双がないように、ドワーフの賢者がいないように。

その種族、その人物に定まった限界を超えて、能力値を上げるとは叶わない。

どれだけ鍛練を重ねても、エルフであるなら【力】は伸びず、ドワーフの【魔力】は限界値より前で止まる。

「……惜しいなあ。僕はまあ、元々剣の才能はからっきしだったから、すつぱり諦められたけど。彼女は剣に愛されているのに、【恩恵】には愛されなかった。いや、奪われたのか」

【アポロン・ファミリア】団長にして迷宮都市唯一の最高位楽士、オルフェ・リユラーは深くため息をついた。

もう、十年以上昔のことだ。

迷宮都市に生まれ、当たり前のように英雄に憧れ、楽士の親に反発して、剣の腕を鍛えて、才能の壁に打ちのめされた。

【力】も【耐久】もGから上にいかなかった、『凡才未満』。著しく欠けた前衛適性に絶



望し、一時は自刃さえ考えた。

そんな自分が、いまや世界で五指に入る最高位楽士マスターパードとなったのは、ひとえに主神アポロンの言葉と、両親の献身の賜物である、とオルフェは確信している。

「……さて」

と、年かきのエルフは口にした。

「私はですね、アポロン様のご意見に賛成です。突出した魔力アビリティがなかったなら、素直に『楽団』に移ってもらおう所ですが、カンストしてる能力があるなら話は別です。

むしろ……この「ステイタス」で上層最奥の第十二階層を探索出来るのなら、さっさと「ランクアップ」させてしまう方がいい」

「——リカルドさん」

「もちろん、彼女は年少で、新人です。ファミリア内で多少の不満も出ましよう。が、それ以上にこの子には価値がある。と、私は愚考致します」

はたして、ファミリアの重鎮が話し合っていたのは、L.V. 1の新米冒険者を『遠征』に連れていくか否か、だった。

このことの発端は、無論、『遠征』の決定である。

探索系派閥に定期的に与えられるこの課題に対し、「アポロン・ファミリア」は普段通りに準備を整え、いつもと同じように、これを達成するつもりだった。

パーティメンバーに幹部が名を連れ、派閥内で腕利きの冒険者が加わり、「ランクアップ」間近な者が、将来有望な者をサポーターとして末尾に添える、その過程で、オルフェは口にしたのだ。

『遠征中は、フリーユークんの面倒を見てあげられないな』と。

それはそうだろう、となった。分身魔法なんて修得していないし、仮に持ってたとしても使わないだろうと、本人も思った。『遠征』に際し、余分な部分に力を割く訳にはいかない。

だが、そこで、アポロンが口にしたのだ。

——『ならば、彼を遠征に同行させるのはどうだろう』。

真つ先にオルフェが反対し、ほぼ同時に小人<sup>ト</sup>族魔術師<sup>ベリ</sup>が賛成を示した。

他の面々——Lv. 2の団員達は判断に迷ったが、団長と並ぶ第二級冒険者のソールが賛成に入ると、彼等もそちらについた。

将来有望な者をサポーターとして同行させる。

たとえ派閥加入から半年の新米だろうと、齡十三の子供だろうと、フリーユークは間違いなく将来有望な冒険者であり、そのことに疑いの余地はなかった。

そして、副団長のエルフがリカルドこの案件を一旦保留とし、今に至る。

「僕は、やはり、反対です」

冷静に、オルフェは口にした。

静かで、力強い言葉だった。

それは派閥団長としての判断であり、短くない時間を共有した子供への親愛の証でもあった。

「アポロン様のご意見も理解できませんが……やはり、早すぎる。せめて、あと半年は待つべきだと考えます」

「もつともな意見だ。私も——そもそも発端ではあるが——あるいは、お前と同じ意見だったと思う」

だが、と輝ける光明の神は続け、しばらく沈黙し、やがて語った。

「【死相】が、見える」

「——」

「そして、それは彼女自身の手で打ち払わねばならぬ、とも感じる」

「……」

「あとどれ程の時間が残されているのかわからない。明日かもしれないし、一年後、十年後の話かもしれない。だが確実に、彼女は「冒険」に飲み込まれる。そう感じる。な

ので、強引に割り込ませてもらった。トランベリオは知らないが……ソラールには、薄々察せられてるかもしれないな。

——基礎アビリティを育てられないなら、「ランクアップ」させるしかない。時間が無い、かもしれない。私が与えられるのは【恩恵】のみ、力のみ。だから力を与えたい。困難を越え、蕾から花を咲かせるその時まで、生きられるように」

だから、どうか、と。

アポロンは、自身の眷属に頭を下げた。

どうか彼女に機会を与えて欲しい、と。

フアマリアの主神が頭を下げる、という行為に込められた意味を知らぬ二人ではない。

年かきのエルフ、リカルドは静かに瞑目し、派閥団長のオルフェはその場に跪いた。ひざまず

主神が下げた頭より更に下へと身を屈め、頭こぶを垂れる。

「神命に従います、我が主神」

「まあ、なんとかしてみましよう。アラファイフの本気を見せますよ」

☆☆☆

「太陽死ね」

「……」

そう、目の前の男神様は悪態をついたのだ。

——勘違いしないでほしい。彼は常日頃からこんなに口が悪いのでは……いや、その、悪いけれど、私の顔を見るなり悪態を口ずさむような人ではないのだ。今は気が立っているだけ。

そう、彼が不機嫌と化している原因の一端は私にあるのだ。

「……私は悲しいです、アスクレピオス様。明日には『遠征』へ赴くというのに、貴方は結局不機嫌なままなのです」

「当然だ馬鹿者。何が悲しくて要観察患者がダンジョンとかいう危険地帯にぶちこまれるのを喜ばなければならん」

……いや、彼の心情はわかる。

仲の悪いらしいアポロン様に呼び出されて、患者を押し付けられたと思つたら、それは『遠征』にお呼ばれされやがったのだから、憤懣遣る方無いのも、理解できる。けれど。けれど、だ。

「これは、もう一月も前に決まっていたことなんですから。いい加減、機嫌を直してほしい、というのが患者の意見です」

「やだ。絶対やだ」

つーん、と口を細めて言い捨てる様は、少年のようだった。

いや、姿形は少年そのものなのだ。それも美形の。腰を通り越して踝くるぶしにまで達するふんわりとした白髪と、そこからぴよこりと顔を出している蛇、寝不足から来る深い隈が特徴的な、10代の少年。

そんな美少年が凄まじい顔をしているのだから、見た目のインパクトが凄まじい。

「いいからさっさと食べ。明日は早いのだろう」

そう口にして、彼は足早にリビングを去っていつてしまった。

目の前に用意されているのは、夜ご飯だ。

なにせ今は夜なので、夜ご飯を食べるのである。

正確には、食べさせられているのだが。

「……残すなよ」

「わかっています、わかっていますよ……」

半開きの扉から顔を出してきたアスクレピオス様に、げんなりとした口調で返答する。もはや抵抗の意思は残っていない。

だって、少しでも残したら、素手で拘束されて口にねじ込まれるのだ。こちらは冒険者で、あちらは神様なのに、取っ組み合いになったらこちらが負けるのだから、神様とこのうのはよくわからない。

もちろん、タケミカツ子様につ倒されるのならわかるが、アスクレピオス様は医神だ。医神が冒険者をぶつ倒すのは今でも理解しがたい。

目の据わった美少年にはつ倒されて、ひたすらに食材を詰め込まれた日、私は初めて実験体時代ではない悪夢を見た。

先生直伝のパンクラチオンとやらの力らしいが、ともかく私のトラウマがひとつ増えたということだ。

「……多い」

改めてその惨状を知覚して、士気が下がる。

子供体型の人が使いやすいよう設計された机に整然と並べられた、栄養バランスのとれた料理。これらは全て、アスクレピオス様が手ずからお作りになったものだ。

曰く、『お前ガリガリだから取り敢えず肥えさせるぞ』。

そして『僕の料理以外口にするなよ。栄養バランスが崩れるからな』。

初対面でそんな暴言を公言された時はどうなるかと思っただけれど、いざ振る舞われるのがこれなのだから、なんとも言えない気分になる。

実際、味はおいしい。食材もワンパターンではなく、旬のものをほどよく取り入れ、彩りも素晴らしく、しかし基本は外さないという、見事な手際だ。

だから、余計に、困るのだけれど。

「……………うう。成長、したくないのに」

これ以上胸が大きくなったら、女性らしい体つきになってしまったら、本格的に私は私の身体を直視できなくなる。

それが嫌だったから、本拠ホームにいた頃はわざと少食にしていたのに、ここ——『クスシヘビの診療所』で生活するようになってから、一変してしまった。

いっぱい食べさせられて、見る見るうちに、変わってしまった。

だって、胸おっぱいが柔らかいのだ。

以前までは、肋あばらが浮き出ていたから、まだゴツゴツしていたのに、もはやその面影はなくなってしまうている。おしりも、お腹なかも、頬ほもぶるぶるしていて、ぶにぶにしている、これじゃあ本当に『女兒』だ。



アスクレピオス様は『骨格的にこれ以上胸が豊満になることはないから安心しろ。確かに貧乳だ』とおっしゃっていたから、それを信じているけれど。体つきが正常になるとアポロン様が喜ぶから、容認したけれど。

不安なものは、不安だ。

「なんなら、髪もさらさらになされたし……手触りいいし……うあああ……」  
なるほどそのふわふわな髪はこうして維持してるんですね、なんて納得しなくなかった。

長髪の男性もいる、と無理やり自分を丸め込もうと努力しているけれど、やはり、キツイ。

今、鏡を見てしまったら、どうなるのだろう。そんな不安に駆られてしまう。

「……」

そこまで思考が回って、ようやく気づいた。

独り言が多い。

「……緊張、してる、のかな」

『遠征』への同行。

見たことのない階層の探索。

サポーターとしての同行だけれど、今までの探索とは危険度が違う。

木偶の坊ばかりの上層の怪物とは比べ物にならない脅威が溢れかえっている。命の危険が、ある。

『——体調はどう？　緊張してる？』

不意に、脳裏に言葉がよみがえった。

忘れるはずがない。

初めての探索で、団長がかけてくださった言葉。

あの時と同じように、自分はこくりと首肯する。

……ああ、けれど。

あの日のことはよく覚えているから、次の言葉もわかってしまう。

『——怖い？』

怖いか。

そう、あの人は私に問うたのだ。

「……怖がるはずが、ありません」

あの日には言えなかった言葉。  
けれど、心境はあの時と同じ。

下級冒険者の私にとって、『中層』は死地だ。

団長達、「ファミアリア」の先達に守られなければ、いつ死んでもおかしくない場所。  
「怖がるはずが、ないのです」

だって、ほら。

私、笑っているのだから——。

「フリュー」

「——ツツ」

心臓が跳ねた。

アスクレピオス様がいた。

彼は、眉間にしわを寄せたまま、けれど丁寧な視線を私に向けた。

「全部、食べたんだな」

「……あ」

「偉いぞ。医者言うことを聞く患者は好ましい」

いつのまにか空になっていた食器に、呆然としてしまう。

時計の針が随分と動いていたので、食べ始めてから軽く一時間は経っていたらしかった。

私がぐずぐずしている間にアスクレピオス様は食器を洗面所に持って行ってしまつて、また足早に去つていった。

……よかつた、と安堵を零す。

アスクレピオス様はいい神様だから、あんな顔は、見られなくなかつた。

もちろん、アポロン様にも、タケミカツチ様にも、ツクヨミ様にも、あんな顔は見られたくない。

この身体に成り果てた私が、唯一笑える時、私はひどく親不孝なことを考えているのだから。

「——ん」

それを見かけたのは、全くの偶然だった。

大通りにさえ人のいない深夜。

窓から大通りを眺めていた時に、それは現れた。

降りしきる雨の中を駆けていく、金の流星。

どこかで見たことがあるような気がした。

気がしたという程度だから、少なくとも同じファミリアの仲間ではなくて、きっと迷宮ですれ違った程度だと思う。

そんな、全く関係がないといつても差し支えないような女の子のことが、気になった。深夜だ。雨の降る夜だ。

それで、剣を携えて、バベルの方向に向かって——いいや直截に言おう、ダンジョンに向かってるのは、明らかに、常識的ではなかった。

何より、彼女の姿を見た途端、胸が震えたのだ。

逃してはならない、と。

彼女の行く所に、お前の求めるものがあるぞ、そう、自分自身に告げられたように思えた。

装備を身につけて、窓から身を乗り出す。玄関から抜け出そうという下手は打たない。なにせバレたら何をされるかわかったものではないのだ。

……一瞬。

ほんの一瞬、変わり者の医神様に、何か言葉を遺すべきかを考えた。

真に求めるモノがあつたのなら、彼とは今生の別れになるから。

けれど、そんな時間はないし、引き留められでもしたら事だと思つた。

この身体に成り果ててからこちら、これだけのために生きてきたのだから、絶対に邪

魔されたくなかった。  
だから、私は、窓から飛び出した。

## m p. 8 『決戦／刃折れた人形姫』

L v. 1にドラゴンと取っ組み合いさせるゲームのRTA、はあじまるよー！

早速ですが、もはや恒例となりつつある冒頭倍速です。アポロンの息子（意味深）と同棲（意味深）を始めたり『遠征』に誘われたりしましたが、全て倍速で片付けます。今後も重要な会話やイベントに関わる箇所以外は倍速していく予定です。まともにやってたらパート数100超えちゃうゾ。

幼アイズとのイベントを間近に控えるフリーユークンですが、ひとつだけやる必要があります。占星術の効果を高める触媒カタリストの作成です。

こちらは魔法の杖のようなもので、所持することで魔法・魔術の結果に補正をかけてくれます。触媒は魔導士専門店で購入出来る他、魔術師系職業のレベルを一定まで上げることで、自作も可能となります。

もつとも、触媒の購入には多額の金銭が必要となりますので、L v. 1でまともな触媒を購入するのは難しいです。正直アポロン様にめっちゃ可愛がられてるフリーユークンならそれなりののを買ってもらえそうですが、今回のイベントでは自作のモノで十分だと判断しました。

本来のチャートですと、迷宮帰りにパーティの面子から一人別れて材料を調達し、夜な夜なこっそり本拠ホームの空き部屋で作成するつもりでした。ここで作成する触媒は使い捨てのモノで良いので、L.V. 1の状態でも自作可能、材料調達の難易度も比較的低いので現実的なチャートだったと思います。

が、今回の場合、早々にアスクレPとの二人暮らしが始まったので、更に難易度が低くなりました。

なにせ自室が手に入ったので空き部屋を工房にする必要がなくなりましたし、何より材料をアスPから貰えるのが大きいです。

本来のチャートでは可能な限り早期に11、12階層での狩りを開始して魔石を換金しまくり、仕送りと材料代を捻出する予定でしたが、材料代がなくなることでもかなりのアドが取れました。材料代のお金をそっくりそのまま仕送りに充てあられるのは非常にありがたいです。

『そんなに無理して仕送りする必要ある?』と疑問に思われた兄貴がいらつしやるかもしれませんので、簡潔に、【社】への仕送りによって得られるモノについてお話しします。

仕送りによる文通では、もともと自機への好感度の高い神様とやり取りをします。そして、仕送りの合計金額が一定に達するごとに、普通に仲のいい神様からはいいものを、



弟子入りなど特別なフラグを立てている神様からは特別な代物を貰えます。自機への好感度の高い、の部分以外はシンプルなシステムですね。

現在フリーくんとかやり取りをしているのは、ツクヨミ様と、タケミカヅチ様です。

こちらをご覧ください。半年の間にフリーくんが貰ったお手紙になります。

内訳はタケミカヅチ様が五通、ツクヨミ様が八通です。ツクヨミ様多い……多くない？　と思われた方もいらつしやると思いますが、これには理由があります。

いやまあ普通に貰ってるのと仕送りの報酬分のが別々に来てるってだけなのですが。仕送りによるお手紙と、ただ好感度が高いから貰えるお手紙は別なのです。

肝心の頂き物ですが、タケミカヅチ様とツクヨミ様の場合、本を貰えます。秘伝書的なアレです。読むことで職業レベルが上がります。魔本とは違いそれぞれのものに特別な加工はされていませんが、ゲーム的には魔本と同じくらい嬉しい代物になります。習熟にかける時間が少なくなるのは素直にありがたいです。

また、仕送りの額が高くなってくるLv. 3〜4辺りになると、触媒なども送ってきてくれたりします。月女神特製のカタリストとか絶対ヤバイやつだっはつきりわかんだね。

それですね、ここからが重要なのですが、触媒の材料代が浮き、仕送りの額が増えたことで、アイズイベントの前にツクヨミ様からの『一冊目』とタケミカヅチ様からの

『一冊目』を受け取ることに成功しました。

本来のチャートでは、この段階ではタケミカツ様の秘伝書は一冊も獲得出来ていないはずでしたので、嬉しい誤算です。これによってより安定感が増しました。

いかんせんワイヴァーン強化種はこちらをワンパンで沈めてくるのに防御不可能なブレスも備えているクソゲーの権化ですので、パリの性能を上げてくれるタケ本獲得が間に合ったのは僥倖と言う他ありません。

アスクレピオス先生！　ありがとナス！

それでは、パート3でこつそりと購入していた三本の《ナイフ》を加工……出来ちゃったあ！

はい、《占星術師のナイフ》の完成です。製作難易度が低く安価な代わりに脆いので、扱いには気を付けなければいけません。ワイヴァーン戦で安定をもたらししてくれる一品です。この光沢、たまらねえぜ（恍惚）。

触媒の形状にナイフを選択出来る職業は実はそう多くはなく、占星術師の利点のひとつと言えるでしょう。攻撃魔術を一切覚えられない弱点を投擲で補えるのはうまあじです。……いややっぱつれえわ。

ここで、アイズイベントが始まるまでの尺を稼ぐのも兼ねて、本作の『占星術師』の

解説をしとうございます。

魔術師系職業に属するこちらの職業ですが、明確にマイナーで不人気な職業です。その理由は明らかで、効力にムラがある上に効果自体がややこしい、これに尽きます。

ムラというのはもう直球にムラでして、その日の星の巡りによつて魔術の倍率が変わるので。調子のいい時と悪い時の落差が激しく、慣れないうちは判断を見誤つてしまふ事態が頻発します。長期間迷宮に潜り続ける仕様と噛み合つてない、はつきりわかんだね。

更にこの職業、攻撃魔術を覚ええないのに加えて、単純な攻防バフも、回復系も覚えません。この時点で使いにくいのに、じゃあ何が出来るのかつていうと、ピーキーな性能ばつかりな占星術になります。

具体的には星に魔力を捧げることでクリティカル率アップやみかわしの加護を授かったり、因果律の操作による諸攻撃の回避、特定の人物の居場所を探知するナビゲートなどです。総じて効果が分かりにくく、バフ時と非バフ時の違いが分からない、これだったら素直に攻防バフかける方がいい、となつてしまいがちです。特に非操作キャラクターにバフした時が顕著ですね。

特に攻撃の回避という部分がネックでして、他の職業における対範囲攻撃<sup>A</sup>防<sup>E</sup>御のほとんどが障壁の展開、つまりバリアーを張るのに対し、占星術は『攻撃を逸らす』防<sup>E</sup>御を

します。前者の場合は攻撃を防ぎきれなかった場合も障壁分のダメージが軽減されるのですが、後者の場合失敗したら直撃します。逸らせなかったらそりやそうなりますよね。さらに成否はその日の星辰次第です。

ただ、占星術師にしか出来ない仕事も多いので、「戦争遊戯モード」ではそれなりに人氣だったりします。

総評すると、『不安定だけどパーティーにひとりいるとたまーに便利』なのが占星術師です。不人気なのも頷けますね。

だからこそその「占星術師×幸運チャート」なのですが。

—— ならば動画の方に戻りまして、現在アイズちゃんがりヴェリアママに泣かされて、雨の降る夜のオラリオを盗んだバイクで走り出してる場面です。

彼女がバベルの方向に走り去るのを確認して、追いかけます。この時、あらかじめ確保しておいた高等回復薬ハイポと《占星術師のナイフ》を忘れずに持っていきましよう。

ハイポに関しては必須ではありませんが、あるとタイム短縮になり、安定します。ただ高価ですので、触媒代とツクヨミ様の秘伝書一冊目の目処が立った上でまだ余裕があれば、で構いません。今回はアスクレピオス先生お手製のをいただきました。アスPありがとナス！（再掲）

マント代わりにしているぼろ布に雨水が染み込んでいますが、動きを阻害する程のものではないので無視して大丈夫です。頭以外装備なしだところといった利点があったりします。無論デメリットには全く釣り合わないので、通常プレイでは、やめようね！

また、イベントが始まる前の段階でアイズに気付かれると面倒なことになりますので、あまり距離を詰めないようにしましょう。

もつとも、アイズの敏捷はAランクなので、あまり心配は要りません。クソステなフリーユークンには無用の心配です。

……幼アイズほんつと速えな（嫉妬）。

ちなみに、エディットキャラクターの『器の限界』は手を加えない限りランダムですが、原作キャラクターのは固定です。みんな高いです。気軽にSランクまで行つてます。トップのベル君は全アビリティSまで行けます。狂いそう……！

既にアイズの姿は見えなくなっていますが、イベントの始まる場所は固定なので問題ありません。適切な早さで向かいましょう。

地味に初めての単独探索はあじまるよー（棒読み）。

あつゴ布林君みーつけ、いただきまーす。

……お前を殺す（デデン）。

このように、イベント会場まで正規ルートをひたすら進みます。進路上のモンスターは真正面から突撃して殺しましょう。この時出来るだけ静かに始末できるとモンスターが群がってくる危険が低くなります。

占星術は温存です。純粋な白兵戦でいきます。

(Ready GO!)

ンなんだお前!? (エンカウント)

うざってえ……!! (憤怒)

立ち塞がるならば容赦はしない。イクぞ! (星四アーツ剣)

ウザコン、お前らに、お前ら二匹なんかに負けるわけねえだろお前オウ! (猛者<sup>おうじゃ</sup>)

郵便屋GOお前放せコラ! (斬首)

仲間なんて必要ねえんだよ! (蛮勇)

(敵追加)

なんだお前!? (驚愕) チツ (鏗鳴り)

馬鹿野郎お前俺は勝つぞお前! (天下無双)

ゴホツ (疲弊)

あーやめろやめろ、どこ触ってんでい! (触れられてはいない)

んあい……どけこら! (殺意)

イイイイアアアッ！（勇者回転剣）

……はい。

また、この探索では魔石を持ち帰らないでいいので、魔石を狙うのもいいと思います。強化種の発生は余裕がある限り抑えましょう。一般冒険者兄貴が困りますからね。

【幸運】なせいでドロップアイテムがほこじやか出てきますが無視は無視！

——10階層につきました。ここから先は霧が発生しており、モンスター<sup>の</sup>質も変わります。真正面から突撃していると逆に時間を取られますので、こちらも戦法を変えていきます。

つまりは霧を利用した不意打ちですね。また、回避できる戦闘も可能な限り避けていきます。一般<sup>の</sup>バルウムが無双なんて出来るわけないだろ！ いい加減にしろ！

【勇者】<sup>プレイヤー</sup>？ あいつは本当にヤベーやつなのでノーカンです。【ロキ・ファミリア】<sup>ヒロインの所属する派閥</sup>で団長やってるだけあって走者視点だと人外でしかありません。第一級は化け物揃いだつてはつきりわかるんだね（一般冒険者並感）。

霧に潜んで不意打ちを繰り返します。

隠密行動は小人族<sup>バルウム</sup>の十八番だからね、仕方ないね。妖精眼<sup>グラムサイト</sup>があるので相手の位置は丸わかり、こちらは潜んで首を落とすだけです。楽です。

ちなみにですが、フリーユークンのステイタスだとオークに掴まれたら死にます。私の場合一撃で殺すので問題ありませんが、オーク兄貴はアイズちゃんも殺しかけてる序盤の難敵ですので、油断せずに戦うことをおすすめします。大型種怖いねえ……。

——無事に所定の位置に到着しました。念のためポジションを少し口に含んだ後、一歩進んでイベントスタートです。

なお、ここから先、ガバ注意です。

やっぱり武器選択は長槍にすべきだったってはつきりわかんかね（吐血）。





以前、団長が語っていたことを思い出す。

ダンジョンが燐光に包まれており、光源を確保する必要がないのは、必要に迫られてのことなのだ。

序盤の怪物には闇を見通す能力はなく、故に光源を用意せざるをえないのだ。

では、この階層のモンスターは。

霧の立ち込める10〜12階層の怪物達は、この白いカーテンを見通すことが出来るのだろうか。

結論から言えば、出来るやつもいる。つまりは出来ないモンスターもいる。

それを利用すれば、ステイタスに優れない私でも、この程度の行いは容易な訳だ。

「しッ」

『オッ』

一閃。

斬殺。

背後から強襲し、首を飛ばす。

そうして、豚頭の大形モンスター『オーク』は沈黙した。

真つ当な戦闘とは言えない、読んで字のごとくな汚い戦い<sup>ダーティブレイ</sup>。

真正面から戦つても勝てるが、今は時間を重視する。

『——ア！』

「っ、『インプ』……」

かの怪物の鳴き声を確認して、素早く移動する。

先ほどの『オーク』は霧を見通す能力を持たないので手早く暗殺出来るが、集団戦を基本とする『インプ』には暗視能力が備わっているので、工夫が必要だ。

要するに、工夫さえすれば雑魚である。

十秒もせずに、霧の中からそれは現れた。

悪魔のような——私は悪魔を見たことはないのだが——と冒険者達に言われている外見は、体格だけならゴブリンに似ている。

漆黒の痩身矮躯、額から生えた角、鉤のついた尻尾。つまり、ここである「悪魔のよう」というのは、子供の絵本に出てくる架空の生き物を指しているのだと思う。

彼等は霧を見通せるモンスターの代表格と言っている。

なんでも、彼等の瞳は『熱』を感じているらしい。生きている限り人体が発せざるをえない熱を観て、霧の向こうから冒険者を見通すのだとか。

音波を視覚の代わりにしている『バッドバット』とは違い、どんな隠密も看破してみ

せる『インプ』は、『オーク』や『シルバーバック』などの大型種ファイターのサポートを務める、生粋スカウトの斥候だ。

——だから、工夫すれば雑魚なのだけだ。

「ふうっ」

『ギャツ』

『——!? ギアアツ!』

「は——っ」

彼等の瞳は熱を視る。

生きている限り熱を持つ人間は、彼等の瞳から逃れることはできない——なんてことはなく。

対策はとても単純で、相手の視界に入らなければいいだけ。

むしろ瞳の性能に甘んじている分、足音を消して死角から近づくのはオークより低難易度だったりする。

何より、瞳の性能は妖精眼こちからの方が上だ。

斥候同士の白兵戦は、先に見つけた側の圧倒的有利である。

群れのうち三体を仕留めた時点で誰何すいかの叫びを挙げられるが、既に大勢たいせいは決している。

『ギャアアッ!』

「っ——! 弱いっ!」

『ハゲツ!?!』

最後の一体を絶命させて、ぶんぶんと頭を振る。

団長や、ヒュアキントス君がいないから、気が抜けているのだろうと思った。あるいは『求めるもの』が近づきつつあるせいかな。

ともあれ、最後の言葉は余計だった。

猛省し、隠密し、次の戦闘に備えなくては。

——弱い。

淡々と正規ルートを進む。

金髪の少女が進んでいった道は、彼女に仕留められたのだろうモンスターの灰が教え  
てくれる。

暗殺しながら進み、時折落ちている剥き出しの魔石を破碎する。強化種が生まれる危  
険は減らすべきだ。

——弱い、弱い。

声がうるさい。

——弱い、弱い、弱い。

そんなことはわかつている。

だって、ここは『上層』だ。

多くの下級冒険者が日々探索している場所だ。

モンスターの特徴を理解したり、装備を整えるだけで、死ななくなる戦場だ。

そんなことは、ゴブリンを殺したあの日からわかっていただろう。

だから、私は『遠征』の誘いを快諾して、

「だから、私は、ここにいます」

一言、口を開く。

それでうるさかった声は消えてくれた。

浅く息を吸って、ゆっくりと吐き出す。

度重なる戦闘で火照った頬を迷宮の霧に撫でられる。

自分の他に戦闘音はしない。

こんな深夜に探索する酔狂な者はいないのだろう。あるいは、ここ数年暴れている

イヴィルス  
闇派閥を警戒してのことだろうか。

アポロン・ファミリアは確実に闇派閥ではなく、しかし明確に正義の側に立っている

訳でもない、いわば善よりの中立を保っている派閥なので、正直、闇派閥の脅威という

のを肌で感じたことはない。

……【幸運】なことなのだろうと、素直に思う。

「……私は」

私は、アポロン・ファミリアの一員として、アポロン様の名に恥じぬ振る舞いを出来ているだろうか。

いや、せめて名を汚すような行いはしていないといいのだけれど。

それを言うなら、ツクヨミ様や、タケミカツ子様、社の神様達だって、そうだ。

私には何も無いのだから、せめて、与えられたモノに相応しい人間として終わりたい。

『——オオ』

それは、咆哮だった。

オークやシルバークの弱つちい叫びとは比較にならない、巨おおいなるモノの猛たけびだった。

弾かれたように疾走する。

隠密なんて投げ捨てた。

『求めるもの』の気配に思考が歪み、ただそれと出会うことしか考えられない。

最後に——接敵する間際、塵のような理性で、回復薬を口に含み、ダンジョン上層の最奥、12階層の最後の広間<sup>ルーム</sup>に突入する。

その、瞬間だった。

「——あああああつ……!?!」

広間の入り口から、『何か』が飛んできた。

それは私の横を通りすぎて、地面に叩きつけられて、ごろごろと転がった。

それは、金の髪を持っていた。

「君、は——ッ!?!」

もやがかかっていた思考から熱が消える。

ゴミのように吹き飛んでいったあの物体が人体だという事実<sup>事実</sup>に息が止まる。

何より——何より。

彼女は、間違はなく、炎上<sup>炎上</sup>していた。

それはあり得ない。

上層に火炎を扱う怪物はいないからだ。

では怪物ではなく人為的な——魔法、あるいは魔剣による攻撃の結果かと身構えた所で、それは現れた。

それは、巨大な体軀を誇っていた。

それは、赤銅の鱗を纏っていた。

それは、凄烈な眼光を発していた。

それは、それは。

それは、本来は持ち得ない、一対の翼を備えていた。

それは、本来はあり得ない、吹き荒ぶ火炎を牙の隙間より発していた。

それは、本来は為し得ない、『同族殺し』を二度遂げていた。

「インファント・ドラゴンの、強化種……！」

相対距離、50M<sup>メートル</sup>。

かの竜ならば瞬きの間に詰められる間合い。

絶望的なマッチアップ。



何をしても勝てない敵。

死力を尽くしても傷ひとつつけられないだろう、偉大なる怪物。

——全てを失った私が、求めていた存在<sup>????</sup>。

折れた刀を持つ瀕死の少女を背に、私は、『求めるもの』とエンカウントを果たした。

## m p . 9 『決戦／鉄馬駆る女戦士（ジャミール）』

幼女と幼女と幼女がドラゴンと戯れるゲームのRTA、はあじまるよー。

幼アイズが戦闘不能になつてゐる場面から再開です。

目の前にインフアント・ドラゴンくんがいますが、逃げます。こちらの方が早いですが、そもそもこのイベントで登場する強化種を単騎で倒すのは現時点のフリーくんには無理です。

パック君に足止めしてもらつてゐる間にアイズを抱き抱<sup>だ</sup>えて撤退します。

【女体恐怖症】のせいで精神がごりごり削られています。少しの辛抱なので耐えましょう。こちらの操作を受けつけないレベルでなかつたのは幸いです。

わっせ、わっせ。

自分と同じ体格の人間を運ぶので速さはお察しですが、申し訳程度の「力」を振り絞ります。以前、最低でも敏捷含む基礎アビリティはHまで伸ばしたいと言つていたのは、それより下になるとこういう場面で困るからですね。今回は画面外で頑張つてくれているパック君のお陰でギリギリ難を逃れましたが、割と際どい所さんでした。

現在目指しているのはひとつ上の階層、ダンジョン第1階層です。何故ってインファント・ドラゴンくん、巨体が崇つて階層を行き来出来ないんですね。それに連絡路はモンスターもあまり寄ってこないの、治療するには適した環境なのです。まあ実際は道中でタナトス兄貴とエンカウントしてしまうのですが。

——と、開始地点から少し走つたところにある広間<sup>ルーム</sup>で、徘徊<sup>ワンダリング</sup>するモンスターに襲われました。

このイベントにおける固定敵ですね。逃走する自機組の行く手を阻むように、12階層の怪物が勢揃いして群がってきます。

具体的には制限時間内に広間の敵を一定数まで減らさないと非常によろしくない結果を招きます。

本来なら持ち込んでいた高等回復薬<sup>ポ</sup>で負傷を治療したアイズと二人で突破する予定だったのですが、今回はアイズが重傷を負っており、ハイポを使う暇もなかったので、かなり危険な場面になりました。

フリーユークンは今、アイズを抱き抱えて走っています。

当然、武器なんて使えません。強いていうならアイズを装備しています。

まさに絶対絶命——なんて思っていないですか？ それやったら明日も俺が勝ちま

すよ（HND）

隠す理由もないので白状しますが、第一級冒険者RTAお馴染みのあの子の出番です。パート7で面倒を見てあげた迷子の子、ネサレテちゃんが登場します。

彼女はこのタイムイングで参戦してきて広間内の殲滅を手伝ってくれるだけでなく、インフロント・ドラゴンとタイムマンを張ってくれます。神かな？

そろそろ来ますよ、3、2、1――。

――女戦士のエントリーだあ！

彼女が参戦してからまずやることは、ファクションチェックです！ファクションチェックをします！これはふざけてるのではなく真面目な行為ですこれだけははっきりと真実をお伝えしたかった（早口）。

ペロツ。これは、青酸カリ！ではなくセーラー服です。はい。セーラー服です。黒を基調とした地味なデザインのセーラー服です。

この奇抜な服装と、彼女が現在騎乗しているお馬さんで、彼女の職業が判明しました。けっこう多い候補の中でもかなり当たり当たりな部類です。最高ではありませんが。

――と、ここでオリチャー発動。本来逃走開始直後に与えるはずだった高等回復薬

をここで瀕死のアイズに投与した後、彼女をお馬さんに乗ってるネサレテに投げ渡します。理由としてはフリーユークンが戦闘に参加出来ないのと、女の子を抱えることに耐えられそうにないからです。彼女の職業が両手が塞がったままでも戦えるモノだった幸運に感謝。

群がっているモンスターは強化種でもなんでもなく、通常の探索で遭遇する奴等と同じです。位置も固定なので不意に囲まれるようなこともありません。ここで温存していた【占星術】も解禁し、速やかに殲滅します。

片付きました。ネサレテちゃん強い、強くない？ この後インファント・ドラゴンと一対一で向き合ってもらうのもあって、出来るだけ多くのモンスターをこちらで負担しようとはしましたが、結果は討伐数キルレイトはこちらが僅かに上、という程度でした。うわよう、よつよい。

馬上のネサレテからアイズを受け取ります。ちよつとした会話が入りますがボタン連打で大丈夫です。別にあれを倒してしまっても構わんのだろう的なやつですので。

んだらば前進を再開しましょう。わっせ、わっせ。

道中ぼつぼつとモンスターが湧いてきますが、群れてなければ問題ありません。帰ってきたパツク君にだまくらかしてもらい、突っ込みます。イクゾー！

…インプの爪に少しひっかかれましたが些事です！ ハナから無傷で突破できる

とは思ってません！ このままタナトス兄貴のところまで突っ込め突っ込めー！（3／3／2突進）

——わーいでぐちら（到着）

所定の広間に入ると同時に会話開始、タナトス兄貴が気さくな挨拶（○）をしてきてくれます。

彼等は原作通りにクノツソスを用いて12階層最奥に陣取り、アイズを待ち構えているのですが、インファント・ドラゴンとかいうイレギュラー異常事態に見舞われたためにふらふらしていたんですね。

本来であればこの時点でアイズは意識のある状態であり、原作と同じような問答をすることとなるのですが、今回は気絶しているの、素の口調で話しかけてきます。会話もそう長くはならないでしょう。

……話が長い（全キレ）

どうやらフリーくん、タナトス兄貴に目をつけられていたらしく、なんとアイズと同じような勧誘（？）をされてしまいました。これは……ガバじゃな？ タナトス兄貴

と接点はなかったはずなのですが……（すつとぼけ）

よくよく考えれば、フリーユークんの願望とかタナトス兄貴の勧誘方法とかその他諸々を合わせると、タナトス兄貴に目をつけられないはずはないのですが、この時点での私は本気で困惑していました。

このゲームのRTAはスキップしていい文章とそうでない文章を見極める技術が重要なのですが、自分はその辺りがまだ未熟だと痛感した場面ですね。

——よし、タナトス兄貴の勧誘を蹴る台詞を提示してくれました。

正直フリーユークんはタナトス兄貴の甘言がクリティカルな人間なのでかなり焦りましたが、終わり良ければ全てよしって英国大文豪兄貴もおっしゃってるし多少はね？

そんなこんなでタナトス兄貴が神威を解放したところで今回はここまで。ご視聴ありがとうございました。

☆☆☆

思考が凍っていた。

眼球が震えていた。

心臓さえ止まったかと錯覚した。

あれは。

あれが。

あれなのか。

私が求めていた、モノは<sup>????</sup>——。

「はっ、はっ、はあっ」

息は荒く、手足は揺らぎ、精神が跳ねる。

それでも私は刀身を検め、道具を確認し、戦闘の用意を終えていた。



無謀な試みだと、誰もが口にするだろうと思った。私自身そう感じている。尻尾を巻いて逃げるべきだと、顔のない誰かが囁いてくる。

けれど、それ以上に、逃げ切れないだろうという思いがあった。

身体能力スベックの差は歴然としている。

偉大なる竜と、矮小な小人族。

今は僅かに離されている間合いも、あの竜がその気になったなら、瞬きの間に消え失せるだろう。

だから、私はアレと戦っていいはずだ。

「は——っ、はあっ……！」

凍っていた思考を、暗い炎が溶かす。

眼球の震えは既に収まり、これから戦う相手を見据えている。

心臓はバクバクと躍動し、全力運動の準備をつつがなく終わらせている。

一步、踏み出した。

私からすれば小さな一步。

されど、偉大なる竜にとつては、“戦いの号砲”に等しい行い。

口角が上がるのがわかる。

おそらく、私は笑っているのだろう。それが口許にだけ浮かぶ薄い笑みなのか、はた

また満面の笑みなのか、私には判別出来ない。ただ、それが酷く醜いモノだとは理解している。

果てしなくどうでもいい。私の表情など些事に過ぎない。誰にも見られていないのだから問題ない。

ああ、偉大なる竜は、私の『求めるもの』は、雄々しき頭部を天へと掲げ――

『オオオオオオオオオオオツツ――!!!』

開戦を告げる大音声。かの竜は矮小な小人を敵と、あるいは獲物と認め、

「……………あ……………っ」

この時ようやく、私は彼女の存在を思い出したのだ。

「――あ」

比喩ではなく、心臓が止まった。

金槌で叩かれたような衝撃に打ち据えられる。

偉大なる竜の咆哮と、金の少女のか細い声。

奇しくも前後から同時に、まるで“進む道”を自身の手で選ばせるように響いた音色が、私の愚鈍で小さな脳をシェイクする。

そうして、時を止めた私に、

「わたくしは貴方の御心に従います、我が王。その上で些細な戯れ言をお許しくださいませ」

妖精が、するりと声を届けてきた。

悪戯の妖精、パツク。

「アポロン・ファリミア」の一員として過ごした半年間、ずっと一緒にいた不思議なヒトは、慇懃に頭を下げて、こう言った。

「また、見殺しになさるのですか？」



『ぼくたちといっしょに、ここを出よう』

『パパとママの待つ、家に帰ろう』

『あたしたちなら、きっとできるわ!』



「——うああああああっつっ?!?!?  
 感あわせパックッ!!」

喉の奥から引き摺り出したような声だった。

偉大な竜から意識を手放し、忠実なる僕しもべにして親愛なる友人に、呻くように命令する。

そうして、私は。

ずっとずっと、ずっと求めていたモノに、背を向けた。

「かしこまりっ!」 《——》 《——》 「!」

『オオオオオオ、オオオオッ!?!』

パツクが何事かを口ずさんだ直後、インフアント・ドラゴンが戸惑いの叫びを挙げる。彼が具体的に何をしたのかはわからないが、確認する余裕は残されていない。私に出来るのはただ信じることだけだ。

短い手足を懸命に振って、極めて未熟な「敏捷」を全力で稼働させて、金の髪の少女

の元へ辿り着く。

「っ、酷い……！」

直視して、最初の感想がそれだった。

黄金のように輝く髪は所々焼け焦げ、肌という肌に火傷を負い、携えていたのだろうか。湾刀は刀身を粉々に砕かれている。

逆に言えば傷はそれだけであり、だからこそ驚愕する。つまりこの少女は、あの竜と交戦した上で、火災による攻撃以外は凌いでみせたというのか。

下級冒険者にあるまじき技量を持つ、年下の少女剣士。そこまで思考を回して、稲妻のように思い出した。

——得物こそあの時とは違うけれど。私は以前、この少女と共に戦ったことがある……！

「とにかく、安全な場所で、治療しないと……っ」  
だから、こうするしかないのだ。

私は物体を触れずに移動させる術すべを持たないのだから、こうするしかないのだ。

「ひッ——ぎ、あ、ああああ、あああ……！」

彼女の、女の身体に触れて、抱だき抱かかえる。

それだけで、理性が悲鳴を上げるのがわかった。

早く手放せ、手遅れになるぞ、そう、私の中の冷静な部分がかなり立てる。

そんなことはわかってるんだよばか、としか言えない。

けれど、やらなくてはならない。

だって私は、アポロン様の眷属で、ツクヨミ様の盟友で、タケミカツチ様の弟子なのだから、見捨てるなんて許されない。

私は、あの方々に相応しい子供ひととして終わりたい……！

「はあつ、あつ、は、はあつ——！」

走る、走る、走る。

名も知らない少女を姫抱きにしてただ駆ける。

体格が自分に近いのが不幸中の幸いだった。

もう少し大きかったなら、抱き抱えたままこの速度で走るとは出来なかつただろう。

『——オオツ——！！』

竜の咆哮が背中を叩く。

パツクの無事を確認する術はない。

私が出るのは、彼を信頼し、進むことだけだ。

だから耐えろ。

柔らかな肢体に全身を射竦められても足だけは動かさず。  
そうでなければ、私は、たった一つの願いにすら見捨てられてしまう。

『——ギギッ』

『ヒッ、ヒッ、ヒウイッ！』

『ブグウウウッ……！』

「——ああくそっ！　なんで肝心な時だけ【幸運】じゃないんだ……！」  
吐き捨てながら、眼前に広がる状況を精査する。

1-1階層へ続く道、正規ルート上の広間ルームにひしめく怪物達。

手の塞がれた状態では正面突破は不可能であり、回り道をするにも負傷を覚悟しなければならぬ、それほどの数である。

それでも進む。

一秒が惜しい。故に即断。層の薄い部分を貫き通す。

波のように押し寄せる殺意をしっかりと見据え、星の導きを得るための詠唱を口にする、その瞬間だった。



「——いやあああああああああつ!? 落ちてるうううううううつつつ!!!」

「Y A H H A A A A A A A A A A A A A A A A!!!」

全く詩的な表現なのだけれど。

信じられないことに、

少女が、空から降ってきたのだ——!

「なつ、はつ、ふえつ……!?!」

「くおらあツ、 “モルフエウス”! 確かにこれが最速つてのはわかるけど! わかるけども! もう少し! 手心つてものをなさい!

——つて、わあ、なんて「幸運」! まさか真下にいたなんて! すんなり会えてよかったわっ!」

「Y A H H A A A!!」

「お前は少し黙ってなさい」

迷宮の天井を通り抜けて、空から降ってきた少女は、一言で表せば、とんでもない少女だった。

まず前提として、とんでもない美少女だった。おそらくは健康な状態の金の少女に並び、一定の嗜好層相手には上回るだろう容姿である。

腰にまで伸ばされた髪は漆のようで、しかし光の当たり方によつて紫水晶アメジストの輝きを放っているように見えた。

水夫のコスプレというダンジョンを舐め腐つてるとしか思えない格好をしているくせに、跨またがる【馬】はおよそ尋常なものではない。

だって、それは。空から降つてきたというのに完璧な着地を決めた、その【馬】は！  
「青銅の、馬……？」

「ちよつと違うけど、似たようなものよ。って、呑気に雑談してる暇なさそうね!? こは怪物だらけだし、なんかヤバそうなモノもこつちに来てるし、死にかけの女もいるし! とにかくさっさと働かなくちや!

ええそうよネサレテ、恩を返すにはちようどいい場面ね!」

「YAHHA!」

主人の昂たかぶりに応じて、鋼鉄の駿馬いななが嘶いなく。

屈強な男性を思わせる両腕が、変形する。

形成されるのは弩弓だ。

魔導士やサポーターに広く採用されている武装が、右腕と左腕に合わせて二機。

臨戦態勢を整えた従者に、セーラー服のアマゾネスは心底から楽しそうに命令した。

「蹴散らせ、モルフエウス！」

「——YAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」

鉄矢の雨が展開された。

身体が鋼鉄ならば、放つ矢も鋼鉄なのか。

全財産投入オールドベクトと言わんばかりにぶち撒けられる弾丸。狙いもくそもない雑な掃討。大部分の射撃を外し、命中したのはほんの少し。それでも多くのモンスターが全身を穴だらけにして絶命した。

射撃が止まる様子はなく、さながら地面を掘削するように、モンスターの数が減っていく。

——それでも、まだ、モンスターはいる。

氾濫する動揺をそれ以上の激情で押し殺し、まなじり 眦を吊り上げる。自然な動作で近づいて、金の少女を差し出した。



結局のところ、あたしは恩を返しに来たのだ。

「蹴散らせ、モルフエウス！」

そう口にすれば、馬の形状かたちをした友人が殲滅を働いてくれる。

無論、*「彼」*は弓の名手という訳ではないので、狙いは雑だけれど、この階層の怪物相手なら問題ないと判断した。

——それに、あたしの仕事は別にあるらしいし。  
背後から感じる気配。

およそ上層に居てはいけない、規格外の怪物の足止めこそ、わたしがここで果たすべき役割であり、恩返しである。

故に、呪的資源リソースを温存する。

あたしがちゃんと制御したなら、モルフエウスの射撃の精度はかなり上がるだろう。それこそ*「ノイマン」*の手を借りたなら、百発百中にまでなるのだろう。

けれど、今はその時ではない。ここで無駄に消耗して、肝心な時にリソース切れで死ぬのは間抜けもいいところだ。

もちろん、恩はきっちり返させてもらう。

彼にとっては迷子の子供を送り届けたという話に過ぎないのだろうけど。

あたしにとって、それは重大な話なのだから。

だからこそ、あたしは万全に近い状態で、今もこちらに近づいている強大なモノと対峙しなくては――。

「……この子を、お願いします」

「はっ？」

つい受け取ってしまったて、変な声を出してしまった。

初めて会った時と同じように、ずだ袋を被った変な小人族。

そんな彼に渡されたのは、先程まで彼がお姫様抱っこしていた金髪の女――『人形姫』こと「ロキ・ファミリア」のアイズ・ヴァレンシュタインだった。いや少女と言わねばいいのか。公式の情報通りならもうすぐ8歳になるらしいが、なるほど年齢通り幼さに溢れた肢体である。逆に言えば、この綺麗な手が、噂に聞く苛烈な剣技を秘めているのだから、【神の恩恵】の凄まじさを実感する。

見たところ外傷の一部は治癒されているようだが――そういえばさつき回復薬を与えられていた――未だに傷は深く、ちゃんとした治療が必要だと判断できる。

いやいや考えるべきはそういうことではなくて、確かに戦闘はモルフエウスに任せきつてから暇そうに見えたのかもしれないけれど、あたしが持つてるのはちよつと危

ない。モンスターの敵意は完全にわたし達に集まっているのだから、殲滅が終わるまでわたし達の後ろで二人ともども待機していて欲しい、というのが本音だった。

なので、その旨を伝えようとして、

「ちよつ——!?!」

敵陣に突っ込んでいく変な小人族を目撃して、絶句してしまった。

だって、そこは、今もモルフエウスの射撃が降り注いでいる領域なのだ。

そりゃあ敵はこの広間を埋め尽くしているのだから、モルフエウスの射撃も広範囲に散らしているけれど。それはつまり、ろくに狙いをつけていない矢が撒き散らされるってことだ。

そんな状況で前に出てしまえば、前の怪物と後ろの射撃で挟み撃ちの構図になってしまう。何が悲しくて味方の背中を攻撃しなければならぬのか。

何より、

「小人族の戦士にどうこう出来る盤面じゃないでしょう……!?!」

単純に、モンスターの数が多い。

モルフエウスの射撃を雑にしている一番の理由は、雑にしても当たるからだ。狙っても狙わなくても当たるのだから、わざわざ狙ってやる必要もない。

上層最下層、12階層の広間を埋め尽くす程の数である。素直に白兵戦を仕掛けるの

は下策だ。一匹殺す間に八つ裂きにされるだろう。

12階層で探索出来るまともな一党パーティーがこの状況に直面したなら、まず逃走を凶るだろうし、もし戦うにしても、通路まで引き返してから壁役ウォールを立てて、魔導士の砲撃に期待するしか勝ち目はない、それほどの大群。

——そんな「死地」に、よりにちよつて小人族バルウムの戦士が突撃するなんて！

——早く『人形姫』の治療を行いたいのも、どんどん近づいてきてる強大なモノから逃れたいのもわかるけれど、それはあまりにも無謀すぎる！

はたして、呪的資源リソースを温存している余裕はなくなつた。

心中で変わり者の小人族の評価をやや下げながら、馬上より飛び降りる。恩人が致命傷を負う前に連れ戻さなくてはならない。あたしが前線に立つ以上、『友人』の誰かを『起こして』、『人形姫』を預けなければ。

こちらから距離を詰めてしまうのだから、近接戦闘に秀でた友人も『起こす』必要があるだろう。モルフエウスの範囲攻撃は中距離でこそ効果を発揮するのだから。

ともかくまずはモルフエウスに射撃を中止させなければ——そう考えて、発声のため息を吸つた、その時だった。

「《観測開始……私は月を奉ずる者》」

——直截に言つて、見惚れてしまった。

侮つていたのは認めよう。

彼の實力を知る術はなく、得物の性能から『下級冒険者の上位』と推察する程度だった。

小人族の戦士なんて種族不相応な肩書きも、その侮りを増長させていたと思う。けれど。

これは——ズルいと思う。

「……アレが、下級冒険者ですつて?」

小人族の戦士は、健在だった。

数多の爪牙に小さな身体を抉り散らされることもなく、鉄の鏃に射抜かれることもなく。

鉄のような冷徹さで、モンスターを殺していた。

つまり——並みの戦士ならば十度命を落とし、百の傷を負うだろう、爪牙と矢の乱



れ舞う戦場で、無双していた。

恐ろしいのは、それが英雄の所業ではないということだ。

一太刀で百の軍勢を斬り払うような剣はなく、頑強な体躯をもつてあらゆる暴力を弾いているのではない。強いて言うなら才能には恵まれているのだろうか。

背後から飛来する矢を避けて、波のように襲い来る怪物共の爪牙を凌ぎ、一太刀で確實に一匹の怪物を屠る。

それがどれほど困難な物事なのか、どれほどの鍛練による成果なのか、剣を握ったことのないあたしにはわからないけれど。

特別な身体を持つあたしには、わかってしまう。

全ての怪物を十全に殺す剣技。

僅かな機動による紙一重の絶対防御。

それらを成立させているのは、極められた精密動作だ。

人体の為し得る極致のひとつ。血肉の一滴、吐息に至るまで突き詰められた肢体と、完成された技巧の融合。

……女神イシユタルの眷属たるわたしが保証しよう。

方向性は思いつきり、思いつきり違うけれど。

『彼女』の黄金率は、美の女神と同等だ——！



「貴方、名前は？」

と、馬上のアマゾネスは口にしたのだった。

既に怪物共は姿を消しており、早急に今後の方針を固めなければならないタイミング時機である。

そんなことはどうでもよろしい、と言い切ろうとも考えたが、どうにも彼女の様子は岩にも似ていて、答えを得るまでは会話を拒否するように思えた。

「……フリーユーカー。フリーユーカー・グッドフェロー」

「そう。フリーユーカーね。——覚えたわ。貴方のことはしっかり覚えた。じゃあ、お返しするわ」

「はっ?」

ひよい、と金の少女を投げ渡される。重傷者になんて仕打ちをするんだこの少女は。いや、それよりも話を——。

「あれは、あたしがなんとかする」  
耳を疑った。

だって、この子は間違いなくLv. 1だ。問いたたださずとも理解できる。「ステイタス」的には恐らく私より格上、しかし最上級ではない。

モルフエウスと呼ぶゴーレムを足したとしても、敵う相手とは思えない。

何より、あの竜を相手取るのは——!

「元々あれの相手はするつもりだったし……あんなのを見せつけられて、黙ってられるほど大人じゃないの。じゃあ、フリーユガー、またね」

「YAFUUUUUUUU!!!」

「——待て、話を、待って!」

そうして、騎兵は駆けて行った。

どうすることもできなかった。

名も知らない彼女は、散歩するような気軽さで、絶対の死地へと赴いたのだ。

モルフエウスと呼ばれていたゴーレムに追い付ける【敏捷】も、負傷者を負ったまま

戦う技術も、私にはない。

だから、今腕の中にいる子を、あの少女に託そうと、そう思っていたのに。

「……………そこは、逆だろうつ!?! 私があいつに殺されるべきだったのに、それが一番綺麗だったのに……………! どうして私は肝心なところで「幸運」なんだよお……………!?!」

それでも、走る。

託せなかったのなら、やはり、走らなければ。

『求めるもの』から離れても、走らなければ。

だって、私が死んだら——きつと、この子も死んでしまうから。

## 幕間『無銘の墓』

『ヒイアアッ!』

「……っ!」

迫り来る『インプ』の鉤爪を無理矢理回避する。

避け切れずにずだ袋の一部を切断されるけれど、無視。戦闘を放棄して逃げ去る。

アマゾネスの騎兵と別れてから三度目となる遭遇戦。劣悪な【敏捷】と疲労が重なり、単体の敵すら対処が難しくなってきた。

『ギギギッ!』

「はい、前通りますよー」

『——ギギッ!?!』

私の背中を追おうとしたのだろう怪物が、困惑の鳴き声を叫ぶ。

つい先程戻ってきたパックの妨害だ。内容は単純、ただ目の前を通り過ぎて声をかけるだけ。なにやら小さいヤツが空をかつ飛んでるのを見たらビビる、という低燃費かつ悪辣な策は、疲弊が頂点ピークに差し掛かろうとしている私の逃走をこの上なく助けてくれて

いる。

——小竜の咆哮が遠い。

——逆に言えば、まだ響いている。

つまりアマゾネスの少女は健在であり、足止めも成功しているということだ。

余計な思考をする余裕は無い。それは十分理解している。だがそれでも思ってしまった。——羨ましいと。小さな子供を守るために身を投げ出すという素晴らしい役割を、どうして奪ってくれたのかと。酷く理不尽な弾劾を行ってしまう。

「——っ?」

「どうしたんです? お腹でも空きましたか我が王」

「……信じられない。神がいる」

「えっ、マジですか?」

言っている私も困惑し切っているが、妖精眼ゴラムサイトは確かに神特有の神気を捉えている。

迷宮内に神がいることはあり得ない。ギルドに禁止されているのが一つ、一般人並みの身体能力しか持たない人材を潜らせる意味はないし、何より背負うデメリットが大きすぎる。いくら構成員が死んでも主神が健在ならば「ファミリア」は生きるが、主神が死ねば問答無用で終わるのだ。酔狂を通り越して気狂いと思えない。

けれど、この瞳はいつだって正しく世界を観測おししてくれた。だからこの気配も正しい

はずだ。この先の広間ルームには神がいる。

「偶然とは思えない時機タイミングですねえ。どうします、迂回しますか？」

「直進する。あそこには神しくないのだ。私の膂力でも押し通れる可能性は高いつ」  
 そう、神しくないのだ。どうやら護衛の団員の一人もつけずに迷宮を闊歩しているらしい。まるで意味がわからないが、私にとっては好都合だ。こちらは重傷者を抱える身なのだから、下界においては無力な神々など、脅威に思う余裕はない。

相手がタケミカツチ様のような武神だったらか、単身でモンスターをどうにかできる武装を所持していたらとか、そこまで考えられる程、今の私は冷静ではなかった。どたばたと足音を鳴らし、ルームに突入する。

その、瞬間。

轟音。

爆砕。

「——っ!？」

抱えている少女のことを気にする余裕はなかった。

頭の中でけたたましく鳴り響く警鐘に従い、全力で前へと跳躍する。

瞬きの間の浮遊感、背後から生じる凄まじい衝撃、受け身を取ることも出来ず頭から倒れ込んで、ズザザツとルームの地面を荒く削る。土が口に入って少し気持ちが悪い。ルームの出入口を見てみれば、何が起こったかすぐに理解できた。

「崩落……塞がれた、のか」

呆然と、呟いてしまう。

大量の土砂により、あまりにも出来すぎたタイミングで通行不可能となった出入口。間違いなく人為的な、否、神為的な崩落を前にして、顔をしかめる。

「おおぅ……他の出入口も塞がれますよこれ。そんで、たつた今最後のひとつが塞がれてしまったので、この広間は脱出不可能となった訳ですね」

「……なら、こじ開ける」

「それは困る」

ぞつ、と。

背筋が戦慄わなないた。

「このような細工をしたのは、君と対面するためなのだから」

ルームの奥、白霧に隠された一角より、【黒】が出る。

妖精眼はその全てを正しく観測おしえてくれる。

酷く妖艶な顔立ちも、どこまでも退廃的な雰囲気も必要とせず、判断できる。



その、漆黒の外套を纏う男神こそは。

——【死】を司る神なのだ。

「……なんだ、貴方は」

「既にわかっているはずだ。私は死神。君が求めているモノを与えられる者だ」

「——」

告げられた言葉に視界が凍る。

槍のような一言に胸を貫かれる。

あまりにも直接的な神託オラクルに、息が止まる。

「——戸惑う必要はない、迷える子よ」

神が語る。

紫色の唇を薄く歪めて、微笑みを向けてくる。

「私は死神であり、お前の前に現れるのは必然。これはそれだけの邂逅なのだから」

「……私は、貴方を知らない」

「私もお前の仔細は知らないとも。判るのはひとつだけだ。お前は死にたいのだろう」

「？」

「——な」

驚愕が止まらない。

誰にも明かしていないのに。

アポロン様はもちろん、タケミカヅチ様にも、ツクヨミ様にさえ隠し通したモノを、眼前の見知らぬ神に暴かれる。

これ以上この神の言葉を聞いてはならないと感じた。

だが、それを、私の身体は許さなかつた。

聞かなければならない、と。

フリーユガー・グッドフェローは、この場面から逃げてはならないのだと、そう理解してしまった。

「——死にたいと願っている」

神が語る。

「——終わりを望んでいる」

それは、私の心そのもので。

「——けれど、お前の過去は終わりを許さない」  
ズキリと。

全身が、軋んだ。

「……嫌だ。いや、やめて……」

「過去の亡霊に囚われている……掻き毟りたいほどの衝動を、後悔の鎖が縛り付けて

いる……お前の心は安息を忘れ、ただ磨耗していく……ただ独り、誰からも救われず、さ迷っている」

「やめて、やめてえっ……!?!」

「——私が、全ての苦しみから解放してやろうか?」

深淵を彷彿とさせる紫の瞳と、目が合った。

「【死】を司る神として、お前に救いを与えよう。——私の眷属になれ、さ迷う者。我が手足となり、我が神意に身を委ねよ。さすれば世界は景色を変え、お前は永久の安らぎを得るだろう」

そうして。

死神は、致命的な一撃を放った。

「約束しよう。使命を全うしたなら——お前を縛り付けるモノ。過去に死した者との再会を果たさせよう」

「——あ」

それは。

それは。

それは……。

## ☆☆☆

かつて、ひとつの【冒険】があった。

それが何時いつだったのか、何人によるものだったのかはわからない。その記憶は既に奪われている。

誰が居て、どんな言葉を語り、どう終わったのかも、判然としない。その光景は既に失われている。

けれど、戦いがあった。彼等は戦ったのだ。

自分達を親元から引き剥がしたモノから解き放たれ、故郷へと帰るために。

か弱い子供の身体で、無い知恵を絞って、その小さな胸に、勇気の火を灯して。

いつ死ぬかもわからない暗闇に、希望の光を見出だしたのだ。  
なんて尊いのだろう。

彼等は立ち上がったのだ。

手を取り合い、仲間となつて、絶望に立ち向かつたのだ。

全ての神々が祝福するような旅路に違いない。

天上の星々に見守られ、あまね遍く精霊に付き添われていたのだろうと思う。

過去のあらゆる偉業、栄光、偉烈に並ぶ出来事だったと、信じて疑わない。

そんな、誰にも語られることのない英雄譚が、確かに在った。

……私は、そこにいなかった。

勇気を持てなかつたから。

希望なんてないと思つていたから。

私は、立ち上がれなかつた。

彼等の手をはね除けて、目を背けた。

そして。

彼等は死んで、私は生き残つた。

何度も、何度も、繰り返し考えた。

何故、運命は勇氣ある彼等から命を奪い、勇氣を持たない私を生還させたのだと。

何故、【冒険】に臨んだ彼等に与えられたのが『死』で、【幸運】なだけの私に『生』が与えられたのかと。

——何故、私は彼等と共に死ななかつたのだと。

死にたかつた。

彼等と死にたかつた。

【冒険】があつたのだ。

輝ける旅路があつたのだ。

たとえその末路が死であつたとしても、尊いモノがあつたのに。

私は、死ねなかつたのだ。

……ああ、そうだ。そうだとも。

だから、死ねないのだ。

【幸運】なだけで生き残ってしまったのだから、生を望んで【冒険】をした彼等のために、生きなければならぬ。勝手に死ぬなんて許されない。死にたいから死ぬなんて、許されない。

知恵を絞って、勇気を奮って、立ち上がって、絶望に立ち向かわなければならぬ。

——私は、私の全能力を用いて、生存しなければならぬ。

……だから、もしも私が死ねるとしたら。

それは、私の全能力を用いても、どうにもならない終わりと出会うだけなのだ。

死力を尽くして、何から何までやり尽くして、それでも避けられない終わり。

【幸運】な私が死ねるような、【運命】によつて定められた【死】こそ、私の求めるモノ。求める終わり。

救いはなく、許しもなく、ただ終わるその時だけを願つて、ひたすらに怪物を屠る、そのために、迷宮都市オラリオまで来たのだ。

……その過程で、少しでも社の人々の暮らしが良くなるのなら、嬉しいと、そうも思つたけれど。前提は覆らない。

私は、ダンジョンに終わりを求めた。

醜い自己満足だと自覚している。

私が生きようと死のうと彼等の結末は変わらないのに、私は独りで勝手に苦しんでいるのだ。

彼等からすればいい迷惑だろうと思う。死後の安寧を乱してしまつて申し訳ないと、

心からそう思う。

けれど、そんな私が……もしも、【終わり】ではなく、【許し】を得ることが出来る  
としたら。

それは、もはや何時だったかも分からないあの時に戻り、彼等の手を取って、共に【冒  
険】に臨み、そして死ぬこと、だけ。

そして、それは不可能だ。

彼等の【冒険】は過去に終わり、私はここにいる。

だから、そんなこと、考えもしなかった。

しなかった、のに。

『過去に死した者との、再会を果たさせよう』

死神ならば。

神様ならば。

この、あり得ない仮定も、実現出来てしまうのではないかと、そう思ってしまった。  
万能たる神アルカナムの力を用い、時間を巻き戻して、もう一度、あの瞬間を。



あの『選択』を、やり直させてくれるのではないかと、想い至ってしまった。全てを捨てていいと思えた。

あの瞬間、あの選択を得られるのなら、今までの全てを投げ捨てたって構わないと思った。

社の人々だって、アポロン様の眷属だって、斬り捨てられるだろうと、そう感じた。死神の神意に身を委ねて、完全なる殺戮機構に堕ち果てるだろうと、それでもいいと思った。

だって、フリーユーカー・グッドフェローにはそれしかないから。彼がそう望んだなら、喜んでそうするのだろう。

だから、私の答えは決まっていた。

☆☆☆

「さあ、私の手を……」

死神が手招いてくる。

安寧の道へと。

楽に終われる道を示してくれている。

伸ばされた手は、天啓にも似ていて。

それを取ろうとする私を、私は否定しない。

「断る」

はつきりと、告げる。

はね除ける手を二度と間違えはしない。

死神の甘言を彼方へと吹き飛ばし、湾刀を握り締める。

瞠目する男神に向けて、言い放った。

「確かに私は死にたい。何もかも失って、ただ後悔だけを抱いた私は、死ぬまでもがき苦しむのだろうと確信している。死ぬその時まで永遠に安らぎを得ることはないのだからとも。」

けれど——何もかも失った私は、何もかもを与えられたんだ」

——それだけは、忘れてはいけない。

顔を失い、

軀を失い、

親を失い、

故郷すら失ったけれど。

からっぽになつた小さなこの軀からだに、たくさんのモノを詰め込んでくれた人達を、私は

決して忘れない。

フリーユーカー全・グッドフエロー失つた少年が、がむしやらに終わりを望んだとしても、

フリーユーカー全・グッドフエロー少女が、その『甘え』を斬り捨てる。

死にたいという願ひは変わらないけれど。

それは、我が奉ずる神様に相応しい終わりでなければならぬ。

「私の剣は武神タケミカツチに授けられたもの。星を読む術は月女神ツクヨミに授けられたもの。神の恩恵は光明神アポロンに授けられたもの。貴方のために振るうものは何一つとしてない。

——何より。私の自己満足に他人を巻き込んでしまえば、彼等の偉業を汚してしま

その様を、男神はどう受け取ったのだろう。

少なくとも彼は嘲りも笑いもせず、黙って私の叫びを聞いてくれた。

微動だにせず、静かに。

「……いいのかい？ 本当に、オレの手を取らないで。君、泣いてるのに」

「泣いてなんかない」

「膝も、がくがく震えてるよ」

「震えてない」

「ほら、あと五歩くらい近づいてくれれば、それで」

「——」 独りになっても、あの人達を裏切ることだけは、したくない」

そっかあ、と男神は呟いた。妖艶な雰囲気は既になく、されど軽薄な笑みもなく。

「噂の『人形姫』ちゃんをおまけ扱いしちゃうくらいには、君を気に入ってたんだ。死

者に会いたいって子を……魂の歪んでる子を数えきれないくらいスカウトしてきたけ

ど、君は格別だったからさあ。死を司る神としても、安寧を与えてあげたかった。

——わりと本気な勧誘だったんだけどなあ。いや全く残念。思ってたより、君は強

かった」

一歩、前に進む。

独白のように言葉を連ねる男神を見据えて、更に一歩。

今の今まで地面に投げ出してしまっていた少女を回収して、塞がれた出入口をこじ開けて、場当たりの治療を行い、地上へと帰還するために。

「……オレの眷属になったら、その子もちやんと治療してあげるよ？」

「うるさい」

「だよねえ」

——じゃあ、こうしよう。

間違いなく、彼はそう口にした。

そして、理解する。

これから行われる行為は、致命的なモノであると。

「っ、死神——！」

「つまりは問答無用で死ねればいいんだろ？ 死神として、死の安寧を求める者に、

死を与えよう」

小人族の矮躯をもって、眼前の男神を取り押さえようと、身を屈めた瞬間。

抑え込まれていた『神威』が、解放された。



「ああ——これなら、大丈夫そうだね」

迷宮の天井に亀裂が生まれる。

雨のように破片を飛ばし、ダンジョンに召喚される『それ』を見て、死神タナトスは満足そうに頷いた。

漆黒の竜。中層に出現する竜種『ワイヴァーン』の強化種。

一対の翼をもつて空を泳ぐ、偉大なる怪物。

下級冒険者では万に一つの勝ち筋も見いだせない、漆黒の終焉。

「……あれには、勝てないな」

ぼつりと、小人族は呟いた。

『求めるモノ』を与えられたにも関わらず、ひどく静かな言葉だった。  
なぜなら、そう。

「けれど……私が死ねば、この子も死ぬな……」

足下に横たわる少女を、そっと抱える。

未だ傷の深い金髪の剣士。このままでは死ぬのだろう。だがそれは私の次だ、とフリユーガーは分かり切った結論を口にする。

「この子を、隠してくれ。そして、可能なら、ここから出せ。頼む」

「貴方はどうするんです、我が王」

「……私は、戦わなきゃ」

少女を広間の隅に横たわらせ、妖精の隠蔽を施したのと同時に、漆黒の竜が完全に産み落とされる。

今も瞳から流れ落ちる涙を乱暴に拭い、頭上の翼竜を睥睨する。

迎え撃つのは灼眼。燃えるような竜の瞳が、眼下の敵を見据える。あまりにも小さな剣士を、敵と認める。

銀と赤の視線が交わり——そして。

『オオオオオオオオオオオオツツツ!!』

口腔より放たれし竜の息吹が、炎の濁流が、広間を焼き尽くした。

## 幕間『英雄宿命／ソード・オラトリア』

漆黒の竜が、燃え盛る火炎を解き放つ。

竜の口腔こうくわうより迸る真紅ドラゴン・ブレスの殺意。

周囲一帯を焼き払う範囲A攻撃Bに対し、占星術師は一振りのナイフを構え、口を開いた。

「《私は太陽を奉ずる者》——」

詠唱と共に、魔力を観測する瞳、妖精眼グラムサイトがその色彩を変調させる。月を彷彿とさせる

白銀が、太陽の輝きを放つ。

『月』を根幹とする魔眼変調が敵対者に一撃必殺クリティカルをもたらすモノならば、『太陽』を根幹とするこちらは炎熱への対処に優位を得る代物である。

さらに、占星術師は構えていたナイフを宙空へと投げ、指先を複雑な手順で動かした。虚空に魔法円を描き、占星術を行使する。

「——《導きたまえ》！」

はたしてそれはいかなる術理か。

確かに投じられ、後は落ちるだけなはずのナイフが、宙空にてピタリと停止する。ついで方位磁針のように回転したかと思えば、ある方角へと切っ先を向けた。



これこそが占術による《導き》であり、《導き》を得たナイフはより良い未来を指し示すべく宙を駆け抜け、広間の一点へと突き刺さる。

その地点へと占星術師が滑り込んだ——直後。

『——ツツツ!!』

火炎の濁流が、広間全域を焼き払う。

とめどなく噴き出す竜の息吹。灼熱の殺意が迷宮の地面を爆砕し、土砂を巻き上げる。

立ち込めていた霧は全て吹き飛ばされ、枯れ木も草原も等しく焼き滅ぼされ、全焼した大樹が轟音を伴って倒壊する。

深い霧に閉ざされていた白色の世界は、ほんの数秒、たった一匹のモンスターの手で、真紅の世界へと模様替えされた。

火の海と化した広間<sup>ルーム</sup>に、以前の光景を思わせるものは残されていない。

『——オオツ……?』

絶大な破壊をもたらした漆黒の翼<sup>ワイヴァーン</sup> 竜は、そこで怪訝な感情を、首を巡らせる仕草の中で表した。

視界の晴れた赤色の平原から、彼の『標的』が消失<sup>ロスト</sup>していたからだ。

神の神威に応じるように——神を葬るためにダンジョンより遣わされた『抹殺の使

徒』たる翼竜にとって、神の抹殺は存在意義に等しい。先程の火炎流によって焼死させた手応えはなく、故にこの広間内ルームにいるはずなのだが――。

しかし、いない。

神威を放ち、彼を召喚せしめた神タナトスは既に迷宮から脱出しており、彼の手の及ぶ範囲からは外れてしまっているのだ。

そして、『動揺』という名の隙を占星術師は見逃さない。

【一意専心スキル】をもって照準するのは竜の灼眼。装填されるのは魔術師の凶刃。

最優先対象の消失ロストに戸惑うワイヴァーンの眼球目掛け投じられる、『導き』を纏う凶弾

『――ツツツ!!?! オオオオオオツ?!』

一瞬にして潰された右側の視界。焼けるような痛みと部位の欠損という不快極まりない出来事に耐えかねた翼竜が叫喚を放つ。

墜落することなく滞空ホバリング駆動を維持できたのは『彼』の技量によるものではなく、このまま墜落すれば命はないぞと本能が告げていたからだ。

残された灼眼で焦土と化した地上を見下ろせば、なるほど確かに中央の辺りに『それはいた。』

頭から袋を被り、所々を草と土で汚した、矮躯の冒険者。

なるほどその位置は死角であり、不意打ちするには適した地点である。

けれど、それは有り得ないのだ。

だって、その冒険者は、先程火炎流をもって焼き払ったのだから。

『ウウウツ……』

確かに、直撃したはずだった。

冒険者が飛び込んだ位置は念入りに焼き払ったのだから、生きているはずはない。

しかし現実として冒険者は焼死しておらず、竜の瞳は奪われている。

彼は優先順位を改めた。

消失した神の追跡をひとまず保留とし、眼下の『脅威』を更に念入りに排除すること

を決定する。

そして、

『オオオオオオオオツツツ!!』

雄叫びと共に、冒険者の頭上より滑空攻撃を仕掛けた。

(……よし)

その姿を認めて、フリーユーカーは目論見が達成されたことを悟った。

使用限界に達したナイフを鞘に納め、魔術の連続行使によって生じた頭痛に顔をしかめる。

予め三本用意していた『占星術師のナイフ』は、既にその残数を一つまで減らしていた。

火炎流の回避に一本、竜の眼球を射抜くためにもう一本。開戦早々にも関わらず惜しみもなく振る舞われたそれらは、字面以上の成果をフリーユースにもたらしている。

(これで、連続で火炎流を放たれる懸念は消えた……)

フリーユースが危惧していた最悪の展開は『ひたすら火炎流を連打される』こと。

こちらの攻撃が届かない上空から、回避に『占星術師のナイフ』一本を必要とする火炎流を淡々と放たれ続けたなら、フリーユースはそう遠くない未来焼死体と成り果てていただろう。

だが、ワイヴァーンの次なる一手は『滑空攻撃』。

謎の手段で火炎流を凌いだ獲物に対し、火炎流は有効打になり得ないと『誤認』した怪物が、近接戦闘を仕掛けてくる。

偉大なる怪物と小さな冒険者の『駆け引き』は、冒険者に軍配が上がった。

『オオオオオオオオ——!!!』

火炎流を封じてなお鬼門は続く。

ワイヴァーンは翼竜なれば、その真骨頂は一对の大翼による飛翔から繰り出される突撃である。

まともに食らえば即死するのは火炎流と同じ。異なるのは防御不可能か可能かという一点のみ。

その防御でさえ、体力の消耗と共に困難になっていく。

故に、狙うのは翼。

一刻も早く飛翔能力を削り、地上戦に持ち込まなければ、フリーユーに勝機はない。

浅く息を吐き出し、武器を構える。

握るのは無銘の湾刀。どこかの誰かが作ったらしい業物。

精神を研ぎ澄ませ、「一意専心」の引き金を引いた。



漆黒の竜の前に、一步も引くことなく相対する冒険者の背中を、彼女は見ていた。

その金色の瞳に滲むような期待を浮かばせて、じつと。破碎された己の武器を抜くこともなく、ただ、眺めていた。



その『ズレ』が生じたのは、ある一幕からだった。

『うわあああああああああああああああ!?!』

第7階層の奥より響く複数の悲鳴。轟く叫喚。

それに応じるようにアイズは駆け出し、すぐさま6階層へと続く連絡路前へとたどり着いた。

『《キラアアント》の大群！ 仕留め損なつた冒険者が「怪物進呈」でもしたか！』  
 アイズの付き添いとして同行していたガレス・ランドロックが事のあらましを察する  
 最中——アイズは冷静に状況分析を行う。

『正史』のように一も二もなく突撃し、最強の「復讐姫」をもつて蹂躪を働かなかつたのは、モンスターの駆逐よりも優先したい事柄があつたからだつた。

『増援、また来ます！ 右の通路、数は……9体っ！』

『だああツくつそ、演奏する暇もないぞこん畜生！ 坊っちゃんの後退、左の方に行つて！』

『はいっ！』

正面の連絡路を塞ぐ軍勢に加え、左右の通路からも次々と雪崩れ込んでくるキラアアントを迎え撃つ、異なる徽章をつけた複数の一党。

その中でも特に目立つ、只人の男性がいた。

どこか吟遊詩人を思わせる布鎧を纏い、紅炎の輝きを放つ波状剣を振り回すその男性の動きは他の冒険者と隔絶しており、上級冒険者であることは明らかである。

しかし、アイズの関心を攫つたのは、その男性ではなく——彼の陰に潜むような立ち回りで怪物を殺していく、小さな剣士だつた。

『フリーユークん、フォロー頼む！』

『はい』

頭目らしき波状剣フランベルジュの男性の指示を受け、正面のキラーアントを屠っていた剣士が急場へと直行する。

敵影が減少しつつある左側と違い、今も怒濤の勢いでモンスターが押し寄せている右側の戦場。9体もの追加が入ることに『多すぎるだろッ!?!』と悲鳴を上げる冒険者達を通り過ぎ、更に前へ。

迫り来るキラーアントの群れに、真つ向から立ち向かう。

『アイズ、お主は右へ行け。儂は正面を叩く!』

『……うん』

ガレスの指示に従い、怪物を駆逐するべく、アイズは疾走した。

『ガレス……』

『む、どうしたアイズ』

迷宮からの帰り道、アイズはガレスに質問を投げ掛けていた。

やれ特注品オーダーメイドが欲しい10階層に行きたいなどという要求こそ活発だが、純粋な疑問を呈するのは珍しく、ガレスは目を丸くしてしまう。



少女が語ったのは、先の戦場で共に戦った、名も知らない剣士の不思議だった。

『わたしより、遅いのに……わたしより、たくさん倒してた』

『そういう立ち回りをしとったからの、あの剣士は』

『立ち回り？』

『おうとも』

こてん、と可愛らしく首を傾げるアイズを見て、歴戦の戦士であるガレスは鮫のように笑った。

アイズの側で見事な立ち振る舞いを披露した戦士の姿は、彼の目にも留まっていたのだ。

『湾刀の技量も大したものじゃが、目を見張るのは立ち回りよ。敵意管理ヘイトの概念と、モンスターモンスターの行動を知り尽くした者の動き方をあやつはしておった。聞くがなアイズ、先の戦い、やけに戦いやすくなかったかの？』

『……』

その言葉を聞いて、アイズは思い出してみる。

【復讐姫スベキル】スベキルによって冷静さを欠いており、あの場では気づけなかったが……戦いやすかった、ような気がする。

いいや、確かに戦いやすかった。

背後からの強襲も横槍も発生せず、常に一对一の戦場を与えられ、モンスターの方から寄ってくるので大きく移動する必要もなかった。

それを、自らもキラーアントを間断なく屠りながら行うのが、どれだけ困難なことなのか、アイズにはよくわからない。

『……立ち回り』

『うむ。立ち回りじゃ』

けれど、凄いことなのだろうとは思った。

『体格が伴えば一級の壁役にもなれるじやろうな』と呵々大笑するガレスの顔を見れば、容易に察せられた。

次の『ズレ』は、酒場の一幕。

『——それじゃあ、フィン達の活躍を労ねぎらって、乾杯！』

悪戯の神の音頭に合わせて、神の眷属が杯を掲げる。

都市最大派閥として闇派閥の対応に骨を折る団員達を労うべく——という名目で

——開かれた宴会の席に、アイズの姿はあった。

探索帰りということもあって、こんなことをしてる暇はない戦わなきや症候群の勢いもそう強くはなく、しかし宴を楽しむ気分にもなれないので、派閥パーティ団長の側で搾りたての果汁ジュースを黙って飲む。

ドワーフの店主と絡んで常には見せない表情を浮かべる首脳陣、わいわいと騒ぐ同派閥の先達、楽しみにジョッキを傾ける他の客。そんな温かな光景に胸の痛むような懐かしさを感じていたとき——彼等はやって来たのだ。

『アイズちゃん！ たまには団長達じゃなくて俺達とも話そうぜ！』

『いけー、ケビン！』

『……!?!』

ロキ・ファミリアの下位団員達だ。酒精によつて朱の差した笑顔を振りかざし、普段交流する機会に恵まれないアイズへと突貫を仕掛けたのだ。

都市最強派閥の名に違わぬ連携で瞬く間にアイズを取り囲んだ彼等は、ぎよつとするアイズに言葉を投げ掛ける。

『アイズたん、じゃなくてアイズちゃん！ お姉さん達の美味しい魔法の飲み物、飲んでみない？』

『この不思議な飲み物を飲むと強くなれるんだぜ！』

そのような言葉と共に差し出された『飲み物』は、魔法の飲み物ではなく、ただの果実酒だった。まあ気は強くなるだろう。もしかしたら「耐久」も若干上がるかもしれない。誤差の範囲内だろうが。

飲んだくれによる、理論もへつたくれもない酒の勢いに任せた『説得』。まともな人物相手なら通用するはずはないが、しかし。

——強くなれる？

アイズの琴線を震わせる言葉ワードに加え、元々世間知らずだったことも合わさり、なんと成功してしまった。金色の瞳を爛々と光らせ、グラスを受けとってしまう。にんまりと笑う団員達。

一連の流れにフィンが苦笑し、ガレスが面白そうに髭を撫でたところで、二人はある違和感を抱いた。緑髪リヴェリアエルフはどこへ行った？

『……あつ』

アイズが果実酒に口をつける寸前。

少女の身体は、硬直した。

さあ今から飲みますよとグラスを傾ける姿勢のまま彫像と化すアイズに、他の団員達が怪訝な顔をしていると——

『お前達』

彼等の背後。

アイズの視線の先に、鬼神が顕現していた。

『年端もいかない子供に、故意に酒精を与えようとは……そうとう教育されたいようだな』

『『——スイマセンデシタ』』

一糸乱れぬ動きで床に這いつくばる下位団員達。

平伏する彼等に、リヴェリアは不機嫌な顔のまま言葉を連ねる。

『宴会で羽目を外すのは勝手だが、最低限のマナーは守れ。全く……』

それは、『正史』とは異なる対応だった。

本来ならばフィンとガレスに妨害されて阻止できなかったアイズの飲酒を、このリヴェリアは防いだのだ。

『昨今は神も酒で身を崩し、治療院の世話にかかっているという。このような時勢故、飲酒そのものを禁止しようとは思わないが……十にも満たない子供に飲ませるのはいいだけ』

それは彼女が知己の治療師から聞いた話だった。

とある男神が過剰な飲酒と過労によって治療院にかかったという、それだけの話なのだが、酒飲みの主神を抱えるリヴェリアには他人事とは思えず、結果としてやや神経質

になっていたのだ。

そもそも特に何もなかった『正史』でも未成年の飲酒行為を止めようとはしていたので、ちよつとでも背中を押されればこうなる、というだけの話だった。

『これは没収させてもらう』

『は、はい……』

『くそつ、酔いどれアイズちゃんを拝めると思ったのに……！』

鬼神の去った後。

アイズは項垂れる下位団員達に囲まれて神妙な顔をしていた。リヴェリアは酒を没収しただけで下位団員をアイズからひっぺがそうとはしなかったのだ。どうやら先程下位団員の一人が発言した内容にリヴェリアも賛同しているらしかった。

アイズはどうすればいいかわからなかった。モンスターを始末する方法は学んできたが、同僚とお喋りする方法はさっぱりである。何を話せばいいかわからない。

もういつそ逃げ出してしまおうか。そこまで考えたアイズに、待ったをかける人物がいた。

『……まあ別に。酒がなくてもお話は出来るからな、なんの問題もないだろうたぶん。というわけでお話しようアイズたん、じゃなくてアイズちゃん』

先程真つ先に話しかけてきた男性、ケビンである。

彼に続くように、他の項垂れていた下位団員も顔を上げる。

『……すみません、その。……何を、話せば』

『知ってた』

『ふふ我等の調査ぢからを侮ってもらっては困るぞアイズたん。君が迷宮探索にか興味のない戦闘大好きガールということはこの場の全員が知っている……』

『そんなアイズちゃんと楽しくお話するための策は用意済みよ！』

口々に言い募る下位団員達は、一通り発言した上で、一人の男を見る。

同僚からの合図を受けた男、ケビンは、ニヤリと笑ってこう言った。

『ここには槍使いと双剣使いと湾刀使いと盾使いと、エトセトラエトセトラな上級冒険者が揃っている訳だが……どいつの話から聞きたい？』

都市最強派閥における『下位団員』——Lv. 2以上の先達に囲まれるアイズは、その瞳を見開いた。

——そして、決定的な『ズレ』が起こる。

『アイズ、これは誰しもが通る道だ。深刻に受け止めるな』

『【アビリティイ】は極めるにつれ、成長速度も落ちていく。決して君の伸び代がなくなつたわけじゃない』

『そうやなあ。【ステイタス】つちゆうもんはそういうもんや』

リヴェリアが、フィンが、ロキが口にする言葉を、アイズは黙って聞いていた。

【ステイタス】の諸数値が限界間近となり、成長速度の衰え始めた時期。

リヴェリア達と言葉を交わし、執務室から出たアイズは、感情のままに渡された更新用紙を握り締める。

幼い相貌に浮かぶのは身を焦がすような不安だ。衰えた成長速度に、明かされない【リンクアップ】の手段に、自分はもう前に進めないのではないかと恐怖してしまう。

張り詰めた表情でダンジョンに向かおうとするアイズは、本拠地ホトの門をくぐろうとした時、見覚えのある顔を見かけた。

『あら、一人でダンジョンに行くの？ あんまり無茶しちや駄目よ、アイズちゃん』  
以前、宴会で知り合った女性。

本日の門番を務める彼女の腰には、薄く歪曲する長剣が備わっていた。



『……だったら、武器を変えてみない？ アイズちゃんってば短剣一筋だから、この機会に別のも触ってみましょうよ。それに、不慣れなことをすると「ステイタス」も上がりやすいわ』

湾刀使いの女性は真摯にアイズの不安に付き合った。

少女の言葉足らずな説明をしつかりと聞き、策を提示し、門番の代わりを見繕い、暇そうな同僚を片っ端から連行して、「ファミリア」の予備武器部屋へとアイズを連れていったのだ。

買ったのはいいが使う機会に恵まれなかった代物や、引退した先達の武具が所狭しと押し込められた一室。

女剣士が手に取った武具をアイズが軽く振るい、その武具を専門とする団員が筋の善し悪しを判断する。

やれこれはいいい、やれこれはよくない、やれお前の性癖を押し付けるな、などと喧騒が広がり、かつての宴会の席で自分の武器<sup>ダイマ</sup>を宣伝した者達が集い、遂には派閥団長まで加わった美少女戦士の武器選びは、巡りめぐって初心にかえってきたところで落ち着いた。

『……これがいいです』

アイズが手に取ったのは——湾刀だった。

槌や槍よりも剣の形をしている武器の方が馴染みやすく、その中でも軽いものに惹かれた。

そして、かつて僅かな時間『共闘』した剣士の姿が脳裏を駆け回り、この武器を選ばせたのだ。

『う、うーん。使ってる私が言うのもなんだけど、これって結構扱いにくいのよね。斬るのにコツがいるし、受け流すのも難しいし、あとはそう、とつても脆いの。初心者さんにはちよつとおすすめ出来ないかなあ?』

『やっぱり大剣だろ。ソロならともかく、隊伍組んでいいんなら初心者向け極まってるし……何より、美少女がゴツツイ剣担いでると俺が嬉しい』

『ふんつ、黙れ筋肉<sup>マ</sup>チ<sup>チ</sup>主義者<sup>スモ</sup>。麗しい乙女に相応しいのは長弓であると何度言えばわかるのだ』

『いや弓つてくそムズいじゃん。というか武器つてどれもこれも難しいし、使わないでよくない? やっぱり女なら拳が一番でしょ? 一緒にモンスターを殴り倒そうよ、アイズちゃん!』

『『『申し訳ないがアマゾネス理論はNG』』』

『なんでエー!!!?』

セルフ漫才を披露する団員達に目を丸くするアイズに、苦笑するフィンが口を開く。

『……やっぱり槍、使ってみない？』

『え、と』

『冗談だよ。アイズが自分で選んだんだ。僕らはそれを応援するだけさ。しばらくの間、カガリと一党<sup>パーティ</sup>を組んで、教えてもらうといい』

『えっアイズちゃんとダンジョンしていいんですか？ やったー！ 頑張つて教える

わね、アイズちゃん！』

こうして——アイズは《<sup>ソード・エール</sup>剣の祝杯》をしばし封印し。

先達の残した湾刀を、握ることとなった。



(——あつい)

ぼんやりとした思考の中で、一人思う。

辛うじて火の海と化していない、広間ルームの隅に寝かされている彼女だが、燃え盛る炎の熱は伝わってきている。まるで悪魔の釜に入れられたかのよう。

(——……あつい)

ならば。

背中から生じる凄まじい熱は、まさしく竜の炎を直に受け止めているのだろうと、アイズは思った。

(——怪物は、殺す)

それは両親を奪還するための『道標』であり、過去に打ち立てた『誓い』である。凄絶な過去によって歪められたアイズの根幹である。

故にアイズは怪物を殺す。それは考えるまでもなく当たり前のことで、アイズがアイズである限り、決して曲げられない代物だ。

けれど、しかし、それでも、

（——怪物は、殺さなきゃいけない、のに。……痛い。苦しい。暑い。……怖い）

アイズは己を支えていたものが砕けかけていることを自覚する。

痛いのは怪我をしているからで、苦しいのはいつものことで、暑いのは気温が上がっているだけ。けれど、最後の感情だけは、抱いてはならなかった。

アイズがアイズであるならば、今すぐに立ち上がって憎き竜を殺さなければならないのに、怖い。

そんな感情はどうに捨てたはずなのに、怖い。

竜に負けないための方

『復讐姫』を背負うアイズが竜に負けていいはずがないのに——怖いのだ。

（——負けた。負けた。負けた。『竜』に敗北した。絶対に負けちゃいけないのに、二度と負けないと誓ったのに、わたしは）

スレイヤー系の「スキル」保有者には、共通する事柄がある。

特定の種族と相対した際、絶大な恩恵を發揮する彼等は、総じて『その種族を相手取ること』に特別な感情を持つ『傾向』があるのだ。

その種族の怪物には二度と負けないという強烈な自信、自負。あるいは二度と負けないという恐怖トラウマ。そういった経験値エクセリアを基盤として汲み上げられる「スキル」系統であるからして、それは必然である。

そしてアイズの場合は、後者だった。

(——負けた)

竜には二度と負けないなんて自信も自負もあるはずがない。歴史上最強と称されるスレイヤー系スキル【復讐<sup>アウエンジャ</sup>姫】の根幹にあるのは竜種に対する底無しの恐怖だ。少女から全てを奪い去った漆黒の終焉にアイズは恐怖して恐怖して恐怖して、それでも打ち勝たなければならなかったから、その【復讐<sup>スキル</sup>姫】は発現した。

もう二度と負けないように、二度と大切なものを奪われないようにという『願い』。

——それを根幹とするスキルを所有するアイズが、それでもなお竜種に敗北したなら。

(——怖い……怖いよ……)

人形の仮面はとうに剥ぎ取られ、アイズは弱い少女のままに恐怖に震える。再来した心的外傷<sup>トラウマ</sup>に怖気が止まらない。

ゆっくりと時間をかけて静養すれば立ち直れる程度の精神異常<sup>デバフ</sup>によって、アイズは戦闘不能と化した。

『——オオオオオオオオオツツ!!』

一際大きく、竜が叫んだ。

アイズにはそれが何か理解できた。

それは、勝鬨だった。

漆黒の翼竜、強化種のワイヴァーンは、冒険者に打ち勝ったのだ。

『彼』は満身創痍だった。

傷の数だけを見れば、大したことはないのだろう。だが断ち切られたほんの数ヶ所には、いずれも一歩間違えれば致命となっただろう深い傷が残されている。

瞳を奪われ、翼を千切れる寸前まで痛め付けられ、今も首元から大量の血液を溢す翼竜。

その眼前に、冒険者はいた。

「はっ……あっ……」

こちらもまた、満身創痍だった。

複数の致命傷一歩手前の傷を負う竜とは違い、冒険者には致命の傷はない。服の所々を焦がし、頭から被るずだ袋がぼろぼろとなつている程度である。そして、それらは地を転がるように行われた回避運動の結果であつて、やはり竜の手で刻まれた傷はない。

それでも、冒険者は敗北した。

単純な体力差によって、無傷でありながら、湾刀を振るう冒険者は膝をついた。

全ての攻撃を弾き、避け、何度も致命の一撃を叩き込んでなお、偉大なる怪物を屠る

には足りなかったのだ。

アイズはその戦いの全てを見ていた。

見ていた上で、立ち上がることなく、地に伏せていた。

その理由は極大の恐怖に抗う術を持たなかったのと、もうひとつ。

（——ああ。わたし、期待してたんだ）

もしかしたら、と。

母親リのような森人アに酷い言葉を叩きつけて、無謀な探索を決行して、小竜の強化種というイレギュラーと遭遇して。

既に一匹のインフアント・ドラゴンを倒しきっていた湾刀が、限界を迎えて砕け散った瞬間を狙われ、火球を当てられて。

竜に負けた瞬間に——その人は、現れたから。

「わたしの……えいゆう……」

アイズは諦め切れなかったのだ。

自分の前に現れることはないのだと悟り、自ら剣を執った今でも、どうしても。

『わたしだけの英雄』と出会える奇跡を、どうしても捨てられなかった。

だから手を貸さなかった。

もしかしたらそうなのかもしれない、と。根拠のない望みを投げ掛けて、名前も知ら



ない湾刀使いと共に戦おうとしなかった。

「……ごめん、なさい」

アイズはどうしようもなく惨めな気分になった。

自分が勝手に期待したせいで、自分を守るために戦ってくれた人は死ぬのだと思うと、胸がひび割れそうだった。

何より、何も為せないまま死んでいく己が、許せなくて、悲しくて、虚むなしかった。竜が前進する。

冒険者には欠片ほどの力も残されていなかった。

英雄のごとく戦った戦士に対し、偉大なる怪物は引導を渡すように厳かに歩み寄った。それはモンスターである『彼』には備わっているはずのない感情によるものだった。生ける彫像と化した戦士。眠りを与えようとする竜。

アイズにはどうすることも出来なかった。

身体は指一本動かなくなつて、仮に動いたとしても距離が遠すぎる。

完全に、詰んでいた。

「——《踊れ踊れ平原吹く風、かの者の声を、私の耳へ》」  
その詰おわりみを覆すべく、悪戯の妖精は魔力を振るう。

悪戯を専門とする彼が行使用するのは風の魔術。

遠くの声を誰かの耳へ届ける程度のささやかな魔力。

そして、使用限界に達しただ袋を剥いで差し上げる。

これでいいだろう、と妖精は確信する。

膳立たねだててには十分だと。

そうして。

アイズはそれを見て、それを聞いた。

英雄のごとく戦った剣士の顔が晒される。

一秒後の死を避けられない人間の顔が晒される。

アイズはその時初めて剣士が自分と同年代の少女であることを知り、

「……やつと、終われる」

その言葉を聞いた瞬間、アイズの中で何かが壊れた。



剣を振るう、父親の後ろ姿。

金の瞳はそれを見ていた。

木漏れ日の差し込む場所で、母親の隣に座って。

鍛練の様子を、父親はあまり見せたがらなかった。

けれど彼は剣を抜いた途端に専心し、相貌を凜々しい戦士のそれへと変貌させるのだ。

父親の剣を見るのは好きだった。

その剣は何かを傷つけるものだけれど、同時に仲間を、母親を守るためのものでもあつたからだ。

アイズにとつての父親は、母親を守る剣士であり、『英雄』そのものだった。

『アイズ』

名前を呼んで、彼は鞘に納めた剣を差し出した。

その相貌は凜々しくも穏やかで、

『アイズ』

背後から、母親の声がかかる。

その声は、子供への愛情に満ちていた。

暖かな陽光の下、両親の愛情に包まれて、目の前には、憧れてやまない『英雄』の剣がある。

けれど。

「……違う」

アイズは、それを手に取らなかつた。

「わたしには、振るえない……」

表情を失くす父親の姿に僅かな諦観を覚えながら、少女は言葉を連ねる。

「……わたしには、救えない」

アイズはここが現実でないことを悟っていた。

おそらくは、人が死の淵に見る走馬灯のようなものなのだと思います。

だから、少女は願った。

「……わたしには、来なくていいから。わたしは出会えないって、わかっているから」

泣きながら笑っていた少女の姿を想い、願う。

「どうか、あの人のところへ行ってあげて。あの人を救ってあげてつ、英雄さま……」

！

あの瞬間。

英雄だと思っていた剣士の顔と言葉を聞いた瞬間、アイズはわかってしまった。

あの人は英雄ではないと。

アイズと同じように、全てを奪われたのだと。

『英雄』に出会えなかった、ただの少女なのだと。

それはアイズにとって絶望に等しかった。

彼女はアイズと同じだったのだ。

全てを奪われて、けれど『英雄』は現れなかったのだ。そんなことはありふれた物事なのだ、悟ってしまった。

原因が違うだけなのだ。

それが世界三大依頼の標的にして人類の絶対敵対者の手によるものか、古の森人の手によるものか、あるいはまた別の手によるものか。

どんな経緯であれ全てを奪われた事実は変わらなくて、そんな境遇の少女は世界にはありふれていて、『英雄』の数は決まっています、救われない少女の方が多いのだと、そう感じてしまった。

故に、彼女は願うのだ。

わたしは救われないだろう。救われない誰かのように救われないだろう。わたしのだけの『英雄』なんて居ないだろう。そんなことはもうわかつている。

だから、せめて、あの人には。

見ず知らずの自分のために命を賭して戦ってくれた、運命に苛まれてなお清廉だった、まだ『英雄』と出会えるかもしれない少女には。

救われない少女が二人いるのだから、片方くらいには救いが与えられるべきだろうと、『英雄』に願うのだ。

『……アイズ』

「お願い……お願い、します。わたしは、いいから。わたしはもう、諦めたから。だから、せめて——！」

金の瞳から滂沱の涙を流して、アイズは懇願した。

たとえ目の前の『英雄』が、自分が死の淵で幻視した、形のない『英雄』だったとしても。

そう願うことこそが、あの少女への謝罪になると信じて。

「……アイズの、おぼか」

アイズはそれを幻聴だと信じて疑わなかった。

この光景は自分が死ぬ寸前に見た幻覚の類いなのだから、自分の知らない言葉を話す

母親が存在するはずがないと思つたのだ。

けれど背後を振り返ってみれば、そこにはアイズが見たことのない表情かおをした母親がいた。

「おかあ、さん……?」

「おぼかには、ぺちんつてしちゃう、よ」

「つゝゝゝ!?!」

アイズは額を押さえてうずくまつた。——でこびんされたのだ!

今度こそ、アイズは混乱した。天真爛漫の化身だった母親からでこびんを喰らわせられるなんて、緑髪リヴェエルフリアが安酒エールを一気飲みするような事態で、つまりは天変地異に等しかった。

訳がわからなかった。

父親も、母親も、自分アイズの見たことのない顔をしていた。

あるいはそれは、子供が生まれたことで引つ込んだやんちゃさの発露かであり、これがそれが本来の2人の顔なのだろうか——?

「アイズ」

「——」

父親の声に、荒ぶっていた精神が整えられる。



子供の前では決して見せることのなかった顔をする父親は、かつてあらゆる戦場を制した『英雄』としての言葉を語る。

「僕は、あの子の英雄にはなれないよ」

——アイズが相貌を罅割らせようとした、寸前。

父親は、剣のような眼差しで、アイズを射抜いたのだ。

「あの子の英雄は、もう決まっている」

「え……？」

「……聞いて、アイズ」

今度は、母親。

英雄に寄り添い、運命の糸を巻く使命を帯びた『大精霊』が、母親の顔を一時胸の奥に仕舞い込み、語る。

「——貴方が、あの子の英雄になるの」

金の瞳が、見開かれる。

「あの子を助けられるのは貴方しかない。そして貴方には『資格』がある。根性も才能も運命も足りている。だったらなれないはずはない。貴方が英雄になるしかない」

「わたし、が——?」  
考えたこともなかった。

剣を執る前も、剣を執ってからも、一度も思うことはなかった。

アイズにとっての英雄とは父親で、決して自分の前には現れない幻で、自分がそれになるなんて、思えるはずもなかったから。

弱くて、小さくて、モンスターを憎むことしか出来ない自分が、誰かを救えるなんて思いうがることは出来なかったから。

けれどアイズの両親は、その瞳にほんの少しの寂寥と無条件の信頼を浮かべて、語るのだ。

「英雄になれるのは、今を生きる者だけなんだ。少なくとも僕には出来ない。だから、アイズ、もしも君があの子の救済を心から願うなら——」

「今この瞬間に、英雄になりなさい」

「——ツツツ!!」

胸が震えた。

瞳に熱が宿り、萎えた息に活力が満ちる。

少女が憧れた『英雄』からの『激励』に、貴方なら為せるという全幅の信頼に、打ち震えるほどの感動を覚える。

頭が真っ白になってしまいうくらい驚いて、泣いてしまいうくらい嬉しかった。

だって、そんなことは言われたことがなかったから。望まれたことがなかったから。

『貴方も素敵な相手に出会えるといいね』

『いつか、お前だけの英雄にめぐり逢えるといいな』

それは紛れもない愛情だったのだろう。

心優しい両親は、愛しい娘が過酷を紡ぐことを善しとせず、英雄になることを望まず、

ただ英雄と出会えることを願った。

けれど、この子が望むのならば。

救うべき相手を見つけてしまったのならば。

救いたいと、そう思ってしまったのならば。

——『英雄』の先達として、力を授けよう。

——『精霊』の使命に依りて導きましよう。

今この瞬間に限り、子を愛する心を捨てる。

「アイズ。君に剣を与えよう。君が救いたいと願ったものを救える剣を。けれど忘れないでほしい。その力はまだ手に余る。細心の注意を払い、抜くべき時にのみ抜き、振

るうべき相手にのみ振るいなさい」

「貴方に風を授けます、アイズ。私達の愛しい娘。私の風は貴方を包み、貴方の意のままに吹き荒れるでしょう。……でも、忘れないで。貴方はまだ、ちよつとだけ、弱いから。その『風』で何をするのか、よく考えて、使つてね」

父親が剣を差し出し、母親が片手を持ち上げ、人差し指を立てて、音を紡ぐ。

それは『英雄』の『証』だった。物語となり、人々の間で受け継がれ、永遠に語られるべき英傑が積み上げた『証』。人類史においていつとう輝く星であり、『英雄』にしか背負えない『力』だ。

それら全てをアイズはしつかと受け止めて、その重みに愕然としてしまふ。あまりにも重くのしかかるそれに欠片ほどの恐怖を抱く。背負い切れるのだろうかという不安も。

けれどアイズは背負つてみせた。英雄と精霊の血族という『素質』と怪物への『憎悪』と英雄の信頼に応えたいという『願い』と名も知らないあの人を救いたいという『誓い』で、アイズ・ヴァレンシユタインという少女を決して折れることのない【英雄】へと打ち変える。

この瞬間。

英雄と精霊の血を秘める少女の裡で、『可能性』が芽吹いた。

気づけば、周囲は一変していた。

木漏れ日の差し込む木陰は既に消え、火の粉散り舞う戦場と化している。

アイズは、自分の背後に、『彼』と『彼女』がいることを感じ取った。彼等の戦いは既に終わり、結末を迎えようとしていることも。

だから、アイズは目の前の二人に背を向けて、走り出さなければならぬ。

「お父さん、お母さん」

戦場へと向かう直前。肉親と交わす最後の言葉。

父親と母親の眼差しを受けるアイズは、胸の奥につつかえたものを吐き出した。

「——わたし、ちゃんと英雄になれるかな」

それは当然の不安だった。

一度は折れてしまった自分が、あなただけ両親を奪った怪物どもへの憎悪に未だ折り合いをつけられていない自分が、迷ってばかりの弱い自分が、誰かの英雄になれるのだろうか、不安に思った。

こんなわたしが英雄になっていいのだろうか、思ってしまうのだ。

不安に震える愛しい娘に、二人の親は全幅の信頼を視線に乗せて、言った。

「なれるとも。英雄になりたいと願うなら、きつと。……というより、こんなのは考え方の転換だ。初めからアイズは、僕達を救う英雄になろうとしてたんだから、そこに何人か付け足すだけでいいんだ」

「私達を救いたって、思ってくれるのは、嬉しいよ。……そんな貴方なら、道中で小さな子を救うくらい、へつちやら。むしろ色んなことをして、いっぱい笑って、たくさんの人を助けてあげてほしいな。私達は、アイズに救われるまで、ちゃんと待つてられるから」

「——ふふっ」

アイズは、笑った。

父親も、母親も笑っていた。

だから少女は願った。

どうか待つていてほしい、と。

いつか貴方を救うその時まで、どうか——。



『オオオオオ……』

竜が鳴く。

一刻にも満たない死闘に幕を引くべく構えるのは竜の炎だ。

軽く踏んづけてやるだけで死ぬ人間に、ワイヴァーンは己の炎を与えんとしていた。

そこには『称赞』と『敬意』があった。己の全てを攻略し尽くし、何度も刃を突き立てた勇士への無自覚な感情があった。

神を始末するためだけに産まれた『抹殺の使徒』は、勇士と死闘を演じるという“物語”を与えられたのだ。

故に、その終わりは勇士に相応しいものでなければならぬ。『彼』は己が誇る最強の武器を選択する。ありとあらゆるを燃やし尽くす竜の炎である。

ことここに至り、冒険者は微動だにしようとしなかった。単純な、生物としての限界があった。冒険者は己の全てを懸けて戦い、全てを出し尽くした。その上で、冒険者は





その終わりを、受け入れた。

「――【母の風よ】」  
テンベスト

フリユートの妖精眼は、確かにその光景を観た。

黄金のような魔力が風の形状かたちとなりて己の周囲を包み、真紅の終焉を消し飛ばす、その瞬間を。

目の前に、誰かがいた。

膝をつくフリユートはその少女の背中を見ていた。

金の髪を黄金の風になびかせる少女。

彼女は無手だった。

なんの武器も持たず、竜と対峙していた。

深い傷を刻まれながらも立ち上がった少女が、フリユートの姿を後目に見る。

少女は今までの自分とこれからの自分を想った。

彼女はここで死ぬわけにはいかないと想った。

父親と母親を救い、救いたいと願った人を救う。喧嘩してしまったりヴェリアにちゃんと謝る。他にもやりたいことがたくさんあった。大体、わたしはまだこの人の名前も知らないのだから、いっぱい話して、同じ卓で同じ食べ物を口にして、心行くままに剣を合わせて、いつか笑ってもらいたい。

それを為すために必要なのは『力』だ。ありとあらゆるを斬り伏せる『力』。守りたいものを守るための『力』。

そして少女の手の内には既にも重い想いが握られている。アイズの中に迷いはなかった。純粹とは程遠い、しかしどこまでも鮮やかな極彩色の感情で鍛えられた剣えいゆうを掲げる。

——未だ怪物への憎悪と向き合えない、弱つちい自分アイズだけれど。

——貴方を救える人でありたいから。

「《わたしは……英雄になりたい》」

アイズにのみ許された起動鍵スベルを告げる。

最初にして最後となる、精霊でありながら英雄となつた剣士が行使する【神秘】。

即ち、精霊の導きを得た英雄ならば、無条件でその助力を得る特級の奇跡。下界にお

けるあらゆる魔術の内でも最上位に位置する〔召喚儀式〕。

未だ未熟な少女の要請に応じ、過去の英雄が降臨する。

かくして物語は一つの区切りを迎える。

いずれ英雄として語られる少女の節目となる激戦。

竜殺しの逸話の最後を飾るいさおし。

漆黒の翼竜の眼前に、ただの少女の眼前に、それは舞い降りる。

——その手に握るのは〔雷霆の剣〕。

——さらに構えるのは〔炎の魔剣〕。

——華奢な瘦身が纏うのは、傷つくことなどあり得ぬ鎧と、黄金の輝きを放つ〔精霊の風〕。

古今東西あらゆる英雄を置き去りにして駆けつけたのは『始源の英雄』。故に纏うのは彼の装束であり、彼の力である。

紫電を迸らせる剣を握り、風纏う最新の英雄は戦意を漲らせた。

「——勝負……！」

最終決戦（クライマックスフェイズ）『往（ゆ）け、彗星  
のように』

☆☆☆

『ぼくたちといっしょに、ここを出よう』

それは過去の諦念。

既に過ぎ去った冒険の末路。

『パパとママの待つ、家に帰ろう』

分不相応な願いを叶えようとして呆気なく死んだ、愚かで、哀れな、ありふれた結末。

『わたしたちなら、きつとできるわ！』

無理だ。

それは絶対に不可能な試みだったのだと、あの時の私も、今の私も確信している。

古の森人の領域から、無力無知無謀な子供だけで逃げ出そうだなんて。そんなの、万に一つだって成功の目はない。博打好きな神々だって賽の目を投げ捨てるだろう。

あまりにも尊い決意、遍く神々に称賛されるだろう挑戦、全ての精霊から祝福されるに違いなかったその冒険は……その実、どんな幸運、どんな加護を得ようとも、達成不可能な旅路だった。

だから私は手を取れなかった。

だから私はそこにいなかった。

たとえ悲惨な末路から逃れられなくとも、立ち上がる勇気を持てなかったから。

彼等の進む道に、希望なんてないと思っていたから。

私は、立ち上がれなかった。

彼等の手をはね除けて、目を背けた。

ああ、それでも――。

「わたしは……英雄になりたい」

その後ろ姿は、もはや顔も思い出せない彼等によく似ていて。

「あ――」

胸が震えた。

その輝きは、あの日の<sup>????</sup>によく似ていて――

☆☆☆

『——オオオオオオオオオオツッ!!!?』

漆黒のワイヴァーンが叫喚する。

人語に翻訳したなら、ありえない、信じられない、といった意味になるのだろう。

その声色は勝鬨には程遠く、その隻眼にはありつただけの焦燥とが押し込められている。

翼竜の眼下。

金の髪を波打たせ、手に轟剣、背に魔剣を携える、眼光鋭き少女から、ワイヴァーンは目を離せなかった。

その華奢な身体から氾濫する魔力も脅威極まりないが、何より——その剣士は消し飛ばしたのだ。

ドラゴン・プレス  
竜の炎を。ありとあらゆる魔物の頂点、英雄の好敵手たる、最も偉大な怪物の必殺を

！





死力を振り絞って立ち上がろうとしていたフリーユースに、そつと語りかけた。

「動いちや、だめだよ」

途端、黄金の風が踊る。

アイズとフリーユースを包み込むように舞っていた風が、柔く、優しく、有無を言わせない力強さで、フリーユースをその場に座らせたのだ。

「あなたはもう、限界。底の底まで戦い抜いて、本当に凄いなと思う。……だから、動かないで。あとは、わたしがやる」

「っ——!?!」

どの口が言っているんだっ、とフリーユースは叫びたかった。

アイズの身体に刻まれた傷は深い。

いくら想像を絶する魔力で武装したとしても、竜と戦えるだけの「耐久」は残されていないはずなのだ。いいや、その『剣』を行使した時点で壊れていなければおかしい。万全の状態ならいざ知らず、最悪のコンディションで耐えられる代物とは思えない。

だからフリーユースは立ち上がって戦わなければならないのに、アイズはそれを邪魔するのだ。

「よ、けっ」

何より、そう、何より。





精霊の御子の手に渡ることで、その祝福は雷神の鉄槌にまで到達した。

フリーユの視界を黄金の輝きが埋め尽くすのと同時、鼓膜に直接雷霆を叩き込まれたかのような爆音が鳴り響き——鈍器で殴り付けられたボールのように、ワイヴァーンの巨軀が宙へと弾き飛ばされる。

ぐるんぐるんと乱回転しながら急上昇し、勢いよく天井に叩きつけられる。四方の壁より堅固なはずの天井を派手に陥没させ、壁面に幾多もの罅ひびを走らせるその様は、『加護』と【復讐スキル姫】の圧倒的暴力の程をこの上なく表していた。

たった一撃。

フリーユとの交戦による疲弊もあるが、それでも、一撃。

ただそれだけでワイヴァーンを戦闘不能に陥れた少女に、フリーユは絶句し、震えてしまう。

「これで、終わりっ」

アイズはどっしりと腰を落とし、力を込めるように剣を構えた。

狙うのは滅殺。空中に弾き飛ばしたワイヴァーンが落下してきた所に、全力の一撃をお見舞いする。

アイズの決意に答えるように、黄金の風が舞い踊り、雷霆が轟すさき荒んだ。あたかも蓄力チャージされるかのように、黄金の刀身がその光輝を増していく。

まともに受けたなら第二級冒険者さえ打ち砕く一撃をもって、アイズはこの戦いに幕を下ろす。

「竜が……」

その、つもりだった。

「竜が、溶ける——」

呆然と呟かれた言葉。

それを証明するように、竜が咆哮した。



『彼』は、死に体だった。

雷霆に焼かれ、風に殴り付けられて、ボロボロだった。もはや反撃の余地はなく、ただ撃ち落とされるのみ。

『神の使徒』としての責務を果たせなかった無念を抱え、彼は自らの死が待ち受ける地上へと落下する。

——自らの死。

薄れゆく意識の中で、彼は思う。

——あれが、私の死？

——全てを打ち砕く、あの極光が？

死を目前にして、あらゆるものが欠落していく。

神を殺さなければならぬという『神の使徒』としての使命。

人間を殺さなければならぬという『怪物』としての存在意義。

ワイヴァーンという個体に備えられた多くの機能。

手から零れ落ちていくような慈悲はなく、容器に入れられた水が床にぶちまけられるかのような、怒濤の破滅。

——討たれるのか。

己を構成する多くのものが零れ落ちて、そして、最後に残ったのは。

——『やっと、終われる』。

一時間にも満たない死闘。

己の全てを攻略し尽くした、あまりにも矮小で恐ろしいほど強かった『敵』が、己の敗北を認めた光景。

剣を手放して、その命を彼へと譲り渡した瞬間だった。

——断固拒否する。

失われた瞳に、炎が灯る。

全身の傷が灼熱を宿す。

絶対に嫌だった。

この嫌悪と比べれば己の死など些事である。

だって当然だ、それは至極真つ当で、確実に正しいことなのだから。

——お前に殺されてなどやるものか。

己の活力の源たる魔石を、溶かす。

おそらくはもう数分も生きられまいがどうでもよろしい。ほんの一瞬、たった一撃に

万全以上を出せればいい。

賦活される心身、個体としての限界を超越する限界突破。オーバーキヤスト代償は数分後の消滅。つまりはノーリスクである。

彼が思うのはただひとつ。己を殺そうと睨む剣士に一瞥をくれ——あつさりと目を背ける。

両の瞳に映すのは、彼の仇敵。彼の勇士。彼が討ち取った、小さな冒険者。怪物の本能はもはや消え失せたが故に、その殺意はどこまでも純粹だった。

——あの“好敵手”を殺すのは、私だ。





『——ウウウツ』

その宣戦布告を。

アイズは、確かに聞いた。

瞬間。

竜の巨軀が、溶ける。

「——」

アイズの脳裏にまず浮かんだのは、魔石を砕かれたモンスターの末路だった。核である魔石を失ったモンスターは、その肉体を灰へと転じて眠る。

だが、これは。

これは——違う。

漆黒の竜鱗が。

漆黒の大翼が。

漆黒の竜尾が。

破損し、使い物にならなくなったそれら全てが、灰ではなく、液体となって溶けてい

く。

そして、竜より生じた液体は、あまりの高温に耐えかねて水蒸気と化し、瞬く間にワイヴァーンの姿を白霧の奥へと覆い隠すのだ。

一瞬で発生する濃霧。これまで攻撃一辺倒だったワイヴァーンのまさかの搦め手に対し、二人の冒険者は異なる結果を得た。

アイズには、濃霧の向こう側で何が起こっているのか、ワイヴァーンが何を狙っているのか判断出来なかった。最悪なコンディションに加え、己の全霊を「雷霆の剣」に叩き込んでいるのもあるが、純粹に彼女の技量不足が祟った。アイズは生粋の戦士であり、斥候・野伏・盗賊が得手とする観察技能は専門外だった。故にアイズは何が起ころうとも最速で斬撃を撃ち放つべく、より一層の集中を己に課した。

そして、フリーユは。

「ブレス！ 受けきれないっ、逃げて！」

占星術師としての観察力と、魔力を観測する妖精眼をもって、ワイヴァーンの狙いのほとんどを看破した。

『ア!!!!』

ぽつ、と。水蒸気の奥に、ろうそくのような光が灯った瞬間。

その竜の炎は——否、ドラゴン・レイ竜の大光線は放たれた。

文字通りの大光線<sup>ビーム</sup>。それは本来のワイヴァーン強化種<sup>には実装されてい</sup>が撃てるはずのない攻撃。開戦直後に広間を焼き払った『火炎流』と同じく大規模攻撃に分類されていながら、本来必要とする『溜め』は一切不要、その上威力は火炎流を優に飛び越える。

己を構成する魔力さえ攻撃に転化させることで為しえた無拳動超火力<sup>ノーモーションオーバーフロー</sup>——『彼』の生涯最後の一撃。

天より来たりて地へ突き刺さる柱と化した灼熱が、金の少女を焼き殺すべく殺到する。

「吹き荒れろ！」<sup>テンペスト</sup>

フリーユが逃げろと叫んだ攻撃を目の当たりにしたアイズの選択は、『迎撃』だった。

『雷霆の剣』のチャージは継続したまま、精霊の風を盾のように展開し、真つ正面から防ぎにかかる。

衝突する真紅と黄金。自壊を許容した渾身の火炎と大精霊の神秘による純粋な力比べ。その余波によってアイズの周囲一帯は致命的に破壊され、あたかも天井に生じたそれを繰り返すように陥没し、いつ地面が抜けてもおかしくないというレベルまで崩壊する。

——その焦燥は、少女の頬より流れ落ちる水滴として現れた。

「……駄目だつ、それでは耐えられない！ 早く離脱しなさいっ！」

「絶対に、嫌……!」

「なんでっ」

「わたしが逃げたらあなたが死ぬッ!!」  
言い切った。

髪先端を発火させ、玉の肌を徐々に炭化させる満身創痕の少女が叫ぶ。

全身を跡形もなく焼き尽くされる無惨な末路を目前にしても、揺らぐことのないアイズの瞳に、フリーユは呼吸の仕方を忘れた。

アイズも気づいたのだ。

この大光線はアイズを殺すために放たれているのではない。ただ一度退かせるだけの攻撃。離脱したその一瞬の隙について、フリーユを殺すための布石なのだ。

だから、絶対に退かない、と。

黄金の瞳が、そう告げていた。

だからこそ、フリーユは真剣に言葉を選び、説得を試みる。

「……それで、いいんだよ。私は、死んでいいんだ」

「よくない! わたしは、あなたに死んでほしくないっ!」

「アレの狙いは私だ。……どうやら、是が非でも私を殺したいらしい。私を殺せばアレも死ぬ。君がそんなに苦しむ必要はないんだ」

「それより先にわたしがあいつを殺す!!」

「……何より、私は、死にたいんだ」

アイズの瞳が揺らいだ。

名も知らない少女を無用の苦しみから救うため、という大義名分を得たせいか、フリーユの口は驚くほど軽かった。

綺羅星のような少女の決意を暗い雲で覆い隠すために、フリーユは己の真意を語る。

「ずっと死にたいと願ってた。けれど死ぬ訳にはいなくて、だから生きなきやいけなくて……。誰にも強制されてはいない。不死の呪いをかけられてもいないし、祖国を救う大義を背負っている訳でもない。ただ、私は私が死ぬことを許せなかった。私が許せなかっただけなんだ。

「……けれど、君を救うために死ぬのなら、私は私を許せるんだ」

「——っ」

「どうか……私の【運命】を、受け入れさせてほしい」

心を裂くように言葉を紡ぎ、フリーユは口を閉じる。

彼／彼女の意思に関係なく溢れ落ちる涙に気づくことはない。

フリーユは綺羅星アのような少女ズを安心させるために、精一杯の力を振り絞って、笑った。

これでいいのだと、示すために。

「……………うあああああつ……………」

その全てをアイズは無視した。

限界以上の風を招来し、強引に大光線を打ち負かしにかかる。

軋む心身、崩壊していく意識を気力のみで束ねるアイズと、自らの命を定めることで限界以上を容認させたワイヴァーン。勝利の天秤がどちらに傾くのか、フリーユーにはわかってしまった。

罅だらけの笑顔は既に消えて、重度の疲労の浮かぶかんばせが絶望に染まる。

視界がぐにやりと歪む。

見せつけられるのだ。少女<sup>アイズ</sup>の死ぬ姿を、立ち上がれない自分は、眺めることしか出来なくて。そうして、絶望し切った自分を、ワイヴァーンが殺すのだ。

——ああ、なんて醜い最期。

「あああああ……………!?!」

フリーユーは傷ついていく少女<sup>アイズ</sup>の光景に耐えられず、顔を背けて、瞳を閉じた。

今すぐこの世界から消えて失くになりたい気分だった。

肉の一欠片も残さず、誰の記憶からも抹消されて、自分の痕跡全てを道連れにして消失したくなった。

——耐えられない。

いいや、それは常々思っていたことだ。フリーユは自分がこの身体に成り果てた時からまっさらに失くなってしまっていた。年月を経るごとに消えていく男だつた自分と空白に注ぎ込まれる女としての自分、その全てに耐えられなかった。

——知らない顔の自分を直視できない。

——柔らかい四肢に吐き気を催す。

——声を聞く度に、鼓膜を破ろうとしてしまう。

だから消えてしまっていた。死にたかった。自分の手で自分を殺す前に、抹消されたかったのだ。

そんなフリーユの命を繋ぎ止めたのは負い目だ。おぞましい暗闇の中で生を求め、儂く散った尊い光。自分が見捨てた子供達が生を望んでいたから死ねなかった。

——それも、私の独り善がりだ。

——あの勇敢な子供達のために死ねないなんて嘘だ。

——無責任に死ぬ勇氣を持てなかっただけ。道の先へと進む勇氣がなかっただけ。

——立ち上がれない理由を彼等に押し付けている、弱くて、みみっちくて、意思の弱い、最低最悪の小人族なのだ。

その結果がこれだ。

フリューは少女を道連れにして死ぬ。考えうる限り最悪な末路を辿る。罪のない子の命を奪い、恩神の顔に泥を塗りたくって果てる。

いつまでも立ち上がれないまま、誰の手も取れないまま、終わる。

「選択の時です、我が王」

鈴の音のような声で、悪戯の妖精が囁いた。

☆☆☆

「ああ、我が王。妖精王の御子息殿、幸運で不幸な探索者の愛娘様。今こそ選択の時です。あなたは選択しなければなりません。あなたは、自ら選んだ道の果てに、自らの運命を見出ださなければならぬのです」



貴方は農村にいる。

正確には、おそらく農村なのだろう、という感想である。

都市と言うにはみすぼらしく、廃墟と呼ぶには活気がありすぎる、自然に溢れた土地。どこからか鳥の囀りが聞こえてきたかと思えば、実り豊かな収穫を祈る農民の歌が耳朶を震わせる。

頬を撫でる風は柔く優しく、戦禍から程遠いことがありありと伝わってきた。

「……が何処かわからない。見当もつかない。——ええ、その感情はとても正しく、とても悲しいことでございます」

悪戯の妖精は大袈裟に落胆してみせた。

その仕草に対し、貴方は殺意を覚えるかもしれないし、どうでもいいことだと無視するかもしれない。

【……は……だ】

【あの子の所に戻らなくては】

↓【……私より先に死なないでほしい】

「……ええ、そのために僕は唄い、踊るんです」

貴方の懇願に、パツクはほんの僅かに相貌を崩した。

それは遙か昔日に道を違えた友人に向けるような、淡く、寂寥の滲む笑みだった。そして、次の瞬間には道化のように大仰な仕草で貴方の注意を引くのだ。

「ここは——農村です。適度にのどかで、程よい喧騒に満ちた、穏やかな日常の具現です。そのような土地をあなたのご両親は探して、そうしてあなたは産まれたのです」

貴方は途方もない衝撃に襲われる。

心臓が凍りついたかのようなだった。

貴方の全ての生命活動が停止して、次の瞬間にはその言葉の意味を探るべく全力で駆動する。

目の前の妖精の言葉が正しければ、つまり、ここは。

この、穏やかで、たおやかな、ありふれた農村は——

「ここは、あなたの生まれ故郷なのよ、フリーユ」

貴方の真後ろから、女性の声が聞こえた。

ひどく特徴のない声だった。

歌うようでもなければ平坦でもなく、特別高くも低くもなく、無機質なように意思の籠ったものでもあった。

まるで顔のない人形に語りかけられているかのよう。

けれど、貴方はその言葉を無条件で心地よく感じるのだ。「女体恐怖症」の貴方が、肉体より更に奥、言うなれば魂に刻まれたとでも表現するべき、原初の記憶がうち震える。

「——おかあさん？」

「その通り。ここはね、フリユー、お前の故郷だ」

「——おとうさん」

貴方は後ろを振り向きたい欲求に駆られた。

同時に、振り返った瞬間に終わることも理解していた。

ここが選択の時なのだ。

悪戯の妖精の語る、貴方の分岐点。

「あくまで記録に過ぎません。記憶には程遠く、記録ですら穴だらけ。元の貴方の両親には到底及ぶべくもありません。記憶には程遠く、記録ですら穴だらけ。元の貴方のこ

——けれど。私は、あなたが失った記憶の一部を、記録として保持しています。

そのことを今の今まで黙っていたことの処罰は、どうか私の話を聞き終えてからにしてくださいたく願います。何故私がそのような記録を持っているのか、という経緯もまた。

ともかく重要なのは、私はあなたの“生まれ故郷”を再現することができる、という

ことです」

悪戯の妖精が、ニヤリと微笑んだ。

「我が王——あなたが望むのなら、この仮初の楽園で、あなたを眠らせて差し上げられるのです」

貴方には、長い時間を共に過ごしてきた友人が悪魔のように見えた。

「それは、駄目だ。そんな。だって、私は」

「子供達を見殺しにしたから？　神様に申し訳が立たないから？　———そういうのは抜きにしてしましましょう。この瞬間だけは、この世の誰にだって、あなたの選択を歪めさせはしません。他ならないあなたは、どうしたいのですか」

「でもっ、あの子が！　あの子が死んでしまう……！」

「どの道死ぬでしょう。だってあなたは立ち上がれないのだから。あなたは何も出来ずに、何も与えられずに、目の前で少女の焼け死ぬ姿を見て、誰にも見守られることなく、残酷な痛苦の末に死ぬのです。」

「だったら……仮初でも、お父さんとお母さんと一緒にご飯を食べて、一緒に笑って、一緒のベッドで抱き締められて眠りたくはありませんか？」

ズグンツ、と胸の奥を貫かれたような錯覚を覚えるだろう。

それが——そのような奇跡が本当に起こりえるのなら、貴方は戸惑わずにはいられない。

最期まで苦しみ抜いて終わるのだと想い続けてきたのに、直前になって、そのような【幸せ】をぶら下げられるなんて。

「我が司りしは『悪戯』。此これなるは虚構の大劇場。もしもあなたが望んでくれるのなら……我が霊格の全損を代償として、完全以上の大嘘をあなたに捧げます。

あなたの終わりを、これ以上なく幸福なものにしてみせます。

ですから、どうか。——選択を」

あ

それは、重大な決断だった。

八年。

貴方が貴方でなくなつて、苦しみ続けた年月。息を吸うことが地獄と同義となつていた月日。

その全ての精算が、目の前に提示されている。ずっとずっと苦しんで、苦しんで。

全てを受け入れて新たな自分を歓迎するのも、もはや耐えられぬと自死するのも。 どちらも選択できずに、足掻いて、もがいて、あがな 贖つて。

そんな、長く長い贖罪の旅の果てに待つのが、親の温もりなんて。なんて、幸福な末路だろう――。

「フリーユ―」

「フリーユ―」

両親が語りかけてくる。

この言葉に答えて、後ろを振り向くだけで、貴方は幸せになれる。

壊れかけていた心がぼろぼろと崩れていく音がした。

貴方は、自分を許してもいいのではないかと思った。

貴方は頑張ったのだ。

本当に、本当に頑張った。

生きて、生きて、生きてたのだ。

だから、もう、いいような気がした。

戒めるように巻かれた鎖が解けていく感覚を覚えた。

精一杯頑張ったのだ。

自分の出来ることは全部やりきった。

決して最良の結果ではなかったとしても、罪もない少女をまた一人見殺しにしてしまったとしても。

この【幸福】を前にすれば、全てがどうでもよく思えた。

選択の時だ。

【後ろを振り向く】

↓  
【わたしは】

↓  
【わたしは】

↓  
【わたしは】



「どうか、素直になってください」

「この【幸福な終わり】を放棄するのならば」

「ここで終わることを選択しないのであれば」

「あなたは、あなたの選択（選）を叫ばなければなりません！」

「この瞬間だけは、神にだって、過去にだって、あなたの選択を歪めさせはいたしません！」

ん！

「あなたの、心からの望みを謳（うた）ってください、我が王！」

↓  
「——立ち上がりたい」

「——その先に、無限の苦しみが待つとしても？」

↓  
「立ち上がりたい」

「——凄絶な終わりを約束されようとも？」

↓  
「立ち上がりたいっ」

「——あなたの顔は、永久に失われたままだとしても？」

↓【それでも——立ち上がりたい……っ】

↓【彼等のように——立ち上がりたいっ】

↓【彼等の手を取って、立ち上がりたいっ】

「たとえば、そこに希望などないとしても……？」

↓【それが間違いだった】

↓【いつだって、どんな時だって、希望はあったんだ】

↓【彼等が希望だ】

↓【彼等が立ち上がったのは、絶望の中に希望を見出だしたからではなく、明確な勝算があったからでもなかった】

↓【彼等自身が希望なんだ。立ち上がる、その決意こそが希望だったんだ！】

↓【だから！ 私は、立ち上がりたい！】

↓【あの日見上げた夜空のように！ 遠く儂く尊い、その輝きぼうきと共に！】

↓【私が焦がれた輝きと共に、今度こそ！】

↓【私は……冒希望険掴みたいをしたい——!!!】

☆☆☆



「——え」

言葉と共に、アイズの背から直剣が抜き放たれる。

真紅の刀身を誇るのは「炎の魔剣」。雷霆の剣と並ぶ、始源の英雄の武装が一振り。アイズがそれを背に装備したまま放置していたのは、単純に二刀流の心得がなかったのと、雷霆の剣の方が手に馴染んだからだ。抜き放つ暇がなかったのも要因のひとつである。

けれどアイズにとってそんなことはどうでもよかった。もつと重要なことがあつて、それはあり得ないことで、アイズの頭が真っ白になつてしまふほどに衝撃的だったのだ。

「なんつ、で、立ち上がれて」

「ちよつとズルをして、【耐久】たいりよくを増やした。だから立てる。動ける。動けるのだから、貴方の力になるんです」

再び、絶句する。

自分の『風』で押さえていたはずだ、とは思わない。既にアイズは疲労困憊であり、フリーユをその場に居させる余力は失われていてもおかしくない。

体力の話も納得はした。理解は出来ないが、回復薬を飲める程度には休息出来たか、あるいは何らかの【スキル】の力か。ともかく、フリーユは動いて、【炎の魔剣】を手に

取つたらしい。

そこまではいい。

けれど。

けれど！

その、先程までとは明確に異なる、同じ声音なのに決定的なところが違う、まるで別人のようなその言葉は、一体——

「何より……私は、お姉さんだから」

「……！」

「年下の子に任せきりなんて、したくない」

カインネウス、ヴェール  
【半端者】。

それが、フリーユのインチキの正体だった。

常に【耐久】に補正を与え、《水上》であれば全てのアビリティに極めて高い補正を為すレアスキル——その最後に記された一文。受け入れる程に強化。つまりは、女性である自分を許容する程に出力が上がるという、フリーユにとって文字通り死ぬより辛い条件があった。

けれど、フリーユは立ち上がりたくて。

だから、この一時のみ、彼／彼女フリーユは女の子になったのだ。



無論、自殺一步手前の賭けである。

なにせフリーユは自分が女性であると実感する度に重度の精神的な苦痛を味わうのだから、少なくとも現在の精神状態で、自ら望んで女性になれば『終わる』のだ。

だからこそ、パツクは細心の注意を払って己が主人を女メスの子撫ちさせにした。

《酩酊》や《幻惑》などの悪戯に関わる妖精術を片っ端から重ねまくって、フリーユ自身が見込んで女性として振る舞っていることを認識できない程にふにやふにやにしたのだ。

その結果——【半端者】カインウス・ツェールはその倍率を跳ね上げ、【耐久】を水増しし、フリーユを立ち上がらせたのである。

「星のような貴方。……共に、冒険をさせてください」

「——！」

かあああつ、と胸が熱く燃えるようだった。

口許に浮かぶのは笑みだ。怒濤の灼熱は今も絶えず、常に命を脅かされているというのに、磨耗しかけた心が、崩壊寸前の身体が、喜びに震える。

立ち上がれないと決めつけていた人が、自分のために、立ち上がってくれたのだ。

それがどれ程の苦痛を伴うことか——それを、今のアイズは知っていて、だからこそ感激してしまう。

たった一人の小さな仲間が、この上なく頼もしい。

『オオオオオオオオオオツツツ!!』

それと同時に、ワイヴァーンも叫喚する。

その吠声に込められているのは勝鬨でも、恐怖でもなく、歓喜だった。唯一無二の“好敵手”の再起に、『彼』はアイズ以上の喜びを感じていた。

際限なく威力の高まる大光線。刹那の感情は彗星のように竜の全てを焼き付く。たとえ数秒後の消滅を免れられなくとも、『彼』はこの激情を己に与えてくれた全てに感謝していた。

互いの殺意が交錯し——決戦する。

「炎を消します。その隙を突いて、飛んでください」

「——うんっ！」

僅かに言葉を交わし、冒険者は各々の役割を全うする。

出力を増した大光線を防ぎ切るべく、アイズが更なる風を招来すると同時。フリューもまた、大光線を打ち破るべく準備を行っていた。

月女神より与えられし占星術をもって、竜の炎を打倒する。

「《我は太陽の信奉者》」

詠唱。それは太陽へ捧げる祝詞。

燃える平原、荒ぶ灼熱を攻略するための魔術。

ああ、天上にて輝く太陽と比べれば、このような炎どうとうということはない。

無論、太陽よりは生易しくとも矮小な小人族にどうにか出来る代物ではないのだが。

それならそれで、どうにかしてしまっただけだ。

「……ツクヨミ様は好まなさそうだけど」

そう呟き、心の中でごめんなさいをしてから、フリーユは半年前より所持している『解  
体用のナイフ』を手に取った。

モンスターを屠るための武器ではない、最低限の攻撃力しか持たないそれで、自分の  
腹を裂いたのだ。

「——ッ!？」

「大、丈夫。信じてほしい。必要なことなんです」

「……無茶、しないで!」

「それは無理かなあ……」

天体と人体には照応の関係がある。

星々を人体の各部と関連させることで、天体を利用した魔術の成功率を上げる、魔術  
師の初歩的な知識。

火星ならば頭。

水星ならば胸、腕。

太陽ならば心臓。

金星ならば喉。

そして——月ならば、腹部。

フリーユーのなだらかな平原に引かれた一本線より、どくどくと血液が溢れ出す。

それは月への捧げ物にして——【半端者<sup>スキル</sup>】の発動条件を達成するための陣地でもあった。

「たとえ数秒後に蒸発していても、それまで、ここは《水上》だ……！」

瞬間、フリーユーは己のステイタスが爆発的に上昇するのを実感した。

【半端者】の《水上》条件が達成され、全アビリティに強力な補正が与えられる。

もちろんそれは長くは続かない。大光線がもたらす灼熱は流れ出た血液すらも蒸気にしてしまう。そもそもこのまま出血を続けていけば、フリーユーは勝手に死ぬだろう。

故に。

フリーユーは、この瞬間を逃さない。

【S<sup>カ</sup>:999<sup>スト</sup>】にまで達した素の能力値。

月へと捧げられる魔術師の血潮。

【半端者】の極大補正。

過去最高に【魔力】の高まったこの一瞬に限り、いつか修得することとなる技術を前借りする。

「——《そして、我は月の信奉者》」  
ダブル・マジック  
 魔力同時起動。

片眼に太陽、片眼に月の魔力を発現させる。今のフリーユアの技量では届かないはずの技術。それによつて、交わることはない太陽と月が手を取り合う。

ひとつで足りないのなら二つ合わせればいいという、単純な発想。

そして——荒ぶる炎を御する『太陽』と致命的な一撃をもたらす『月』に、同時に観測みられたのなら。

「タケミカヅチ様。貴方の剣をお借りします」

言葉と共に【一意専心】コンセントレイトを起動する。

構えるのは【炎の魔剣】。英雄の武装。

小さな身体を満たすのは波のような魔力。

束ねるのはこの生涯において最高の集中。

ならば、足りるはずだ。

場は整った。

相応しい武器もある。

——後は、為すのみ。

「風を解いて！」

「っ！」

フリユートの言葉に、アイズは間髪を容れずに答えた。

今の今まで大光線より少女達を守護していた黄金の風が、その役目を放棄する。

殺到する真紅の殺意。

アイズの瞳を猛炎が埋め尽くす。

瞬きの後の死が迫る。

だというのに——アイズの心には、欠片ほどの恐怖もなかった。

そして。

フリユートの瞳には、斬るべきモノしか映っていなかった。

「——  
// ふつのみたま 布都御魂 //」

アイズは絶句した。

ワイヴァーンは驚嘆した。

フリーユの手の内で、英雄の武装がひび割れ——柱のごとき大光線が、真つ二つに割れる。

つまりは斬ったのだ。

竜の炎を！

全てを焼き尽くす、真紅の極光を！

太陽と月の魔力、劍神の「技」で、斬ってみせたのだ！

「さあ、往かれよ！ 彗星のように!!」

「——はあああああああああツツツ!!」

アイズは一条の光と化した。

英雄に捧げられた絶技に答えるために。

全力の風、全霊の雷をもって——飛翔する。

『——、オオ』

ワイヴァーンは確かに見た。

天へと駆け上がる雷霆のごとき極光。

断ち斬られた炎柱の間から舞い上がり、この空にまで到達した、一人の冒険者の姿を。

「<sup>ディア・アルゴノウト</sup>始源の英斬」 つ!!」

雷霆のごとき斬撃が、ワイヴァーンを打ち砕いた。



「あ——」

その斬撃を放った直後。

アイズは、己に力を貸してくれていた英雄との繋がりが失くなったことを感じ取った。

手の内から消えていく“雷霆の剣”。幾度となく命を救ってくれた黄金の輝きに、アイズは感謝を告げる。



そうして。

アイズは、落下した。

「……あ」

そういうえば、飛んだ後のことは考えてなかったな、と。

全力の一撃を放ってへろへろと化したアイズは、今更ながら窮地にいることを察した。

当然、風を生み出す余力は残されていない。

あらまあ、なんて母親アリアの言葉が聞こえたような気がした。

「……つつつ?!?!?!」

糸の切れた人形のように落ちていく。

アイズは言葉にならない悲鳴を挙げて、涙目になってばたばたした。

流石にこの終わり方はあんまりだ、と。

『人形姫』もへつたくれもない表情で。

ひゅーん、と落ちていく。

「ふぎゅつ」

その結果。

アイズは、フリーユを下敷きにした。

「あつあつえつ」

「~~~~~むぎゆう」

「ちよつ……!?!」

フリーユとしても、苦肉の策だったのだ。

パツクの《軟化》の術で受け止めようと思っていたのだが、彼は不在だった。

著しく魔力を消耗した結果、姿すら保てなくなつたのだ。フリーユも「先に死なないでほしい」と口にする程度に感づいてはいたが、思っていた以上に無茶をしていたらしい。

ともかくフリーユはその身一つで空から落ちてくる同じくらいの体格の少女を受け止めなければならず、疲弊した身体で出来るはずもなく、自分をクツション代わりにするしかなかったのだ。

唯一の救いは、落下点に先回りしようとしてこけた、という顛末からして、うつ伏せに突っ伏していたため、腹部からの出血がぎりぎり《水上》判定になり、なんとか気絶するだけで済んだことだった。

「ど、どうしつ、どうすれば——」

「——アイズっつ!」

「! リヴェリアっ、リヴェリアっ!」

「……アイズ、私は……私は、お前の母親にはなれない。だが、それでも——」

「後で!!! 聞くから!!! 全部、謝るからっ! それよりも先に——この人を、助けて!!」

「……。……すまない、頭に血が上っていた。お前の言う通りだ——走りながら治療する、抱えるぞで」

「ひゃっ!」

「しかし……まさかこんな時期に、娘三人を担いで走るようになるうとはな……!」

訂正。

王族妖精ハイエルフの女性とかいう地雷中の地雷の小脇に抱えられた、という事実を知らずに済んだのは、この上ない幸運だった。

## エピローグ 『星のようなあなたへ』

さあ、往かれよ。

霞む意識を無理矢理に束ねて、叫ぶ。

そうして、少女は飛んだ。

流れ星のようだった。

いいや、あれは正しく勝利を告げる綺羅星なのだろう。

その軌跡に迷いはなく、その輝きは限りなく。

夜の帳さえ斬り裂いて、地平の果てすら飛び越える。

いつか私の瞳から見えなくなっても、際限なく限界なくどこまでも、あの子は駆けていくのだろう。

私は勝利を確信する。

あの少女は仕損じることなく、漆黒の翼竜を粉碎するだろう。

そして。

それは同時に、私の『悲願』が打ち碎かれることでもある。

「――、あ」

目を逸らしてはいけない、と思った。

私が求めていたモノ。

悪逆非道を為してでも得たいと思っていたモノ。

それが、目の前にあつて。

それを、目の前で手放す。

8年もの間、ひたすらに積み重ねてきたこの想いを、私は今から裏切るのだ。

「は――、あ――」

後悔はある。

不安もある。

今までの私は泣き喚わめいているし、これからの自分も、この決断を軽蔑するだろう。けれど。

「――  
// 始源の英斬 //  
――」

彗星が漆黒を打ち砕く。

命を弾き飛ばすかのような、見事な一撃だった。

目映き雷光がダンジョンを埋め尽くし、ワイヴァーンを消滅させる。

瞬間、この小さな胸に飛来した感情は、諦念か、それとも悔恨か。

きつとその両方ともで、ずっと守りたかった、とても大事にしていたモノが、失われるのを感じた。

「どうか、私を恨んでほしい」

ありつたけの想いを込めて、告げる。

これから、私は今まで以上の過酷を味わうだろう。

ずっと目を逸らしていたものを、直視してしまった。

その代償は重く、今だって、叫び出したいくらいに胸が震えてしまっている。

それでも。

「ああ……なんて綺麗」

今だけは。

あの少女きぼうの輝きを、目にしていたい——

☆☆☆

自分が寝台<sup>ベッド</sup>から出られたのは、あの夜の一週間後のことだった。

我ながら酷使したものだと思っていた身体は、案の定酷い事になっていたらしい。重  
ねすぎた疲弊は身体機能を衰弱させ、治療院に担ぎ込まれた時は呼吸すらままならない  
惨状だったとか。

無事に意識が戻ってから受難は終わらず、むしろより悪化した。

具体的には、自分がどれだけの確にアスクレピオス様の地雷を踏んだのかを自覚させられた。

夜間に無断で外出して、死にかけて、他所の医者の手にかかったのだ。

……あまり思い出したくはない。患者と医者との関係である限り、自分はこの先ずっとあの医神には逆らえないだろう。そう思わざるを得ない出来事があった。それだけの話だった。

何もさせてもらえない時間、というのは、思っていたよりも多くの物事を自分に与えてくれた。

自分の『性』のこと。

自分のこれからのこと。

あの子とどう向き合うのか、ということ。

考える時間はたくさんあった。迷宮通いの日々を続けていたなら、風化させ、なあなあにしてしまっていたかもしれない事柄を、自分はしっかりと受け止めることができた。

今更ながら、アスクレピオス様の軟禁命令は、自分の精神も慮っていらつしやつただと思う。あの夜に起こった多くの出来事を見据え、整理するのに十分な時間を、あの



方は用意してくださったのだ。

そうして、自分は。

ある『答え』を、アポロン様に告げた。

あとは、そう。ロキ・ファミリアとの付き合いについて。

自分が寝ている間、オラリオは一時大変な騒ぎになっていたらしい。『上層にワイヴァーンが出現した』ことで下級冒険者達がこぞってギルドに詰め寄り、上位派閥への強制調査依頼が発令されて……そして、「ロキ・ファミリア」のとある冒険者が、過去の世界最速記録に並ぶ早さでの「ランクアップ」を果たした。

アイズ・ヴァレンシユタイン、所要期間一年でのLv. 2昇格。

僅か8歳の幼女が成した偉業に、迷宮都市は大いに沸いたらしい。特に神々の喜びようは凄まじく、街の至るところであの見目麗しい方々が踊っていたのだとか。

暗黒期という酷すぎる情勢下において、あの少女がやってのけた偉業は、さながら暗雲の隙間から差し込む陽光のようだったのだろう、と思う。

で。

『おめでとうフリユ、【ランクアップ】だ！』

『……え……それは、ええと』

『発展アビリティにも恵まれたぞつ、「狩人」もある！ やったなフリーユー！』

『……それは、まずいのでは』

『えっ？』

にここにこしたままのアポロン様と、顔から色を失くす自分。

流石に見かねたらしいアスクレピオス様が諸々の物事を説明なさった頃には、アポロン様は真顔で頭を抱えていた。

所要期間半年での「ランクアップ」である。

現在巷ちまたを騒がせている、都市最強派閥所属のアイズ・ヴァレンシユタインは一年である。

なるほど大幅更新だ、素晴らしい！

馬鹿正直に発表したら地獄になると、政治的な物事に疎い自分でも理解できた。

『これが明るみになれば……なんだ、取りあえず、ロキの所から睨まれるな。うちの子がきやーきやー言われとったのに泥ぶっかけてきよって何してくれてんねんみたいなノリで……』

『他の娯楽好きの神々からも狙われるだろう。半年ってことは正真正銘の世界最速記録、守りきれれるのか、クソ親父？』

『フレイヤに見初められれば確実にアウト、そうでなくとも徒党を組まれれば危うい。我が派閥ってそんなに武力ましましな訳ではないからな、C評価の中でも下位だと思  
う』

『隠すか』

『いや、念には念を入れて“保留”にする。「ランクアップ」可能の状態でしたら  
放置し、落ち着いた頃に昇格させよう。具体的には次回の神会デイトゥスの時期まで……幸いなこと  
に、口止め出来る程度の資金はある。なんなら司会の席を取ってもいい』

『都市内の有力神への賄賂、情報の隠蔽か。……患者の身の安全のためだ、僕もいくら  
か出そう』

『すまない、助かる』

『お前のためじゃないからな』

『わかっているとも』

つまり、今「ランクアップ」してそれがバレると非常に不味い、なので三ヶ月後に開  
催される神会まで昇格は保留とし、出来る限り情報を隠蔽しつつ、バレたとしても大事  
にならないよう根回しする、ということだった。

拒否する理由はなかった。

あの子……アイズの名声に泥を塗るなんて、あつてはならないことだし、それでアポ

ロン様が助かるのなら、そうするべきだと思った。

これ以上成長の見込めない【ステイタス】的に考えれば、今すぐ【ランクアップ】してしまうのが一番なのだろうが、自分の目的は金稼ぎであって、強くなりたいという訳ではない。それに、三ヶ月早くLv. 2になっただとしても、自分の能力値アビリティの上限からして誤差にしかならないだろう。

唯一の懸念は、【ランクアップ】の時期が遅れることによる収入の低下——『中層』進出が遅れることだったが、順当に調整することを約束してくださった。

自分のランクアップは三ヶ月後。

それまでは、今まで通り『上層』をメインに探索することとなるだろう。

そんなふうを考えていた時期が、自分にもありました。

……敗因は、自分の認識違いにあった。

具体的には、自分がアイズに向けていた感情と、アイズが自分に向けていた感情の齟齬だ。

自分がアイズ・ヴァレンシユタインという少女に抱いている感情は……信仰心なのだと思う。

アイズは、その……フリーユ・ガー・グッドフェローという小人族バルウムの人生を、一変させた。

複数の外的要因によってひん曲げられていたモノに、無理矢理に力を加えた結果、不恰好だがまっすぐになってしまった、というか。

定められた『悲劇』を唐突にぶち壊して、さも当然のように『喜劇』の幕を上げたのだ。

冷静になって、その事実を再認して、愕然とした。

8年間積み上げ続けた感情が、生き方が、切願が。あの夜の一戦、たった二度顔を合わせただけの、名前も知らない女の子に吹っ飛ばされたのだ。何があの輝きを目にしていたいだ、現実逃避してるだけじゃないか。自分の想いはこんなに小さなモノだったのかと思うと、酷く胸が苦しくなった。

何より、救われてしまった手前勝手に死ぬ訳にはいかないな、なんて思ってしまったのが、もう、致命的だった。

救ったつていうなら、タケミカツ子様とかツクヨミ様とかはどうだつていうんだ。自分はその敬愛すべき方々からの親愛を捨てても死にたいと思つていたはずなのに、ぼつと出の女の子に救われたら、もう死ねないな、なんて。

——それじゃあ、タケミカツ子様達に救われたのを軽んじてるみたいじゃないか！

自分は悶絶した。

当たり前のように持っていた、持っていると思っていた、心優しきお歴々への信仰心が、突然薄っぺらいモノに思えてしまったのだ。お前の敬愛は、何処の誰とも知らない金髪娘に対する感情に劣るモノでしかなかったのだと、自分自身に糾弾されるようだった。

仮に、本当に仮に、自分がアイズに抱いた感情が恋慕の類이었다のなら、こんな事にはならなかったのだろう。畏敬とか、崇拜とか、敬愛とか……そういつた、神々へ向けていた感情を、年下の女の子に抱いてしまったせいで、すごい辛いことになったのだ。いや、生き死にの観点からすればとんでもない「幸運」なんだろうけど……。

要するに。自分は、元から社の神々へ向けていた信仰心の強度を疑ってしまう程度に、アイズ・ヴァレンシユタインという少女を敬愛している。

アイズは『希望』で『英雄』で『信仰の対象』で、つまりは『神々のようなモノ』で『星』でもあって、だから向ける感情は信仰心というか……通常人に向けられないような感情を抱いてしまっていた。

だから、その。

アイズにとつての自分は、『果てしない悲願を叶えるための道中で、たまたま手を差し伸べた人物』……英雄譚でいう、序盤にちよつとだけ登場するようなキャラクターで。

英雄の覚醒にたまたま立ち会って、とても「幸運」な事に救ってもらえた、誰でもないなんだろうな、なんて思っ、勝手にそれで納得してしまったのだ。

その、結果。

『フリーユーカーって子が診療所に居るって聞いたんやけど』

『知らん』

『アポロンとこの子やろ？』

『いやあまあ確かにフリーユーカーという名の眷属はいるが……』

『合わせてくれんなあ、うちも困るんよなあ。だってその子絶対「ランクアップ」出来るやろ？ しかもなんや、ギルドの記録と合わせると……半年で、Lv. 2ってことになるやん。すごいなあ、ぶっちぎりでレコードやで』

『……』

『まー、うちらもアイズたんの件ではしゃいでたのもあるけど……これ、ふつーに発表されると、うちらとしても、自分等にとつても、よくないと思うんよ。それはわかるな？』

『……』

『くつそ可愛い言うとつたからなあアイズたんなんー。フレイヤの奴も気に入りそうやなー。超絶技量激カワ幼女剣士、神連中も欲しがるやろなあー、なんならうちも欲しいしなあー』

『いや待てロキ、それはだな』

『知らんつ』

『ずだ袋被った小つさい剣士が【悲恋の奏者】と一緒にいるのを見たつて眷属ガレスが言うてるし、ディアンケヒトの治療院が完治してない患者を預けんのは相応の設備と腕のいい医師がおるところだけや。うちとしては、はよ観念してもろて、建設的な話をしたいんやけどなあ……』

『……………』

『何より、犬猿の仲な自分等らが毎日顔を合わせとる時点でバレバレや。見舞いにきてたんやろ？ いい主神やんけ』

『（尾おけられてるじゃんかクソ親父死ね）』

『（いや私もそれなりに戦える神だし弓兵だし私が感知出来ないなら居ないもんだと）』

『ちなみに斥候しとつたのはうちの団長や』

『……………』



そんなことがあって。

真つ白になったアポロン様をよしよしして差し上げて。

それから、ええと。

『遠征』に向かわれた方々が大事なく帰還されて、お互いの無事を祝ったり、自分が直前に参加できなくなったことを謝罪したりして。

それで。

……何があつたんだっけ。

ああ、そうだ。

何か、とんでもなく衝撃的な事があつたんだ。

それで自分は気絶して、つまりここは夢の中で、何があつたのかを思い出すために今までの経緯を言い連ねていて……。

確かなのは、今日はあの夜の一週間後、つまりアスクレピオス様を頑張つて説得して寝台ベッドから無理矢理這い出て、精神統一したり相応の服を用意したりして……

アイズ・ヴァレンシユタインと、二人きりでお出かけしているということだ。

## ☆☆☆

沈んでいた意識が、緩やかに浮上していく。

微睡みから醒めるようなこの感覚は、嫌いだった。意識がある限り苦しみ続ける自分にとつて、『起床』とは苦痛の始まりに等しく、『就寝』は悪夢の吹き荒れる雪原となる。つまり意識があろうとなかろうと辛いのだが、沈んでいく眠りと浮上していく目覚めでは、後者の方が憂鬱度が高かった。

ただ、なんだろう。

いつもは憂鬱なこの時間が、どうしてか、名残惜しかった。

……恐ろしい。自分はいつから、お布団から逃れられない怠け者になってしまったのだろう。社の子供達がそうするのなら可愛げがあるのだろうか、自分はもう14歳……らしい、のに。とても情けない。そして恥ずかしい。

何より、ここまで考えられる程思考が戻ってきているのに、未だに起きようとしていないのが、訳がわからなかった。

はたして、自分はそんなに怠惰な小人族だったか……？

(いや、違う。これは……)

自分を繋ぎ止めているのは、『熱』だ。

小さな身体を包み込むような『熱』。柔らかくて、暖かくて、どうしようもなく安心してしまう。いつそ暴力的なナニかに、自分は為す術なく敗北しているのだった。

ひどく情けない。そして抗い難い。負けてしまうのが当然で、これに勝ててしまう方がおかしいように感じてしまう。

嗚呼、この逃れられない温ぬくみこそは……。

「…………お母さん……………」

「…………うん、お母さん、だよ」

びよこん、と。

夜の空と共に視界に入ってくる金の髪。  
比喩抜きで、心臓が止まった。

「——あッ」

瞬間、脳裏よみがえに甦る今までの記憶——！

具体的にはアイズに『話をしたい』と言われてあれよあれよと予定シチュエーションと状況を組まれてからよくわからないまま中央広場で待ち合わせていざ対面するまでの記憶——！！

「なんつ、これっ、どうしっ……!!」

「フリーユが、倒れて。ここは、近くのベンチだよ」

「は？ ついや、それは、わかった、わかったから、もう起きる……！」

「駄目だよ」

とんでもない羞恥——アイズを母親と間違えるなんて！——に駆られるように身を起こそうとして、失敗する。頭を持ち上げられず、何か柔らかくて温かいモノに押し付けられる。

これ、アイズに膝枕されてる……!!? いや、それよりこの感覚には覚えがあるぞ……

！

慌てて妖精の瞳に魔力を通せば、光輝く風が自分の身体を覆うように展開されているのがわかる。思い出すのはあの夜、戦闘不能と判断したアイズにそうされたように、自

分は拘束されていた。

「や、やめなさいっ、人前で、こんな、恥ずかしいっ」

「恥ずかしいの?」

「恥ずかしいよ!」

小声で叫ぶという器用なことをやりながら、周囲に目を走らせる。

夜の中央広場である。

常日頃より、迷宮帰りの冒険者で賑わう場所である。

当然今だつてたくさんの冒険者がいる。

そんな所で「超大型新人」のアイズ・ヴァレンシユタインがどこの誰とも知らないち

びつ子を膝枕していたら、さて、どうなるだろう?

『おい、見ろよあれ』

『げっ、【人形姫】……』

『【剣姫】のがいいだろ、もう正式に決まってるだし』

『あれが【ロキ・ファミリア】の最速記録レコード保持者? おいおいマジで幼女じゃねえかや

ペーな』

『【剣姫】は何やってんだ? 迷宮帰りつて訳でもなさそうだが』

『銀髪の幼女に膝枕してる』

『マ?』

『マ?』

『マ?』

『ほう金銀幼女ロリですか、大したものですね』

『あいつも「ロキ・ファミリア」か?』

『年若い銀髪の女冒険者。聞いたことはないな』

『あ、目が合った』

『かわいい』

『かわいい』

『かわいい』

『ひえっなんか怖えぞあの銀髪ロリ作りもんみてえだ』

『いやかわいいなおい』

『いつからあそこに座ってるの?』

『少し前から居たぞ。【剣姫】が銀髪のことをずっと膝枕して撫でてた』

『【悲報】剣姫、百合』

『朗報の間違いだろお?』

……頭がくらくらする。

『かわいい幼女』と言われて凍える心が、『アイズに可愛がられている幼女』という言葉でひん曲がって、訳がわからなくなる。

このままでは遠くない未来、自分は頭がおかしくなってしまうだろう。

「アイズ」

「うん」

「どのくらいの時間、ここに座って、撫でてた？」

「一時間くらい？」

楽しかったよ、とアイズが微笑みながら言う。

それだけで、自分は何もかもを許してしまった。

無言で伸びてきた手を黙って受け入れれば、金の瞳は細まり、周囲からの熱視線が温度を増し、ひどい羞恥に鼓動が早まる。頬に触れる風が、自分がどれほど赤面しているかを伝えてくれる。

しばらくの間撫でられ続けて、もはや諦めの境地に至りかけていた頃、アイズは唐突に表情を変えた。

「ごめんね」

「え……？」

「がんばって、我慢して、待ったけど……もつと待たなきゃいけなかった。フリーユ、

まだちゃんと治ってない、よね。また無理させちゃった……」  
申し訳なさそうに瞳を伏せるアイズ。

言っている意味はよくわからないが、彼女がそんな顔をしているのは嫌だった。

「いや、身体は快調だよ。無理なんてしてない」

「でも……」

「それに、そんなことはきみもよくわかってるだろう。一昨日再会した時、挨拶もなしに衣服を奪って、全身を眺めた挙げ句、お腹に頬を押し付けてきたこと、忘れてないぞ」

「あれは、わたしは悪くないよ。いきなりセツプクしたフリーユが悪い」

「お陰でアスクレピオス様からの心証は最悪だ。きみと会うための説得に、どれだけ苦勞したか」

そう口にして、おどけるように肩を竦すくめてみせれば、アイズは申し訳なさそうにしながらも、口許を緩めてくれた。

拘束は解いてくれない。

「取りあえず、起きたいのだが」

「いきなり倒れる人を放っておくのは、よくない」

「……すまない、どうやら倒れたらしいが、その記憶がない。よければ、倒れる直前に何があったのかを教えてほしい」



実のところ体調は完全に回復してはいないが、それでも唐突に倒れる程ではない。空腹も覚えていない。しかし、アイズによれば、自分はいきなり倒れたらしい。

はつきり言つて心当たりは皆無だ。

なら、原因はアイズにある……と思う、けれど。

そういった意図で発言すると、アイズは困つたように眉を曲げて、「直前……直前……」と呟いたかと思うと、何かピンときたような顔で、それを口にした。

『お姉ちゃんつて呼んでいいですか』つて言つたら、倒れた』

「ああ、なるほど」

道理で記憶がないはずだ。

そんな爆弾を放り込まれたらそうなるだろう。

なにせ、それを言われるのは二回目らしいのに、心がぐしゃりと潰されるようなのだから。

アイズ・ヴァレンシユタインにそう言われるのが、これほど辛いとは、思わなかった。

「……フリーユ？」

心配そうに自分の名前を呼ぶアイズから焦点を外して、金の髪の向こう側を覗き見

る。

雲ひとつない夜空。物静かに佇む星の海は、あの日の光のようで。ちっぽけな自分に、なけなしの勇気を授けてくれる。

「お姉ちゃんは、止めてほしい」

努めて冷静に口にする。

身体を起こす。

アイズの風は既に解かれていた。

ありがたい。ちゃんとした話をするには、先程の体勢は不適切だろう。

立ち上がり、五歩前に出て、振り返り、アイズを見る。

年頃の少女らしい衣服を纏いながらも、佩剣している冒険者は、その金色の瞳を見開いて、自分を見上げている。

自分にとってその冒険者は英雄だが、冒険者にとっての自分は、さて、何者なのだろう。

「まずは祝辞を。ランクアップおめでとう、【剣姫】アイズ・ヴァレンシユタイン。きみと同じ戦場を潜り抜けられたことを誇りに思う」

「あ……うん、ありがとう。それで……」

「私にとって、きみは英雄だ」

はつきりと告げる。

妥協も欺瞞も許さない。

フリーユーカー・グッドフェローはアイズ・ヴァレンシユタインに救われ、英雄だと思っ  
ている。

その事実を、自分に焼きつける。

その上で、自分は確かめなければならない。

「きみは希望だ。きみは星だ。きみは私の悲願を叩き壊し、未来を拓いた。あの夜生  
き残ったというだけの話じゃない。きみは正しく、死に往く私を救ったんだ。

だから、きみはこれ以上私に構わなくていい」

「――」

「きみは英雄になりたいと言っただろう」

忘れるはずもない。

あの夜、再起を果たしたアイズが告げた誓いは、その響きすら自分の裡に残っている。  
だから、言わなければならない。

「英雄となるのに何が必要なかはわからないけれど、きみには『力』と『信念』があ  
るように思える。加えて環境も舞台も整っているのだから、順当に努力を重ねていけ  
ば、きつとなれる。そうして、多くの人を救い、途方もない数の希望になるのだろう。私

にとつてのきみのように。

だから……：そうだな。我ながら嫌な言い方になるが、『既に救った者』に無駄な時間を使う必要はない。きみの英雄譚における私の出番は終わっている……と、私は思っている」

それが自分の結論だ。

小人族のフリーユガーはアイズ・ヴァレンシユタインに救われて、これから先も無理くり生きていくだろう。

それだけの話だと、自分は思っていた。

けれどアイズはここにいる。

なら、それ以上があるのだろう。

「けれどきみは、私に会いに来たな」

「……うん」

「それは、何故だ？」

つまりはそういうことだった。

アイズが自分を求める理由がわからないのだ。

再会した時はじゃれてきてからすぐに追い出されてしまったし、今回の逢瀬に関して、小人族の英雄は『会ってやってくれ』としか言わなかった。

……ああ、この時点でもうおかしい。

『確実に自分と会う』、ただそれだけのために、L.V. 5フィン・ディムナの時間を使わせた「ロキ・ファミリア」の意図がわからない。

自分にそのような価値がある訳がないのに。

自分の役割は既に終わっているというのに。

「私は、きみの何だ……?」

「——戦友ともだち」

「そうか、ともだち……友達?」

こてん、と首を傾けてみる。

もしか、度重なる羞恥と英雄の眼前にいるという緊張から頭がおかしくなってしまったのかしら。

隠すことなく困惑を表に出す自分を他所に、アイズは畳み掛けるように言葉を連ねる。

「憧れの人、すごい人、綺麗な人、強い人、小さいのにとっても速い人、一緒に戦って

ほしい人、『家族ファミリア』になつてほしい人……泣いてほしくない人。笑ってほしい人」

「え、え、うあつ、んううう?」

「わたしは、あなたに、笑ってほしい」

「えっと……笑えばいいのか？　じゃあ、はい」

目尻を下げて、口角を上げてみる。

「違う」

「むう、手厳しいな」

「……歩きながら、話そう？」

ガチャリと短剣を鳴らして、アイズは立ち上がった。

「フィンも、フリーユに『ロキ・ファミリア』に来てほしいって言ってたの」

かつん、かつん、等間隔で響く足音の合間を縫うように、アイズは言った。

バベル内部の、どこかの通路だった。

魔石を燃料にして動く昇降機を乗り継ぎ、そこから階段を用いて更に上層へと向かって  
いる。

何故か、アイズは頑なに目的地を教えてくれないが……

（バベル上層は力ある神々の住まう領域と聞く。どこぞの神様に会いに行くつもりなのか……？）

「フィンに、英雄って何って聞いてみたんだ」

「っ、ああ。それで？」

「難しい話だね、って笑ってた。英雄にも色んな人がいて、どうしてなったか、何をし  
てなったか人それぞれだから、結論は出せないって」

「それは、そうだろうな。竜殺しの英雄がいれば、救国の英雄だっている。死病の治療  
法を確立した医者なんかも英雄と言えるだろう」

それこそ、かの「勇者」<sup>フレイバー</sup>だって、小人族の英雄らしいし。

なんて思ってしまう自分は、異端の小人族なのだろう。なにせタケミカヅチ様の社に  
はヒューマンと神様しか居なかったのだ。小人族が他の種族からどのような目で見ら  
れているのか、その偏見を打ち砕いた「勇者」の偉業がどれほどのモノなのか、自分  
はその実感がない。

病室で顔を合わせた時には、極めて腕の立つ槍使いという情報しか得られなかった。

「だから、英雄の定義は、人によって変わる。フィンはその言うってた」

「そうだな」

「……わたしは」

前を歩いていたアイズが立ち止まった。

その瞳には複雑な感情が浮かんでいる。

「わたしは、何をしてでも取り返さないといけない人がいて、だから、英雄になんてなれないし、なるうとも思つてなかった。わたしは、『誰か』のために戦えるような人じゃないから。そんなのは、英雄じゃないって、思つてたから」

「……」

「……でも、それでもいいんだって、あの時教えてもらったんだ」

ぎゅ、と胸に手を当てて、アイズは感慨深そうに囁いた。

「わたしは、わたしが救いたいと思つた人を救う英雄になる」

それは、聞くものが聞けば『なんて自分勝手な』とでも言いそうな誓いだつた。

無辜の民草を無償で守護するような、人々の望む英雄像とは明確に異なっている。

精霊の風を従え、英雄の剣を携えた、気質と才能からこの上なく愛された少女が目指すのは『わがままな英雄』。

竜に膝をつかせ、巨人を砕き、地平線まで広がる万敵を討ち滅ぼすに至るだろう冒険者は——自分が助けたいやつしか助けないぞ、と言いつ切つたのだ。

「だから、わたしはフリーユを救いたいの」

「……先程も言ったが、私は既に救われて——」



「わたしはまだ満足してない」

その響きは、有無を言わせない重みを伴っていた。

空を駆ける綺羅星のような決意は英雄の発言を揺らがぬものとし、一切の反論を問答無用で押し潰す。

「『あの人』が言ってたの。『誰かを救いたいのなら、まず、自分が笑わなくちゃ』って」

「――」

「わたしには『誰か』を救う余裕なんてない。最速、最短で、わたしはアイツを殺して、お母さんを取り戻す。」

だから、わたしが救った人をお願いする。

わたしは誰かを救えないから、救いたいと願った人に、誰かを救える人になってもらう。救ってくれるって、信じる」

「それは……」

「フリーユはまだ『笑えない』でしょ？」

「……私は」

「だから、フリーユには、笑ってもらおう」

それっきり、アイズは一言も喋らず、黙々と歩みを進めた。

自分も同じように沈黙して、彼女の後を追う。

……いいや、たとえば話を許可されてたつて、今の自分は何も話さなかつただらう。

アイズの『誓い』。

アイズの『英雄』。

感嘆せずにはいられない。

なんて尊く輝かしく、困難な道のりだろう。

助けたい人しか助けない？ わがままな英雄？ ——冗談にしても笑えない。

目の前の少女は、万人を救うつもりなのだ。

それが、夢物語や妄言虚言の類いでないことがわかつているからこそ、震えてしまう。

これが『英雄』。

これが『希望』。

もはや言葉も出ない。

アイズのためなら、自分はなんの躊躇もなく命を懸けられるだろう。

やがて、ひとつの扉が現れた。

「開けるよ」

アイズはそういって、自分の手を引き、そこへと連れ出した。

——そこには、天空があつた。

一面の夜天。

星々の輝きで満たされた大海。

そこは、自分の知る内で最も空に近い場所だつた。

「バベルの、頂上。星が好きだつて聞いたから……それならここだつて、みんなが」  
アイズの言葉が、今だけは遠い。

彼女の声以外、なんの音も遮るものもない空間で、一面の夜空を独り占めにする。  
まさしく、絶景だつた。

「綺麗……」

自然と、涙が流れていた。

育ち故郷である社を飛び出し、海を渡り、アポロン様と出会い、怪物どもを殺して殺して殺して、冒険に臨んで。

取り巻く環境も、自分自身もひどく変化したけれど、あの日自分を救つた夜空は何も変わっていないかつた。

その事実を改めて嘯み締めて、みっともなく泣いてしまう。

「ああ、自分は、自分はっ……」

「フリーュー……」

「うああっ、ああああああっっ……!」

金色の月に見守られながら、ただ泣いて、泣いて。

落ち着いた頃には、目元がすっかり腫れてしまっていた。

年下の女の子の胸にすがって泣きじやくったという事実には、消えかけていた羞恥心が燃え上がる。

「フリーュー」

アイズが言った。

伏せていた瞳を向ければ、そこには英雄が居た。

彼女は静かに近づいて、自分の手を包むように、柔らかな両手を添えた。

「……わたしは、フリーューの過去を知らないし、どうすれば笑ってくれるのかも、わからないけど」

その言葉で思い至った。

自分の『好きなもの』——夜空を見せるために、わざわざバベルの頂上まで連れ出したのは……きつと、自分を笑わせるためだったのだ。

少くない手間と時間をかけて、アイズはフリユー（じぶん）に笑顔をもたらそうとしたのだ。

「……それでも、フリユーには泣いてほしくないし、笑ってほしい」

「アイズ……」

「笑顔の方は、どうすればいいかわからないけど……今、ここで、約束する。

わたしは二度とフリユーを泣かせない。どんな悲しみが立ちはだかつて、あなたの隣で一緒に戦って、一緒に乗り越えて見せる。

あなたは、わたしを救ってくれた……わたしを信じさせてくれた、わたしよりもずっと強い人だから。あなたが笑えるようになるまで——あなたが誰かを救えるようになるまで、絶対に、この手を離さない。

だから、フリユー——」

「わたしの、（ファミリア）家族”になっってください」

「えっ、断る」

「アイズの家族になる、つまり「ロキ・ファミリア」に入るのは絶対に無理だ。だってあそこヤバすぎるもん。」

「そもそも「ロキ・ファミリア」は最初に候補から外した派閥なんだ。女性比率がすごく高くて主神も女性、王族妖精ハイエルフが居てそいつの信奉者シンパの女エルフがわんさかいるとか地獄過ぎて笑ってしまう。紙面だけでも震えが止まらなかったくらいだ、そんな地獄が同じ都市にあるなんて——」

「……フィンの言った通りになった……」

「——あついやごめんアイズ、きみの家族に酷いことを言ってしまった、どうか許してほし……アイズ？」

アイズの顔が見えない。

何でかって、アイズが顔を伏せてるのもそうだが、距離が近すぎる。

先程まで握られていた両手はいつの間にか自分の胴に回っていて――

「ひゃんっ!? あ、アイズっ、何を!?」

「なって」

「んひゅうっ!?」

「家族になって……!!!」

「いや、だからそれは無理なんだって――ふにゅんっ!?」

「なるって言うてくれるまで、抱きつくっつ!!!」

「~~~~~」

無窮の夜天の下、柔らかくて温かい至福の地獄を味わう。

ふわふわと浮かぶ金色の月に、苦笑いされてるような気がした。

☆☆☆

結局。

冒険者フリーゲーターはなんとかアポロン様の元にいられることとなった。

顔を真っ赤にしてぐずる英雄殿の姿に形容しがたい感情を抱きながらも、彼女の要求を一部呑む形となり、お互いに一安心、という感じだ。

アイズとの逢瀬の同日、「勇者」とオルフェ団長、ロキ様、アポロン様による密談が行われていたらしく、命からがら『クスシヘビの診療所』に帰還したら真っ白になった団長とアポロン様がぶっ倒れてたり医神が荒ぶっていたりと……まあ、端的に言っただけであったのだが、それも過去のこと。今は元気なのでとても安心である。

そして。

「アイズ」

「……なに？」

「お姉さんはやめてくれ、と言ったが」



「うん。……そうだね、フリーユアーは、男の子だったんだもん。お姉さんは、よくないね」  
「……おれとしては、お兄ちゃんと呼んでくれるなら、それでも構わない」

過去のフリーユアー、どうか恨んでほしい。

あの時、フリーユアーは、生きると決めた。

たとえ未来いまのフリーユアーが、今まで以上の苦難を味わうこととなったとしても、それでも――。

「おれは、男だ」

身体は女兒だ。認めよう。はつきりと直視する。

男だったときの記憶はない。その通りだ。故郷も家族も一人称も、己の顔すらわからない。

それでも、『男』を握り締めようと決めた。

消えていくことから目を逸らすのではなく、かき集めて、繋ぎ止めて、しっかりと抱いて。

いつか、ちゃんと笑えるようになるその日まで――英雄の隣を、歩いていく。

L v. 2 ↓ L v. 3

m p. 11 『命名／灰別』

『アイズ起きませんねえ……そろそろフリユークんちゃんも限界なのですが——つと危ない今のは危なかった』

『これは再走ですかねー、【実験体】ガチャも爆死してる訳じゃないし、魔力特化の体質も記録更新狙えそうで惜しいんですけど……このまんまだと流石に無理です』

『——はい、終わりですね。俺の負け！　なんで負けたか次走までに考えといてください。アイズが起きてくれなかったからじゃないですかね？　……アСПのハイポで治療出来ないはずはないと思うんですけどねー……【耐久】の乱数で最低値引いてたのかな——おや？　この希望の花が咲きそうなBGMは……（棒）』



前回、アイズが謎の英雄ルート入りしたりワイヴァーン戦の後処理をしたり夜空の下でプロポーズ（）されたりした後日になります。

未だ疲労が完治しておらず、ろくに行動できない時間が続きます。なので、ベッドの上でりんごを咀嚼そしゃくするフリーくんには右枠に退いてもらい、ここで『再走していない理由』と『新規に獲得した特記事項・スキル』、『次の目標』についてお話ししようございます。

まず、再走していない理由について。

というのも、アイズからの好感度が一定以上になった時点で、専用のチャートを組んでいない限り、再走するのがベターです。

アイズと仲良くなると毎日のように押しかけられて付き纏くわれて交流く！ 冒険B！

親愛S！ の三点コンボを決められ、更にリヴェリアを筆頭とする他キャラクターとの関わり合いを強制されます。あゝ（憔悴）

無論、アイズと仲良くなること自体難易度が高いので、基本的には気にしなくてもいいのですが——『ワイヴァーン戦』で共闘する程度では問題ないのです——今回はなーぜーかー、アイズからの好感度が非常に高くなってしまうっており、ワイヴァーン戦の時点では再走するつもりでいました。

それを踏まえて、なぜ走り続けているのかを説明します。

といつても理由は単純で、アイズが英雄ルートに入っていること、スキル  
スランナース、オデッセイ  
 【星天旅路】と特記事項【揺るぎなき信仰（星）】を獲得出来たからです。

一つずつ見ていきましょう。

アイズの英雄ルート入りですが、これを説明するにはアイズの特性についてお話する  
 必要があります。

皆様もご存じの通り、アイズは『英雄』と『精霊』の子という極めて特殊な出自を  
 しています。それ故に、複数のフラグを踏んだり踏まなかつたりすることで、アイズの技  
 能や性格が変化するのです。

派生先は四つ。

魔法を捨て、代わりに「英雄の剣筋」を振るう通称『剣士アイズ』。

剣を握らず、魔法の運用に特化した通称『精霊アイズ』。

【恩恵】獲得までアイズに関わらない、または上記二つのフラグを半々くらいに踏むと  
 発生する通称『原作アイズ』。

そして、アイズに『英雄になりたい』と強く願わせることで誕生する通称『英雄アイ  
 ズ』。

この四つのうち、今回は英雄アイズになった、という訳です。

そして、先程言ったように、アイズ・シリーズはそれぞれ性格が異なるのですが、英

雄アイズはアイズ・シリーズで最もコミュニケーション力が高く、モンスターへの憎悪が精霊アイズの次に低いのです。

一言で纏めると、『みんなと仲良くなれるアイズ』になります。

そして、みんなと仲良くなる仕様上、他のアイズよりも好感度を稼いだ際のリスクが少ないです。なにせ他のキャラクターとも同じように仲良くなっていますので、他のアイズのように過度に執着されたりしません。

ですので、英雄アイズなら……と妥協したんですね。

いやキツイのですが。

次にスキルを見ていきます。

ステランナース・オアツセイ  
【星 天 旅 路】

・完全走行。

・《直立》時、全アビリティ補正。

・如何なる条件下でも天空視認可能。

重要なのは一番上の『完全走行』。

これ、極めて強力なレア技能です。

特記事項の【資質・完全走行】がAランク、と言えばそのヤバさが伝わるでしょうか。

その効果は“歩行能力のカンスト”。所有者の『歩く』、『走る』動作を完全なもの

します。

具体的にはダッシュ時のスタミナ減少がなくなり、かつ擬似的なアーテル・アシスト「縁下力持」になります。つまり最強だな……？

最後に【祝福：揺るぎなき信仰（星）】。

（星）がついていることを除けば、原作開始時点のオツタルが持つてるヤツです。

ランクは堂々のA！ その効果は、強力な『精神防御』と、畏怖による『重圧』、瀕死状態での『戦闘続行』です。職業：神官の場合行使可能となる『奇跡』の倍率をガン上げしてくれる効果もありますが、このRTAでは関係ないのでスルーします。

特に強力なのが『精神防御』で、その倍率はランクAまでの特記事項では堂々の一位。ドイツクスの呪詛カース「フオベートル・ダイダロス」を真正面から打ち破れるレベルです。『重圧』はRTA的に嬉しい技能で、敵対した知性体の能力を下げる事が出来る他、好感度の調整にも使うことができます。

もちろん『戦闘続行』も有用です。RTA的には、これのお世話にならないのが理想ではありますが、これがあると安心感があります。走者の心労を減らしてくれる良技能ですねえ！

あえて欠点を挙げるなら、習得条件が鬼畜なのと、『信仰対象への絶対的な忠誠』が付与されることです——オツタルを見てもらえばわかりやすいかと——フリーユ—

の場面はかなり特殊でして、アイズに対して身も心も全て捧げちゃってはいませんでした。その詳細は今後の動画<sup>はなし</sup>で出てきますので、まあそれまで待つててくれや。

以上が再走していない理由になります。

デメリットはキツイですが、それを超えるメリットが発生しているんですね。

本音を漏らしてしまうと、「幸運」と「完全走行」の両立はかなり難しいので、そのデータ取りも兼ねてたりします。

——一旦ゲームの方に戻ります。診療所でゆっくりしてるフリーユークンに來客があるようです。

いやまあアポロン様なんですからね。毎日お見舞いありがとナス！

そしてアポロン様によると、フリーユークンに新しい武器を宛がってくれるようです。ワイヴァーン戦で失くした湾刀の後継ですね。Lv. 2ランクアップ後に武器を新調するのはチャート通りなのですが、これ、ガバです。

何がガバかと言うと、元々Lv. 2へ昇格した際の『お祝い』に『単<sup>ツ</sup>独<sup>ク</sup>探索の許可』をいただく予定だったからです。なので、その『お祝い』を『武器の新調』で潰してしまつたのはい逃れようのないガバなんですな。

ただまあ、フリーユークンがソコを許してもらえらかつて言われると……みたいなところ



ろはあるので、そう悲観はしていません。

深夜に勝手に迷宮行って大怪我した奴が『ランクアップしたんでソロ探索させてください』とか言ったところで、駄目です（慈悲） 知ってた（特大赤字） ってなる未来が見えます見えます。

ただ、ソロ探索させてくれないとやれない事もあるので、出来るだけ早期に得ておきたいです。アポロンからの好感度がここまで高くなるのは想定外だったので、そのあたりの折り合いをなんとか付けたいですね。

アイズがいるからソロ探索は無理でしょって？ そうねえ……

アポロン様のお話が終わりましたので、獲得したスキル・特記事項の解説をしていきます。

といっても『再走しない理由』の方で重要なのは語りましたので、残ってるものを軽くお話しします。

まずはスキルから。

カインネズミ・プレス  
【?????】

・《神久》に補正。

・水上歩行可能。

・《水上》条件時全アビリティ補正。

・性自認により変容。

こちらは新規に獲得したのではなく、【半端者】が変化した物になります。

雑に言えば【半端者】の劣化版です。

補正の倍率が軒並み下がり、『受け入れる程に強化』も消えています。

これだけならばーつつかえ、の一言なのですが、最後の一文が不穏ですねえ……（棒）

L v. 3 になったらまた内容変わるから見とけよ見とけよ。

続いて特記事項【資質：英雄信奉者】。

ベルくんの初期資質の一つなので、既プレイの方はご存じかと思えます。

英雄にまつわる知識判定に成功しやすくなったり、特定の場面で低ランクの勇猛技能が発揮されたりする資質です。

あれば便利。そんな感じですね。

以上、終わり、閉廷、解散！ あつたら嬉しいな程度の能力なので特筆する必要なし！  
です！

ゲームの方でも進展がありましたので、そちらを見ていきとうございます。

——やあああつと完治しましたよもおおおん。

というわけで、フリーユークン完全復活です。やったぜ。

診療所でのほぼ軟禁生活から解放され、ダンジョン探索が許可された訳ですが、まず最初にやるのは……武器の受け取りです。さっきのやつですね。

ブツはもう用意されているらしいので、早速作り手の工房へ向かいましょう。相も変わらず路地裏を利用して移動します。

後継武器ですが、例のワイヴァーン君の素材を使用します。ここが幸運チャートのいいところで、あのワイヴァーン戦でドロップアイテムが出るかはランダムなのですが、【資質：幸運】を持っていると、確実に、かつ上質な素材を落としてくれます。なので、安心してチャートに組み込めるんですね。

この『【幸運】によって確実に質のいいアイテムを獲得する』手法は今後もお世話になるので、覚えておいてほしいです。

あっそうだ（唐突）。豆知識ですが、アイズは竜を素材にした武器を決して使いません。理由はもちろん、お分かりですね。

今回のワイヴァーン討伐はフリーユークンとアイズの共同になるのですが、そういった場合、ドロップアイテムと魔石は折半するのが定例です。しかし、アイズはワイヴァーン君の素材を受け取り拒否します。売るのにも難色を示す感じですね。よってワイヴァーン君の素材は全てこちらが確保出来まして、こうして武器に費やせるんですね。

ワイヴァーンイベントを通過するメリットの一つがこれです。あのワイヴァーン強化種の素材を用いた武器はほぼ確実に『第二等級武装』になり、それを『中層』に持ち込めるのは大きな利点です。

ちなみにここまでお話しした時点でお察しかとは思いますが、ワイヴァーン戦直後に気絶したのは酷いガバです。今回は幸いにもロキ・ファミリアの方がドロップアイテムを回収してくれましたが、運が悪いとそのままロストします。まさかあそこまでポロポロにされるとは思ってませんでしたからね、仕方ないね。

さて、例の鍛冶師の工房に着きました。

今回武器の製作をしてくれたのは、なんと「ヘファイストス・ファミリア」の幹部です。

元々のチャートでは「ゴブニュ」に依頼する予定だったのですが、この変更には幾つかの要因があります。

フリーユくん個人ではなく「アポロン・ファミリア」からの依頼になったことと、「勇者」の介入によるものです。

先程お話ししたように、本来はフリーユくん個人で武器の製作を依頼するはずでした。つまり、『二つ名』を持たない一般小人族』として依頼する予定だったのです。そ

うなると「ヘファイストス」では末端の鍛冶師しか斡旋してくれず、せつかくの素材を活かせません。その点、「ゴブニュ」ではお金さえ用意出来れば腕のいい鍛冶師が出張ってくれます。通常プレイ、RTA問わず、名声が足りてない状態で武器を注文する場合は「ゴブニュ」に依頼するのがいいと思います。

では、そこに「アポロン」と「勇者」がくつつくとうなるか。端的に言えば名声とコネの問題が一気に解決されます。

『どこぞの木っ端冒険者からの依頼』が、

『有名派閥からの依頼で、かつ「勇者」の推薦つき』となるんですね。

それによって、「ヘファイストス」幹部への依頼が叶ったわけです。

今、扉から出てきた男性がその幹部兄貴です。

迷宮都市随一の魔剣使いにして稀代の魔剣研ぎ師。湾刀をメインウエポンにするなら是非お世話になりたい、名ウテの鍛冶師です。

RTAで顔を見る機会はありませんが、通常プレイで湾刀を使うなら、この鍛冶師が一番だと思います。

といっても、幹部兄貴とフリーユークンの関係は依頼主と鍛冶師以上のなんでもありませんので、特に会話はありません。さっさと武器を受け取って帰りましょう。

……と、行きたかったのですが。

この鍛冶師、武器の命名は担い手に一任するスタイルだったりします。

そして、フリークンにとつて、『名前を与える』というのはとても大事なことです。りします。

つまり——武器の命名にめっちゃ時間を使いました。

ガバかな。ガバかもしれない。ままええわ。いや、これは仕方ないと思うのですが。どうでしょうガバですかね？

『入力速度を考慮してほかにしろ』とか言われそう（未来予知）。それが出来たら苦労しないんだよなあ……。

あつそうだ（思い出し玉）。

今回、フィンのコネによって、幹部兄貴への依頼が通ったのですが……

つまりフリークン、現在『フィン監修の武器を携行する女小人族』となっております……

……ツスー……いい……天気です……

☆☆☆

コンコンコン。

控えめに響く音が、男の鼓膜を震わせた。

煤と鉄の香りに満ちた、鍛冶師の工房である。

むくりと上体を起こす。寝ぼけ眼で見回せば、どうやら作業を終えた後、そのまま床に転がり眠りこけていたらしい。

なにせ徹夜での鍛冶作業、それも今までにない依頼だ。構想を練り、試作を繰り返し、そうして完成に至ったのが、さて何時だったか。

工房の主はのろのろと歩を進め、机に放られていたパイプに火を点けた。工房に紫煙が満ちる。嗜好品を兼ねた賦活剤である。難儀な依頼をこなした後はこれを吸うのが鍛冶師の日常だった。

そうして頭のもやを晴らした鍛冶師は、ふとあることに気づいた。

自分を起こした音。来客。期日。依頼主。

紫煙の立ち込める工房。ゆらゆらと舞う煤。鉄の香り。

男は換気の必要性を感じ取り、依頼主にしばらく外で待つてもらおうよう伝えるべく扉を開けた。

はたして、そこには誰もいなかった。

「あん？」

右を見て、左を見て、もう一度右を見る。

いない。

「下です」

——いた。

なんかいた。

なんかとしか言い様のない変なのがいた。

いやにくぐもった肉声。てるてる坊主を思わせる、肌の露出の一切を排した風体。冒険者とは思えない劣悪な体格。つまりは不審者。

自然と腰に手を添えて、佩剣していない迂闊を思い出す程度に、推定依頼主は変なのだった。

「武器を、受け取りに来ました」



「……あー……すいやせん、なんぞ証明出来るモノは持ってますかね」

「あります」

「どうやら、依頼主らしかった。」

『これが武勇名高きブレイバーの“推し”か』と、男は驚けばいいのか呆れるべきか迷った。

——なんて思っていた鍛冶師だが、太陽がバベルの頂に届く頃、その評価は大分変わっていた。

「むん……むん……」

依頼主は——フリーユは、唸っていた。

簡素な拵こしらえの鞘を、ひいてはそれに納められた一振りひと振りの刃を前にして。

抜きもせず、触りもせず、じい、と見詰めていた。

無論、布で覆い隠された視線を窺い知るのは難しいが、実際まあなんとなく察せられる。

なにせ、鍛冶師が何も言わなければ、フリーユはずっと同じ姿勢で、同じように唸っているのだ。

放っておけば物言わぬ地藏にでもなっているようなので、鍛冶師は定期的に声をかけて

いるのだった。

「そんなに決められんもんですかい」

「すみません」

「や、別に。聞きたいって言ったのは俺ですんで」

そう、この奇妙な空間は鍛冶師の一言によって生まれたのだ。

『命名は任せるが、俺にも教えてほしい』。

鍛冶師はいつもと同じように依頼主にそう言つて、現在、フリーユはめちやくちや悩んでいた。

——まあ、悪い気はしねえが。

究極、武器は消耗品だ。

肉切り包丁などと呼ぶつもりはないが、正しく扱えば刃零れなど起こるはずなしと宣のたまう奇人に耳を貸すつもりもない。

戦場を試合場と勘違いしている達人とやらを、鍛冶師は何人も見送っている。

壊さぬよう使い、壊れるまで使う。そうして新しい武器を握る。そういうものだろう、と鍛冶師は考えている。

故に、武器の名付けはぞんざいなくらいが丁度いい。

だが、懊悩される分には嬉しいものだ。

——懊惱つてほどふらふらしちゃあいねえか？

工房の隅っこに視線を飛ばす。

思索に耽るその様は、さながら難問に挑む学者か、神の啓示を欲する巫女のように。それらに共通するのは、洗練された専心だ。

自分の作品の命名に長時間懊惱している時点である程度の好感を抱いているのだが、鍛冶師の目には、フリユ一の『一つの物事に集中する』技能が特別なものに映っていた。

——無名<sup>L.V.1</sup>の剣士に出来るもんじゃねえ、と思うんだが。

多くの鍛冶師が炉と槌と鉄と向かい合う際、理想とするのは『没頭』である。目の前の炎、鉄の音色、打ち手を残して世界全てを消し去ることこそ鍛冶師の理想だ。

そして、この依頼主<sup>フリユ一</sup>の専心は鍛冶師の理想からは程遠いモノだと男は感じていた。

専心にも種類があり、それぞれの理想がある。鍛冶師の理想、巫女の理想、剣士の理想。通ずるものはあれども、その深淵は異なる。

そういう意味で、フリユ一の専心は鍛冶師のそれとは異なる。

異なるが、名無し<sup>L.V.1</sup>が持っているいい練度ではない。

なので、気になる。

「振つてみりゃあどうですかい」

つい、口に出ていた。

「有名な話がありましたね。振るうと風切り音が燕の飛び去るようなんで、その銘を『紅燕』と。使ってみて初めてわかる事もあるかもしれせん」

「……しかし、ここでは」

「素振り程度なら問題ねえです」

「……………む」

至極真面目な顔で口にしたこの鍛冶師、頭の中は『この剣士が本業をしている様を見たい』で染まっていた。

対し、フリーユは僅かに逡巡する。自分の種族と職業が、つまりは『小人族の剣士』という肩書きがもたらす恩恵を团长その他から語られているフリーユである。無駄に注目されてはいけない立場でもある。はたして、目の前の男性に剣を見せていいものだろうか。

——いいか。【ヘファイストス】の幹部だし。

あとはそう、いい加減フリーユも煮詰まらない名付けに疲弊していた。

「では」

「おう」

すつくと立ち上がり、フリーユはその湾刀を抜いた。

露になる純白の刀身。小人族のために拵えられた武装は軽く短く、しかし斬れ味は申

し分ない。

会心の出来だという自負が、鍛冶師にはあった。

小人族用の灣刀を打つのは初めてだったが、その程度で音を上げては「ヘファイストス」の名に恥じる。お陰で連日の徹夜を強いられはしたが、まあそんなのはいつものことだ。

鍛冶最大手派閥幹部の面子を保てたことに改めて安堵した男は、フリーユーが刀を構えたのを察知し、緊張感皆無の心持ちで観戦の姿勢をとった。

「……」

素振り。

そういえば、最後にそれをしたのは何時だったか。

早朝から深夜まで迷宮に潜り、残りの時間は全て休息に宛てていたフリーユーにとって、その基礎的な鍛練は酷く懐かしいものだった。

医神と共に生活するようになる前、本拠に居た頃はしばしばやっていたが、それも社時代に比べればあっさりしたものだ。

悪いことでもあり、良いことでもあった。

フリーユーにとって、素振りとは劍の糧ではなく、己の身体から目を逸らす手段でしかなく。

ただ只管ひたすらに専心し、自分の全てを世界から消し去ることを目指していたのだから。

「ふうっ——」

それも今は叶わない。

その願いはフリーユ自らの手で斬って捨てている。

今の望みは、目を逸らさないこと。そして、アイズの力になること。消えることも、死ぬことも許されない。

故に、フリーユの手の内にある輝きは特別すぎた。

——あのワイヴァーンの剣……

瞼の裏に映る死闘。

自身の死をも厭いとわず、壮絶な決意をもって己を殺しにきた翼竜が、姿を転じ、刃となった。

「——重い……」

「えっマジですかい？」

「荷が、重い」

フリーユにとって、それはあまりにも大切すぎた。

「おれは名前しか残せなかった」

「……」

「名前だけに縫すりついて、今の今まで生きてきた。——そんな男が、名付けなんて」  
顔も、声も、性別さえも、彼／彼女には残されず。

ただひとつ、これだけは失いたくないと願ひ続けたものこそ、名前だった。

それを失えば終わるという確信があった。

名前を失えば、『男だった』という確信も消える。

そう名付けられた自分と今の自分が異なるものだと思えなくなる。

そして——何もかもを忘却して、可愛い可愛い女の子に成り果てるのだろう。

だから名前は大切だった。

名も知らぬ両親から、顔も判らぬ自分に贈られて、今も残っている唯一のものだ。

フリーユーにとって、それはあまりにも大事だった。

でも。

多くのものを容易に奪われた自分は、本当に、名前だけは奪われていないのだろうか

？

本当は、この名前だって——。

「ツツツ——!!!」

烈破の気合いをもつて、フリーユはその『疑念』を振り捨てる。会心の一振りが工房を斬り裂き、静寂を為す。

酷く、汗をかいていた。

前後の感覚が怪しい。

名前はとても大切なものだ。

名付けはとても大事なことだ。

だから、自分がそれを行うのなら、真剣に考えたい。

それで『考えてはいけないこと』に突き当たる度に、気が狂いそうになるので、こんなことはさっさと終わらせてしまいたい。

真剣に考えたい。

もう考えたくない。

どちらも、フリーユの本心だった。

「……おい、大丈夫か?」

異様な雰囲気を感じ取った鍛冶師が、顔の隠しを取り上げる直前。



それを制するように、幼げな声が響いた。

「『灰別』……というのは、いかがでしょう」

フリーユの肩に、妖精が腰かけていた。

『『灰色』とは『どつちつかず』。それを我が王、貴方はあの夜……あの腐れ幼女趣味トカゲ野郎との対決で別わかち、選択し、勝利しました。この剣はその象徴であると、私は考えます』

死にたいと願う自分と生きたいと願った自分。

『女』の身体からも、消え逝く『男』からも目を逸らしていた自分。

あの夜、あの戦いで、それは別わかたれた。

暗き死の誘惑を退け、薄明の生を選び取り。

『女』の身体をしかと認め、しかし己は『男』だと。

文字通り白黒はつきりつけた後、その手にあるのは『純白』の刃。  
故に『灰別』。決断の証。

「……『灰別』」

口の中で転がすように、フリーユはその銘なを復唱する。

良い響きだと思えた。

己を燃やすように最期まで戦い抜いた、あのワイヴァーンの武器に相応しい名だと。

灰色グレイからの決別にして、星のように燃え尽きた竜の灰遺物。

「今から、お前は『灰別』だ」

カアantz、カアantz——。

鉄の音を伴って、鍛冶師は槌を振るっていた。

「あれだけ振るえるんなら、それ用の調整をしてやる」と告げての、ただ働きである。耐久性をやや削り、威力と斬れ味を突き詰める。

「勘違いしてたんだが」

刀身の具合を精査しながら、鍛冶師はフリーユに声をかける。

「少し前の翼竜騒ぎ、上層に出たっていうワイヴァーンを殺したのは『ロキ』んところの世界最速記録保持者レレコードホルダーって聞いていたが……あれ、お前だろ」

「……」

「今回の依頼人は『勇者』プレイヤーのお気に入って聞いてたんで、『剣姫』が殺したワイヴァーの素材を流用したのかと思ってたんだが。さっきの口振りだと、なあ？」

「……アイズと一緒に、殺した」

「んじやあ『名無し』<sup>しんじやあ</sup>ってのは嘘だな。——そんな顔すんな、言われなくても口外しねえ。そいつのこともな」

一瞥すらくれず、鍛冶師はパックについて触れる。妖精を従える者は稀であり、大抵神々の間で取り合いが発生するが、鍛冶師にはどうでもいいことだった。——当の本人は工房の煤で遊んでいる辺り、察せられていたようで癩だが——。

実際「二つ名」はあんのか、と問えば、与えられていないと返ってくる。

なんぞ事情があるのだろうと、鍛冶師は雑に納得した。

結局のところ、鍛冶師と依頼人の関係でしかないのだし、そいつの全てを知らなくとも武器は打てる。

少なくとも、今は。

「よし、こんなもんだらう。握ってみろ」

「……これは」

「より軽く、より鋭く、より脆く。ぶつちやけ芸術品三歩手前だな。俺が普段使っているヤツよりやあマシだが。それで、どうだ」

「先程より、馴染みます」

「そりやあよかった」

「……ありがとうございます、鍛冶師殿」

では、と改めて礼をしようとしたフリーユから、鍛冶師はひよいと「灰別」を取り上げた。

きよとんとする依頼人に、鍛冶師は言った。

「デイーノ」

「……?」

「俺の名前だ。それで、名刺。お前にやる。こいつがあれば、俺並みの奴等と顔を合わせるくらいは出来るだろう」

言外に、誰にでも渡しているものではない、と告げるデイーノ。

困惑するフリーユに、彼はにいと笑った。

「そいつの整備は難しい。本格的に消耗したら持ち込め、俺がしてやる。その代わりにつかてめえの【二つ名】を思いっきり言えるようになったら、俺に教えろ」

差し出された手を、フリーユはしばらくぼうつと見ていた。

デイーノは辛抱強く待ち、パックは目を細めていた。

そして。

おずおずと、小さな手が重ねられた。

「……よろしく、お願いします」

## mp. 12 『遠征／新世界を目指して・起』

水面に投げられた波紋はいずれ大きな波となって帰ってくるRTA、久し振りに再開していきます。

前回、黒竜（偽）くんの素材を元手に武器を作成した所からです。

診療所に戻って、待ち受けていたアポロン様に湾刀を見せているフリーユくんを背景に、ざっくりと今後の予定……というより、チャートの変更点をお話していきます。

というのも、本来のチャートではこの時点で「ソロ探索」を達成しており、かつアイズとの親愛度もそこまで高くない——原作アイズにとつての自派閥下位団員程度——ようにしていたのですが、みなさまお察しの通り、度重なるガバガバガツバーナ→アのせいでもうめちやくちやになってしまっているのです。

そんな訳で、ここで少しお時間をいただきまして、L.V. 3到達までの道筋をざっくりとお話しようございませぬ

まず最終的な目標ですが、これは変わらず「大劇場イベント」での「ランクアップ」です。

これに関しては、この時期にアポロン・ファミリア入団という怪しい択を採用してい

るところさんから察していた方も多いと思われます。暗黒期では珍しい闇派閥イウィルスほぼ無関係の修羅イベントで、しかも『迷宮都市オラリオ』では滅多にない異界攻略型ということで、知名度はかなりのものです。数多くの先駆者様が動画をアップされていますし、実機でプレイされた方もいらつしやるでしょう。

今回はそんな『大劇場イベント』をチャートに組み込んでいます。

……おいおいおい死んだわアイツとか言われてそうですが私は健常です。多分これが一番早いと思うので採用しています。この走りが世に出ている時点である程度はうまくいつてるからね、多少はね。

まあ、見とけよ見とけよ！ とだけ言っておきましょう。もちろんガバもあるよッ

!!! (白目)

その『大劇場イベント』……以後『大劇場』と呼称しますが、ともかくその『大劇場』の開始は夏の中頃。現在は冬の終わり頃ですので、あまり長くない猶予時間を何に費やすのか、その配分が大事になります。

——まあ【幸運】とったりコミュニケーションにしている辺りでもうお察しでしょうが『金策』です！ 『人脈作り』も『経験値稼ぎ』も投げ捨てて、とにかくお金を集めます！

何故かつていえば小柄鈍足非力幼女のステイタス上げても恩恵少ないしネームドと仲良くなるとタイムが伸びるんですね。なので大金用意して武器作って奇襲暗殺襲撃

に徹します。

具体的には占星術で希少鉱石をサーチして売り捌き、黒竜戦でも使用した『占星術師のナイフ』の上位装備の獲得を目指します。ランクアップの条件である『D評価到達』と『上位経験値』は全て『大劇場』<sup>シター</sup>で得る予定です。

よって「アストレア・ファミリア」の面々とも関わりません。彼女等と親睦を深めると暗黒期のほぼ全てのイベントに『スターキヤラクター』として参加できるという大きなメリットが発生するのですが、今回は利用せずに走っています。

ひたすら迷宮に潜ってイベントを回避しつつ鉱石を漁り、短期間で上位の武具を作成する——というのが、当面の方針になります。

というのが本来のチャートでの話。

冒頭でお話ししたように、というか今までこのRTAをご覧になった方には自明としますが、今回の走りではけっこうなイレギュラーが発生しています。

アイズとの想定を超えた友誼と、それに付随する「ロキ・ファミリア」からの注目です。

これらによって上記のチャートが完遂不可能になり、いわゆるオリチャーを敷くこと

になりました。

というのも、アイズと行動を共にするにあたっていくつかのイベントをこなす必要があり、それによって金策の時間が足りなくなりました。狂いそう……！

かといってフリーくんを投げ出すのは嫌だったので、以前作成した『アイズを仲間にするチャート』とフリーくんが得てきた手札カードを組み合わせていい感じに仕上げることとなりました。まあいい感じになったんじゃないですかね？（投げやり）

ただそのせいで、RTAにおいて重要な再現性を著しく欠いてしまったのが非常に残念ですが……これはこれで資料的な価値を出せた気がするのでヨシッ！

——動きがあつたので一旦プレイ画面に戻ります。

現在ダンジョン13階層、つまりは中層一步手前なのですが、そこで不幸にもインファンクト・ドラゴン赤塗りの高級トカゲに衝突してしまいました。はあく……（くそでか溜息）

Lv. 2になった今、こいつにはなんの用もありません。素直に逃走を図りましょう。——と、普段の私なら行動しているのですが、今回はちよつと事情が違います。

相方が退却する気ゼロなのは火を見るより明らかなので、日が暮れる前にさっさと殺しとぅございませぬ。



……じゃあ、氏のうか。



『——グオオオオオオオオオッ!!!』

咆哮を轟かせ、真紅の巨軀が猛進する。

ダンジョン・ギミック 迷宮の仕掛けの薄霧を散らしながら突撃を敢行するのは、下級冒険者より『小竜』と

呼ばれ恐れられるモンスターだった。

纏うのは血に濡れたような赤色の鱗。鉄の鎧さえ容易く貫く巨爪をもつて大地を踏

み締め、丸太めいた尾つぽで轍わだちを成す、正真正銘のドラゴンである。

ダンジョン上層でも最深部にあたる11、12階層にのみ極少数が徘徊する、上層屈指の稀少種にして、唯一の『竜種』。

それが現れたのなら、その場の冒険者全員の結託によつて討伐されるか、その場の全員が塵殺されるしかない、上層最強のモンスター——インファント・ドラゴン。

そんな最弱の竜と、一党は戦闘状態にあつた。

「フリーユ、大丈夫？」

「問題ない。おれの【敏捷】でも、アレの突撃からは逃れられるらしい」

正確には、交戦しているのはフリーユとアイズの二人のみ。ダンジョン一階層よりここ十二階層まで、保護者達は傍観に徹していた。今回の探索の目的には、幼女コンビの相性や問題点の洗い出し、ひいてはパーティに必要な人員を見定めるための情報収集も含まれている。彼等は努めてアイズ達の邪魔をしないよう立ち回っていた。

もちろん、フリーユとアイズはLv.2であり、上層のモンスター相手なら難なく突破出来るだろうと踏んでのことではあるが——

「小竜以外の敵影なし。一瞬でいい、注意を引いてくれ。おれが殺す」

「……無茶、しない？ 【復讐姫】を使って、確実に——」

「おれ達の目的は下層だ。『前座』に手間取らせはしない」

淡々と。

しかし確実に。

小人族の剣士は、竜の瞬殺を確約した。

楽士が顔をひきつらせ、勇者が笑みを深める先で、アイズが首肯を返し、フリーユは構えていた第二等級武装《灰別》を鞘に納める。

それはここまでの道中でも数度披露していた、小人族バルウムの十八番の予兆だった。

『ヴルルルルウツ……!!』

インファント・ドラゴンが苛立ちを示すように呻く。

己の突進をちよこまかと動き回って凌いだ敵を睨めつけ、今度は逃さぬと照準する。

奇しくも同刻、冒険者と怪物は互いの抹殺を予告した。

およそ40Mメートルの距離を離して対峙する両者。運動性能からして二秒かからず零にならう間合い。小竜が四ツ足を隆起させ、**「剣姫」**ソード・エールが愛剣を握り直し、迎撃の構えを取る。

先に動いたのは、やはり竜だった。

『——オオオオオオオオ!!!』

選択した行動は『突撃』。

しかし、その赤眼は爛々と猛り盛り、アイズへの殺意と悪意に満ちている。

先程と同じようにはいくまい、何かしら仕掛けてくる、少女の中の経験値ばうけんしやがそう訴え



「ふッッ!!」

これ以上ないタイミングで、短剣を叩きつけた。

『——オオ?』

風よりも疾く迫る巨爪に剣を合わせ、力一杯に己の身体を跳ね上げる。

【力】と【敏捷】の足りないフリーユでは為し得ない、冒険者の絶技である。

真摯に積み上げられた能力と英雄の剣技、何より眼前の脅威から目を逸らさない強靱な胆力で、ありふれた窮地を潜り抜ける。

その蜥蜴面とかげづらに驚愕の感情を張り付けるインフアント・ドラゴン。ひび割れた爪、少ない出血、破片を肉に埋め込まれた激痛に構うことなくアイズと瞳を合わせたのは、死なないためだ。

中空を泳ぐ、金の瞳の剣使い。

ソレから目を離せば、きつと死ぬ。

故に、上層最強の怪物は、アイズから目を離せない。

「——」

交差する視線。

アイズの金眼に、小竜の双眼が映り込む。

小竜。

竜種。

憎き竜。

ぞわりと。

アイズの背中から、昏い炎が溢れ出す――

(違う)

アイズは跳ね上げた際の反動に逆らうことなく後方へ身を投げた。

竜に向かつてかっ飛ばような角度調整は可能だったが、風を纏わぬ身での空中戦はリスクが高いと判断。迎撃され、叩き落とされれば、L v. 2の「耐久」でも危ういものがある。

(それじゃ、だめ)

そうなればこの先にいけない。

風とスキルを温存した甲斐がない。

探索が終わってしまう。

あの人との初陣が終わってしまう。

それは嫌だ。かなり嫌だった。心の中のアイズも頷いている。

それに、何より。

(それは、わたしの役割じゃない)

そう、口の中で呟いたのと同時に。

アイズの目の前で、竜の首が飛んだ。

』

「何が起こったのかわからない」。

そんな表情で地面に落ちていくインファント・ドラゴンが最期に見たのは、妖精を足場にしての二段ジャンプで高度を稼ぎ、竹を割るような軽快さで首を叩き落とした、小さな冒険者の姿だった。

「ごめん、パツク」

「何事です、我が王」

「事前に取り決めていたとはいえ、君を足蹴あしげにした」

「むしろ褒美です、我が王」

誇らしげに胸を張る小さな友人に、何とも言えない顔をするフリーユの背後で、インファント・ドラゴンの肉体が崩れ落ちる。上層最高の魔石と、ドロップアイテム『小竜の巨爪』と『小竜の堅鱗』と『小竜の逆鱗』を残して、モンスターが灰と化す。

「……驚いたな」

フリーユに駆け寄るアイズの姿を見て、フィンは素直な感想を零した。

「そうでしょう、そうでしょう、うちのフリーユは【劍姫】にも決して劣らない、才能ある冒険者かと」

「ああ、いや、それはそうなんだけどね……」

楽しげに語るオルフェに、フィンはやや曖昧な微笑みを返す。

言葉を濁したのは、フィンが想定していたフリーユの戦いの方が、実際のそれとは大きく異なっていたからだ。

端的に言えば『すっごく渋い』。

『アイズから絶賛された剣士』にして『武神の弟子』なんだから、てっきり王道っぽい、つまりは真正面から突撃して大暴れ、ばっさばっさと殺しまくる感じの戦い方だと思っていたのだが……

「隠密から暗殺、妖精術からの暗殺、視線誘導から暗殺、乱戦に乗じて暗殺、囮で気を引いて暗殺……」

「いや、まあ、その……いつもは普通に戦ってるんですよ。あんなえげつない立ち回りは僕も初見です。ちゃんと戦ってもフリーユは強いんですよ、ほんとに」

「それはもちろん、わかっているさ。ただ、なんというか……」

アイズが気に入るような冒険者か、と言われると、やや疑問が残る。

いや、技量は申し分ない、それは確かだ。剣の腕前は第二級まで含めても最上位だろ



う。立ち回りはともかく。

オルフェ曰く、普段の探索では真つ当な戦い方をしているらしいが、しかし。

「武神の弟子の戦い方じゃない、かな」

碧眼が弧を描く。

字面こそ否定的だが、口調はむしろ愉快気だった。

英雄に見初められた少女、神授ならざる魔術の使い手、異端の小人剣士。なるほど素晴らしい！

その素質を見定めるために、此度のプチ遠征を決行したのだ。

【ロキ・アポロン】混成パーティ、総勢4名。

両派閥の団長と幼女×2が目指すのは『下層』。

L v. 2 になったばかりの女兒を新世界にぶち込むという、主にオルフェの胃を痛めつけるこの悪魔的企画は、極めて順調に進行していた。

## m p. 13 『遠征／新世界を目指して・承』

金髪少女と戯れるRTA、まだまだイクゾーツ！

前回、くそ雑魚トカゲくんを成敗したところから始めていきます。

ここからしばらく面白くない映像が続きますので、この時間を使って、現在フリーくん達が何をしているのかを説明します。

端的に言えば冒険者依頼です。

内容は『人魚強化種の討伐』。原作におけるベル君救出クエストに代表される固定クエストではなく、ランダムで出現するフリークエストです。

難易度はけっこう高め。そもその戦場が『下層』なのと、相手が『魅了』持ちの人魚なので、パーティ編成をしくじると普通に返り討ちに遭います。さらに人魚には不利を悟るとすぐ逃走に転じるAIが組まれており、仕留めるには大規模な氷属性攻撃や、拘束技能が求められます。

そんな面倒な冒険者依頼をなぜフリーくん達が受けているのか、そして実際クリア出来るのか。順番にお話しします。

まず受注した理由ですが、アイズと公然とお付き合い（意味深）するための一手になります。発案者はもちろん【勇者】<sup>フレックスパー</sup>。

フリーユークんとアイズがパーティを組む際の問題が二つありまして、ひとつは『他派閥であること』、もうひとつが『アイズが最速記録保持者であること』。この二つを解決しないと、大手ファミリアにして閩派閥対抗派閥筆頭である【ロキ・ファミリア】の最速記録保持者と閩係を持つことは出来ません。

基本的に派閥間の軋轢<sup>あつれき</sup>は深く、また本来の記録保持者であるフリーユークんと公的な記録保持者のアイズが絡むのは危険である、という話ですね。

それじゃあ一体どうするのか——を全て説明したりはしません。RTA的には全く無意味ですし、『【勇者】が何とかしてくれました』の一言で済んでしまうからです。なのでここでは、それぞれの問題をどう対処したのかだけ右枠に載せておきます。

§ §

『他派閥であること』——派閥同士での付き合いは必要ない（フリーユークとアイズだけの個人的な関係）ので、公然とした『出会い』をさせ、周囲に認めさせて閩係を育ませる。

『最速記録問題』——ギルドと交渉し、フリーユークの冒険者歴をいじってなんとかす

る。

§ §

そして、今回のクエストは、この二つの両方に関係しています。

フリーユークンとアイズは『黒竜戦』で出会いを果たしましたが、公的にはワイヴァーン殺しはアイズひとりの偉業、ということになっています。なので、それとは別の『公的な出会いの場』を用意する必要があるのですが、それがこのクエストです。一般冒険者視点で『フリーユークンとアイズはこのクエストで出会ったのだ』と思わせたいんですね。

また、この冒険者依頼はいわゆる強制<sup>ミツシヨ</sup>任務ではないのですが、ミツシヨンすれすれのものになっています。『下層』でのトラブルを解決できる人員は限られており、また緊急性も高く、暗黒期特有の人材不足も相まって、けっこうヤバイことになっていたのです。その解決のリターンとして、フリーユークンの冒険者歴の改ざんを容認させた、という経緯になります。

という訳で総勢四名の派閥混合パーティによる下層弾丸ツアーが始まったのです。

人材不足には気を付けよう、という一例です。ねくオレア……

んまあ実際、このメンツなら人魚強化種は倒せます。

フィンの存在は言わずもがな、ロリ組はL.V.こそ物足りませんがそれを覆せる程度の一芸を備えていますし、何よりこちらには団長こと【悲恋の奏者<sup>オルフェウス</sup>】がいます。へまをしなければ勝てるでしょう。

……ですすの〜でえ……（不吉な気配）

わたくしここで一本、オリチャーを入れとうございます……

☆

自然な流れで野営<sup>キャンブ</sup>する運びとなった。

モンスターが産まれないよう辺りの地形を破壊し、光源のコケを削る。途端に薄暗く

なつた広間は夜の森を彷彿とさせて、オラリオまでの道中、ひとり旅をしていた時期を思い出した。

もちろん、その頃はオラリオ到達までの早さを重視していたし、資金もなかったのだから、テントを張つたり、調理の準備をしたりといった、野営らしい野営はこれが初めてだ。【勇者】<sup>プレイバ</sup>とオルフェ団長が頑なに譲ろうとしなかった荷物——『気にしないでいいから経験値稼いできなさいほらほら』などと——それらのお陰なのだろう。

ありがたいことだ、と素直に思う。

「これを、ここう持つ」

「……えつと。……ここう？」

「うん。そうして、ここうする」

恐れ半分、好奇心半分といった様子 of アイズの横で、火打石の動作を反復する。

目の前にはいい感じに組まれた木材。火だねを投じることで、焚き火となる。

やがて意を決したららしいアイズが、えいや、と手を動かして——

「——わあ」

バチバチバチ。

一瞬で燃え上がる木材。舞う火の粉。灯りに照らされた少女の相貌は純粹な驚きと、喜びに染まっていた。

どうですか、という瞳。揺れる尻尾を幻視して、つい頬を緩ませてしまった。

はたしてその火を頼りに簡単な調理をこなし、夕食の時間となった。

「わ、おいしそうだな……」

「あまり手の込んだものではありませんが」

「いやいや、ありがたいよホントに」

そう言つて、オルフェさんはお椀を手にとつた。

干し肉と薬草ハーブを適当に刻み、スープの素なる固形物と共に煮込んだだけの代物だ。そう喜ばれるモノではないと思うのだけれど、彼は「ありがたいや〜」としみじみ繰り返していた。

……いや、思えばこのスープはアイズも手伝つてくれたものなのだから、ありがたいがられて然るべきなのかもしれない。

実際、それを知つたとき、あの【勇者】プレイヤーが目を丸くしていたのだし。普通のように、すごい代物なのだ。

「んむんむ」

「うん、おいしい」

「我が王お手製スープですからねよく味わつてくださいね皆々様。——あつもちろん美味でございます我が王ありがとうございますうんめえです」

「ありがとうパック」

「……ちようどいいかな。食事の途中だけど、耳だけ貸してもらいたい」

【勇者】<sup>ブレイバ</sup>の言葉に、和やかな雰囲気は僅かばかり引き締まった。

「ひとまず、今日はお疲れ様。一日で2、4階層まで来れるとは思ってなかった。いや、想定はしていたけど、最大値を引いたって感じかな。各々の努力の結果だと思う、臨時リーダーとして感謝を」

「言うてもまあ、【勇者】<sup>ブレイバ</sup>の槍捌きと、戦闘を避ける判断力のお陰ですがね。もちろん、フリーユークン達がずっと前衛で頑張ってくれたのも大きいけど」

「……ありがとうございます」

「恐縮です」

「はは、謙虚だね。さて本題に移るけれど……」

はたして、【勇者】<sup>ブレイバ</sup>は理路整然と今後の方針を語っていった。

パーティの力量的に問題なさそうなので、予定通り下層へ進むこと。その際の行動。見張り番は【勇者】<sup>ブレイバ</sup>が単独で行うらしいこと。オルフェ団長が抗議を入れたけど、「徹夜は得意なんだ」と却下された。

あとは食器の片づけとか水汲み係を決めたりとか、まあ特筆することのない内容が続いて——要するに、油断していた。



取り返しのつかないミスである。

「フリー君はアイズと同じテントね」

「はい」

「あと寝袋も同じのを使ってね」

「はい。……。……はっ？」

そういうことになった。

「……」

「……」

そして、こうなっている。

テントという密室にあつて、逃げ場はどこにもなく。

正座するおれの前に、アイズは横たわっている。

なるほど、確かに寝袋は子供用にしては大き目で、アイズが入って余りある。

余りあるとも。それは認める。事実だから。でも、でもね……

「寝袋っていう道具は、ひとり用だと思っただ」

「うんって言った」

「……」

「……わたしと一緒に、いや？」

「……………」

だから、自分の問題でしかないのだ、これは。

そもそも何故嫌がっているのか。アイズが望んでいるのだから、喜んでやるべきなのに。おれはアイズに求められたなら、なんだってやるのではなかったのか。

自問を重ねて答えを探す。男女<sup>いせい</sup>への意識はあり得ず、誰かと寄り添って眠ることに嫌悪は感じない。

それでも自分が、この状況から逃れたいと願っているのは……

「……だめなんだ」

ひどく、重い声だった。

「うれしい。とつてもうれしいんだ。でも、だめだ」

「……」

「もう、決めたんだ。アイズ……きみのために、おれは、おれの全部を使うんだって。そうしたいと思つたんだ。だから……」

溺れているような気がした。

鼓動は荒く、視界は狭い。

僅かな酸素を代償に、己の心を吐き出した。

「怖い。きみの光が惜しくなるのが。きみの隣にいられないのが、怖くなるのが怖いんだ」

——ああ。叶うなら、使い潰してほしいのだ。

全て、全て、自分が『男』<sup>しぐん</sup>でいられる内に、アイズのために、英雄という名の篝火にこの身を投じられたなら。

「——よかった」

アイズは、ほにやりと笑った。

動揺があった。何も出来ないまま、おれは寝袋に引きずり込まれた。

一気に近くなった鼻先に、息を詰まらせているのを見逃さず、アイズの手が伸びる。細い身体に手が回り、ぎゅうつと抱き締められた。

「もつと怖くなって」

「……っ、アイズ……」

「傍にいるよ」

「……」

「わたしのために、わたしと一緒にいてほしい」

「……それは、もちろん」

「……『迷宮の楽園』、きれいだったよね」

「……うん」

「いつか、もっと強くなつて……ふたりで、行こう？」

「……うん」

「いつしよに……つよく……」

「情けない」

自責する。

穏やかな寝息を邪魔しないよう、慎重に寝袋から這い出る。

天使草アルセリカの香りには睡眠作用があり、悪夢を憂いた医神によつて拵えられた香料は、上

級冒険者にも作用する。

諸々の準備は出来ている。

彼女が起きないように発ち、起きるまでに戻るだけ。

「……きみの隣にいたい」

口の中で転がせば、滑稽なほど、高揚した。

テントを出る。

彼は——<sup>フレイバー</sup>「勇者」フィン・デテムナは、まるでこうなることがわかっていたような顔をして、槍を手にとった。

「やあ。眠れないのかな？ 僕でよければ、就寝前の雑談に付き合うけれど？」

「邪魔だてしますか、<sup>フレイバー</sup>「勇者」」

「目的次第かな。闇雲に力を求めてるなら、眠ってもらう」

「まさか」

きつと、アイズには見せられない表情だった。

「おれは弱い。……弱くなりました」

「だろうね。君の戦い方<sup>スタイル</sup>の変化は、ちよつと露骨だ」

「スキルが使えなくなつた。あるいは弱体化した。新たに獲得したモノは、真の困難には生ぬるい」

「それじゃあ、どうする？」

「武器を作ります」

にい、と。

歴戦の小人族は、実に善い笑顔を晒した。

「いこうか」

「いこう」

そういうことになった。

## 幕間『ある夜、迷宮の中』

【一意専心<sup>コンセントレイブ</sup>】が使えない。

それを自覚したとき、フリーユは言語化できない衝撃を受けた。

一時的に集中力を高めるその【スキル】はシンプルかつ強力で、幾度となくフリーユの助けとなった。ヒュアキントスなどの他冒険者から『技量お化け』と恐れられた要因でもあり、これを使い倒すことで、なけなしの【器用】を稼いだりもしていた。

それが、唐突に失われた。

原因不明の弱体化に、フリーユはただ己への失望と不安を募らせていた。

だが、

『【スキル】が使えなくなるのは、そう珍しくない』

不安が限界に達し、親しい神物に【スキル】の機能不全を打ち明けてみれば、彼らは事もなげにそう言っただけなのだ。

午後の茶会の様相である。

本拠から診療所に顔を出していたアポロンと、労働の合間に一息入れていたアスクレピオスが、何やら思い悩んでいるらしい小人族のために突発的に開催したアフタヌーン・ティー。

ほどよい価格の紅茶が香り立つ空間で、二柱とひとり卓を囲んでいた。

『種族特性に由来する【スキル】——つまりは獣人の【獣化】や狐人の【妖術】、鉞人の【力補正】にエルフの【魔力補正】やらは、まあ言葉のままそいつの種族に由来するスキルなので、よほどのことがない限り機能する訳だが……』

『それ以外の、いわゆるユニークスキルというやつはそうも限らない。特に、フリーユアの【一意専心】は機能不全になりやすいタイプなんだ』

語りながら、太陽神は羊皮紙に筆を走らせる。眷属の【ステイタス】を仔細に把握している主神が、件の【スキル】を書き起こす。

☆

【一意専心】  
コンセントレイト

・超集中。

・行使判定の達成値は精神状態に依存。

・《器用》値によって基準値減少。

・連続発動困難。失敗時、一定時間理性蒸発。  
ファンブル



☆

『見れば見るほど』とアスクレピオスが嘆息する。『典型的ではある』とアポロンも同意する。

おろおろするフリーユに、さてどう説明しようかと顔を見合わせて——アスクレピオスが嫌悪感に耐えられず顔を逸らしてアポロンは涙目になったが——ともかく、アスクレピオスが先に切り出したのだ。

『この「スキル」が使えない理由は、お前の言い分を聞く限り明白だ。単に、行使判定とやらにひっかかってるんだらう。そして、つい先日からひっかかるようになった理由だがこれも明白だ。これも僕が言うか、親父？』

『いや。私が話そう。……フリーユ、間違っていたら言ってほしいのだが、君の言葉からして、君は疑似的な死を迎えるためにこの「スキル」を使っていたんじゃないか？』

『——っ』

まさに言い当てられて、ただ息を飲んだ。

フリーユの専心は、元はタケミカツチとの鍛錬や書物の写生などで培われた技能だが、その原動力となったのは『消えてしまいたい』という願望だった。

ある一点に意識を取斂させ、際限なく己を削って世界から自分という存在を消失させることで、極限の専心を目指すのがフリーユの専心であり、だからこそフリーユはこの

【スキル】を好んでいたのだ。

そう考えれば、機能不全になる理由は確かに明白だった。

消えてしまいたいから、発現したスキルだ。

消えたくなくなったら、当然使えなくなる。

つまりは、七年間抱き続けた大願を破棄した報いだった。

『白状してしまえば、私は嬉しく思っているよ』

と、アポロンは言った。

複雑な顔をするフリーユーとは対照的な、穏やかな表情だった。

『今のフリーユーは、消えてしまいそうにないからね』

『……でも、【スキル】が使えないのは、困ります。なんとかして、もう一度使えるよ』

うにならなければ……』

『でなければ、【剣姫】と共にいられない？』

『っ……』

結局、それが不安の核心だった。

フリーユーの友人。彼女の星。金色の風を纏う、未完の英傑。

彼女の隣に立つと、そう決めたのだから、相応の力を示さなければならぬのに。

既に足りていないところから、さらに差し引かれてしまえば、十把一絡げの小人族バルウムで

しかないというのに。

なんて情けなく脆弱なのだろうと、フリーユは己を糾弾してやまないのだ。

『少し、話をしようか』

ふと、甘い香りが鼻腔をくすぐった。

伏せていたかんばせをあげると、子供程の背丈の男神が新しいティーポットを用意していた。ふわりと広がる花の香りは、際限なく沈んでいく心身を慰撫してくれるようだった。そつとカップに口つけければ、じんわりとした甘味が口内を染め上げ、濁りを残すことなく、鮮やかに消えていく。

『フリーユ、君は私の司る事物を知っているかな？』

『もちろんです、アポロン様。太陽を司る神様と聞いています』

『概ねその通りだが、少し違う。予言と牧畜と音楽とかの芸能活動、疫病と医療、あとは羊飼いの守護者だったりする。更に言えば、太陽というよりどちらかと言えば光明の方が近くて、太陽のシンボルを背負うようになったのはヘリオスのやつが……』

『……。……欲張り？』

『つまり、結構色んな物事を司っているんだ、私』

宇宙の裏側を垣間見たような顔で固まるフリーユをほんの少し愉快に思いながら、アポロンは言葉を続ける。

『だが、下界に降りた私はこれらのほとんどを失った。当然、それが神々のルールで、私も例外ではない。神の力<sup>アルカナム</sup>とともに多くの権能を封じられ、私はただのアポロンとなった』

『……それは』

たかが「スキル」と神の「権能」。重ねるには、あまりにも規模が違いすぎる。けれど、あえてアポロンはこのように表した。

獲得した能力の欠落、その無力感というものを、私も知っているのだと。

『——君の瞳に、私はどう映っている？』  
と、アポロンが言った。

『数々の権能を失い、悲しみに暮れているように見えるかな？ 全知零能の身に成り下がり、未知の暗がり<sup>ミカド</sup>に怯えるような？ こんな境遇に陥るのなら、下界になど降りなければよかったと、後悔しているように思ukai？』

『いいえ。おれはアポロン様が、この下界でどんな時間を過ごしたのか、全然知りませんけど……』

『そう。私は、喜びに満ち満ちている。なぜなら、失ったことで、より素晴らしいものを得られたからだ』

例えばそれは、権能を失ったこと<sup>みいだ</sup>で見出せた、『情愛の心』である。

例えばそれは、古くより光明と予言の神に信仰を捧げ続けた信徒とのふれあいである。

例えばそれは、美シヨタに狂った時に頭をひっぱたいて本拠までひきずつてくれる愛しい眷属との出会いである。

いずれも、天界では決して得られなかったものだ。

いずれも、権能を失ったからこそ得られたものだ。

だからこそ。

『「スキル」の喪失は、なるほど悲しいことだ。けれどあえて、私はこの悲劇を喜劇と呼ぼう。なぜならこれは、君が生きたいと願った証左に他ならないからだ』

『だからこそ、私は君に更なる躍進を期待しよう。なぜなら、はつきり言つて、たか・が・スキルひとつ失っただけだからだ。なんぞ集中力を上げる技能が失われたらしいが、君は冒険者で、魔術師だろう？ 手元の札はいくらでもあるのだし……むしろ、それらを見直すいい機会になるんじゃないかな？』

☆☆☆

『——キユイイイイイツ?!』

深夜の迷宮に、その叫喚はよく響いた。

ダンジョン中層域、二十四階層。

『下層』を目前とする大樹の迷宮最深部で、一方的な戦いが行われている。

蹂躪されるのは雄鹿のモンスター、《ソード・スタッグ》。刀剣を思わせる角を持ち、これによる突撃<sup>チャージ</sup>を得意とする、捌手<sup>いやらしいやつ</sup>使いの多い中層域では珍しく真つ当に強いタイプの怪物。

そんな彼等が徒党を組んで襲い掛かる先には、ひとりの槍使いがいた。

「ンー、追加か。深夜のダンジョンは面倒だね」

ごう、と風が吹いた。

超絶の動体視力を有する妖精眼<sup>ブラムサイト</sup>でさえ、その黄金の穂先は霞んで見えた。

金色の斜線<sup>が</sup>が夜闇に刻まれる度、槍袂<sup>やりふすま</sup>のように立ち並ぶ剣の群れが砕けていく。数と体格で劣るはずの小人族<sup>バルムム</sup>が、小柄な体格に不釣り合いな長物<sup>ながもの</sup>を巧みに操り、数で勝るモンスター共を圧倒している。

小人族の英雄、【勇者】<sup>フレイバー</sup>の二つ名を世に轟かせる第一級冒険者が振るう業物こそは《フォルティア・スピア》。かの勇鉄を骨子とする黄金の長槍は、血煙舞う戦場に在つてなおその輝きを損なうことなく、秘めたる勇気を証明する。

脳裏に浮かぶのは予定調和の四文字。極めて熟達した冒険者の未来予知にすら思える機先は、命の奪い合いをありふれた舞台に塗り替えてしまauraしかつた。

『シィウルルウウウ……！』

「おっと、《リザードマン》か」

戦禍に誘われ、怯えるように立ち竦む剣鹿どもの合間から一匹のモンスターが現れる。

一言で表すなら、それは直立した蜥蜴<sup>トカゲ</sup>だつた。

赤色の鱗を纏い、ぎよろりとした黄緑色の瞳を迷宮の暗がりに浮かび上がらせる、人型の怪物。

瞬発力と耐久力を兼ね備えた五体はそれだけでも脅威なのに、あろうことかその右手には花卉のような盾（あるいは盾のような花卉）を、左手には茎のような剣を（あるいは――）装備しているのだ。

『迷宮の武器庫』<sup>ネイチャーウエボン</sup>を活用してくるモンスターとして、この鱗<sup>リザードマン</sup>を持つ戦士はもつとも有名な一種なのだつた。

『シャアアツ——!!』

『キュイイイイツ!!』

突撃は奇しくも同時だった。

あるいは意図的な戦術だったのかもしれない。『上層』と『中層』のモンスターは知能が大きく異なり、それこそ白兵戦を誇る《リザードマン》ともなれば、簡易な戦術すら可能なのか。

生き残りのソード・スタッグとリザードマンの攻勢を、頭目に率いられる雑兵を見紛ったのは、きっと自分が真の軍隊というものを知らないからなのだろう。

だって、

「シー……」

【勇者】プレイヤーフィン・デイルムナは。

ただ半歩、軸足をずらしただけで、迎撃準備を終えていたのだから。

ひゅんつ、という音と共に一匹の雑兵が死んだ。

続けて手のひらで鮮やかに旋回した槍の石突が雑兵の顎をしたたかに打ち据えて戦闘不能に追い込む。

その反動を利用して、小さな身体が独楽こまのように回転した。

深夜の迷宮に、三日月が生まれたのだ。



宙を駆ける黄金の穂先は死神の鎌めいて《ソード・スタッグ》どもの命を刈り取り、そして、

「むっ………！」

『ギイイツ………！』

がちり、と。

《リザードマン》の剣とかち合つて、火花を散らした。

無論、拮抗はあり得ない。

鱗持つ戦士として【勇者】の前では雑兵に過ぎず、一秒後には五体を打ち砕かれているだろう。

けれど、その一秒を待ち望む者がいたのだ。

けたたましい、羽音である。

一匹の巨デッドリー・ホーネット大蜂が、上空を飛び回っていた。無闇に仕掛けず劍鹿の群れが駆逐されるのを傍観していたのは、知能の証明なのだろう。けれど姑息に違いはなく、羽音を鳴らしながら赤子のような隠密を試みるこの怪物の存在を【勇者】が把握していなかったとは思えない。

しかし事実として、巨大蜂は硬直した槍使いを襲撃したのだ。

ぎらりと鈍く光を放つ毒針。【耐異常】を持たない冒険者を速やかに絶命させる致命

の一刺しが【勇者】の首筋に迫り——

「《導きたまえ》<sup>Lead me!!</sup>」

ボツ、という生物を殺害する音が連続した。

自分が投げ放った短刀が《デッドリー・ホーネット》を撃ち落したのと、金の槍が《リザードマン》を灰に帰した音だ。

しばらく、辺りに静けさが満ちた。

生物の気配のしない夜のダンジョンを見回して、戦闘終了を確認する。

「うん、いい援護だ。ありがとう、助かったよ」

「……その」

「いや、大した技量だ。アイズが惚れ込むのもわかるよ。気を抜いたら僕もファンになつてしまえそうだ。「スキル」を失つてなおこの腕前、素晴らしいの一言だよ」

「ごめんなさい、やめてください……」

——ひんつ、と喉の奥から喘ぎ声を漏らして、自分はただ懇願した。

この『褒め殺し』が始まって数十分。この深夜の散歩の思惑——『アイズの役に立てるといふ証明』をしたいのだと、己の恥部を晒すような羞恥に耐えながら語った自分に、【勇者】<sup>プレイヤー</sup>は何の説明もなしにこんな仕打ちをしていた。

先程のようにわざと見せ場を用意して、過剰に持ち上げてくる。かの【勇者】にありつ

たけの美辞麗句で飾り付けられるのは、他人であればむしろ至福なのだろうが、自分にはとてもつらいことだった。

自分はアイズの隣に立つには弱すぎて、けれどあの子の隣に居たいから、至らない身を綺麗に見せようとしているのに。

【勇者】はただそのままの振る舞いに、惜しみのない賞賛を贈ってくるのだ。

なんてひどい。横暴だ！ いい歳したオトナが子供をからかってそんなに楽しいか！

これでも——これでも、泣き出したくなるのを必死に堪えて、話してやったというのに！！

「……嫌いになりますよ……？」

……たぶん。今の自分を社の神様方が目撃したなら、大層驚かれるだろう。

瞳にうつすら涙を湛え、頬を紅く染め上げて、きつと誰かを睨みつける、だなんて！ そんなの、まるで……まるで、些細な自尊心を軽んじられて拗ねてしまうような、ただの子供みたいじゃないか。

「おや、ふふ。嫌いになるのかい？」

「すでに、かなり嫌いです。あなたと話をしていると、おかしくなりそうだ」

「それは悲しいな。未来ある若者に嫌われるのは、年長者にとって耐えがたい苦痛だ

からね」

「まあ止めるつもりはないけど」等のたまと宣バルウムう同族に、よくもいけしやあしやあとおつ、と叫ぼうとする口をなんとか押さえつける。

当人は相も変わらず微笑んだまま、凧いだ湖面めいた碧眼を見せている。

手のひらの上で踊らされている、いやそこまで露悪的ではないけれど、なんというか全部オミトオシみたいな感じでもともいやだ。

「まあ聞きなさい。君の様子からしてもうすぐ目的地らしいから、この辺りでちよつとお話をしたいんだ」

「さっきの言葉を忘れましたか……？」

「覚えているとも。そして、この話を語り終えた時、その評価をくるつと裏返して見せると保証しよう。今から話す物事は、確実に、今の君に必要なだ」

「……………わかりました」

勇者の要請に応じて、その場に座り込む。への字に曲がる口許を元の無表情に戻すのにかかなり苦勞した。自分が思っているよりも、自分はこのフィン・デムナという人物が嫌いになっているらしかった。

この感情を他の小人族どうぞくに知られたなら、きつと呆れられるか軽蔑されるのだろうか。彼の言葉は全て正しく、その行動は正しく英雄を名乗るに相応しい。現に、『目的地』を伝

えないまま淡々と先導して迷宮を移動してきたにも関わらず、残りの道程がほんの僅かであることを察してのけている。中層に至るまでの判断も素晴らしく、彼が迷宮都市でも随一のリーダーであることに疑いの余地はない。

そんな人物が種族の矢面に立とうとしている。なんともありがたい話だ。それを踏まえた上で、今のところ勇者はひどいと思っただけだ。

「ありがとう。さて、何から話そうかな……うん、時間に追われる状況じゃなかったら色々話したかったけど、この場では要点をひとつに絞ろうか。ずばり、君に足りないものだ」

「それなら、数えきれない程にあります」

「それだよ。君は面白いくらい自己肯定感に欠けている。有り体に言えば、自信がなさ過ぎるんだ」

一瞬、何を言われているかわからなかった。

「それは、反論させてください。自分が出来ることは、わかっているつもりです」  
「へえ？」

「己は何も出来ない無能だと決めつけて、膝を抱えて蹲うすくまることだけはしちやいけないと、随分前から誓ってます。……その上で、自分には足りないものが多すぎるという事実を……受け止めかねているだけです」

「それはおかしな話だ。君の言葉が真実なら、『魔法』が発現しているはずだろう」  
 「……どういうことですか」

自分は、気づけない。

勇者の碧眼が相も変わらず揺るぎないせいで、軽口でも叩くみたいな口調に欺かれて、致命の間合いに踏み込まれたことを解せない。

はたして一族の英雄は言葉の槍をゆるりと構え、

「魔法」は発現者の心からの願望をゆりかごにして生まれるモノ。ならば、『魔力』に極めて優れた君が真に願ったなら、とつくのとうに『アイズに並び立てる理想の自分になる魔法』を得ていなくてはおかしいだろう？」

「――」

あっさりとして、幼子の破綻を貫いた。

「似た事例はいくつもある。例えば『フレイヤ・ファミリア』のLv. 5のひとり自身己の人格を殺戮者に変貌させる精神魔法を持つていと聞かしく……ちよつと外れるけど、僕も同じような発想の魔法を発現させている。更に言えば、そもその話、『それ』の達成方法は異なるだろうが、『理想の自分になる魔法』は極めてありふれた『魔法』だ」  
 炎の球を投げつける魔法が『炎で敵を打ち倒す自分』を叶えるために生まれたとして、なんの矛盾があるだろう。

『爆発的に力を高める魔法』も『大怪我すら治す魔法』も、そのゆりかごは『そう在りたい自分』という願望なのだ。

つらつらと言葉を続けて、勇者はそつと私を指差したのだ。

「——だから、何かしら【魔法】を得ただろうと思っただんだ」

運命の夜を共に超えて、あなたの隣を歩むと決めて。

その時点で、何か規格外アイズに比肩するための【魔法】を発現したに違いない、という過去の勘違いを勇者が告白する。

だってそうでなければ並べない。無才非力の小人族バルグムが縋れるモノは【魔法】しかない。

——普通の小人族であればそう考えると、一族の英雄は断じたのだ。

「でも君は【魔法】を発現させなかった。今まで君が語ってくれた話と合わせて、これが意味することはひとつだ」

「つ……」

息を呑む。

今の今まで有無を言わさないような語りをしてきた彼が、その碧眼を「心の準備はいいかい？」と気遣うように揺らしたから。

それはつまり、次の一言ひびくが重い一撃という証左。

「君は、君自身でも伺い知れない心の奥底で自分を冷静に見定めていて、『アイズに並び立てる』こと自体は実現可能と断じている」

「だから、君を苛んでいる不安は『非力ゆえにアイズの隣にいられないこと』なんかじゃない」

「君の不安はおそらく——『いつかアイズに捨てられるんじゃないか』だ」

「……それは……」

彼の言葉を飲み込むのに、少なくとも時間を必要とした。

後から思えば、それはきつと、理解したくなかったからだ。

だって、勇者はこう言ったのだ。

——お前は、お前の弱さを呪っているのではなく。

——アイズ、ヴァレンシユタインお前を救った英雄に、不信任を募らせているのだと。

「アイズは君を無二の戦友と認めている。けれど、君はアイズをどう思っているんだい？ 固い結束で結ばれた友人だと、神に誓えるかな？」

「……それは……いや……そもそも、違う。私は……以前あの娘にも言ったように、たまたま一番最初に助けられただけで……彼女はこれから、もっとたくさんの人を救うのに……」



「聞きたいのは予想じゃなくて感情だよ。と言つても、そんな表情かおをしてるのに、わかんないはずはないだろうけど」

……わかつてる。分かつている。

一言話す度に、この小さな胸が裂かれるように痛むのだから。

けれど、認めてしまえば——裂かれるどころか砕け散つて、二度と戻らないような気がした。

だつてそれは、神の愛を疑うようなことだから。

「……嗚呼——」

そう、神の愛を疑うような。

「……私は、あの娘の、アイズのためなら、なんでも出来る。アイズが求めたなら、なんだつてする」

「だろうね。君がアイズを見る目は、どこぞの美神の眷属かみみたいだから。そう求められたなら、君は何も躊躇ちゅうちようことなく命だつて捧げるだろう」

「……アイズのためなら死んでもいい。けれど、だから——アイズに求められなくなつたら、きつと死にたくなる……」

太陽を見ているだけなら良かったのだ。

手の届かない中天にそれは座していて、言葉もなく、感情もなく、ただ恩恵のみを与

えてくる。かつての英雄と、ただ救われる集団でしかない無辜の民のように。

けれど、もしも太陽に愛を囁かれたなら？

中天に座するだけの輝きに、遍く人々に熱を差し出す上位存在に一個体として認識され、寵愛されたなら？

その上で——その愛を失ったなら？

耐えられるはずもない。特別という名の熱を永久に失ったなら、己の運命を嘆きながら凍え死ぬしかない。

「怖い……」

アイズに力を求められて、共に歩むと誓った事に後悔はない。それだけは許されない。アイズがそこに在れと求めてくれるなら、私は万難を糧にして彼女の隣に佇もう。

けれど、『もういらぬ』と言われて何も求められなくなったなら、私はきつと駄目になる。

たまたま英雄に救われただけの何者かではなく、アイズの愛を知ってしまったフリーユーカーは、その喪失に耐えられない。

「自覚してくれたようでは何より。これで次の話に進められる。その恐怖を克服する方法を教えようじゃないか」

「っ……それは？」

「確固たる自信。または自負。つまり、『自分を信じること』だよ。そもそも、君はアイズの信頼を失うことを恐れているけど、裏返せば『アイズからとても信頼されている』んじゃないか」

「――」

「だから――君は、英雄に愛される自分を誇りに思っていないんだよ」  
愛の喪失に怯えるのではなく、愛されているという事実を自信に変えれば良いのだと。

小人族の英雄として、都市最大派閥の頭領として、多くの信頼を背負う【勇者】はそう断言した。

「君に必要なものは『自負』で『自信』だ。僕の目が正しければ、アイズは君を深く信頼している。それはもうかなり信頼していて、僕達……僕とロキ、リヴェリア、それにガレス……この一年間アイズと日常でも冒険者としても関わってきた面子と同等の信頼で、これはとても、本当に、すごいことだ。言葉足らずなああの娘に代わって、僕が保証するよ」

「だから、君はそれを受け入れるだけでいい。難しいだろうけど、そうしなきゃいけない。自分のことを、いざれ英雄に至る少女に名指しでばっちり見初められていて、ついでに多くの神々の寵愛を受けている、とてもすごくてスーパーな小人族なんだと自覚し

なきやいけない。未来の英雄の隣に我が姿ありと、彼女の信頼を受け止められるようにならなきやいけないんだ」

「そうでなければ——たとえ世界を滅ぼせる力を得ようとも、君の不安は拭えない」

「——ああ……」

目の前で、勇者が膝を折り、目を合わせて語りかけてくる。

その言葉は正鵠を射ていて、それだけで私の心にすんと収まるような喜びに包まれるけれど、いくつか足りないものもあつた。

……彼の言う通り、私は、アイズの隣にいられるほどの力がないことではなく、アイズに失望されることを恐れていた。これは、間違いない。けれど、それだけではないのだ。

私は——自分、男で在りたくて、けれど、それはとても不安定で、砂上の楼閣のように容易く崩れ去ってしまうから、しつかり男おのれを保てない自分がよわつちくて脆弱でずっと不安で怖くて恐怖していて、きつと「一意専心ス キル」が使えないのも単純に一心に集中できる精神状態じゃなくなっているからで。

自分が今まで神々ほしほしに向けていた信仰のような感情を、まだ幼いアイズに向けてしまったから、不変の星々かみがみには決して届かないこの想いもどんどん成長していく少女には容易く触れられてしまうことが■くて——

「……わ、たし、は」

「うん」

「……私は、私を、信じるべきなのでしうか」

たとえ不安定でも、いつか来る日まで男おのれを貫けると。

たとえ不鮮明でも、ずっと英雄の戦友ともだちでいられると。

そういう自分で在れることを、自分は強いと信じるべきなのかと。

「概ねその通りかな。もちろん、べき、ではなく自然にそう思えるのが理想だけだね。

ただ、それが難しいなら、とりあえずの策は提示できる。月並みだけどね——」

歴戦の冒険者に曰く。

自分を信じられなくても、自分を信じる誰かを信じることは出来るだろう、と。

☆

「そもそもこの散歩、僕に信じてもらうのが目的なんじゃないか」

「……そうですね。武器を用意する。その過程で力を示し、あなたの信頼を得る。それが、当初の目的でした」

「僕の信頼を得られれば、アイズに失望されても近くにいられるって？」

「——泣きますが。よろしいですか」

「許してほしい」

「許します」

フリーユが平静を取り戻した後、一行はこの深夜の散歩の目的地へと歩を進めていった。

モンスターとの遭遇はない。占星術師の先導にフィンは何も言わずに追従する。聡明な彼は、フリーユのやりたいことを既に看破していた。

すなわち、強力なモンスターを倒し、そのドロップアイテムで武器を得る。

力がなければ武器を使えばいいじゃないの精神は、フィンも絶賛するところだった。

お金は力なりなどと露骨な事を言うつもりはないが、彼我の差を武装で埋めるという発想は実に小人族的でグッドである。

「とはいえ、そろそろ聞いておかないとだ。今回の遠征はあくまで人魚の討伐。その

責任者として、本命に支障をきたしうる行動は控えさせなきやいけない。……要するに、なにを倒すんだい？」

「すぐにわかります」

「おっと」

碧眼を軽く見開いて、フィンはおどけるように驚いた。この純朴な少女なら、聞けば素直に教えてくれるものだと思っていたのだ。

この頃になると単純にフリユーと話すのが楽しくなってきた彼は、そのまま口を開こうとして——その瞳に、本物の驚倒を浮かべた。

「……本当に？ いや、君の占星術の腕を疑っていた訳ではないけど、そういう話じゃない。現在この世に存在するか不明な、見たこともないモノをきつかり探し当てられると？」

「占星術の便利さを見せれたなら、よかったです。ただ、フィンさんの言う通りの無法な代物でもありません」

フィンの中には確かに「それ」が見えていた。小人族は種族的な特徴として視力に優れるのでそれ自体は関係ない。

問題なのは、『中層全域で僅か数本』で『お目にかかることすら稀』な『レアアイテム』を、『一切の事前情報なしで』探し当てたということだ。

もちろん、フリーユ어가語ったように、占星術にそこまでの力はなく。

「簡易的な儀式も含め、それなりの費用は投じましたが……最後の決め手は、きつと【幸運】に恵まれたのでしょうか」

あつさりそう言い切つて、眼前の敵をねめつけた。

フリーユ어의視線の先には、『木』があつた。

大樹の迷宮にあつてなおその『木』は巨きく、そしてたくさんの『実』を宿していた。そして、その『実』は『宝石』だった。

「……宝石樹」

文字通りの『金のなる木』。宝石樹が実らせる色とりどりの宝石は極めて貴重であり、ダンジョンのもたらすアイテムの中でも随一の額で売買される。その理由は宝石樹の出現自体が極めて稀なこともあるが、それを大きく上回る要因がひとつある。

「勝算はどれほどかな？」

「<sup>十</sup>勝ちます<sup>制</sup>」

「シーなるほど。じゃあ、危なくなったら介入しよう」

宝石樹には、守護者がいる。

古今東西、あらゆる冒険譚におけるお約束に違うことなく。

迷宮の秘宝の傍には、宝の番人がいるのだ。  
トレンジャーキーパー



それは、震えるようにして瞼を上げた。

長らく開くことのなかつた緑の瞳が、不遜な盗人を照準する。

それは全長10Mメートルを超える巨大な身体をしていたため、起床するのにとどろくような轟音を必要とした。

深夜の迷宮に響き渡る騒音に、しかし応じるモノはいない。獲物の気配に喜び勇んで馳せ参じる有象無象は現れない。

なぜなら、それが動いたのなら、冒険者は必ず絶命すると本能で理解しているからだ。やがてそれは長い眠りから解き放たれ、いつでも戦闘に入れる体勢、待機状態に移行した。

その佇まいがとぐろを巻くようなので、それを『蛇』と呼ぶ者もいるだろう。

緑色の体表とあまりの威圧感から、それを『樹木の精霊』と誤認する者もいるだろう。けれど、否。否、否、否！——それと対峙するフリーユは、理性で、肌で、掌で、それが何者なのかを理解する。

蛇のような体躯を持ち、秘宝たる大樹を守護する怪物。

その名を——『グリーンドラゴン』

大樹の迷宮において『最強』とされる緑の竜に、ギルドが定めた潜在能力は、L.V.4  
およそ二階梯の差を誇る竜種をしつかと見詰め、フリーユはもう一度、掌で鞘を撫で  
た。

「……お前程じゃないな」

いまや灰と化した宿敵に想いを馳せ、フリーユは一步前に進み出た。  
それが戦闘開始の合図となった。